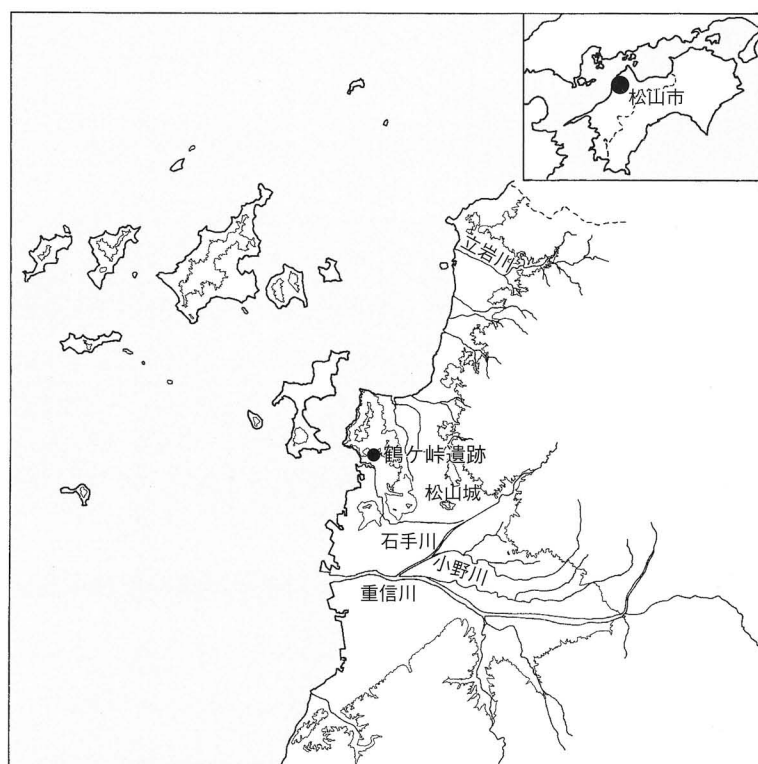


鶴が峠遺跡Ⅰ

2007

松山市教育委員会
財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

鶴が峠遺跡 I



2007

松山市教育委員会

財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター



巻頭図版 上空より望む調査地

序

本報告書は、昭和55年、56年の2ヶ年にわたり、松山市西部の石風呂町・松ノ木町において実施された大規模土地区画整理事業にともなう発掘調査の成果報告です。当時、果樹園や水田地帯であった一帯は、事業により「すみれ野団地」として生まれかわり、現在では戸数400を越える大住宅地となっています。

調査では、主に弥生時代の遺構群と、古墳時代中・後期の古墳群が調査され、なかでも弥生時代の土坑から出土した土器群は、松山平野の弥生時代前期末の基準資料となるものとして評価されています。また、古墳群出土の埴輪類は、これに含まれる形象埴輪とともに注目される出土遺物として、本報告が長く待たれるところとなっていました。

今般、ここに成果の一部を「鶴が峠遺跡Ⅰ」として上梓いたしますが、このような成果をあげることができましたのも、埋蔵文化財に対する関係各位の深いご理解とご協力のたまもと心より感謝申し上げます。

本書が、今後各方面でご活用いただければ幸いに存じます。

平成19年3月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団

理事長 中村時広

例 言

1. 本報告書は、松山市石風呂町・松ノ木町において松山市教育委員会が実施した、鶴が峠遺跡の発掘調査報告書である。紙数の都合上、報告は2分冊とし、A～L区までである調査区のうち、本報告ではA～G区までの報告を行うこととし、H区以降については次年度刊行予定である。
2. 鶴が峠遺跡の調査は、東急不動産株式会社によって、1980（昭和55）年から計画・実施された土地区画整理事業に伴う事前調査として、1980（昭和55）年1月から1981（昭和56）年9月までの2カ年にわたって実施された。
3. 遺物の実測・製図、遺構図の製図等は、池田学（平成4年退職）、松村淳（平成5年退職）、丹生谷道代、矢野久子、多知川富美子が行った。
4. 遺構の撮影は、調査担当者が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。
5. 遺物の縮尺は、土器・土製品を1/4にすることを原則とし、石器・石製品、鉄器・鉄製品1/2で、また、玉類はその大きさに応じて1/1、1/2を使い分けて掲載した。
6. 使用した方位は磁北である。
7. 出土種実の分析は、調査当時（財）京都市埋蔵文化財研究所に在職中の岡田文男先生（現、京都造形芸術大学）にお願いし、報文をいただいていたにもかかわらず、以後25年を越える間、本報告に至らないまま発表の機会を逸してしまったことをお詫びするとともに、今回の報告にあたっての訂正、執筆をご快諾いただいたことに深く感謝いたします。
8. 調査にあたって、地元町内会（重松清信会長 当時）、土地改良区（黒田一行区長 当時）および住民のみなさんにはひとかたならぬお世話になった。記して感謝申し上げます。
9. 調査当時、（財）京都市埋蔵文化財研究所調査部長在職中の、故 田辺昭三先生には折にふれ貴重なご指導をいただいた。記して感謝申し上げますとともに、ご冥福をお祈りいたします。
10. 本報告にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されているとともに、その一部は、併設の松山市考古館において常設展示されている。
11. 本報告書の執筆・編集は、松山市教育委員会文化財課 西尾幸則の指導のもと、栗田茂敏が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 環境	
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	2
3. 組織	5
第2章 調査の成果	6
1. 試掘調査の概要	6
2. B区1号墳の調査	6
3. C区の調査	15
(1) C1号墳	15
(2) C2号墳	15
4. D区の調査	20
5. E区の調査	24
(1) E1号墳	24
(2) E2号墳	30
6. G区の調査	38
(1) 弥生時代の遺構と遺物	38
(2) 古墳時代の遺構と遺物	71
第3章 自然科学分析	104
鶴が峠遺跡から出土したアズキ近似の炭化種子について	岡田文男 104
第4章 まとめ	107

挿図目次

図1 調査地と周辺の主要遺跡	3
図2 土地区画整理事業予定範囲	7
図3 調査地の区割りと調査実施部分	9
図4 B区調査前コンター図	11
図5 B区完掘後全測図	13
図6 B1号墳周辺出土遺物	15
図7 C1号、2号墳丘調査前コンター図	16
図8 C1号墳、2号墳の配置	17
図9 C1号墳平・断面図	18
図10 C2号墳平・断面図	19
図11 C2号墳出土遺物	20

図12	C区出土遺物	20
図13	D区出土遺物(1)	21
図14	D区出土遺物(2)	22
図15	D区出土遺物(3)	23
図16	E1号墳丘調査前コンター図	24
図17	E1号墳丘完掘後コンター図	25
図18	E1号墳横穴式石室平・断面図	26
図19	E1号墳横穴式石室遺物出土状況	27
図20	E1号墳横穴式石室展開図	28
図21	E1号墳横穴式石室出土遺物	29
図22	E2号墳横穴式石室平面図	30
図23	E1号墳と2号墳の配置	31
図24	E2号墳横穴式石室展開図	33
図25	E2号墳横穴式石室遺物出土状況	36
図26	E2号墳横穴式石室出土遺物(1)	37
図27	E2号墳横穴式石室出土遺物(2)	37
図28	G区SK1	38
図29	G区遺構配置図	39
図30	G区SK2	41
図31	G区SK2出土遺物	42
図32	G区SK3	42
図33	G区SK4	43
図34	G区SK4出土遺物	44
図35	G区SK5	45
図36	G区SK5出土遺物(1)	46
図37	G区SK5出土遺物(2)	47
図38	G区SK6	47
図39	G区SK6出土遺物	48
図40	G区SK7	48
図41	G区SK7出土遺物	49
図42	G区SK8	50
図43	G区SK8出土遺物(1)	51
図44	G区SK8出土遺物(2)	52
図45	G区SK9	53
図46	G区SK9出土遺物(1)	54
図47	G区SK9出土遺物(2)	55
図48	G区SK10	55
図49	G区SK10出土遺物	56

图50	G区S K11	56
图51	G区S K11出土遺物	57
图52	G区S K12	57
图53	G区S K12出土遺物	58
图54	G区S K13	59
图55	G区S K14	60
图56	G区S K15	61
图57	G区S K15出土遺物	62
图58	G区S K16	63
图59	G区S K16出土遺物	64
图60	G区S K17	64
图61	G区S K17出土遺物	65
图62	G区S K18	65
图63	G区S K18出土遺物	66
图64	G区S K19	66
图65	G区S K19出土遺物	67
图66	G区出土弥生土器	69
图67	G区出土石器・石製品	70
图68	G区1号周溝遺物出土狀況	72
图69	G区1号周溝出土遺物	73
图70	G区2号周溝遺物出土狀況	74
图71	G区2号周溝出土遺物(1)	75
图72	G区2号周溝出土遺物(2)	76
图73	G区2号周溝出土遺物(3)	78
图74	G区3号周溝遺物出土狀況	79
图75	G区3号周溝出土遺物(1)	81
图76	G区3号周溝出土遺物(2)	82
图77	G区3号周溝出土遺物(3)	83
图78	G区3号周溝出土遺物(4)	84
图79	G区4号周溝遺物出土狀況	85
图80	G区4号周溝出土遺物	86
图81	G区出土古墳時代遺物(1)	87
图82	G区出土古墳時代遺物(2)	88
图83	G区出土古墳時代遺物(3)	88

表 目 次

表1	B区出土遺物觀察表 土製品	89
----	---------------	----

表2 C 2号墳出土遺物觀察表 土製品	89
表3 C区出土遺物觀察表 土製品	89
表4 D区出土遺物觀察表 土製品	90
表5 D区出土遺物觀察表 装身具	91
表6 D区出土遺物觀察表 金属製品	91
表7 D区出土遺物觀察表 石製品	91
表8 E 1号墳出土遺物觀察表 金属製品	91
表9 E 1号墳出土遺物觀察表 装身具	91
表10 E 2号墳出土遺物觀察表 土製品	92
表11 E 2号墳出土遺物觀察表 金属製品	92
表12 G区SK 2出土遺物觀察表 土製品	92
表13 G区SK 4出土遺物觀察表 土製品	93
表14 G区SK 5出土遺物觀察表 土製品	93
表15 G区SK 5出土遺物觀察表 石製品	93
表16 G区SK 6出土遺物觀察表 土製品	93
表17 G区SK 7出土遺物觀察表 土製品	94
表18 G区SK 8出土遺物觀察表 土製品	94
表19 G区SK 9出土遺物觀察表 土製品	95
表20 G区SK 9出土遺物觀察表 石製品	95
表21 G区SK 10出土遺物觀察表 土製品	95
表22 G区SK 11出土遺物觀察表 石製品	96
表23 G区SK 12出土遺物觀察表 土製品	96
表24 G区SK 15出土遺物觀察表 土製品	96
表25 G区SK 15出土遺物觀察表 石製品	96
表26 G区SK 16出土遺物觀察表 土製品	96
表27 G区SK 17出土遺物觀察表 土製品	97
表28 G区SK 18出土遺物觀察表 土製品	97
表29 G区SK 19出土遺物觀察表 土製品	97
表30 G区出土弥生時代遺物觀察表 土製品	98
表31 B区出土弥生時代遺物觀察表 石製品	98
表32 G区1号周溝出土遺物觀察表 土製品	99
表33 G区2号周溝出土遺物觀察表 土製品	99
表34 B区2号周溝出土遺物觀察表 石製品	100
表35 B区3号周溝出土遺物觀察表 土製品	100
表36 G区4号周溝出土遺物觀察表 装身具	102
表37 G区4号周溝出土遺物觀察表 土製品	102
表38 G区出土古墳時代遺物觀察表 土製品	102
表39 G区出土古墳時代遺物觀察表 金属製品	103

表40 鶴が峠遺跡G区出土の炭化種子同定結果	104
表41 G区SK2出土アズキ近似炭化種子と現生のアズキ・リョクトウの種子長の比較	104
表42 G区SK2出土炭化種子とアズキ、リョクトウの最大長・へそ長の比較	105
表43 出土種子とアズキ・リョクトウのへそ長／最大長の比較	105

図版目次

図版1 調査前遠景(南より)	調査前のA区～E区(南より)
図版2 調査前のG区～J区(北東より)	A区トレンチ調査状況(1)(南より)
図版3 A区トレンチ調査状況(南より)	B区1号墳丘(南西より)
図版4 C区1・2号墳丘(東より)	C区1号墳丘(北より)
図版5 D区第2地点調査状況(南東より)	D区第1地点近景(西より)
図版6 E区1号墳丘調査前(北西より)	E区調査状況(南東より)
図版7 E区1号墳横穴式石室検出状況(北西より)	E区1号墳横穴式石室攪乱状況(南より)
図版8 E区1号墳横穴式石室玉類検出状況	E区1号墳横穴式石室完掘状況(南より)
図版9 E区2号墳横穴式石室攪乱状況(北より)	E区2号墳横穴式石室遺物検出状況
図版10 E区2号墳横穴式石室完掘状況(1)(南より)	
E区2号墳横穴式石室完掘状況(2)(南より)	
図版11 E区2号墳東側壁近景(南西より)	E区2号墳西側壁近景(東より)
図版12 G区SK2遺物出土状況(南より)	G区SK4遺物出土状況(北西より)
図版13 G区SK1～SK4(南より)	G区SK5遺物出土状況(1)(南西より)
図版14 G区SK5遺物出土状況(2)	G区SK6遺物出土状況(南より)
図版15 G区SK8遺物出土状況(東より)	G区SK7・8完掘状況(南東より)
図版16 G区SK9遺物出土状況(南より)	G区SK10遺物出土状況(南東より)
図版17 G区SK12遺物出土状況(北東より)	G区SK13完掘状況(北東より)
図版18 G区SK15遺物出土状況(1)(北より)	G区SK15遺物出土状況(2)
図版19 G区SK17遺物出土状況(北より)	G区SK18遺物出土状況(東より)
図版20 G区SK19遺物出土状況(北東より)	G区1号墳全景(北より)
図版21 G区2号墳周溝遺物出土状況(1)(北より)	G区2号墳周溝遺物出土状況(2)(西より)
図版22 G区3号墳周溝遺物出土状況(1)(北より)	G区3号墳周溝遺物出土状況(2)(西より)
図版23 G区3号墳周溝遺物出土状況近景(西より)	G区3号墳全景(西より)
図版24 G区1～4号墳完掘状況(北西より)	G区4号墳全景(西より)
図版25 B区、C区2号墳・C区、D区出土遺物	
図版26 D区出土遺物	
図版27 E区1・2号墳出土遺物	
図版28 G区SK2・4・6出土遺物	
図版29 G区SK5・16・17出土遺物	
図版30 G区SK8・9出土遺物	

- 図版31 G区S K 7・10出土遺物
- 図版32 G区S K 12・15・18出土遺物
- 図版33 G区S K 19出土遺物、G区出土弥生土器
- 図版34 G区出土弥生遺物
- 図版35 G区1号墳周溝出土遺物
- 図版36 G区2号墳周溝出土遺物（1）（展示用に想定復元されたものを含む）
- 図版37 G区2号墳周溝出土遺物（2）（展示用に想定復元されたものを含む）
- 図版38 G区3号墳周溝出土遺物（1）
- 図版39 G区3号墳周溝出土遺物（2）（展示用に想定復元されたものを含む）
- 図版40 G区出土古墳時代遺物（1）
- 図版41 G区出土古墳時代遺物（2）

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

1980（昭和55）年、松山市西部の石風呂町・松ノ木町において、東急不動産株式会社により計画された土地区画整理事業にもとづき、松山市教育委員会文化教育課は、分布確認調査を実施した。計画された区画整理事業は、総面積約25ヘクタールにおよぶ。その用地の内訳は、畑・山林を主とした丘陵地と、水田や畑として利用されている丘陵麓の鞍部や低地部とからなっている。このエリアは、松山市の指定する包蔵地「No11 石風呂町弥生遺物包含地・古墳群、岩木山古墳群」に含まれている。分布確認調査は地元町内会の協力を得ながら、踏査を主として実施された。その結果、丘陵上の各所において古墳群が確認されたり、弥生土器が採集されたりしたので、全域を一応トレンチ調査の対象とすることとした。調査は、フォーク状を呈する調査地丘陵や谷部をいくつかのエリアに分け、順にトレンチ調査を行いながら、遺構や遺物が検出された部分に、必要に応じて適宜調査区を設定して進めていくという方法をとった。そのうちでも対象地東部にひろがる低地部は現地表面での海拔2 m～9 mと低く、トレンチを掘削するとすぐに湧水がみられ、確認作業自体困難をきわめたので、調査対象からはずし、基本的に丘陵上を主に調査することとなった。調査区にはA区からL区までの12の区域を設定したが、このうち対象地の最高所であるF区としたエリアでは既に岩盤が露出し、遺構等も薄いと判断された。また、K区とした丘陵とその東の鞍部I区は、当初開発区域として組み込まれていたが、用地取得がならず、最終的に計画からはずれ、現状のまま保存されることとなったので、これら3つのエリアについては調査対象からはずすこととなった。

調査は1980（昭和55）年1月21日、A区から開始し、おおよそアルファベット順に進めてゆき、翌1981（昭和56）年9月28日終了した。この間、A区を除く丘陵各所で土坑をはじめとする弥生時代の遺構群や古墳の検出、あるいは遺物の出土がみられている。これら、調査された遺構に関する遺構名は、調査当時、A区からE区までを通し番号としていた。しかしながら、その後G区以降の調査では続きの番号をとらず、各区ごとにあらためて1から始まる通し番号をとるといった不統一な部分がある。こういった状況ではいらい混乱を招く恐れがあるので、本報告にあたって遺跡全体の通し番号に改めることも考えたが、既にL区古墳などはL区1号墳～3号墳として広く通用しており、また、2001（平成12）年刊行の愛媛県埋蔵文化財調査センターの報告書、「鶴が峠古墳群（L区）」では、本調査検出の3基に続くL区4号墳～9号墳の遺構番号を当てている。このような事情を鑑み、報告としての統一性を図るため、本報告では逆にA～E区の各遺構についても区ごとに1から始まる通し番号にふりかえることとした。例えば、調査時E区で検出された2基の古墳を4号墳、6号墳として調査したが、本報告ではそれぞれE区1号墳、E区2号墳とするといった具合である。G区以降の遺構についての変更はない。

2. 環 境

(1) 地理的環境

道後平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を發し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の2大河川がある。この2河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、西方の海岸線から約4kmの通称「出合」で合流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみてみると、平野北方の石手川扇状地、およびその西方にひろがる氾濫原、扇状地の北に延びる沖積低地、平野南方の重信川扇状地、およびその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原に加えて、両河川の間において、石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。そのうち、平野北方の沖積低地は、東方の高縄山系南西面と、西方の太山寺山塊東面との間の、東西幅約2～4km、南北長約7kmにわたってひろがる地溝性の低地で、調査地はこの沖積低地西方に位置する松山市石風呂町、太山寺山塊の南麓にあたる丘陵地である。西北2kmの伊予灘には、松山の海の玄関口松山観光港、南西1kmにはもうひとつの主要な港、三津港が位置し、また北方の斎灘に面する現海岸線まで約3kmという地点にあたる。

(2) 歴史的環境

鶴が峠遺跡周辺の道後平野北西部域における環境を概観してみる。このエリアでの遺物・遺構の確認例のうちで最も遡るものは縄文時代後期の遺物群で、馬木町所在の蓬萊寺遺跡や、太山寺町の大淵遺跡において、包含層資料として後期中葉から後葉までの遺物の出土がみられている。遺構として人間の生活の痕跡が確実に確認できるのは縄文時代晩期中葉以降のことである。船ヶ谷町所在の船ヶ谷遺跡では晩期突帯文を遡る時期の河川、杭列、住居址が多量の土器、石製品、木製品とともに検出されている。大淵遺跡では、後期に引き続き、晩期前葉から晩期末までの遺物の出土があり、晩期後半の遺物を出土する土坑群が調査されている。また、晩期後半の遺物を出土する包含層からは大量のイネ花粉や炭化朶の検出とともに、丹塗り壺、カジ紋壺や石庖丁、石鎌などの大陸系磨製石器の出土もあり、当平野における稲作関連の最も古い例として注目されている。これらの遺跡は先述の沖積低地に立地する遺跡であるが、例が少なかったこの低地上での発掘調査例も少しずつ増加しており、弥生時代に関しては注目される調査例もみられはじめている。太山寺町の市営三光団地内において近年行われた大淵遺跡3次調査では中～後期の土器が流路内から出土している。また、西長門の船ヶ谷遺跡4次調査の流路からは前期から後期の遺物を出土したほか、前期から後期まで各期の井戸が検出されている。これらの井戸のうち、前期の1基は壺形土器の底部を抜いたものを井戸側として利用していて注目された。この低地周辺で弥生時代の遺構・遺物が多く確認されているのは低地を臨む周辺の丘陵麓、あるいは麓から低地にいたる緩斜面上である。主な遺跡を挙げておくと、溝から前期中葉の土器とともに板鍬、柳葉形磨製石鎌などを出土した山越遺跡2次調査地、弥生時代各期の遺物の出土のうち、前期突帯文系甕の出土が特徴的な谷町座拝坂（ざわいざか）遺跡、中～後期の溝を多く検出し、

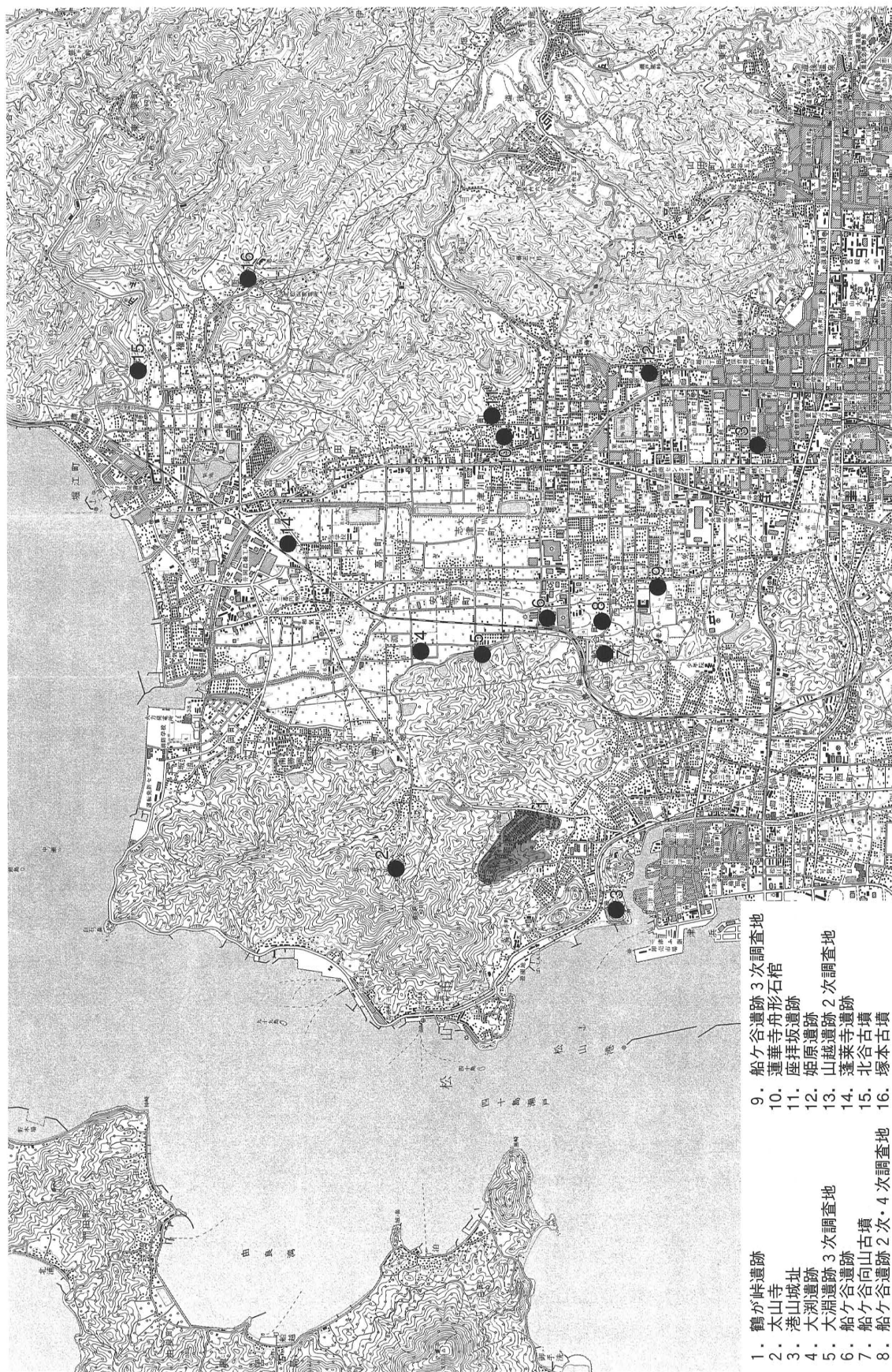


図 1 調査地と周辺の主要遺跡 (S=1:50000)

なかでも後期の円形周溝状遺構の検出で注目される姫原遺跡などがある。

古墳時代の集落そのものの確認例はさほど多いものではないが、先述の大測遺跡3次調査で前期の竪穴式住居数棟と古式土師器を多量に出土する流路や後期の掘立柱建物数棟が検出されていたり、西長戸で行われた船ヶ谷遺跡2次調査で4世紀末から6世紀前半の祭祀土坑を伴う集落遺構が調査されている。同じく、船ヶ谷遺跡4次調査では、古墳時代初頭から後期の集落や流路の検出があり、陶質土器や軟質土器、非陶器系須恵器など多量の遺物の出土がみられている。これらの集落に対して古墳そのものは周辺の丘陵上に数多く分布している。太山寺山塊北面の勝岡町高月山古墳群の7基の古墳のうち2号墳は、箱式石棺を主体部とする小長方墳で、周溝内より布留I式期併行の土師器壺や銅鏃を出土しており、この地域のみならず平野内でも最も古い段階の古墳のひとつである。この古墳群の周辺には同様に箱式石棺を主体部とする古墳群、赤子谷古墳群、坂浪古墳群などが分布しており、この坂浪古墳群中の塔ノ口山古墳では長宜子孫銘内行花文鏡、画像鏡の2面の鏡片が出土し、古い段階の首長墳ともいわれているが、須恵器や人物埴輪等の出土も伝えられており、墳形・主体部とともにその実態については不明な部分が多い。その他、調査地南東1.8kmの低丘陵上にかつて存在した小規模な前方後円墳船ヶ谷向山古墳では、くびれ部円筒埴輪樹立列とともに馬、鶏、蓋などの形象埴輪が出土しており、5世紀末頃の年代を与えられている。

沖積低地東方の高縄山系南西麓にも多くの古墳群が分布しているが、そのなかでも福角町所在の市指定文化財北谷古墳や権現町所在の塚本1号墳など、大型石材を用いた横穴式石室を主体部とする6世紀末から7世紀前半代の円墳・方墳というこのエリアでの首長系譜に連なる古墳がよく知られている。また、潮見古墳群内に属する谷町室岡山蓮華寺境内には、阿蘇溶結凝灰岩を削り抜いた舟形石棺の身部がある。出土地、出土状況等の詳細は不明だが、県内唯一の削り抜き式石棺の例であり、先ほどの船ヶ谷遺跡4次調査の陶質土器や軟質土器の出土例とともに、瀬戸内海上交通ルートの要衝の一角を道後平野北西部が担っていたことがしのばれる。

古代以降のこの地域についても不明な部分が多く、座拝坂遺跡の奈良～平安時代の2棟の掘立柱建物、あるいは姫原遺跡の溝、また、船ヶ谷遺跡3次調査の掘立柱建物、柵列、井戸等で構成された中世村落遺構などが、遺跡として知られている主なものである。さて、調査地東を南北に走る遍路道、県道183号線を北へ1km上ってゆくと、四国霊場52番札所太山寺がある。739(天平11)年、行基開基と伝えられる寺本堂は、創建以来2度の災害を経て、1305(嘉元3)年の再建になるもので、国宝に指定されている。また、南西1kmの海岸に面した独立丘陵上の港山城跡は14世紀の築城と伝えられ、河野氏の海浜守護としての役割を考えられている。

文献

『松山市の文化財』 松山市教育委員会 1980

『松山市史料集 第2巻 考古編Ⅱ』 松山市教育委員会 1987

阪本安光『松山市・船ヶ谷遺跡』 愛媛県教育委員会 1984

栗田茂敏・武正良浩『大測遺跡－1・2次調査－』 松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2000

吉岡和哉『大測遺跡－3次調査－』 松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2000

長井数秋「農耕文化の形成と発展」『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』 愛媛県教育委員会 1982

梅木謙一・武正良浩「山越遺跡－2次調査－」『山越・久万ノ台の遺跡』 松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993

組 織

- 西尾幸則 「鶴が峠遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会 1986
- 松村 淳ほか「座拝坂遺跡」『和気・堀江の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
- 高尾和長 『船ヶ谷遺跡－2次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1999
- 相原浩二 「姫原遺跡」『和気・堀江の遺跡 II』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
- 宮崎泰好 『高月山古墳群調査報告書』松山市教育委員会 1988
- 池田学・宮崎泰好 「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報 II』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1989
- 岡野 保 『北谷古墳（墳丘・石室実測調査報告書）』松山商科大学史跡研究会 1980
- 栗田茂敏 『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991
- 藤田憲司 「讃岐の石棺」『倉敷考古館研究集報 第12号』倉敷考古館 1976
- 加島次郎 『船ヶ谷遺跡－3次調査地－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1999
- 山之内志郎・高尾和長 『船ヶ谷遺跡－4次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2002

3. 組 織

調査組織

松山市教育委員会	教 育 長	西原多喜男
文化 教育 課	課 長	藤原 涉
	課長補佐	坪内 晃幸
	第二係長	大西 輝昭
	主 任	西尾 幸則
	調 査 員	池田 学
		松村 淳

刊行組織

松山市教育委員会	教 育 長	土居 貴美
事 務 局	局 長	石丸 修
	企 画 官	江戸 通敏
	〃	仙波 和典
	〃	宮内 健二
文化財課	課 長	家久 則夫

(財) 松山市生涯学習振興財団

理 事 長	中村 時広
事 務 局 長	吉岡 一雄
〃 次 長	丹生谷博一
調 査 監	杉田 久憲
埋蔵文化財センター	
所 長	丹生谷博一
次長兼管理係長	重松 幹雄
次長兼調査係長	田城 武志
担 当	栗田 茂敏

調 査 地 愛媛県松山市石風呂町乙41-8 外

調 査 期 間 1980（昭和55）年1月21日～1981（昭和56）年9月28日

調 査 面 積 4,500m²

第2章 調査の成果

1. 試掘調査の概要

調査は、フォーク状を呈する調査地丘陵や谷部をいくつかのエリアに分け、順にトレンチ調査を行いながら、必要な部分に調査区を設定して進めていった。まず、丘陵部の調査を行う前に、対象地の最も東にひろがる低地部に重機を入れ、数本のトレンチを設定して掘削を始めたが、湿地状地形であるため湧水が著しく、十分な掘削が行い得ない状況であった。このため、本調査を通して鞍部については調査対象からはずすこととし、丘陵部にA区からL区までの12の区域を設定し、主に稜線沿いを中心にトレンチによる調査を行った。この12のエリアのうちK区とした丘陵は、用地取得が行い得ず、開発対象からはずれ、現況のまま残ることになったので、調査対象とはなっていない。試掘調査では、A区、F区を除くすべての区域でなんらかの遺構の検出があったり、遺物の出土が確認されたため、各々のエリアのうち必要な部分に調査区を設定して調査を進めていった。

2. B区1号墳の調査(図4・5)

B区の尾根東端の盛り上がり調査した。耕作土直下で地山となるが、この地山も耕作による削平が進んでおり、墳丘であるとの断定は難しいが、周辺の表土中あるいは灌水配管用の溝から須恵器や埴輪片の出土がみられたので、一応墳丘の痕跡と判断した。

出土遺物

須恵器(図6)

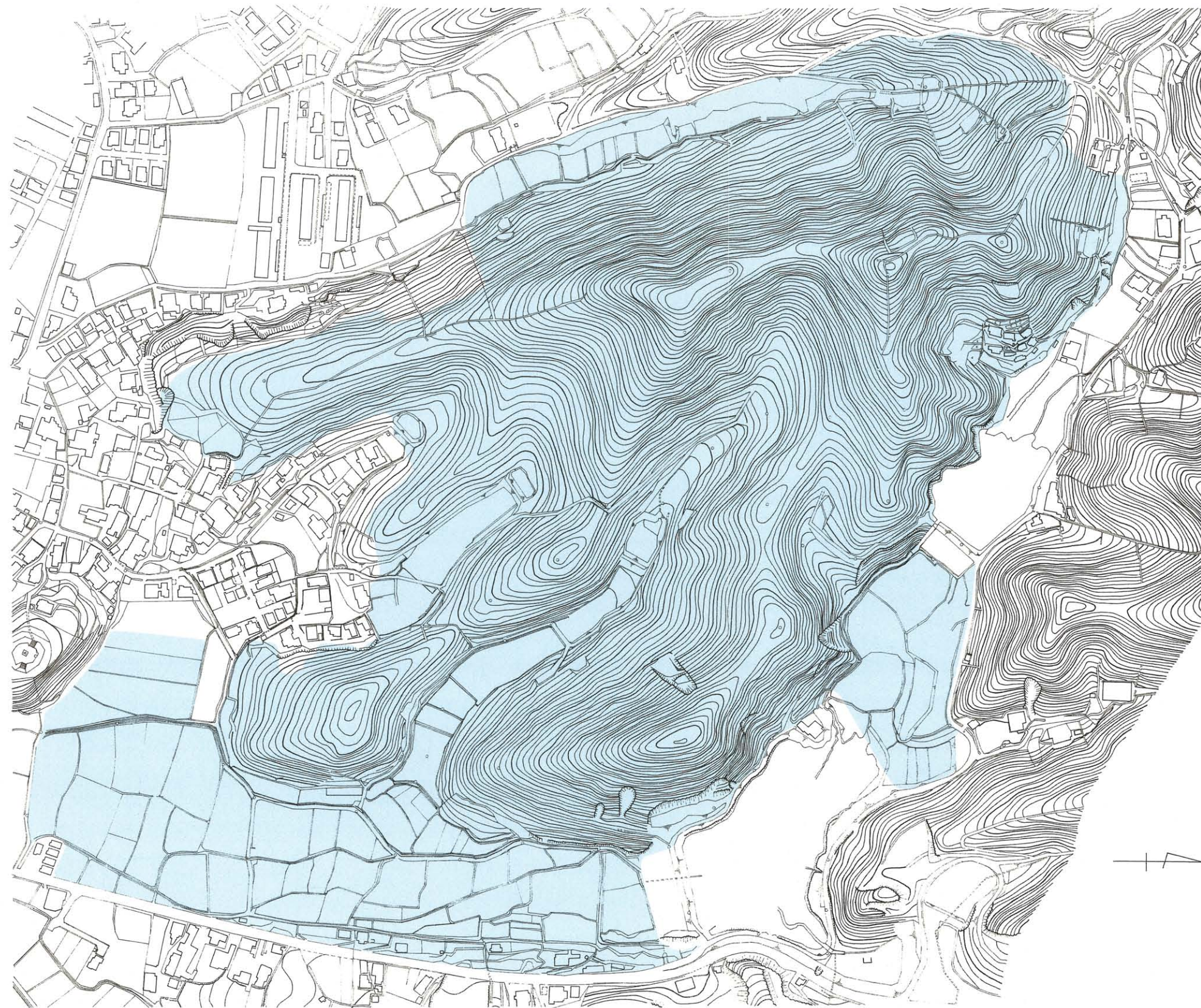
蓋(1~3) 1は有蓋高坏の蓋。口縁部を欠くもので、直径2.8cm、高さ0.6cmの中窪みのつまみを持つ。天井部と口縁部境の稜が僅かに看取できる。天井部全面を回転ヘラ削りされている。稜の部分での復元径11.8cmを測る。2は坏蓋口縁部の片、口径12.8cmを測る。天井部との境に稜、口端部内面に段を持つ。3も、口径14.6cmを測る坏蓋である。端部を丸く収める外開きの口縁部と天井部の境に稜を持つ。この稜以上の天井部を回転ヘラ削りされている。外面は暗紫色、内面は灰黒色に焼成されている。

坏身(4) 復元受部径15.7cmを測るもので、口端部を欠く。比較的浅い器型で、口縁部も短いものと思われる。

甕(5) 小片のため口径に若干の不安があるが、復元すると24.7cmの口径になる。口端部を外面に断面方形に肥厚し、端部を軽くつまみ上げている。

埴輪(図6)

6は底部片、底端部を8cmほど上がった部位に丸みをおびた断面台形状の低いタガを持つ。基本的に底端面は外下がりの傾いた面をなし、外端面で接地するが、削りの痕跡はみられない。断面を計測した部分は、潰れを起こした部分を起こしたものと考えられ、断面形は尖り気味に変形している。外



0 200m

(S=1:3000)

図2 土地区画整理事業予定範囲

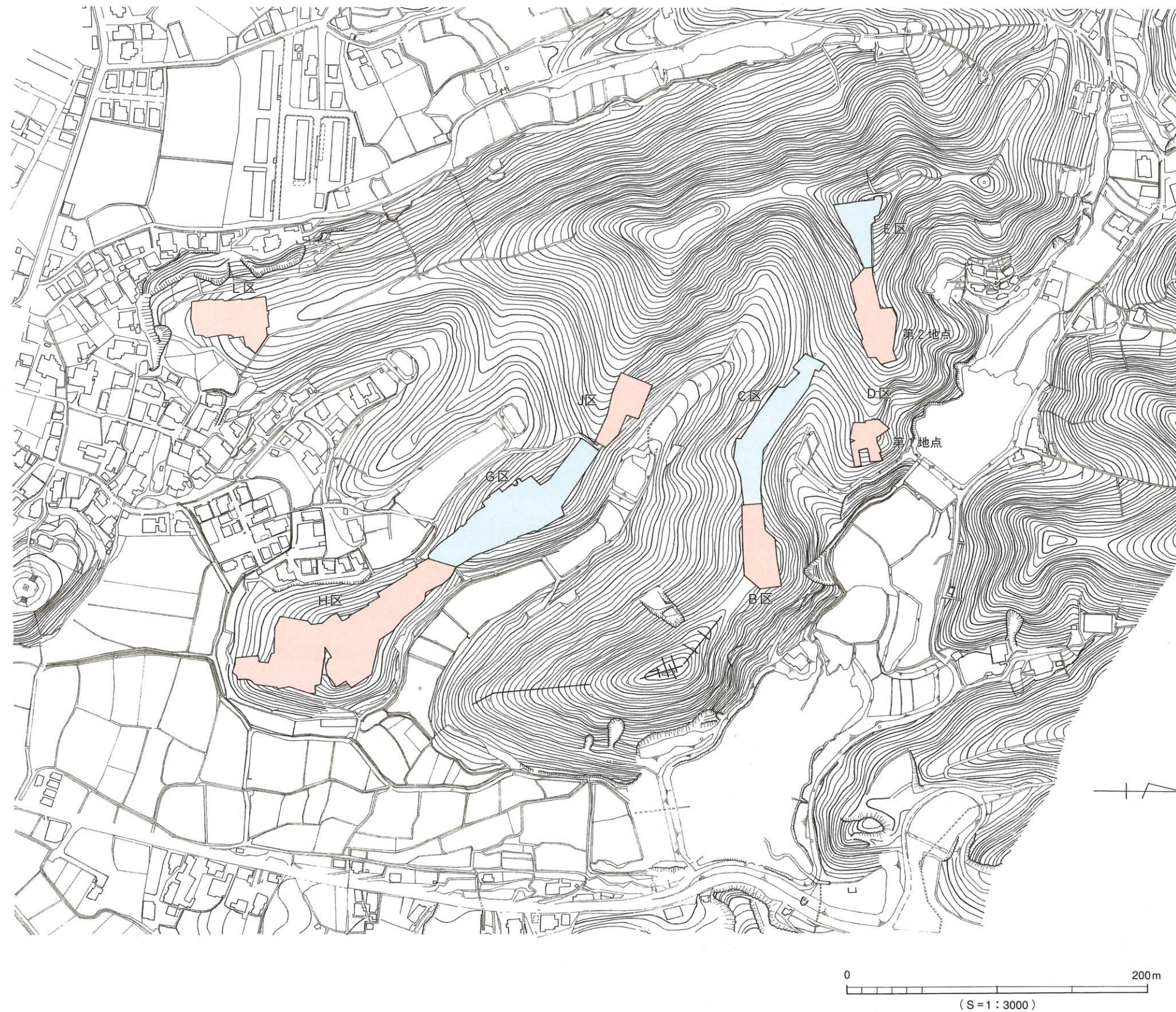


図3 調査地の区割りと調査実施部分



図4 B区調査前コンター図

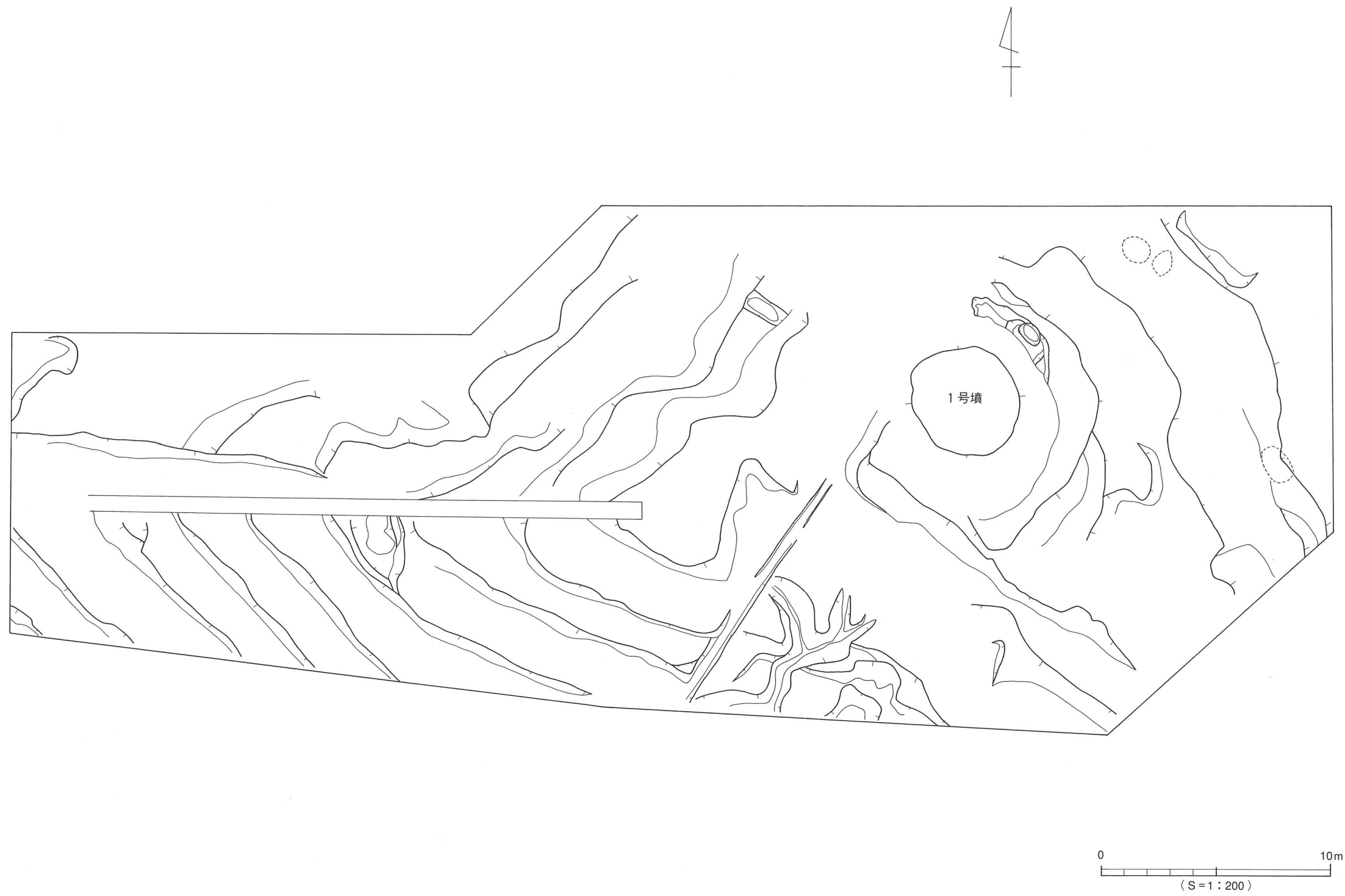


图5 B区完掘後全測図

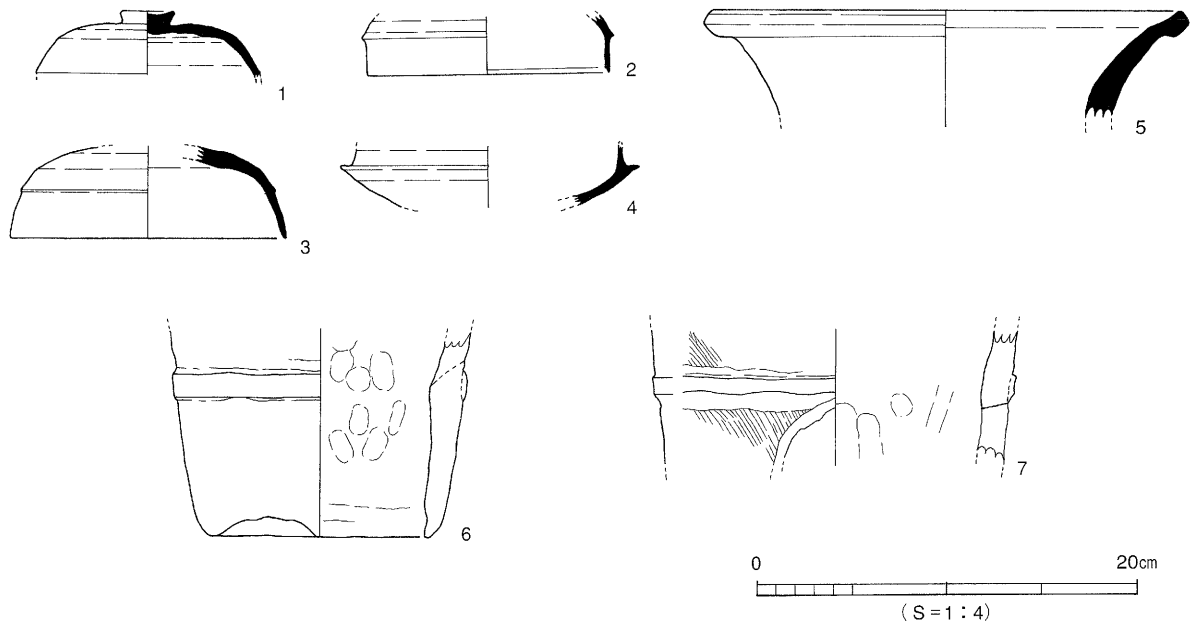


図6 B1号墳周辺出土遺物

面に刷毛目はなく、内面には指おさえや斜め方向のナデが観察できる。7は透孔部分の胴部片、6と同様の硬質の焼成である。タガ断面形は中窪みの低い台形、外面には斜め方向の刷毛目を施される。

3. C区の調査

B区の北西の尾根沿いを、その形状にしたがって「く」の字状に約1800㎡表土剥ぎを行い、調査区の「く」の字に折れ曲がる近辺で2基の古墳を検出した。いずれも地山面で整形痕や周溝の一部と考えられる溝が検出されたのみで、主体部等の詳細は不明である。

(1) C1号墳 (図7～9)

東西に2基並んで検出されたうちの西側の1基である。マウンド状の盛り上がり、南西から北にかけて不明確ではあるが、周溝が検出されている。遺物の出土はないが、墳丘直径10m内外の円墳と考えられる。

(2) C2号墳 (図7・8、10)

1号墳の東に近接して営まれているもので、これも地山面での検出である。墳丘の南半は耕作によりカットされている。残っている部分には途切れながらも周溝状の溝が巡っている。これも1号同様10m程度の直径を持つ円墳であったものと思われる。北西側の周溝内から須恵器壺1個体分の出土があった。

出土遺物

須恵器 (図11)

壺(8) 器高19.9cm、口径15.4cmを測る広口壺。胴部は、直径19.7cmのほぼ球形で、頸部は直線的



図7 C1号、2号墳丘調査前コンター図

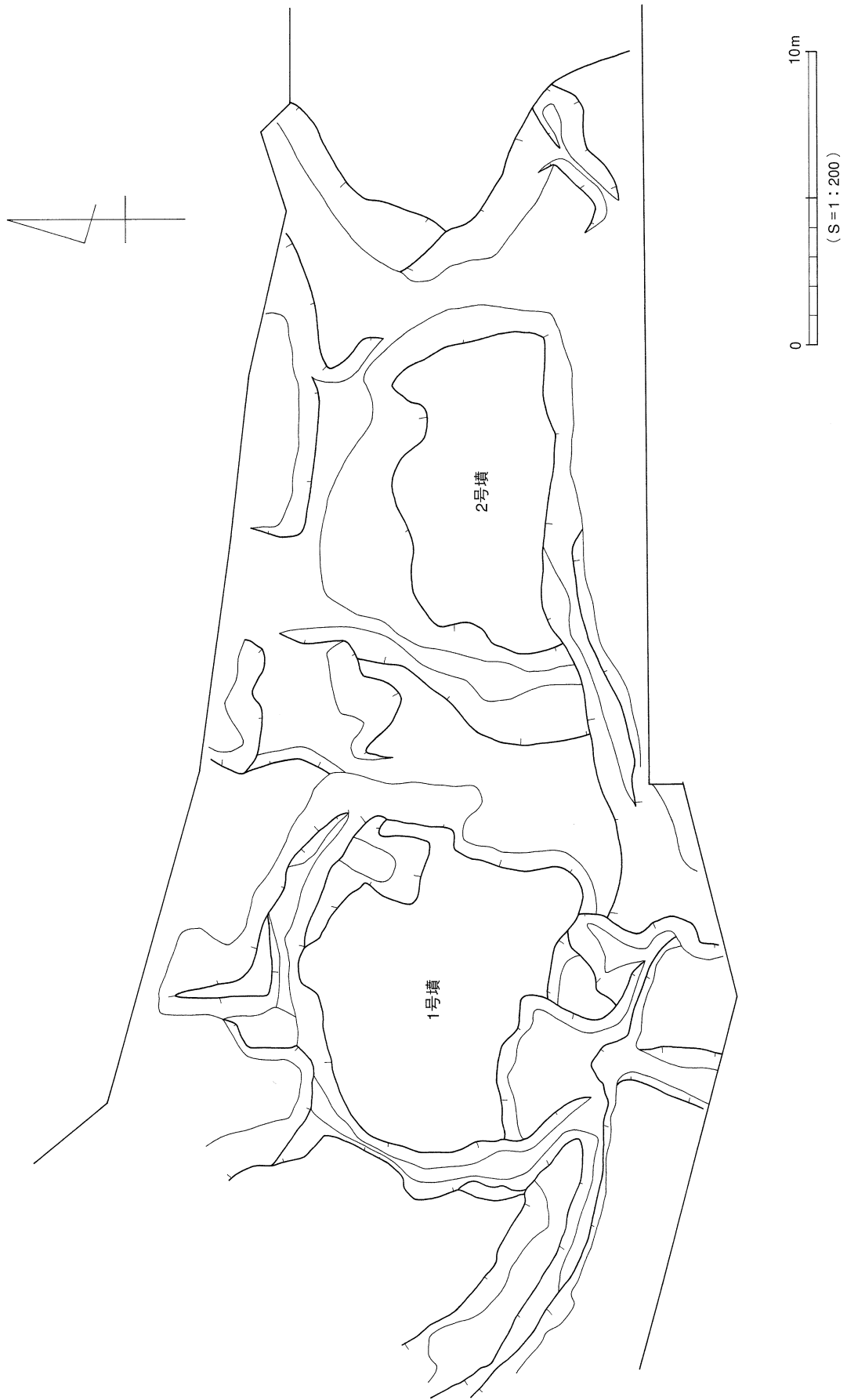


図8 C1号墳、2号墳の配置

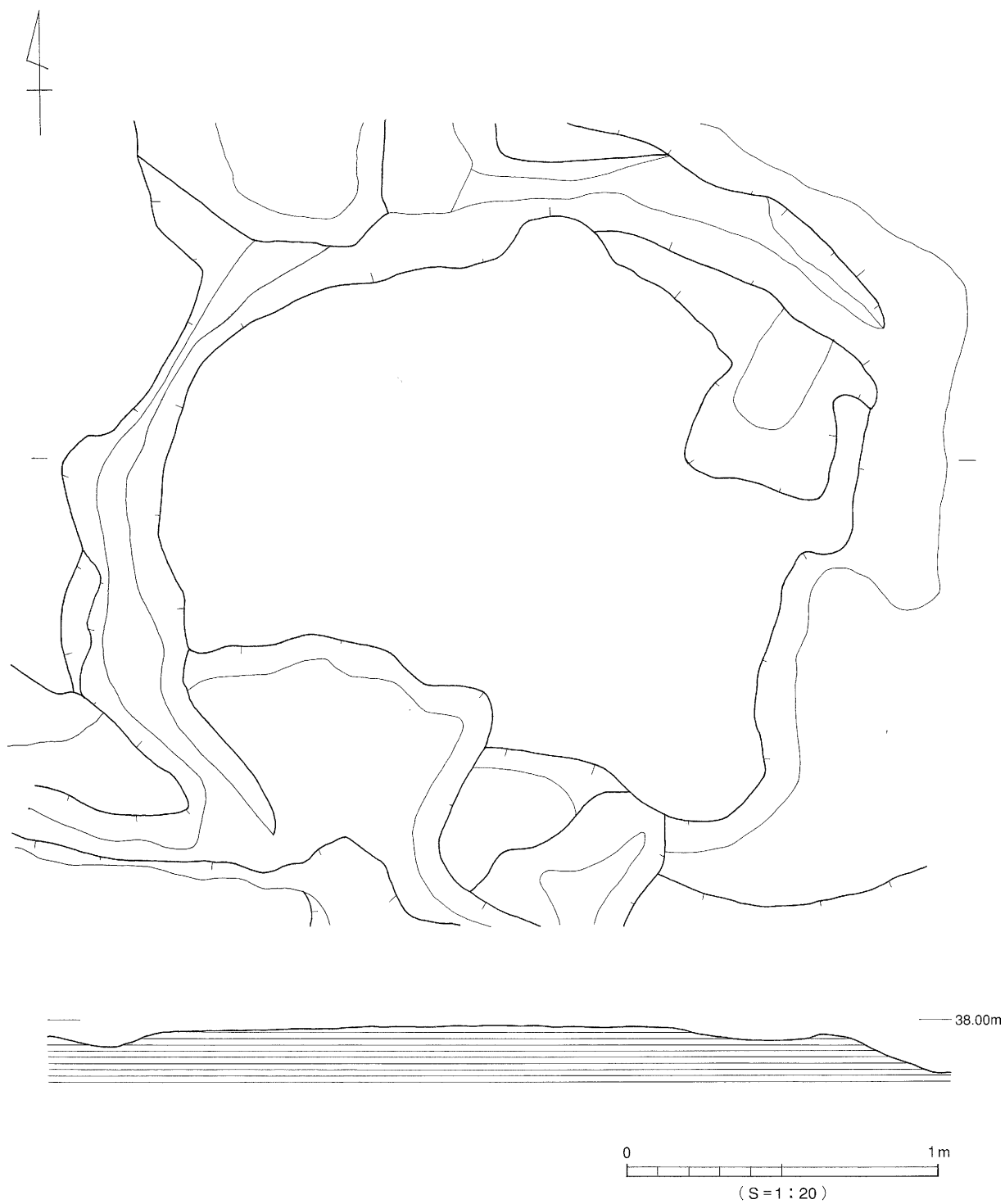


図9 C1号墳平・断面図

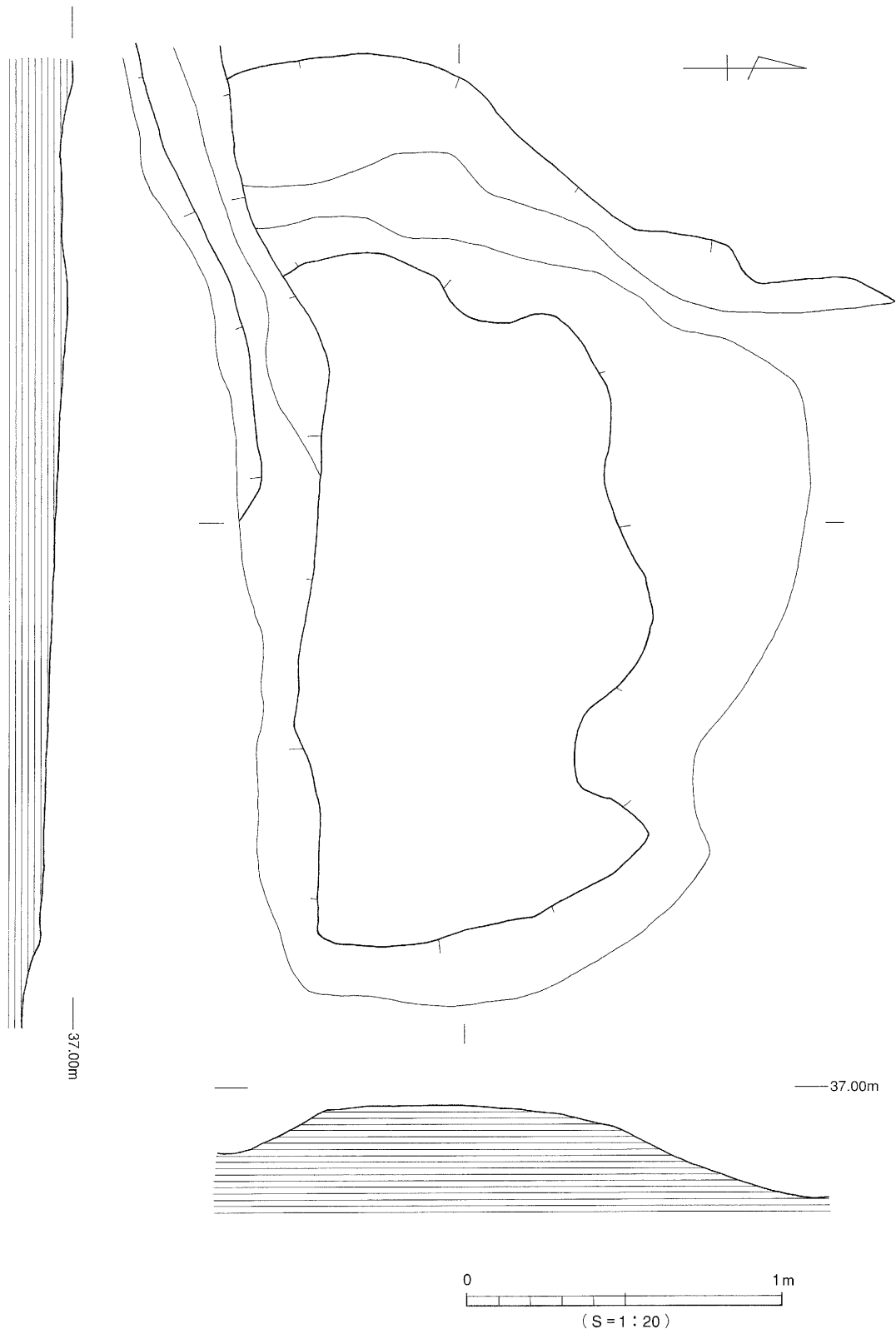


图10 C2号墳平・断面図

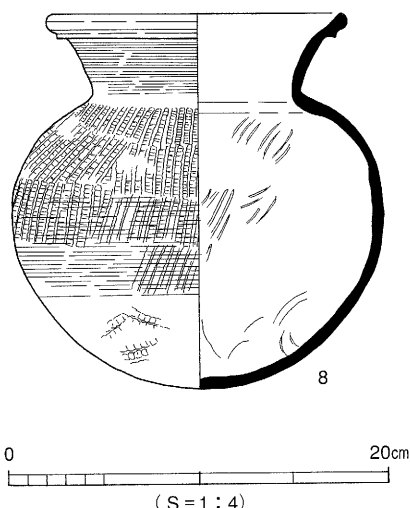


図11 C2号墳出土遺物

に外上方に開く。丸みをおびた肥厚帯を持つ口端部直下に、断面三角形の細い突帯が巡る。胴部外面には大きめの格子叩きが施されるが、底部付近は撫で消され、中位付近には叩きの後カキ目が施されている。頸部はカキ目調整の後横撫でされている。胴部内面の叩き目は撫で消され、底部には指頭圧痕が顕著である。

(3) その他の遺物

須恵器 (図12)

高坏 (9) 脚部片、裾部径9.6cmを測る。裾端面は横撫でによる窪みを持ち、端部は下方につまみ出されている。また、外面中ほどには凹線が1条巡っている。

壺 (10) 復元口径14.8cmを測る口頸部片。外反しながら外

上方に開き、口端部に肥厚帯を持たず、端部を上方につまみ上げている。端部直下の外面には、断面三角形の細い突帯が巡る。頸部外面はカキ目調整されている。

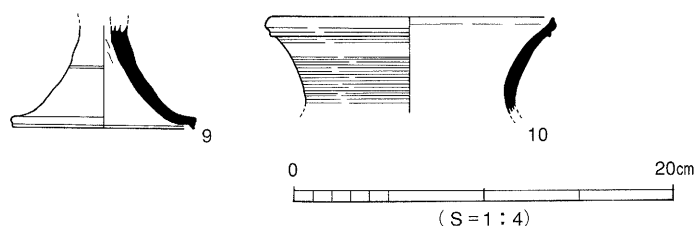


図12 C区出土遺物

4. D区の調査

C区の北側鞍部を越えた部分に、調査地の最高所E区から南東に下る尾根線がある。この部分をD区として調査した。調査区は、D区東端の突出部に第1調査区約200m²、またE区に続く稜線沿いに第2地点約1300m²と、図3に示したような不整形の2調査区を設けて掘削したが、耕作による地形の改変のため、顕著な遺構は認められなかった。しかしながら、第2調査区の各所において須恵器片や埴輪片の出土が散見されているので、本来はいくつかの古墳が存在していたものと思われる。

D区出土遺物

須恵器 (図13)

坏蓋 (11~14) 11~13は、いずれも口縁部と天井境に稜を持つものである。11は口径12.3cmを測るもので、口端部に段を持つ。天井部外面にはシャープな削りが施されている。12・13ともに口端部に段を持つ小片で、それぞれ口径14.6cm、14.0cmを測る。14は前三者と異なり、口縁部と天井境に沈線を施されるもので、口径15.0cmを測る。天井部に顕著な削りはみられず、撫で調整されている。口端部は平坦な面をなしている。

坏身 (15・16) 15は口径11.4cm、内上方に長めの口縁部が立ち上がるもので、口端面に段を持つ。16は口径11.6cm、外反する短い口縁部が内傾しながら立ち上がっている。

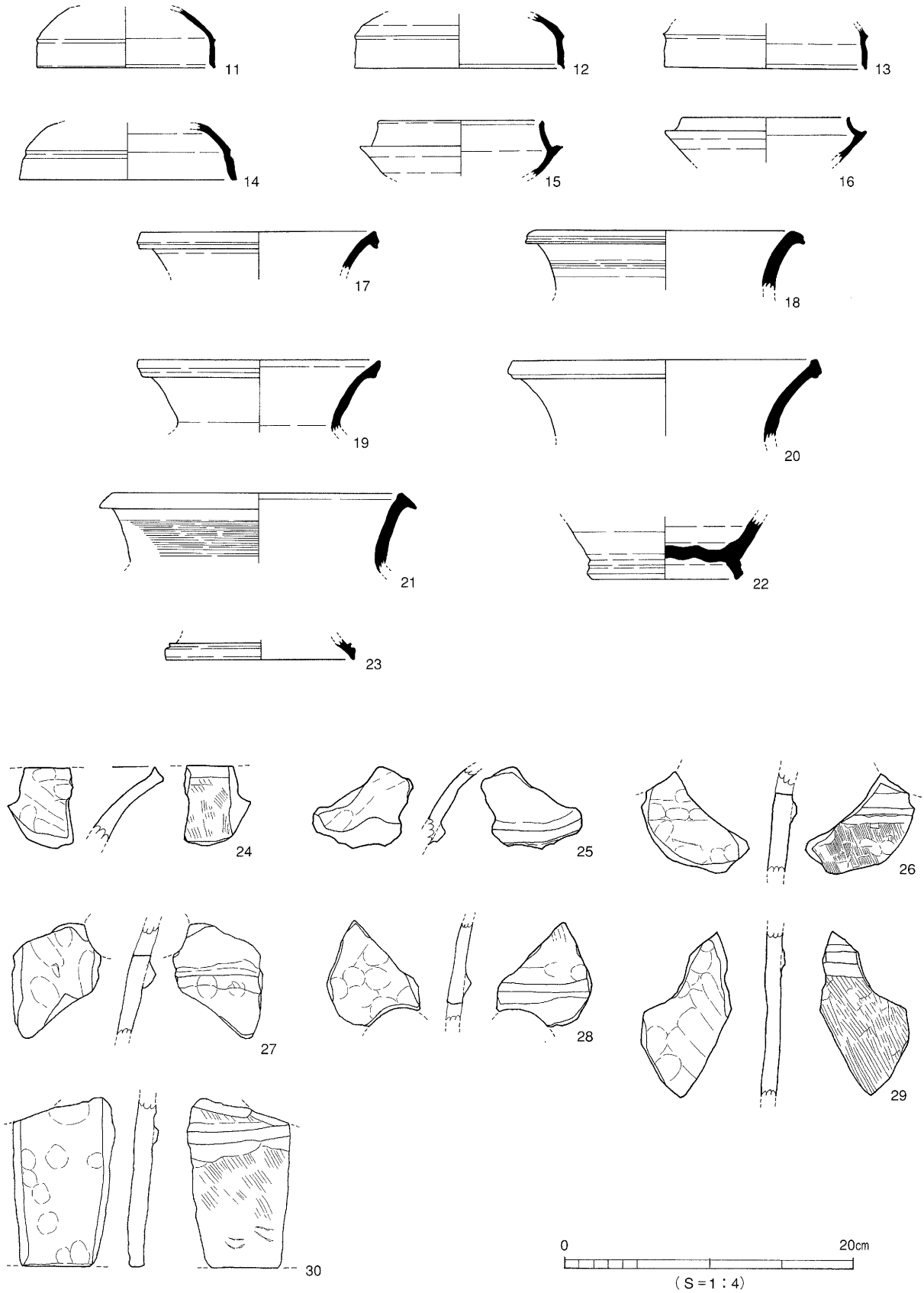


図13 D区出土遺物(1)

壺・甕 (17~22) 17~21は口頸部である。17は口径16.2cm、口端部外面を下方に肥厚し、下端に近い部位に沈線を1条施す。18の口端部外面も下方に肥厚して沈線を施す点では17と同様であるが、内面に稜を持たないところが異なっている。頸部外面にはカキ目を施されている。19は口径16.7cm、比較的細身の口頸部である。口端部を断面三角形に肥厚し、1条の沈線を施す。20は口径21.0cm、口端部の内外面に断面方形の肥厚帯を持ち、口端面を平坦におさめる。外面の肥厚帯には1条の沈線が施される。21は口径20.0cm、あまり大きく開かない短い頸部、口端部は薄く外下方に引き出したような、外傾した面をなす。口端部内面には撫でによる窪みが巡っている。22は底部、外上方に直線的に立ち上がる体部に、ハの字状に踏んばる高台が貼り付けられている。高台径9.9cmを測る。高台端部は内傾した面をなし、内端で接地する。

高坏 (23) 短脚有蓋高坏の脚裾端部片、復元裾端径13.0cmを測る。端部直上の外面に、断面三角形の細い突帯を持つ。

埴輪 (図13)

24・25は朝顔形埴輪の口縁部片で、24は口端部、25が受部タガ付近の片である。両者ともに器壁が薄く、比較的小型のものと考えられる。24の口端部をやや下がった外面にはタテハケが観察できる。26~29は胴部片で、うち26・29が須恵質のものである。須恵質の26には低い台形状のタガが貼り付けられ、外面を非常に細かい縦から斜め方向の刷毛目で調整されている。土師質の27・28は透孔が確認できる個体であるが、先の朝顔あるいは30の底部も含めて焼成は堅緻である。タガの断面形は、先の朝顔25も含めて三角形を呈している。須恵質の29の外面に施された斜め方向の刷毛目は、他の土師質のものと同様で、同じ須恵質の26ほど細くない。タガは27に近い中窪みの低い台形で、土師質のものが断面三角形であるのと異なっている。30は底部、やはり底部のわりには器壁は薄い。外面の斜め刷毛目は底端部をやや上がったところまでで、端部付近には工具痕のような窪みがみられる。端面は平坦で、端面全体で接地する。タガは低い台形状を呈する。

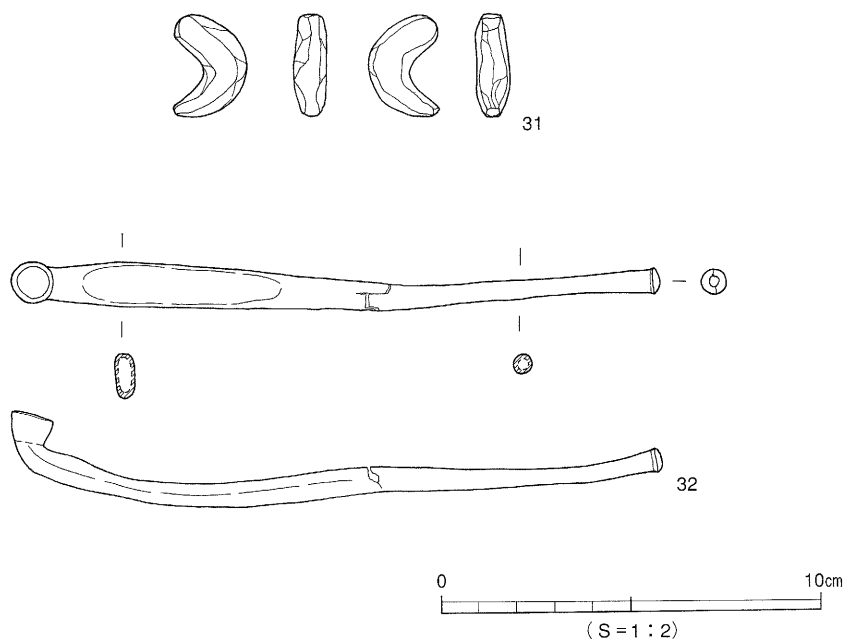


図14 D区出土遺物 (2)

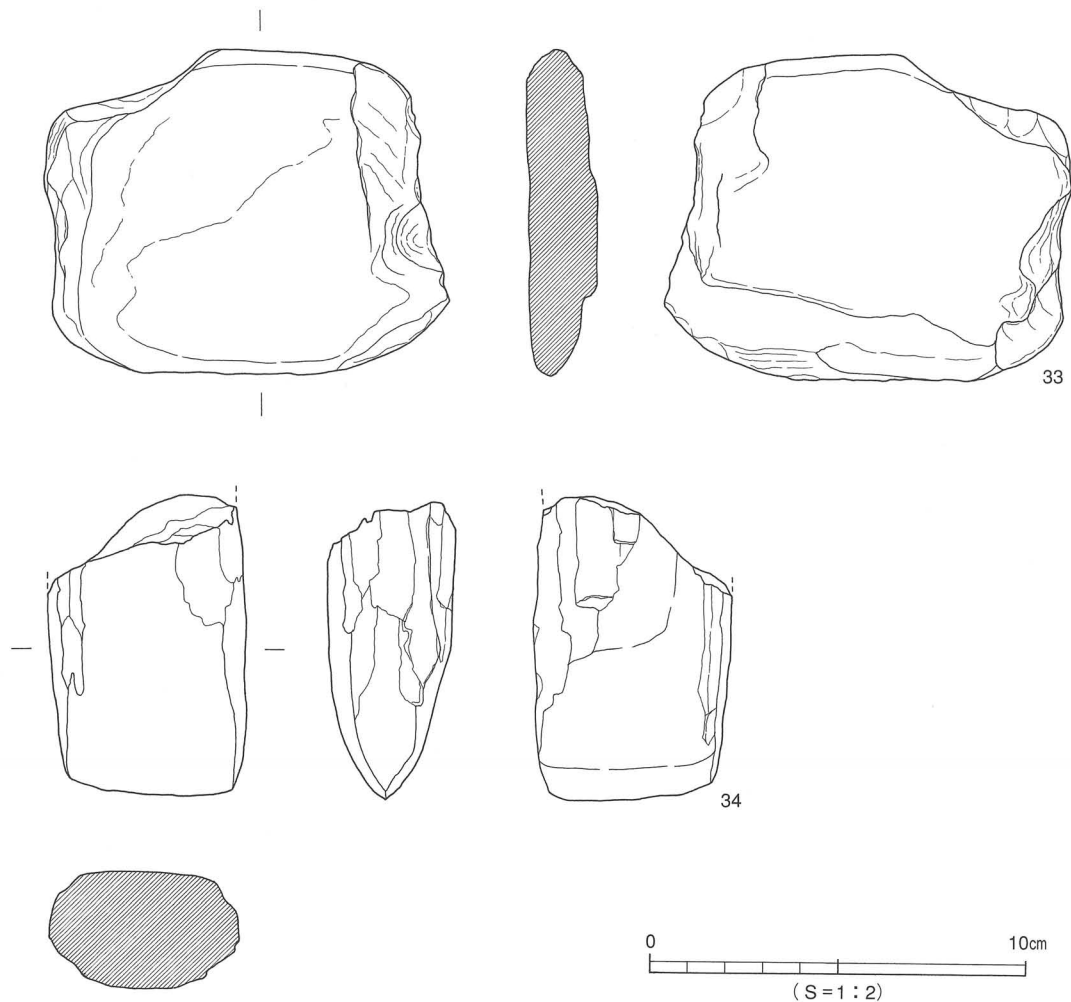


図15 D区出土遺物(3)

玉類・金属製品(図14)

勾玉(31) 碧玉と思われる淡緑灰色の石材を擦って、おおまかな形態まで成形した未製品である。全長2.7cmを測る。平面部分には大きな擦り面が、また曲面部分には細かい擦りの単位が観察できる。次段階で穿孔を行い、仕上げの成形・研磨工程に進むものと思われる。背側の曲線に対して、腹側は直線的に強く折れ曲がる。腹部に比べて頭部を薄く成形しているのが特長である。弥生時代のものか。

煙管(32) 銅製、全長17.1cmを測る完形品である。雁首と吸い口をラウで接続しない延べ煙管で、脂返しに近い部分に変形し、中間どころに亀裂が入っている。全体的なプロポーシオン、火皿の形態などから、18世紀後半頃のものと考えられる。

石器・石製品(図15)

石錘(33) 厚さ1.8cmの緑泥片岩板状素材の短辺二辺を打ち欠いて錘としたもので、重量282.2gを量る。

石斧(34) 緑泥片岩を素材とした伐採斧の破損品。刃部片で、現況重量209.2gを量る。残存長8.0cm、幅5.2cmで、厚さ3.2cmの楕円形横断面をなす。

5. E区の調査

対象地の北部の最高所、標高72.6mを測る頂上部を含むエリアで、頂上部と、主に南から南東斜面を調査した。その結果、E1号墳、2号墳の2基の古墳が検出された。調査時にはそれぞれ、4号墳、6号墳と呼称されていた2基である。

(1) E1号墳

墳丘・主体部 (図16~20)

頂上部で調査されたもので、表土直下の岩盤を掘削した墓坑内に、ほとんど全壊状態の横穴式石室が検出された。盛り土の残存はなく、ベースの地山もかなり削平されている状況であった。したがっ



図16 E1号墳丘調査前コンター図

て、墳丘の形態・規模も定かではない。

主体部は南方向に開口する横穴式石室で、基底石の一部と床面の一部が残存しているのみであった。基底石のうちでも、壁面を構成する主要部材となる大型の石材は奥壁に1石、東側壁に1石の2石のみで、その他は比較的小ぶりの石材で、部分的に転石はあるが、多くが角の立った割石を用いている。墓坑は4.1×2.2m程度の隅丸方形形状で、この墓坑の中に床面幅1.2m、現存長3.4mの石室を設けている。東側壁の遺存している石材や、抜き痕をみると、腰石には扁平な石材を立てて用いていたようである。床面も攪乱されているので、玄室が開口方向のどの部分までであったのか不明で、したがって、



図17 E1号墳丘完掘後コンター図

調査の成果

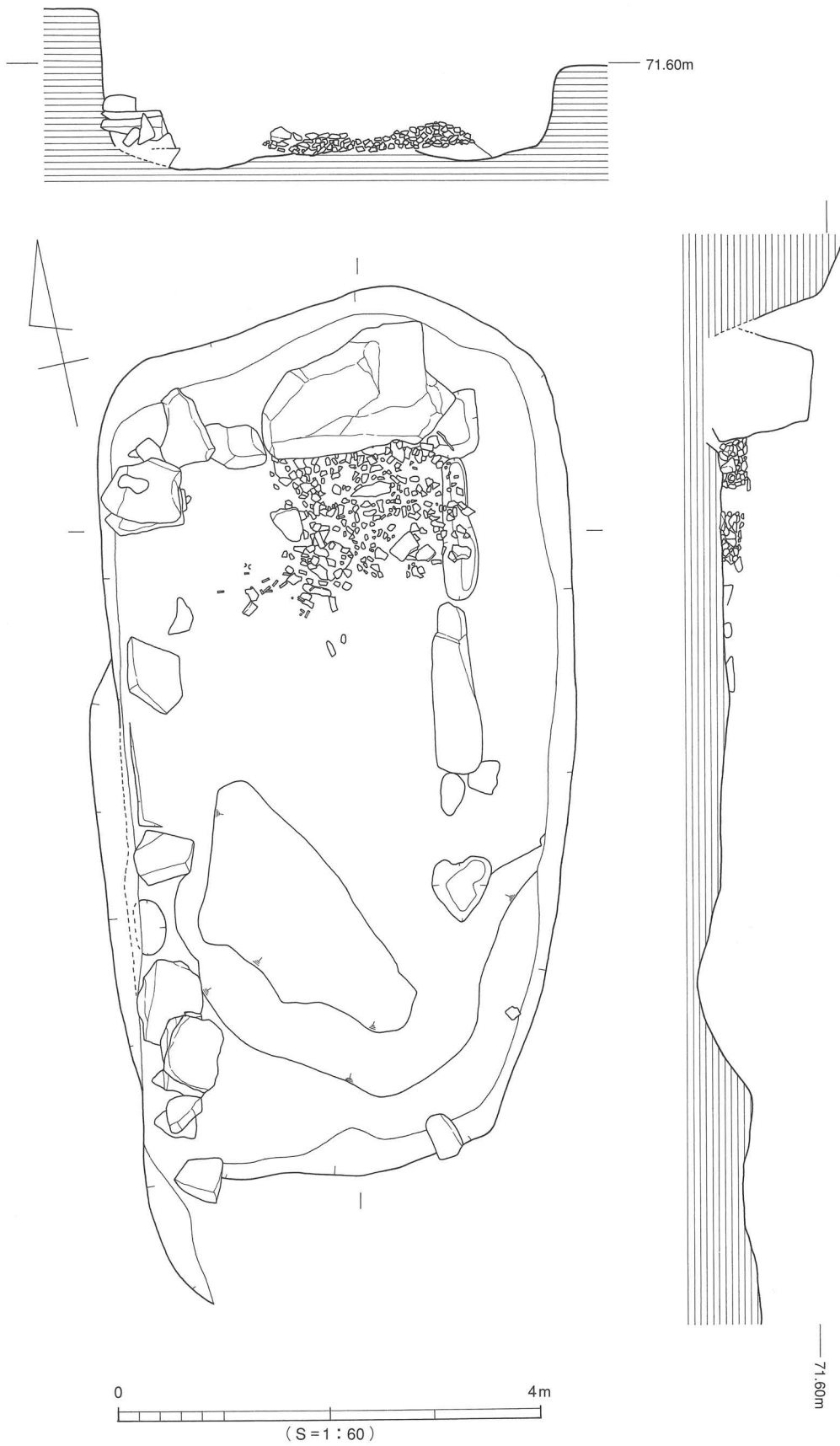


図18 E1号墳横穴式石室平・断面図



図19 E1号墳横穴式石室遺物出土状況

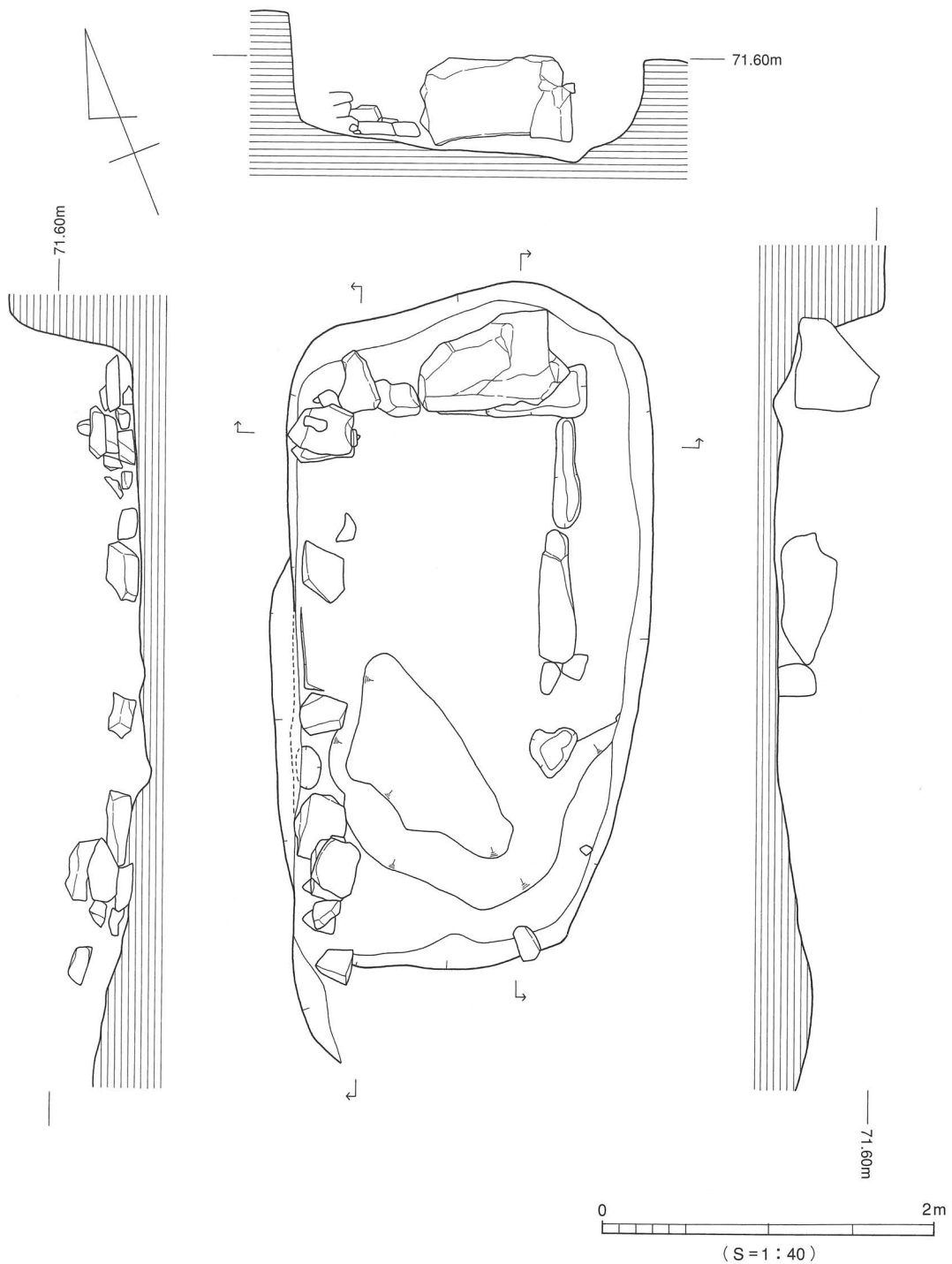


図20 E1号墳横穴式石室展開図

石室の平面プランも判然としないが、その規模や石材の用い方等の現況から判断すると、無袖の石室であった可能性が高い。玄室右奥隅の部分に、攪乱状態ではあるが礫床面の一部が遺存していたが、これに用いられている石材にも河原石と地山礫が混在している。石室長軸ラインの奥壁から0.5m付近に、管玉をはじめとする玉類が集中して検出されているので、この付近に被葬者の頭位があったものと思われる。墳丘も含めて副葬土器類の出土はないが、石室の規模・形態から7世紀前半代の古墳と考えられる。

横穴式石室出土遺物

鉄器・鉄製品 (図21)

鉄鏃 (35) 長頸の片刃鏃。茎部を欠く、鏃身長3.5cmの片区の片刃である。箆被長7.3cmで、片面の刃部と箆被部の境周辺と、関部の側面に平織りと考えられる布の痕跡がある。現況で17.9gを量る。

不明鉄製品 (36) 玄室内出土の小破片6個が接合して図のような鉄棒になったが、用途、器種は

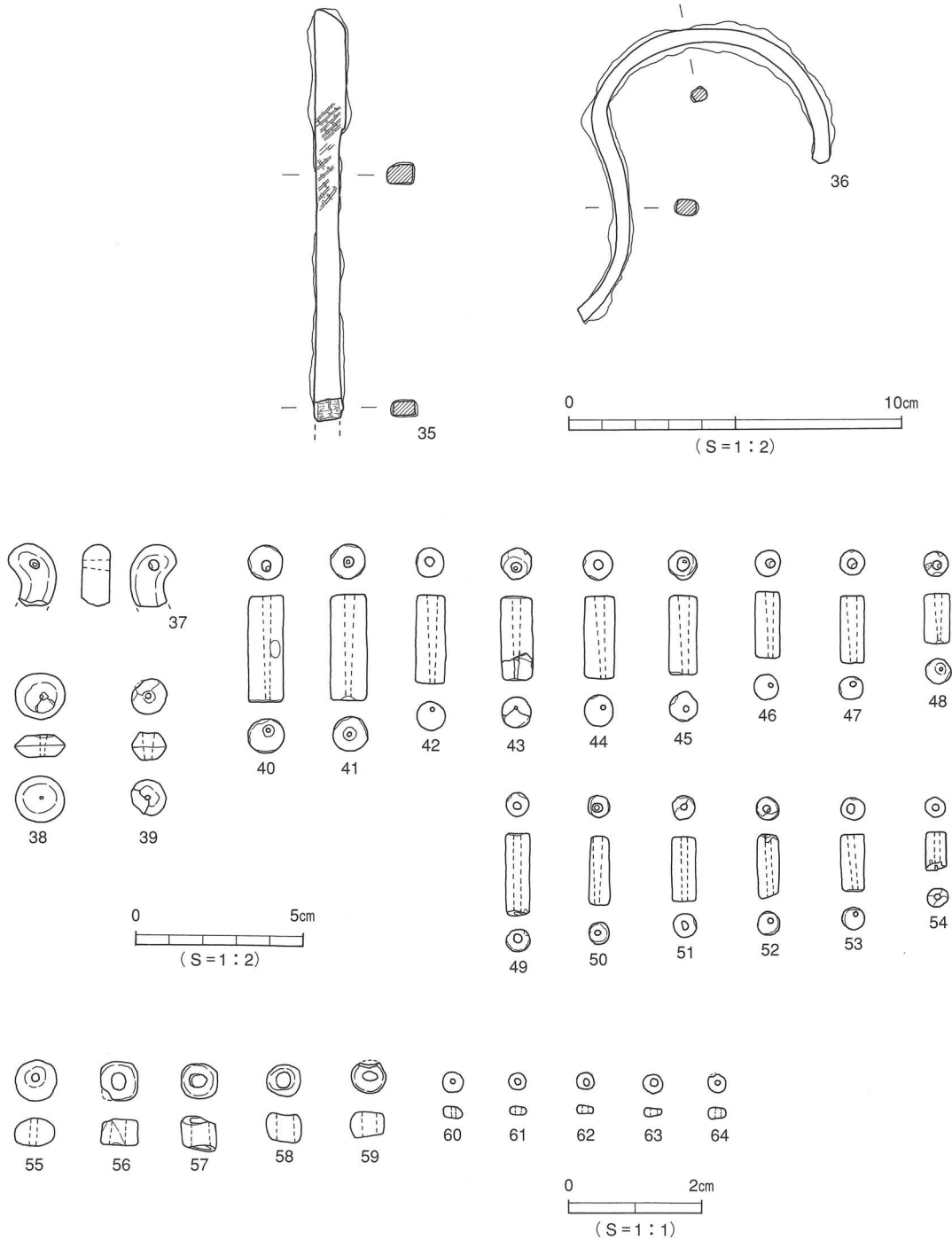


図21 E1号墳横穴式石室出土遺物

不詳である。馬具の一部か。

玉類 (図21)

勾玉 (37) 水晶製勾玉の半裁品、腹部から尾部を欠く。穿孔は片側から行われている。

算盤玉 (38・39) いずれも水晶製、38は直径1.4cm、厚さ0.6cmと扁平で39に比べると大型、片側穿孔のものである。39は若干破損しているが、直径1.3cm、厚さ0.8cmを測るもので、やはり片側から穿孔されている。

管玉 (40~54) 15点の出土がある。すべて碧玉製であるが、色調にふたとおりのものがある。40~48が濃緑色、小ぶりの49~54は淡緑灰色である。

ガラス玉 (55~64) 丸玉5点、粟玉5点の計10点の出土がある。これらのうち57・58がやや緑がかった青色であるほかは、濃い紺色の色調である。

(2) E2号墳

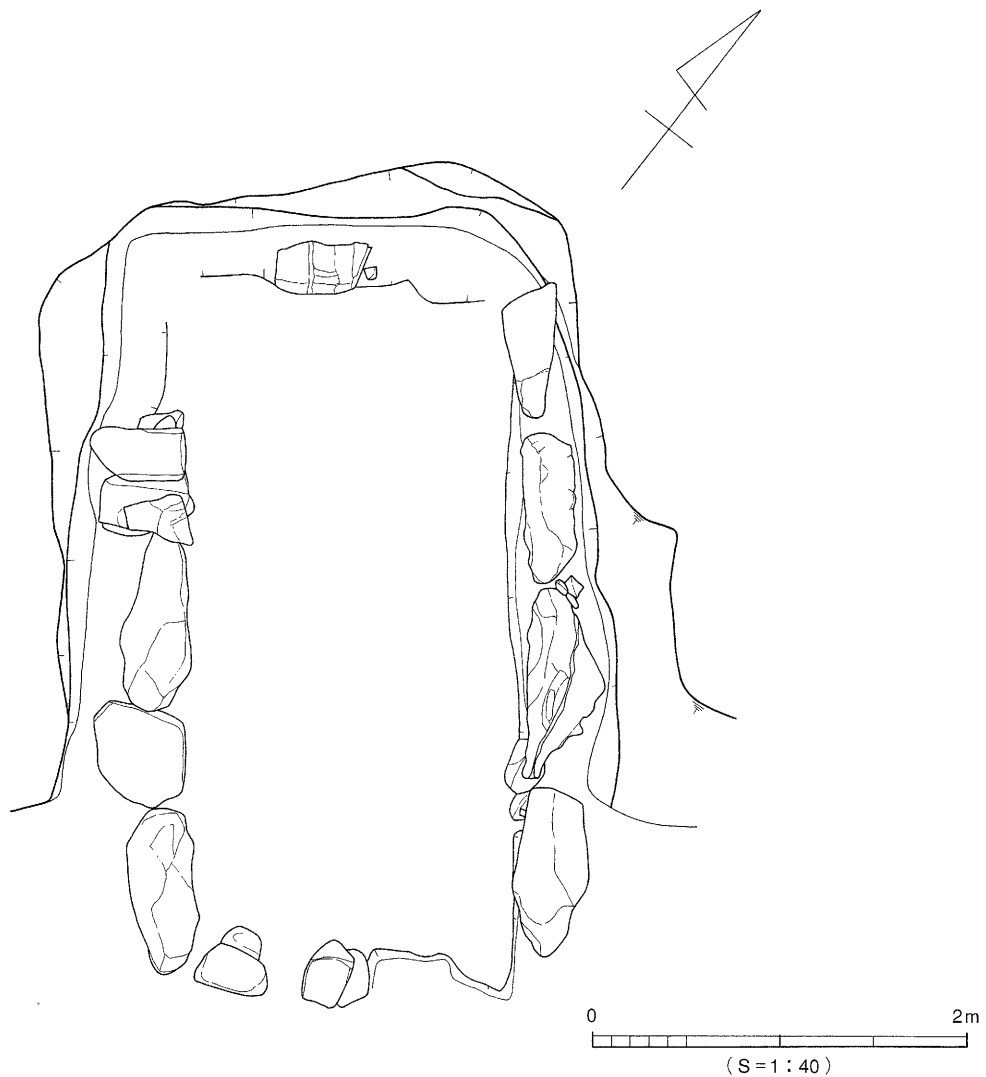


図22 E2号墳横穴式石室平面図

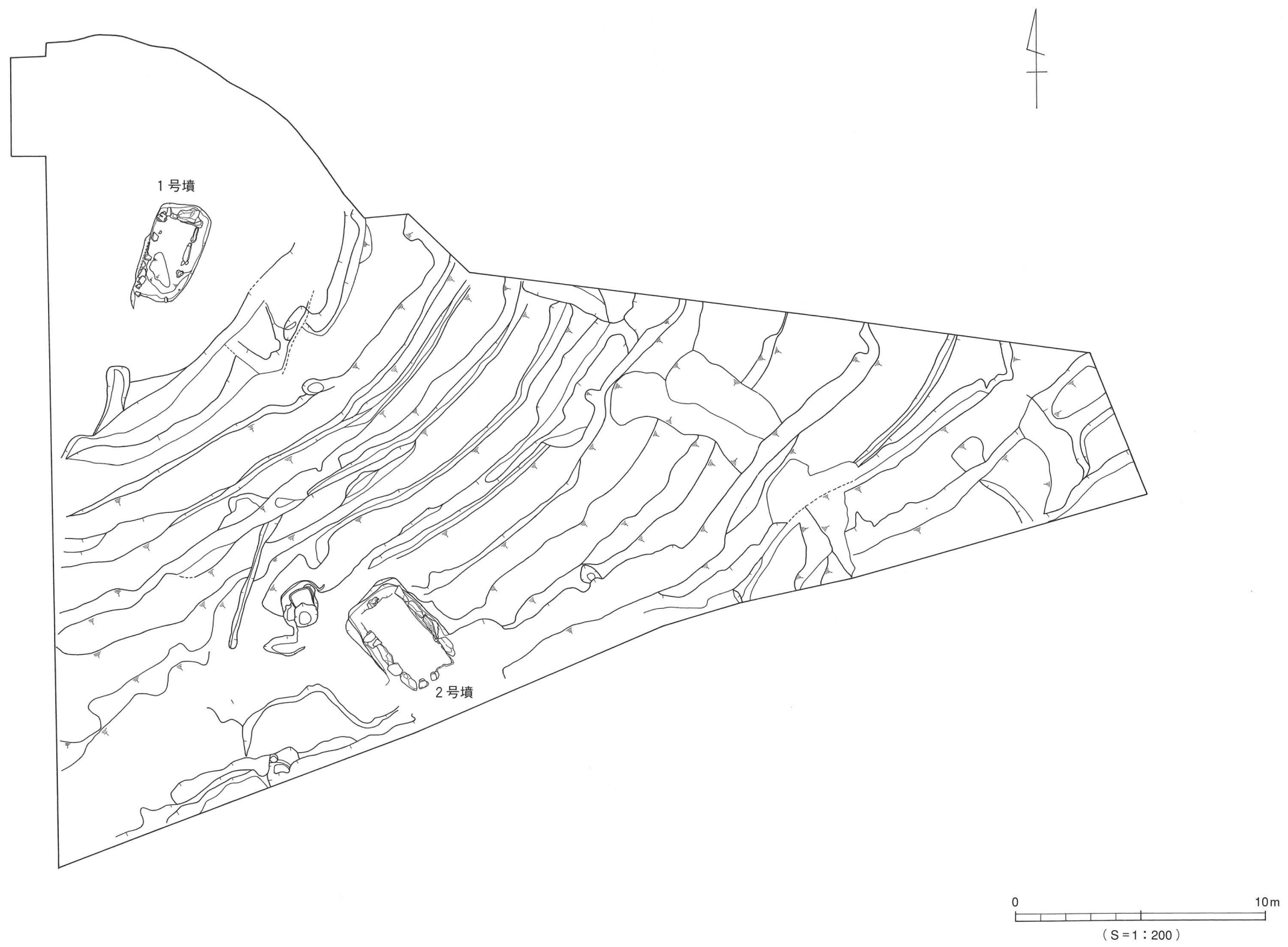


図23 E 1号墳と2号墳の配置

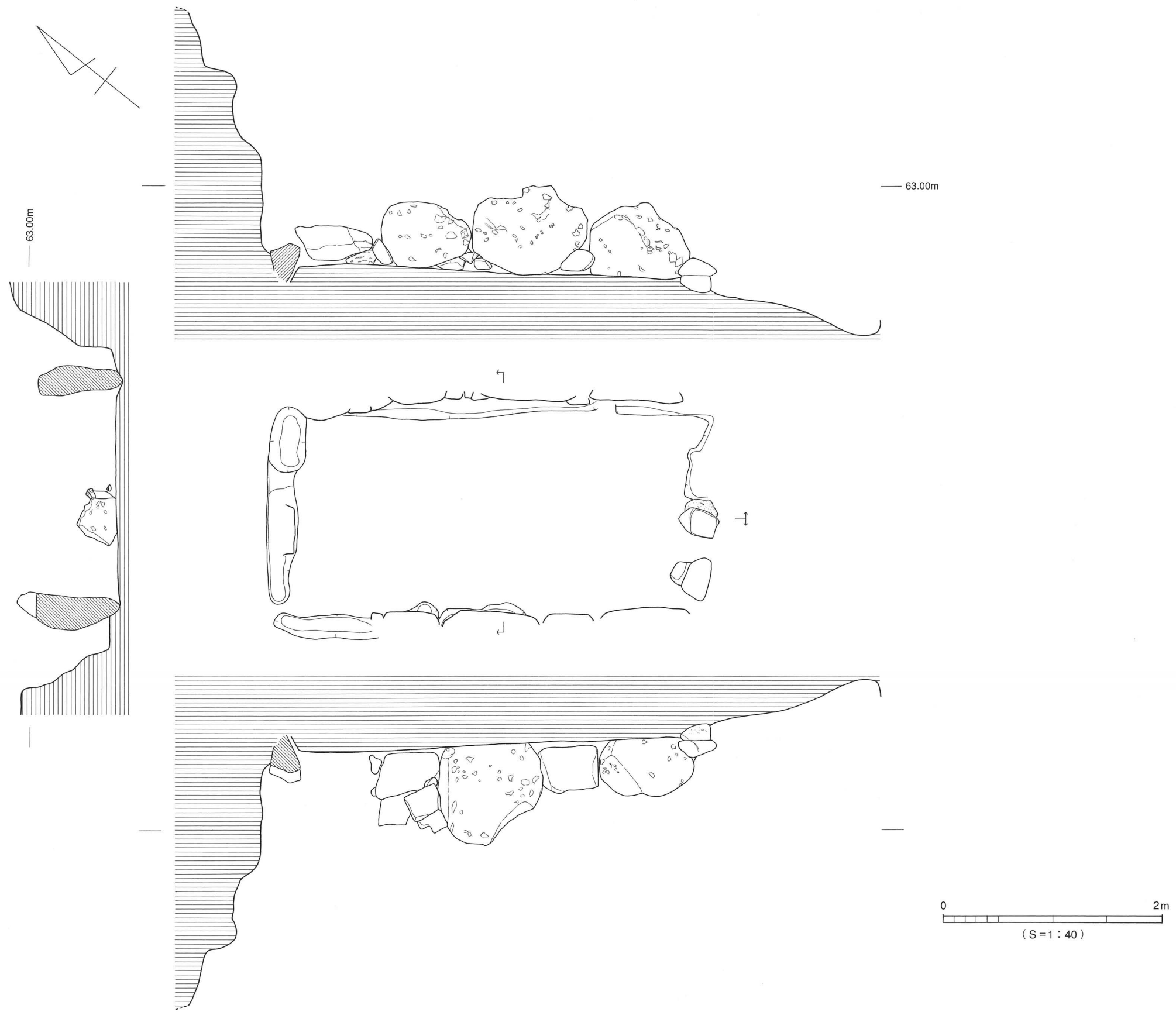


图24 E 2号墳横穴式石室展開図

墳丘・主体部 (図22~25)

E区の南斜面で検出された古墳である。この斜面はかなり急峻で、頂上部に存在する1号墳からの平面距離12mの間で9mの比高差がある。この斜面の地山をL字状にカットして横穴式石室が築かれている。墳丘盛り土の遺存はなく、また段畑の造成により地山整形の痕跡も残っていない。したがって、この古墳についても墳丘規模・形態は不明である。

主体部は南東に開口する横穴式石室で、やはりこれも壁体の基底石の一部が遺存しているのみであった。開口部側床面の石材と抜き痕が生きていると考えられるので、玄室長3.4m、幅1.7mの規模の石室である。袖の有無、羨道部の構造、全長等は不明である。この石室でも比較的扁平な石材を立てて腰石としており、大型の石材には礫岩が多く用いられている。礫床・貼り床等の床面施設はなく、地山を削りだした面をそのまま床としている。玄室中央より入り口寄りの南東側壁付近で4点の副葬須恵器が検出され、また中央奥壁寄りの部分で鉄釘7点の出土がみられた。釘は後述するように、長さ9cm、0.5×0.5cm程度の断面方形になるもので、被葬者は、厚さ約2.5cmの板を緊結した組み合わせ式木棺に入れられて安置されていたものと思われるが、床面から棺台状の施設は検出されなかった。これらの須恵器や、鉄釘の法量などから、この古墳は7世紀前半から中頃のものと考えられる。

横穴式石室出土遺物

須恵器 (図26)

高坏 (65~67) すべて無蓋高坏で、うち坏部65・66は椀形態をなすものである。両者ともに焼け歪んでいるため、本来の口径の正確なところはわからないが、おおよそ12.5cm程度の値になるものと考えられる。67は脚端部を欠くもので、口径10.6cmを測る坏形態の坏部に短い脚が付される。内外面に自然釉がかかっており、坏底部内面に重ね焼きの痕跡がある。

長頸壺 (68) 器高23.5cm、口径9.7cmで、底径9.2cmの高台状の台を持つ台付長頸壺。中位よりやや上に16.8cmの最大径を持つ偏球形の胴部から、ラッパ状に開く口頸部が立ち上がる。肩部に2条平行の短い直線によるヘラ記号がある。

鉄製品 (図27)

鉄釘 (69~75) 69は身から直角に折り曲げられた頭の部分である。身の部分は錆膨れがひどく、縦方向の亀裂が数条入っている状態である。比較的状態のよい頭の部分での断面形は、0.5cm四方の正方形に近い形状を呈している。70は上半部の頭部に近い部分と考えられる破片、現況で長さ3.9cmを測る。断面形は0.5cm四方の正方形で、対向する2面に横方向の木目がある。71は頭部と先端部を欠く、現況長7.15cmのものである。断面形はやはり0.5cmの方形で、上位の1/4程度の部分に横方向、以下の部分に縦方向の木目があるが、横方向のものは対向する2面に、縦方向のものは全面にある。72・73は身部の小片、72で長さ2.85cm、73で1.35cmを測る。72は木目の付着は観察できないが、やや先細りになる形状から判断すると先端部に近い部分であろう。73は小片のため、釘かどうかも不明であるが、他のものと同じ場所での出土、玄室内からは釘以外の鉄製品の出土がないことからすると、釘の一部である可能性は高い。74は先端部の片、長さ5.6cm、断面方形のものである。端部にわずかに縦方向の木質が残存している。75は頭部を欠くもので、おそらく折り曲げの部分で折損しているものと思われる。現存長8.43cmで、やはり身部断面が0.5cm程度の方角になるものである。上端から2.5cmの間の対向する2面に横方向の木目、以下の部分には縦方向の木目が全面にみられる。



図25 E2号墳横穴式石室遺物出土状況

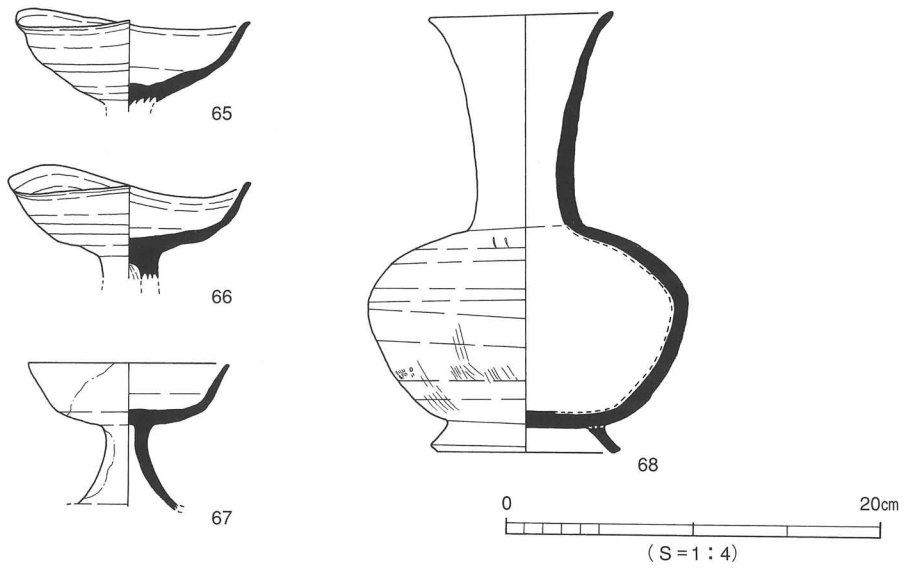


図26 E2号墳横穴式石室出土遺物(1)

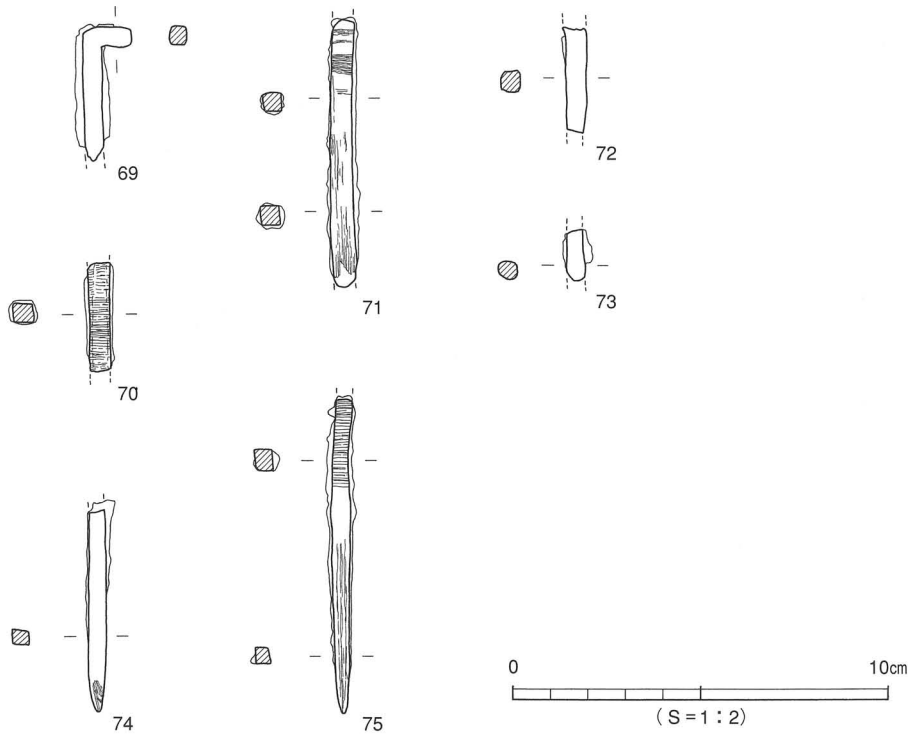


図27 E2号墳横穴式石室出土遺物(2)

6. G区の調査

(1) 弥生時代の遺構と遺物

a. 土坑

SK 1 (図28)

SK 2 と隣り合って検出された土坑で、1.05×0.9mの楕円形プランを呈する。削平され、斜面立地のため斜面上方の西側および南側の肩は25~10cm程度の立ち上がりとして残っているが、北および東側の肩はほとんど残っていない。粗砂混じりの淡褐色土で埋まっているが、遺物の出土はない。

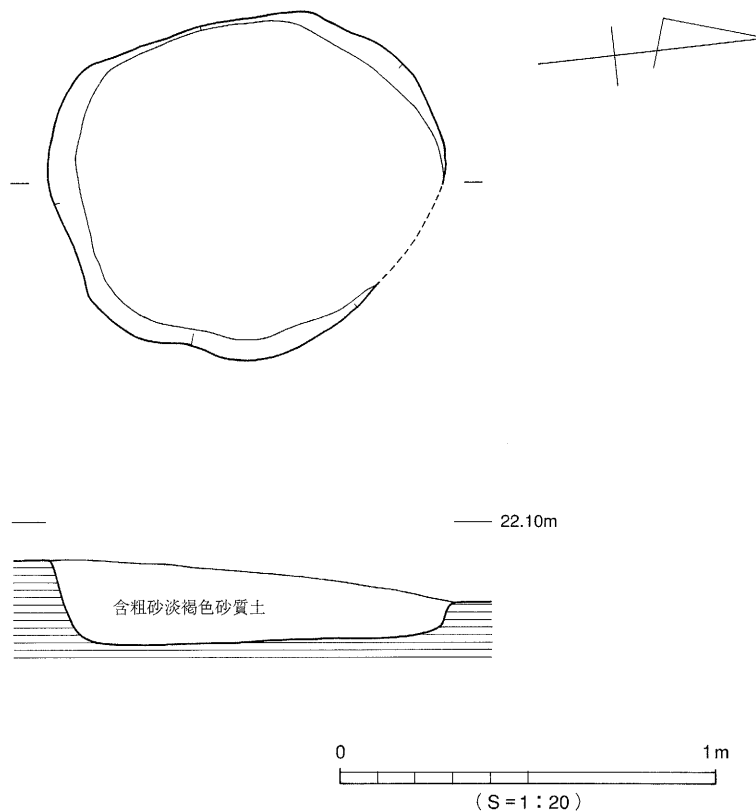


図28 G区SK 1

SK 2 (図30)

直径1.1~1.2mのほぼ円形プラン、深さは20cm程度の遺存で、弥生土器数点の出土をみている。この土坑も粗砂混じりの淡褐色土で埋まっていたが、この埋土には若干の炭化種子が入っていた。分析の結果、この種子はアズキと推定されている。

SK 2 出土遺物

弥生土器 (図31)

壺 (76・77) 76は、器高32.0cm、口径16.4cm、底径9.1cm、胴部最大径13.7cmを測る広口、短頸の壺である。安定のよい平底、胴部の中位に最大径を持ち、この部分に棒状工具による横方向の沈線を6条引き、この沈線帯の上下に同一工具によると思われる連続刺突文を施す。緩くすぼまった短い頸

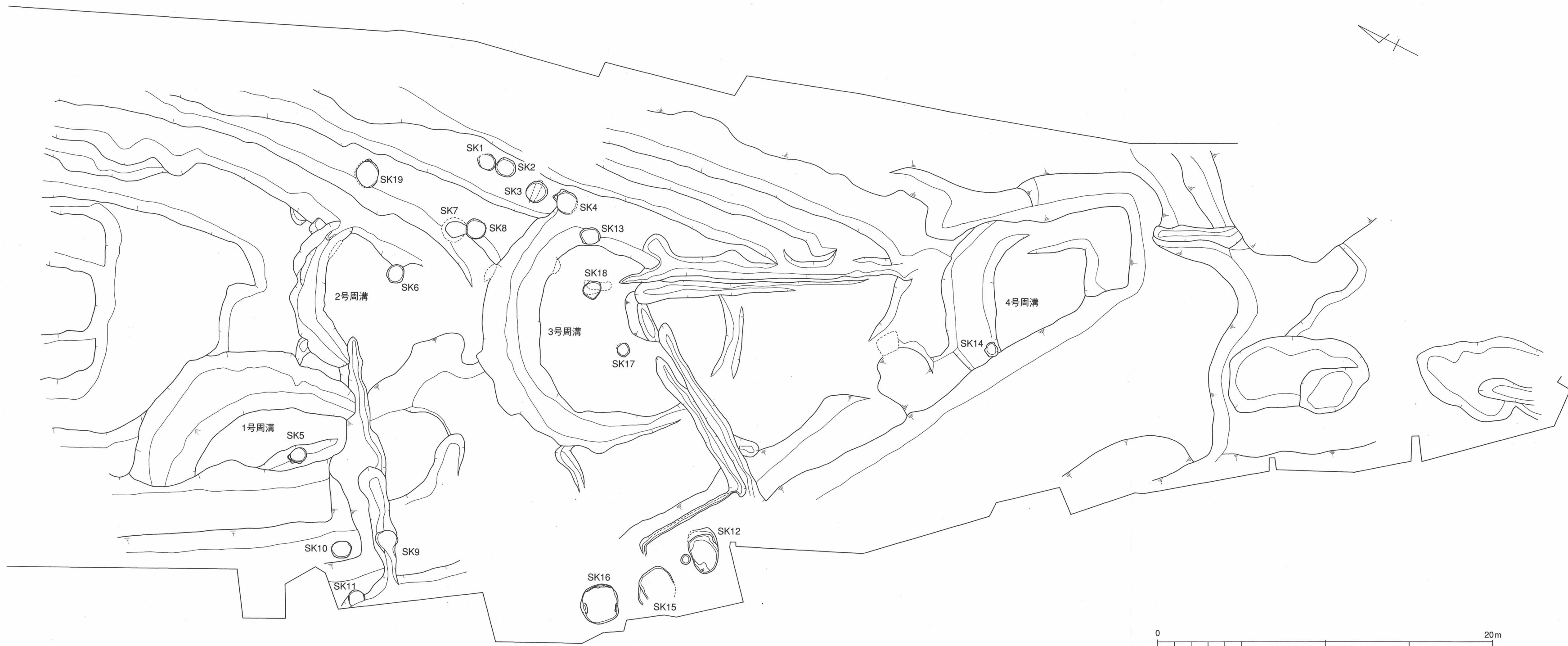


图29 G区遺構配置図

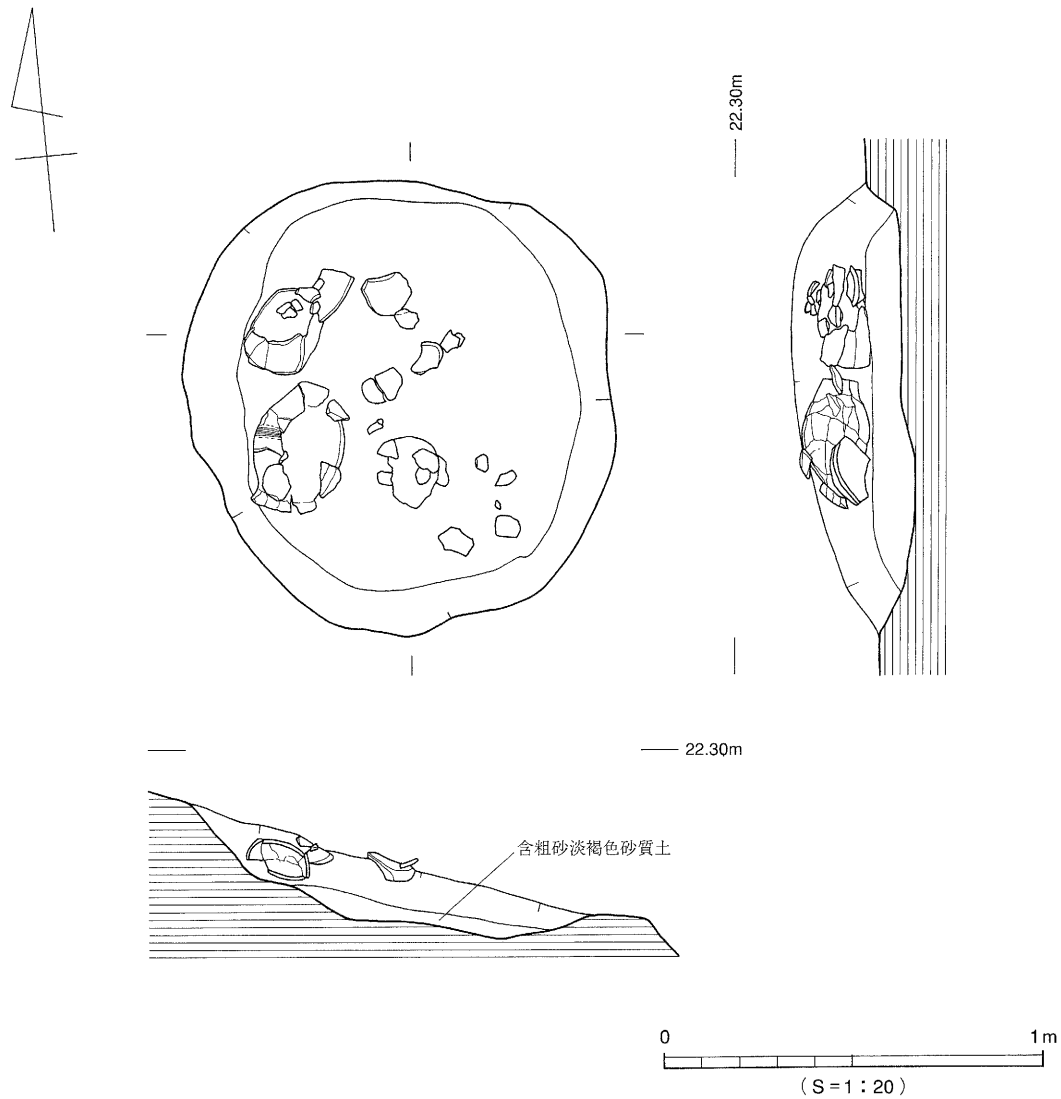


図30 G区SK2

部を経て、外反しながら短い口縁部が開く。口端部には大きめの刻みが施されている。外面には横方向から斜め方向の磨きが施されるが、底部立ち上がり付近には部分的に縦方向の刷毛目が観察できるので、刷毛目調整の後磨いているようである。内面の胴部も、頸部のやや下位まで縦方向の粗い磨きが一部看取できる。77も平底の壺底部、底径9.4cmを測る。

甕 (78・79) 78の上半部は口径17.8cmを測るものである。胴張りを持たない器型で、水平に開く口縁は貼り付けによる。口縁下の平行沈線10条は1本単位で引かれている。口端部に刻み目は持たない。79は、器高23.1cm、口径18.4cm、底径5.8cmを測る無文の甕である。平底の底部、張りを持たない胴部、短く水平に開く口縁部は貼り付けによるものと思われる。器面の荒れが特に外面に著しいが、斜め方向の磨きが看取できる部位がある。内面の調整は撫でによっている。

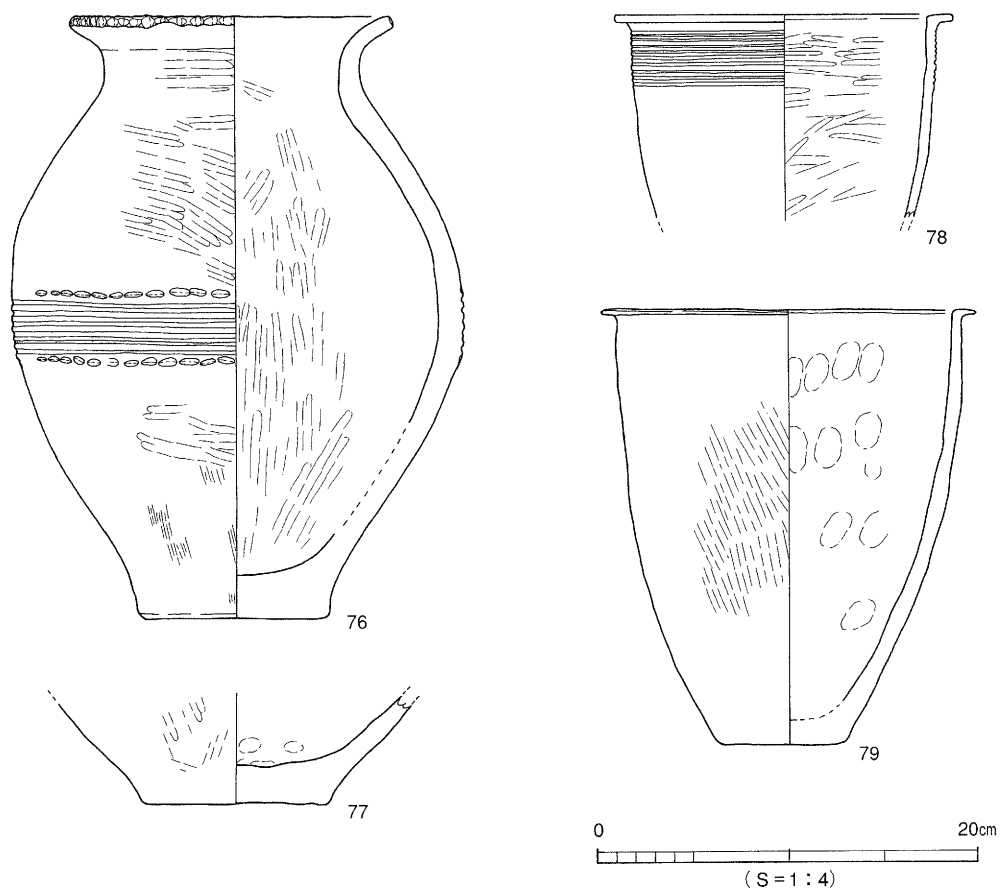


図31 G区SK 2 出土遺物

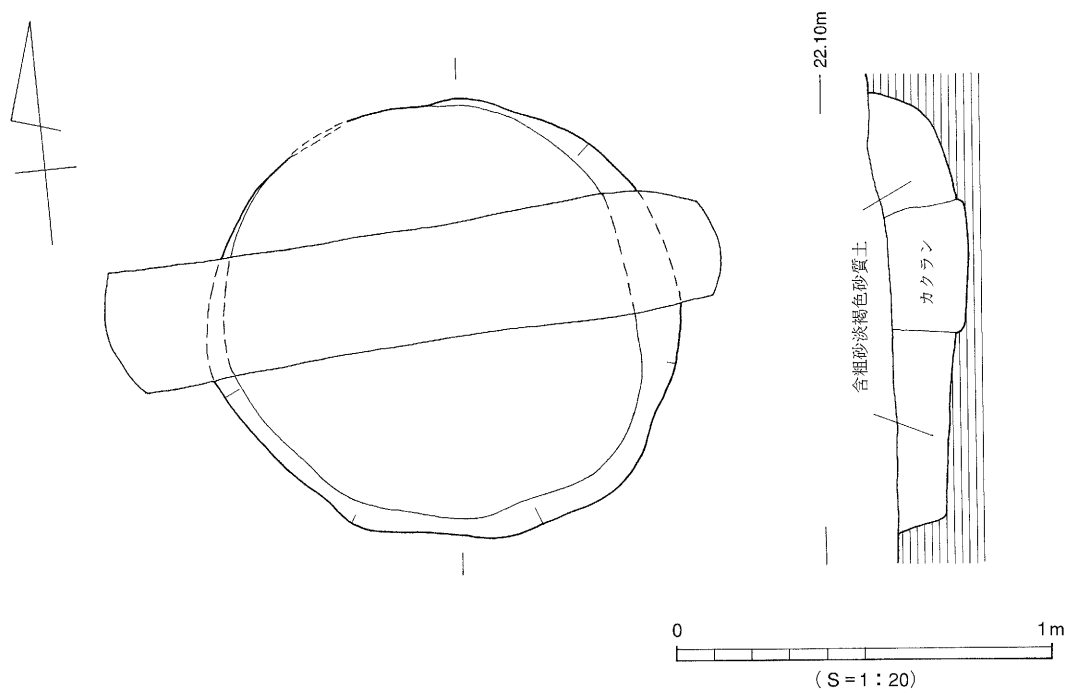


図32 G区SK 3

S K 3 (図32)

S K 2の南1mで検出された、直径1.2mの円形土坑で、深さ10~20cmの遺存である。中央部を幅30cm程の溝状の攪乱によって切られている。遺物の出土はない。

S K 4 (図33)

S K 3の南に隣接して検出された。S K 3と同様の攪乱によって南肩を切られている。直径1.25mの円形プランで深さ20~40cmを測る。北側の壁がオーバーハングする部分があるので、本来袋状土坑であった可能性がある。人頭大から拳大の石とともに弥生土器が数点出土した。埋土中の炭化物にはイチイガシと思われるドングリが含まれていた。

S K 4 出土遺物

弥生土器 (図34)

壺 (80~83) 80は胴部上位より上を欠くもので、残存高25.0cm、胴部最大径25.1cm、平底の底部は直径9.2cmを測る。外面胴張り部以上の器面が傷んでいるので調整の確認ができないが、確認できる

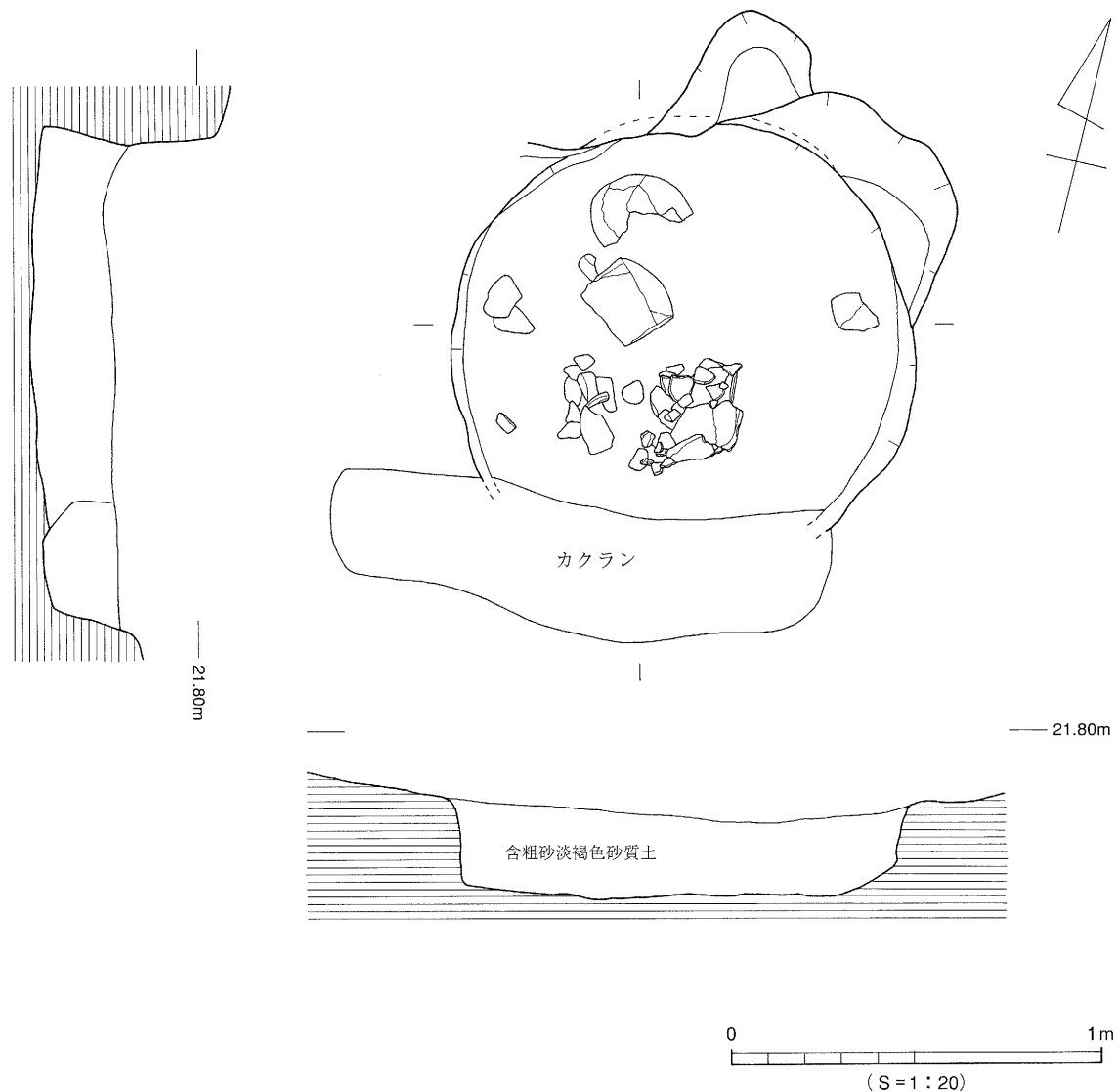


図33 G区SK 4

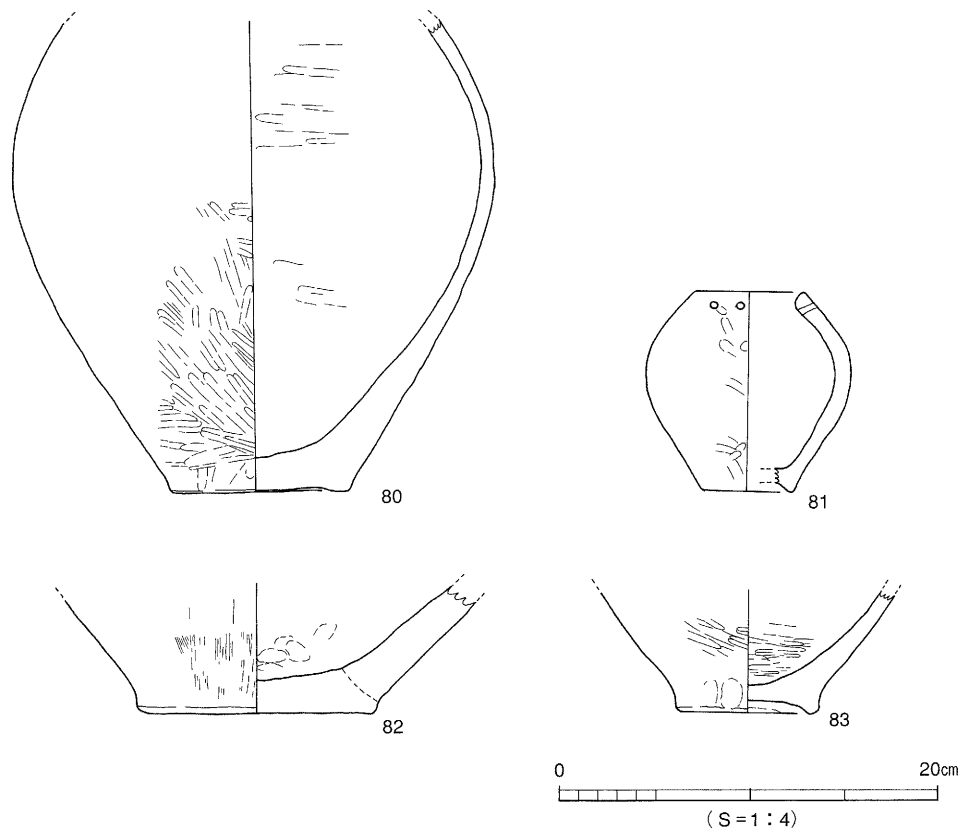


図34 G区SK 4 出土遺物

範囲の内外面は外底面を除いて磨かれている。81は小型の無頸壺、器高10.6cm、口径5.6cmを測る。上げ底の底部は径4.6cmに復元できる。ラグビーボールの両端を切り落としたような形態。口端部は内傾した面をなし、これをやや下った位置に2個の穿孔がある。対向する部位が欠けているが、この部分にも同様の穿孔があったものと考えられる。外面の焼成剥離が著しいが、残っている部分には磨きが観察できる。内面は撫でられている。82は大型壺の底部、平底で直径11.8cmを測る。破面が外傾接合の擬口縁となっている。83の底部は若干の上げ底となるもの、直径7.0cmを測る。接地面は幅の狭い平坦な面をなす。胴部の立ち上がり外面と内面には磨きが施されている。

S K 5 (図35)

1号墳丘上で検出された円形土坑で、直径0.8~0.9m、深さ30cmを測る。埋土は2層に分かれ下層の粗砂混じりの淡褐色土中に弥生土器や石製品が入っていた。また、この埋土中からは炭化米が検出されている。

S K 5 出土遺物

弥生土器 (図36)

甕 (84・85) 84は器高23.5cm、口径20.3cm、底径7.1cmを測るもので、折り曲げによる口縁は、短く水平に開き、端部に刻み目を施される。口縁下に3段のヘラ描沈線施文帯を持ち、施文帯間をこれもヘラ描による連続山形文で埋めている。沈線は、上から順に4、5、4条となっている。胴部外面は磨かれているが、中位以下が縦方向、以上が横方向となっている。内面の磨きは胴部上位の口縁部付近にのみ行われている。85は口縁部から胴部上位の片、復元口径21.4cmを測る。これも短い口縁が

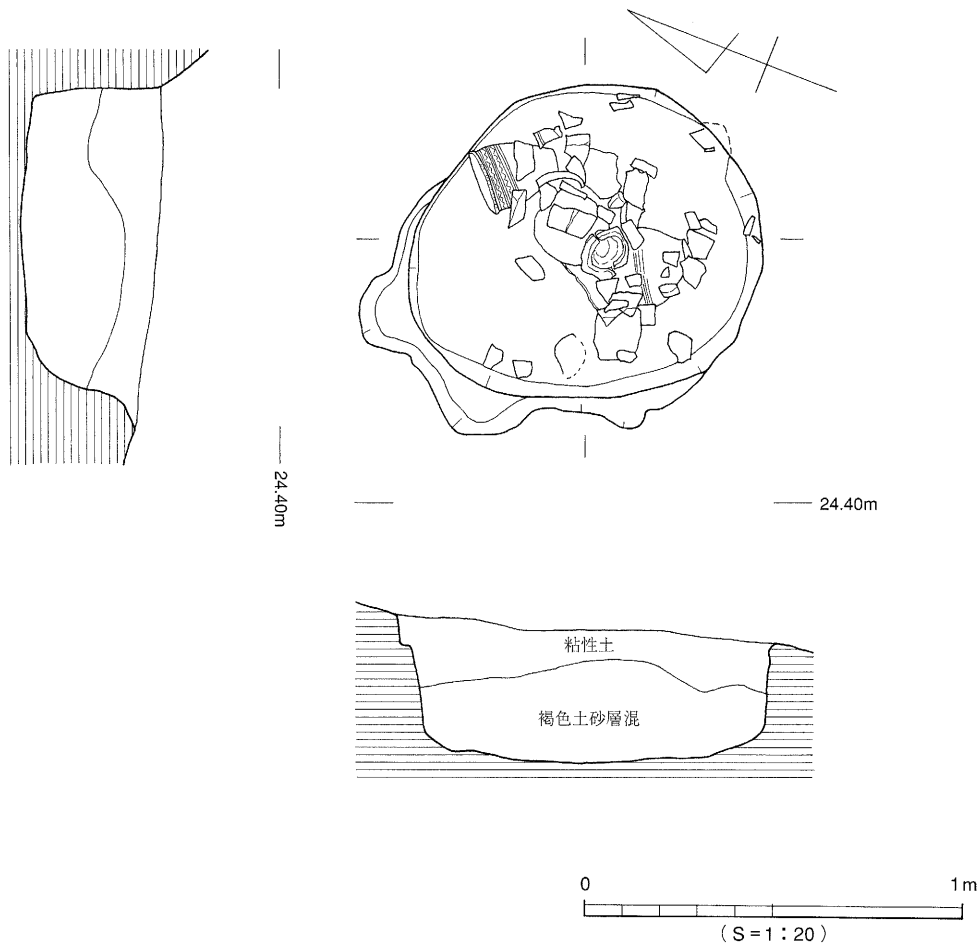


図35 G区SK 5

水平に開き、面を持つ端部に刻み目を施されている。頸部下にはヘラ描沈線が7条、その直下に器面に対して斜め方向からの刺突文が2段施文されている。

壺 (86~88) 86は胴部の片、張りの大きい偏球形になるもので、内外面を磨かれている。87は器高26.5cm、口径18.6cm、底径7.0cmを測るもので、土圧による歪みがあり、亀裂を生じている部分もあるが、胴部最大径18.0cm前後になる。突出した平底、張りの弱い胴部、頸部は筒状に立ち上がり、口縁部は外に大きく開く。口縁部と頸部の境内面には柱口状の突帯が貼り付けられている。頸部から胴部の外面は磨かれ、内面は丁寧に撫でられている。88は口端部を僅かに欠くことを除けば、ほとんど完形のものである。残存高28.5cm、底径7.4cm、胴部最大径20.0cmを測る。口径はおそらく16cm内外になるものと思われる。安定した平底、胴部のやや上位に張りを持ち、やや長めの頸部から口縁部が外反して開く。頸部、肩部、胴張り部にヘラ描沈線文を持つが、それぞれ8、4、6本となっている。口縁部内面には圧痕文による刻み目を施された注口状の突帯が1条貼り付けられている。外底面を除く、外面は入念に磨かれている。

石器・石製品 (図37)

擦り石 (89) 三角錐に近い形状の凝灰岩転石の各面を擦りに用いている。また、頂部には敲打痕もあることから、敲石としても利用されていたものであろう。

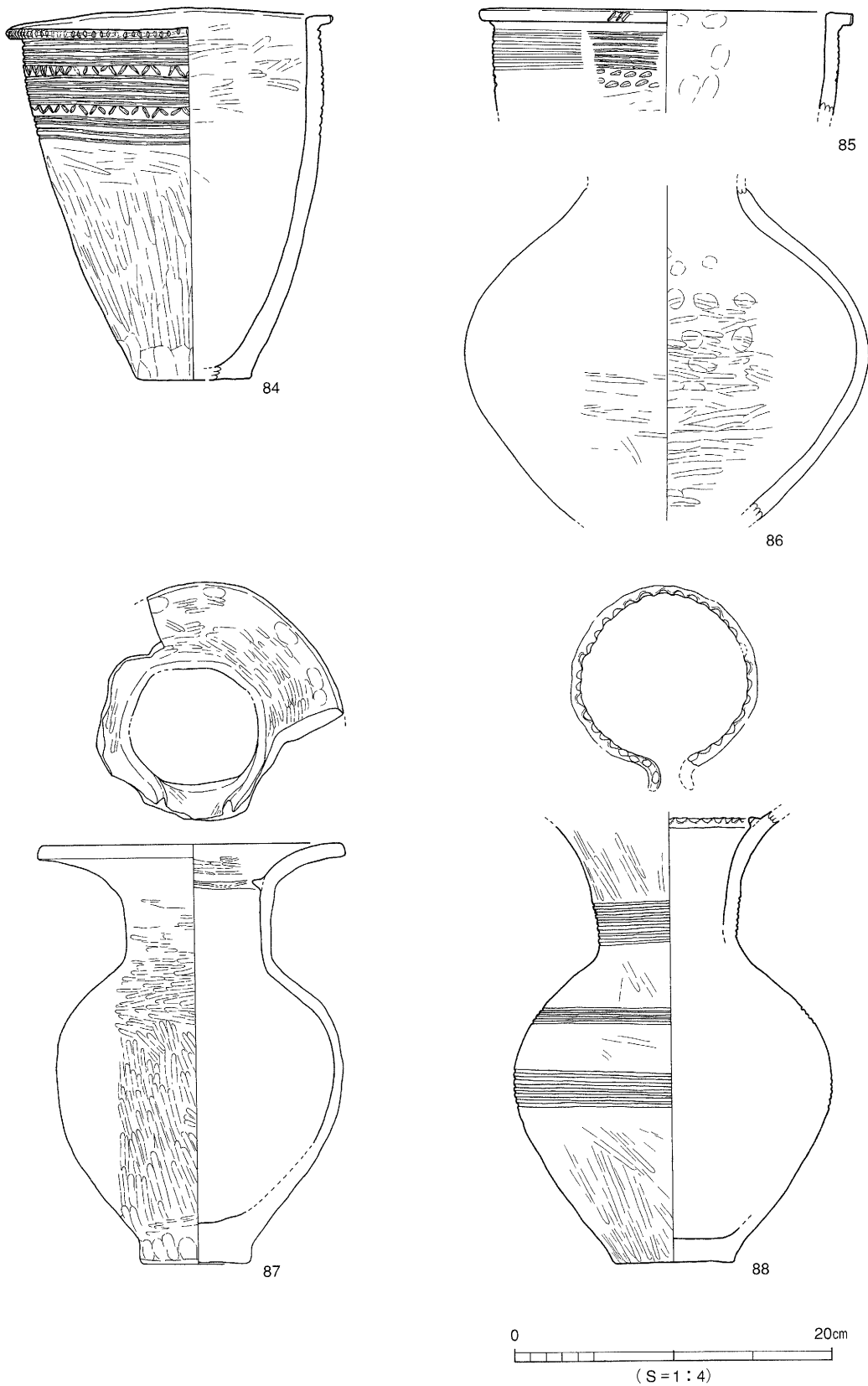


図36 G区SK5 出土遺物 (1)

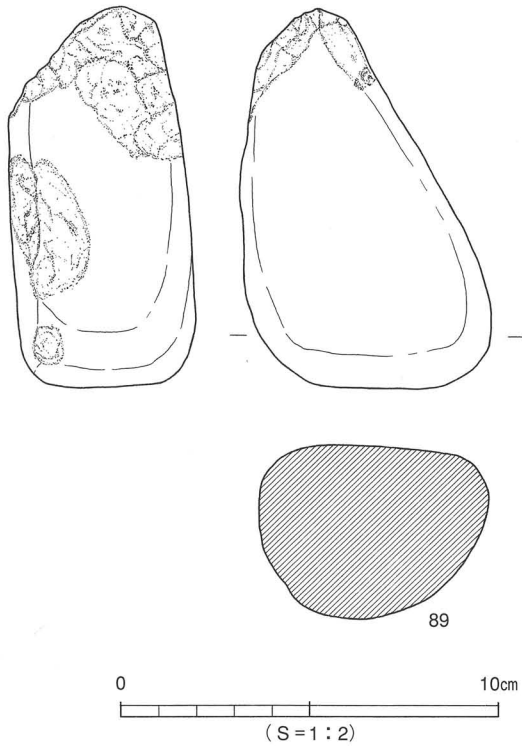


図37 G区SK 5 出土遺物 (2)

S K 6 (図38)

2号墳丘上で検出されたもので、0.95~1.1mの不整形円形プランをなす。深さ15~20cmの遺存である。炭化物を多く含む埋土中から甕が1点出土した。炭化物中に種子等は検出されていない。

S K 6 出土遺物

弥生土器 (図39)

甕 (90) 口径22.6cmを測るもので、胴部下位から底部を欠いている。底部から頸部へ向けてひろがっていく器型で、胴部径は口径を凌がない。折り曲げによる口縁部は端部に面を持つ。無文で、胴部外面は磨かれ、また内面も胴部上位の部分は磨かれている。

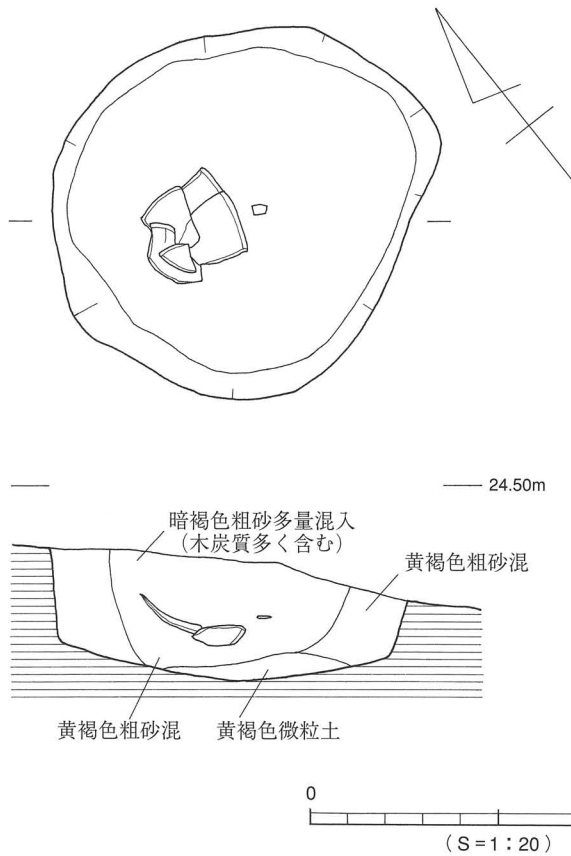
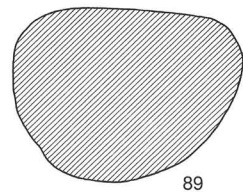


図38 G区SK 6

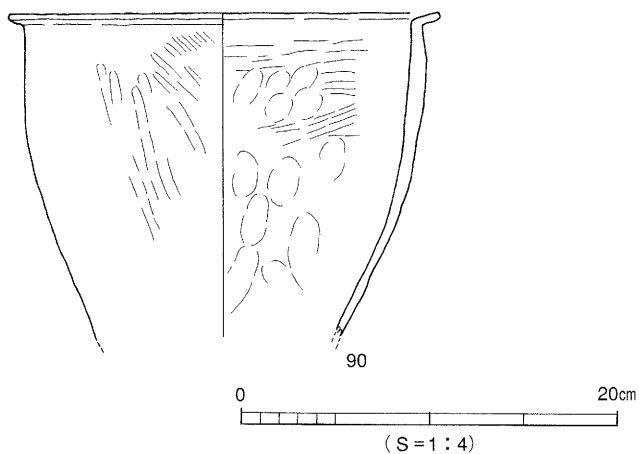


図39 G区SK6 出土遺物

SK 7 (図40)

2号墳丘南東裾、SK 1～4の斜面上方で後述のSK 8と隣接して検出された袋状土坑である。上面のプランは1.0×1.15mの不整円形、底面は1.4mの円形、深さは0.7mを測る。平面プラン検出の段階ではSK 8との間に切りあいが認められなかったため、両土坑を併行して掘り下げていった。SK 7が袋状を呈することが判明した段階で、相接する壁に切り合いが予想されたため、土層断面観察による確認しようとしたが、降雨による崩落のため

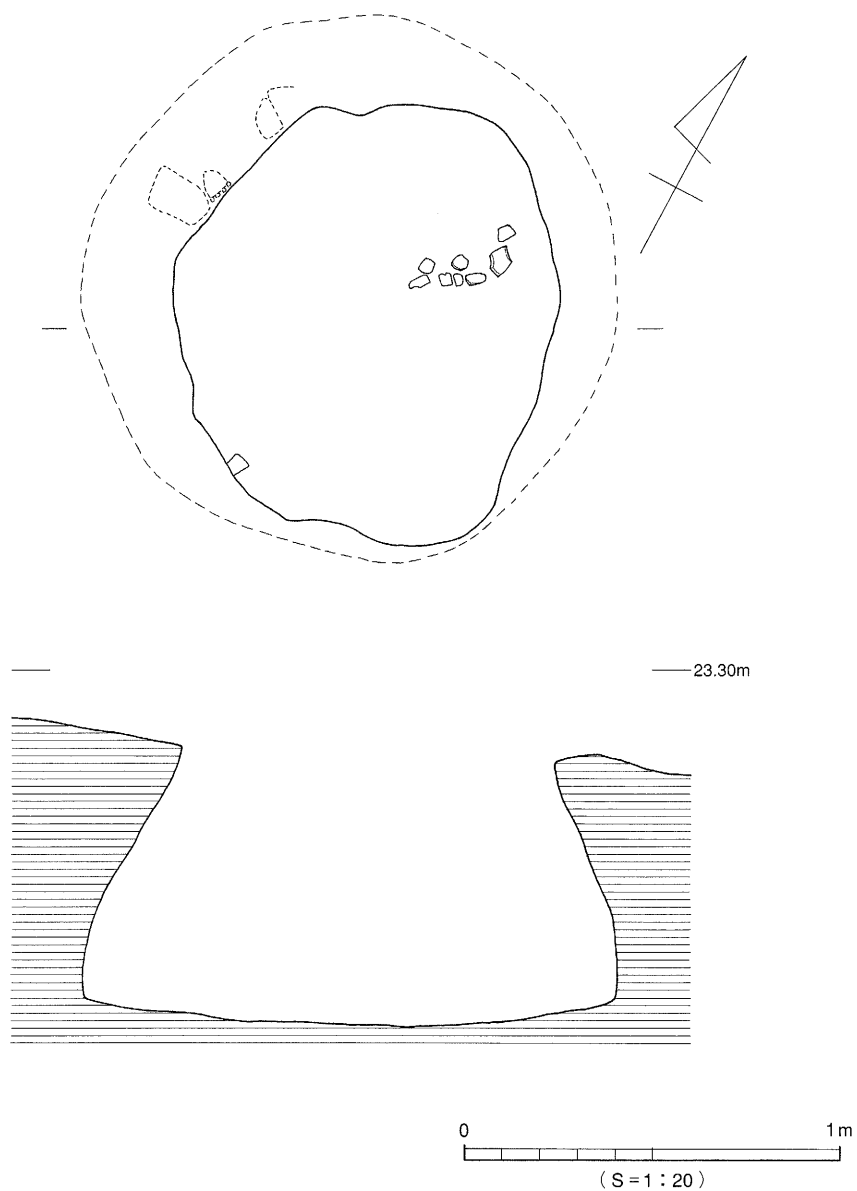


図40 G区SK 7

め確認することができなかつた。埋土中から炭化米の検出をみている。

S K 7 出土遺物

弥生土器 (図41)

鉢 (91) 口端部が生きてないので正確なところはわからないが、口径35cmプラスの大型鉢である。大きく開く胴部から口縁部が軽く折り曲げられる。外面は横方向に磨かれている。

甕 (92~94) 92は無文の甕、底部を欠く。断面三角形の短い口縁を胴部上端の外側に貼り付けており、口径20.6cmを測る。外面の頸部以下は斜め方向にヘラ磨きされ、以上は磨きの後撫でられている。内面の上位は横撫で、下位は縦方向に撫でられている。93・94は有文の甕。93は折り曲げによる口縁で、端面の下端を刻まれている。口縁下にはヘラ描沈線が8条まで確認できる。94は胴部上位の片で、口縁下にヘラ描沈線と刺突文を組み合わせた施文がある。施文を下位からみていくと、最下段に刺突列点文、その上に4条の沈線、さらに刺突と3条の沈線、その上位には刺突を2段に施し、その上位に沈線が1条だけ確認できる。

壺 (95~98) 95は貝殻施文の無頸壺片を同一個体と判断して想定配置した図である。S K 4 出土

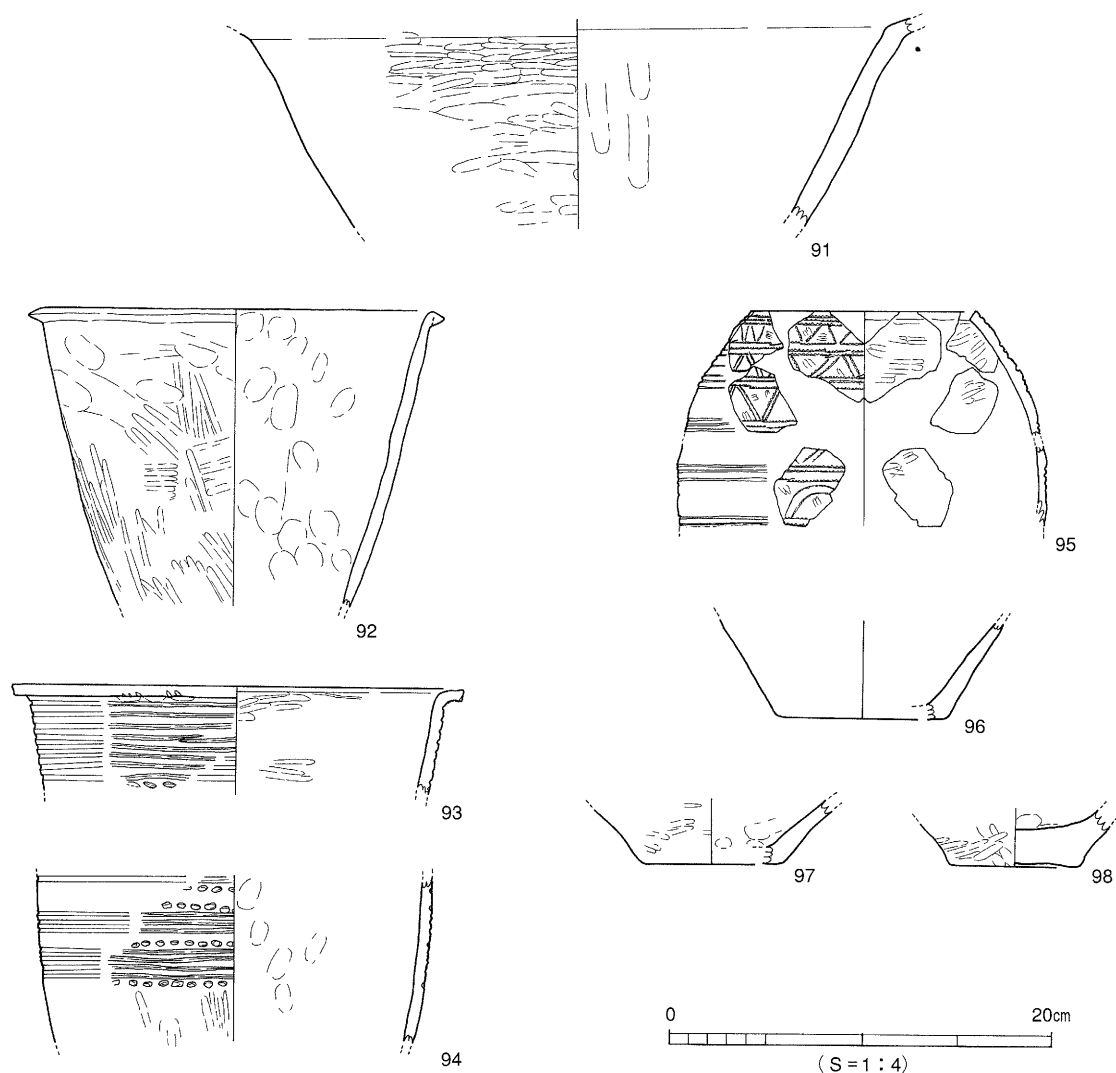


図41 G区SK7 出土遺物

の81同様、口端部は内傾した面をなす。ヘラ磨きした胴部上位の外面に二枚貝の腹縁を用いた施文が行われている。最下段では2本しか確認できないが、基本的には横位に施した3本単位の直線文で区画した区画帯の中を山形文や弧文で埋めている。最上位の施文帯には単線の山形文、以下の3段には複線山形文、以下の確認できる最下段には複線弧文となっている。96~98はいずれも平底の底部片である。

S K 8 (図42)

直径1.15m、深さ0.5mを測る円形土坑で、先述のように、壁で隣接のS K 7と切り合っていたものと思われる。甕を主とした弥生土器と土製投弾、炭化米などを出土している。

S K 8 出土遺物

弥生土器 (図43)

鉢 (99・100) 99は摩滅により口端部を僅かに欠くが、ほぼ完形に近いものである。器高約12cm、口径もおおよその値であるが8cm程度になるもので、平底の底部は直径7.4cmを測る。外面の器壁は傷

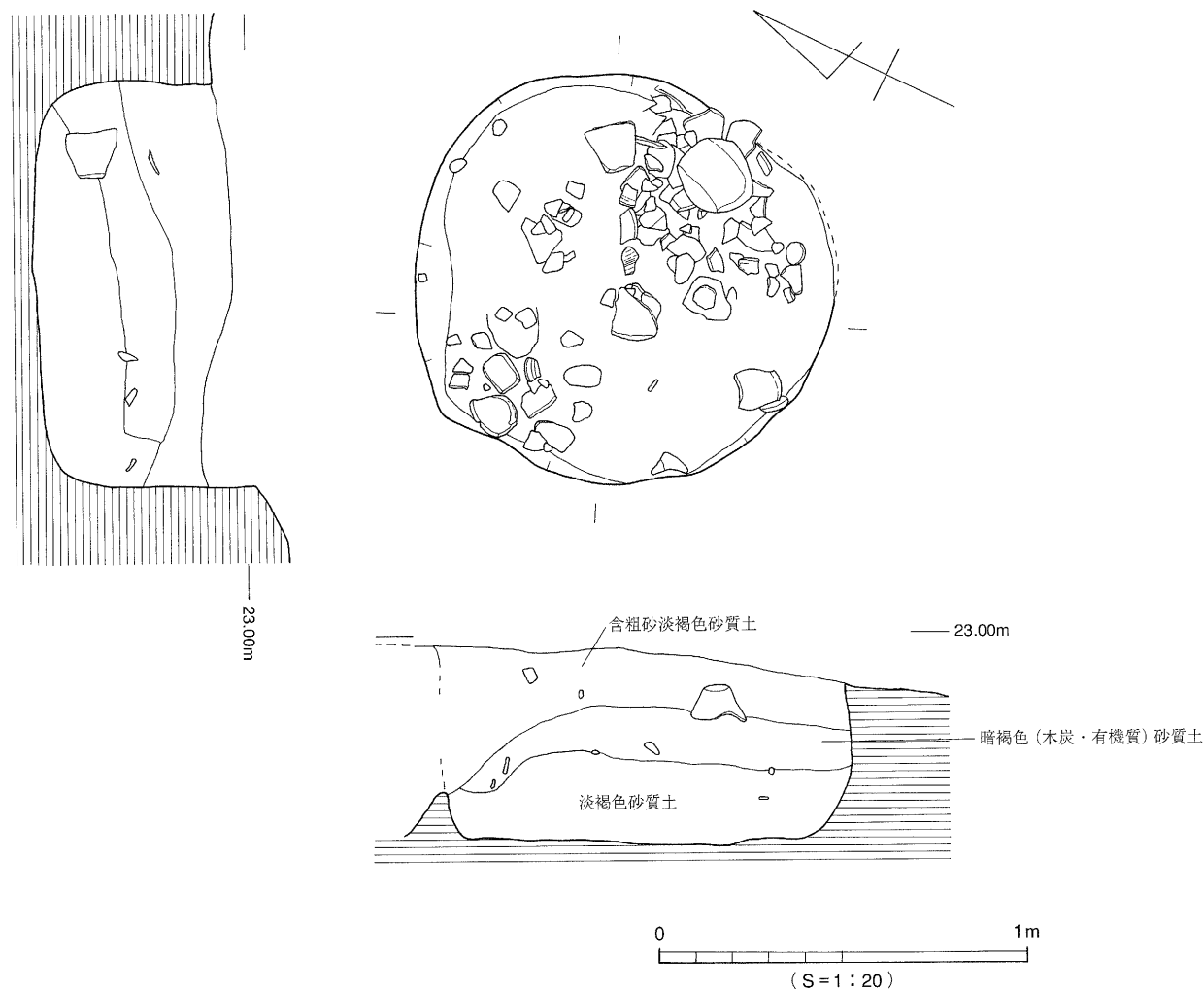


図42 G区SK 8

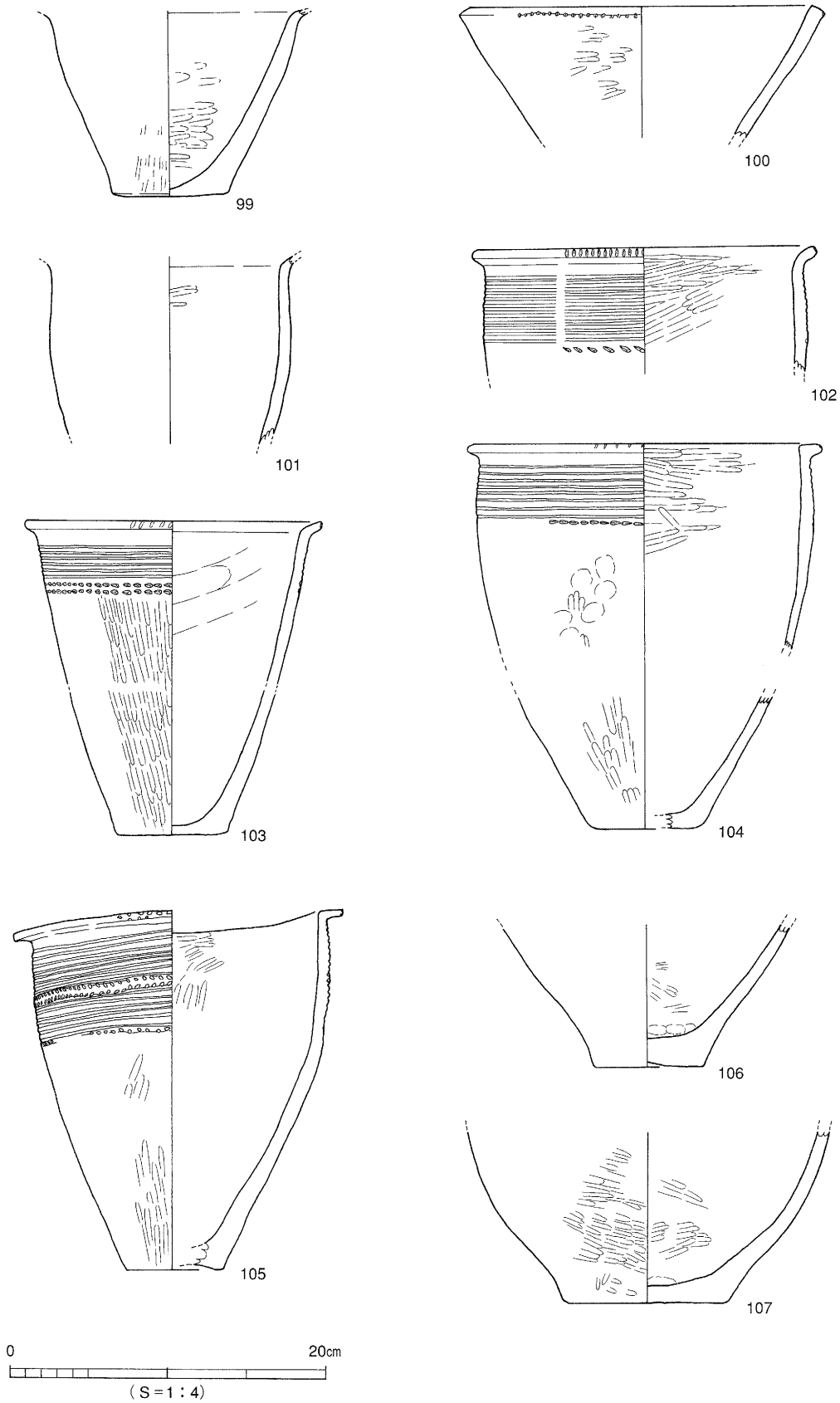


図43 G区SK 8 出土遺物 (1)

みが進んでいるので調整は不詳であるが、内面が丁寧に横方向に磨かれているので、おそらくヘラ磨きされていたものであろう。100は直線的に外開きになって終わるもので、口径は21.6cmに復元できる。口端部は平坦な面をなし、下端部に刻みが入られる。外面は横方向に磨かれている。

甕 (101~105) 101も外表面の傷みが激しく、折り曲げによる口縁部も端部が摩滅して生きていない。無文の甕で、口径は17cm程度になるものと思われる。内面は磨かれているようである。102~105は有文の甕である。102は口縁部から胴部上位の片、復元口径21.2cmになるものである。口縁部は、短く軽く外上方に折り曲げられ、面を持った端面全体を刻まれる。口縁下には11条の沈線、その下位に刺突列点文を施されており、この部分に吹きこぼれの炭化物の付着がある。内面の口縁部付近を横方向にヘラ磨きされている。外面の調整は不詳。103も折り曲げ口縁によるもので、接合はしないが、同一個体と思われる底部と組み合わせて図化している。口径18.8cm、丸みを帯びた口端部に刻み目を持つ。口縁下に6条のヘラ描沈線、その下位に横長の刺突列点文を2段施文されている。胴部外面の調整は、磨きというよりも縦方向の目の粗い擦痕のような調整である。平底の底部は、直径7.2cmを測る。104は貼り付けと思われる口縁が短く水平に開くもので、これも接合はしないが同一個体と考えられる底部と組み合わせて図化している。口径21.6cm、底径7.0cmを測る。口縁下に8条の沈線、その直下に刺突列点文、口端部には刻み目を持つ。器壁の傷みのため外面の調整は不明、内面の口縁部付近には横方向の磨きがみられる。105はかなり歪んでいるが、最大高22.9cm、口径21.0cm、底径6.0cmを測る。貼り付けによる口縁部は水平に開き、端部に面を持つ。端面には刺突の列が上下2段に巡る。口縁下の外面には、上下2段の沈線施文帯があり、その本数は上段が8条、下段が6条となっている。これら上下の沈線施文帯の間には2段の刺突文が施されているが、上下で刺突の方向を違え、羽状の配置となっている。下段の沈線帯の直下にも刺突列点文が巡っている。胴部外面や内面の上位、口縁上面は磨かれている。

壺 (106・107) 底部2点の出土がある。どちらも平底、106は底径6.8cmで、直線的に開く胴部が立ち上がる。底径10.0cmを測る107では、丸みを帯びた胴部が立ち上がっている。両者ともに内外面磨かれているようであるが、106では外表面の傷みのため判然としない。

土製品 (図44)

投弾 (108) 粘土塊を直径6cm程度の不整球形に焼成したもので、190.9gを量る。

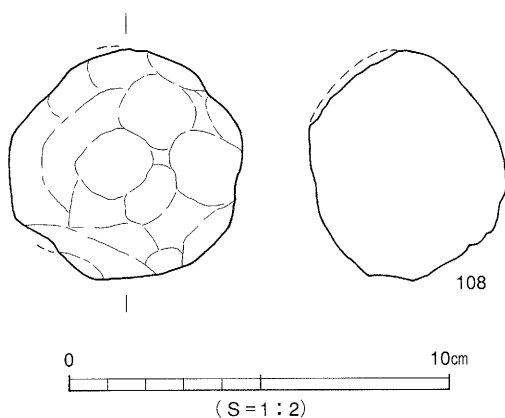


図44 G区SK8出土遺物 (2)

SK 9 (図45)

1号墳の南西斜面で、現代の溝に切られて検出された土坑で、1.0×1.3mの楕円形に近いプランをなしていたものと思われるが、斜面下方の肩が流れてしまっている。この土坑からも、弥生土器、石製品と、炭化米、ドングリの出土がある。

SK 9 出土遺物

弥生土器 (図46)

壺 (109~114) 口縁部から肩部にかけての109は、口径14.0cmを測るもので、撫で肩の肩部に筒形の頸部を経て口縁部が外上方に開く。口端部は平坦面をなし、その下端部に押圧による刻みを持つ。外面頸部から口縁部は縦刷毛目、以下の肩部は横方向に磨かれる。内面頸部から口縁部は横ヘラ磨き、以下は撫でられている。底部から胴部下半110の底部は、径7.9cmのやや凸レンズ状に膨らんだ平底で、張りの弱い胴部が内湾しながら立ち上がる。胴部の内外面ともに磨かれている。111は底径7.8cmを測る底部で、底面は平底であるが、周縁が僅かに高台状に高くなっている。胴部外面は縦刷毛目、内面は横ヘラ磨きされている。112は胴部内外面をよく磨かれた平底のもので、底径8.2cmを測る。113は大型壺の底部、平底で底径11.2cmを測る。114は肩部より上を欠くもの、底径8.8cm、胴部最大径26.7cm、

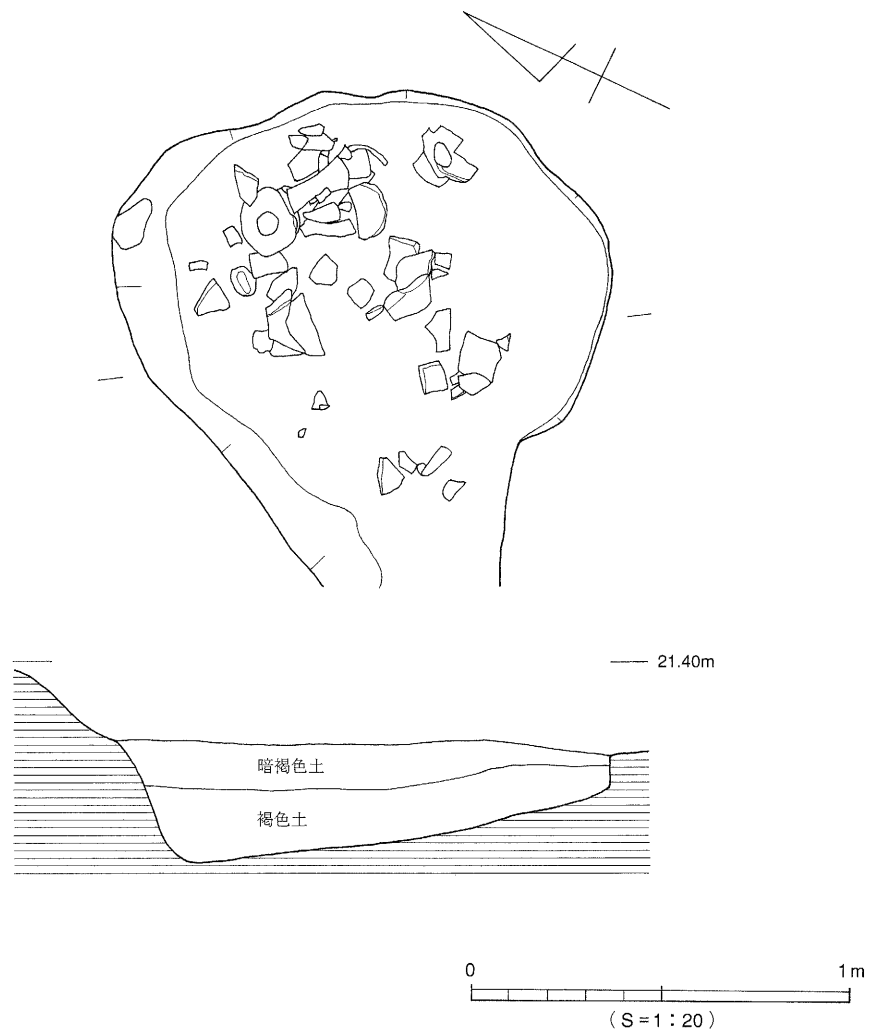


図45 G区SK 9

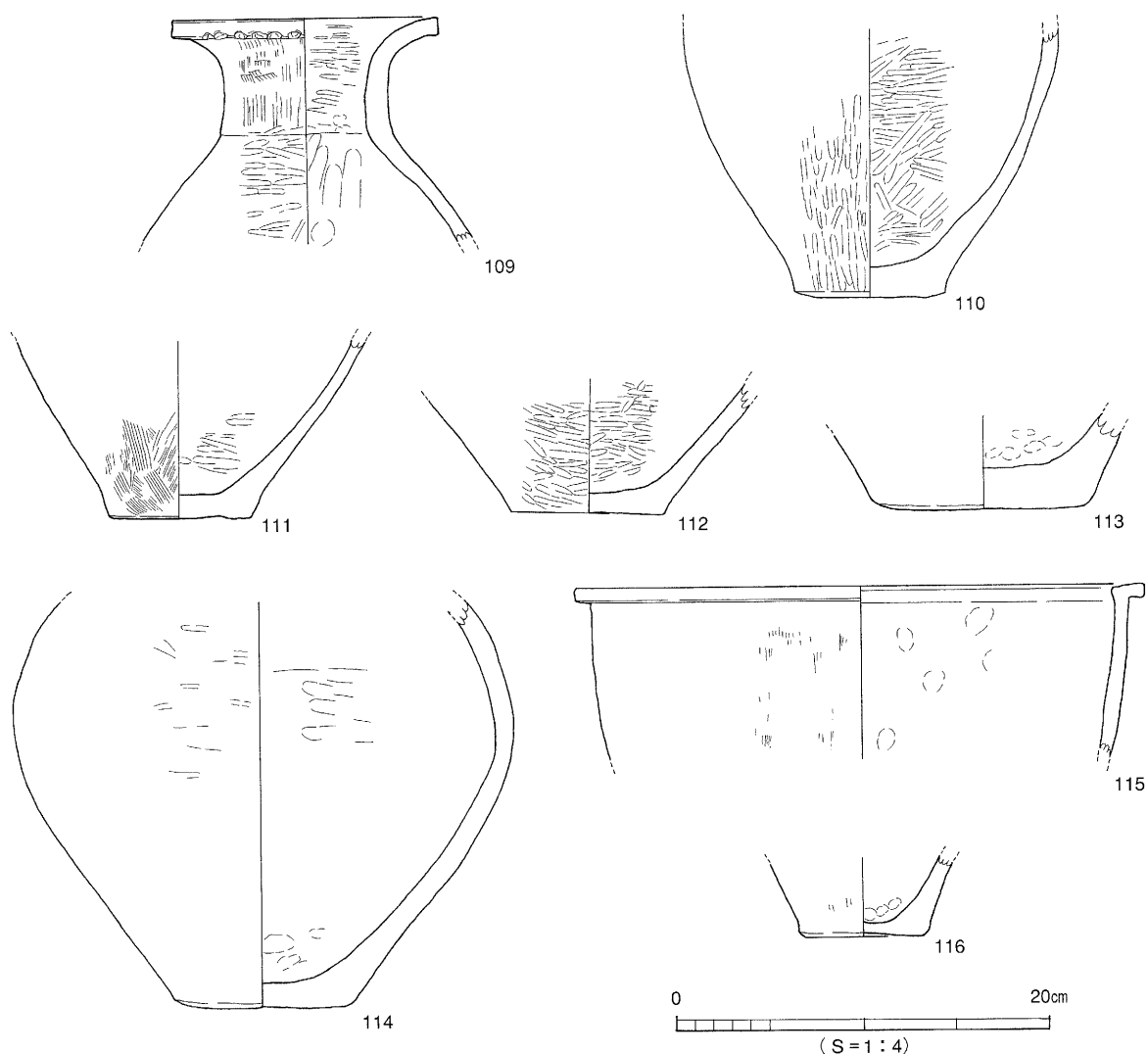


図46 G区SK9出土遺物(1)

残存高22.1cmを測る。外面の胴張り部付近に横方向の磨きが観察できる。

甕(115・116) 115は、口縁部貼り付けによる無文の甕、復元口径30.4cmを測るものである。水平に開く口縁屈曲部をつまむように横撫するため、屈曲部が僅かに内面に突出する。胴部外面は縦刷毛目の後撫でられている。116は平底の底部、底径6.3cmを測る。

石器・石製品(図47)

敲石(117) 重さ1005gの砂岩円礫の側面を敲打に用いている。また一方に擦痕を伴う平滑な面があり、擦り石としても利用していたものである。

SK10(図48)

直径1.0~1.1mの円形土坑で、1号墳西裾、SK9の北西2mで検出された。深さ40~10cmの遺存である。弥生壺をはじめとする弥生土器の出土をみている。

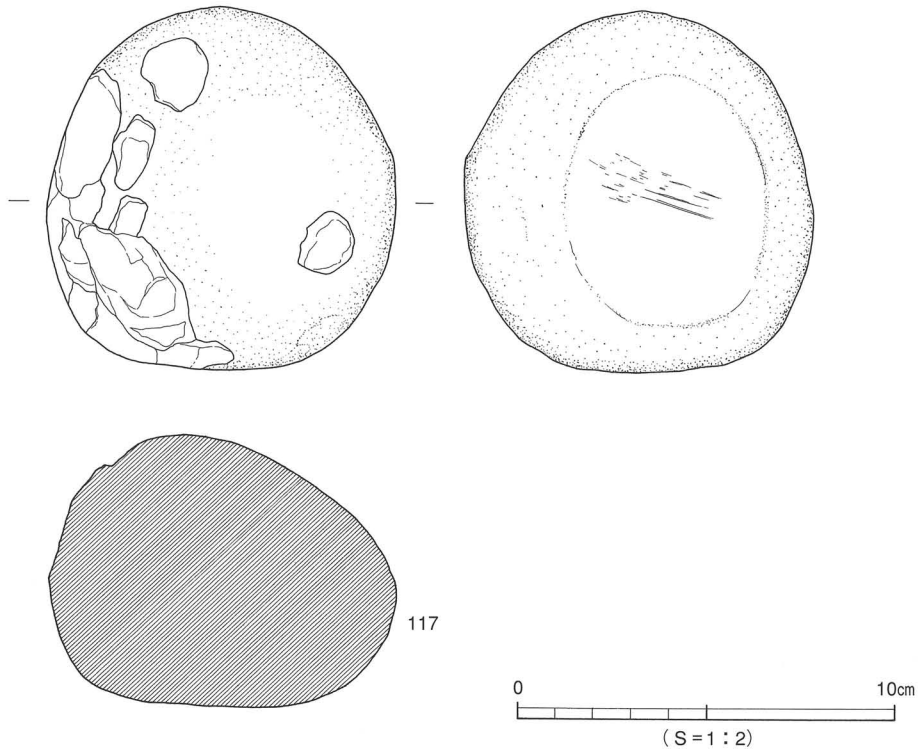


図47 G区SK9 出土遺物 (2)

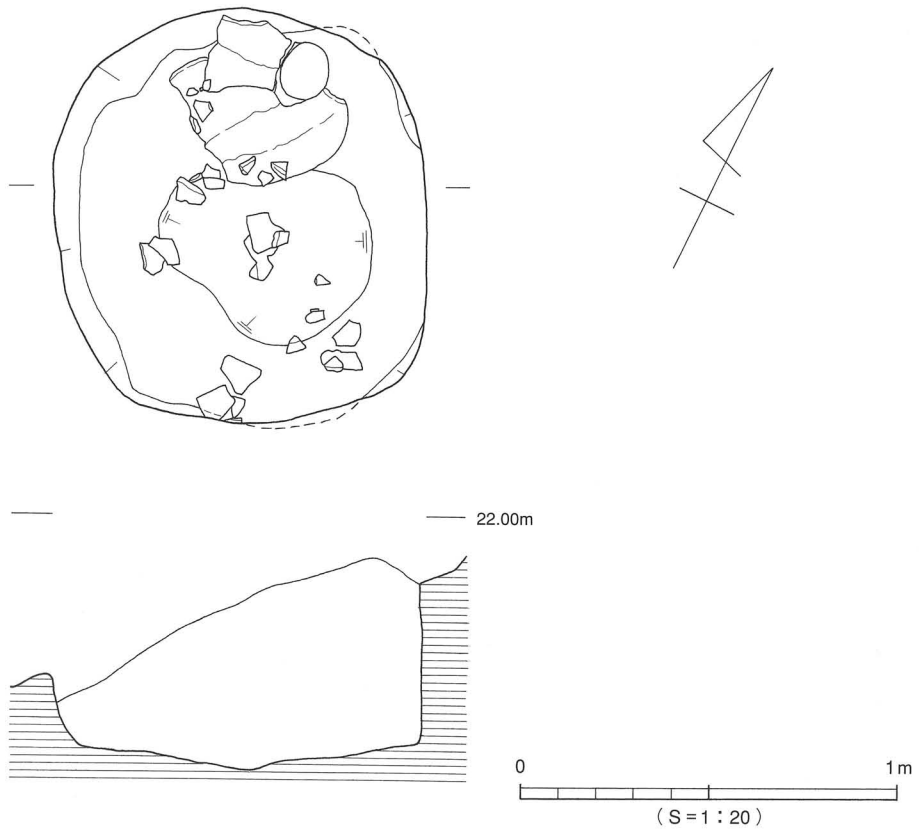


図48 G区SK10

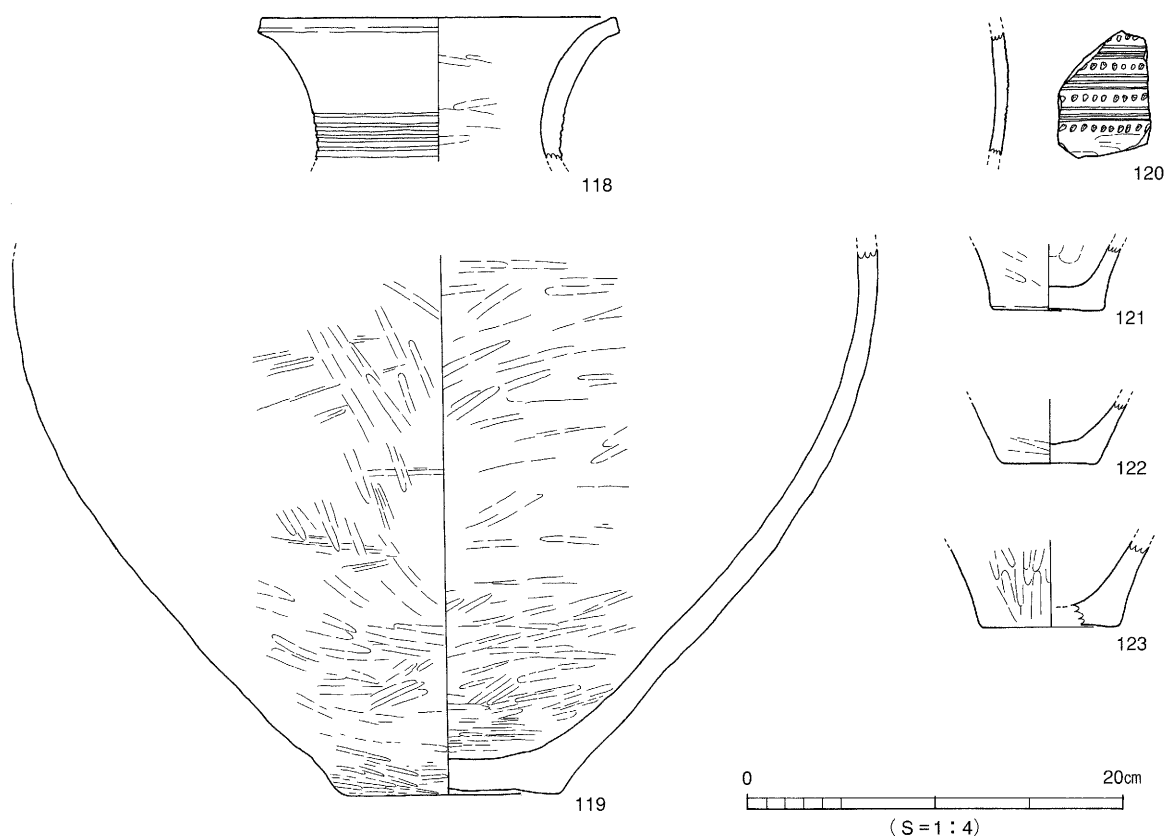


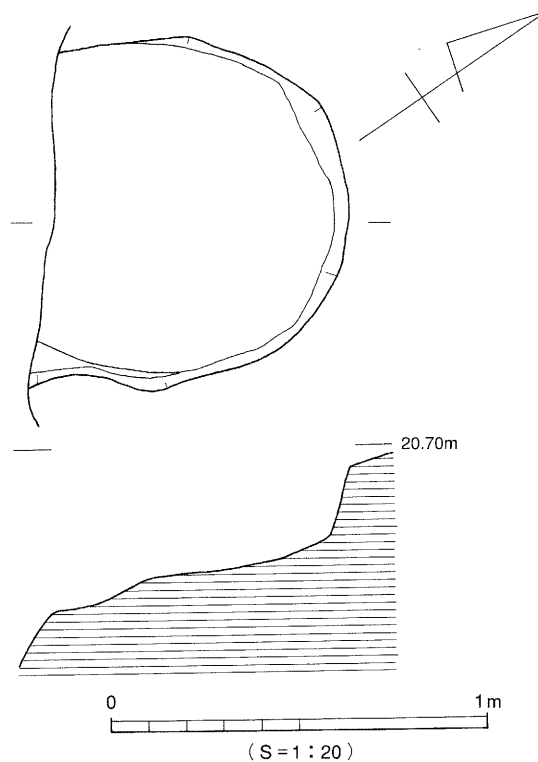
図49 G区SK10出土遺物

S K10出土遺物

弥生土器 (図49)

壺 (118・119) 118は復元口径18.6cmを測る口頸部片。口端部は平坦面をなし、頸部には6条の沈線を持つ。119は大型壺の底部から胴部中位である。底径11.2cm、残存高28.7cmで、残存部上端のあたりに胴部最大径があり、その値は45.5cmとなっている。外底面以外のすべての部位をヘラ磨きされている。

甕 (120~123) 120は胴部上位施文帯の片である。3本単位の横位の沈線で区画したスペースに刺突列点文を施しており、沈線帯が3段、列点文帯が4段まで確認できる。121~123はいずれも平底の底部片である。



S K11 (図50)

S K10の西、さらに斜面下方で検出された土坑で、段カットのため西側の肩が消失し、

図50 G区SK11

直径1 m程度の馬蹄形状のプランとして調査された。土器の出土はなく、石斧片1点の出土であった。

SK11出土遺物

石器 (図51)

石斧 (124) 柱状片刃の加工斧刃部片、緑泥片岩を素材としている。

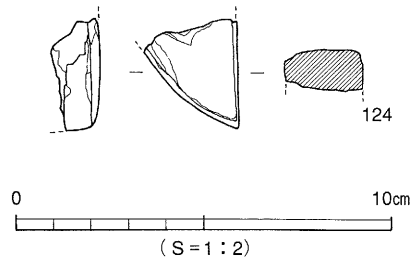


図51 G区SK11出土遺物

SK12 (図52)

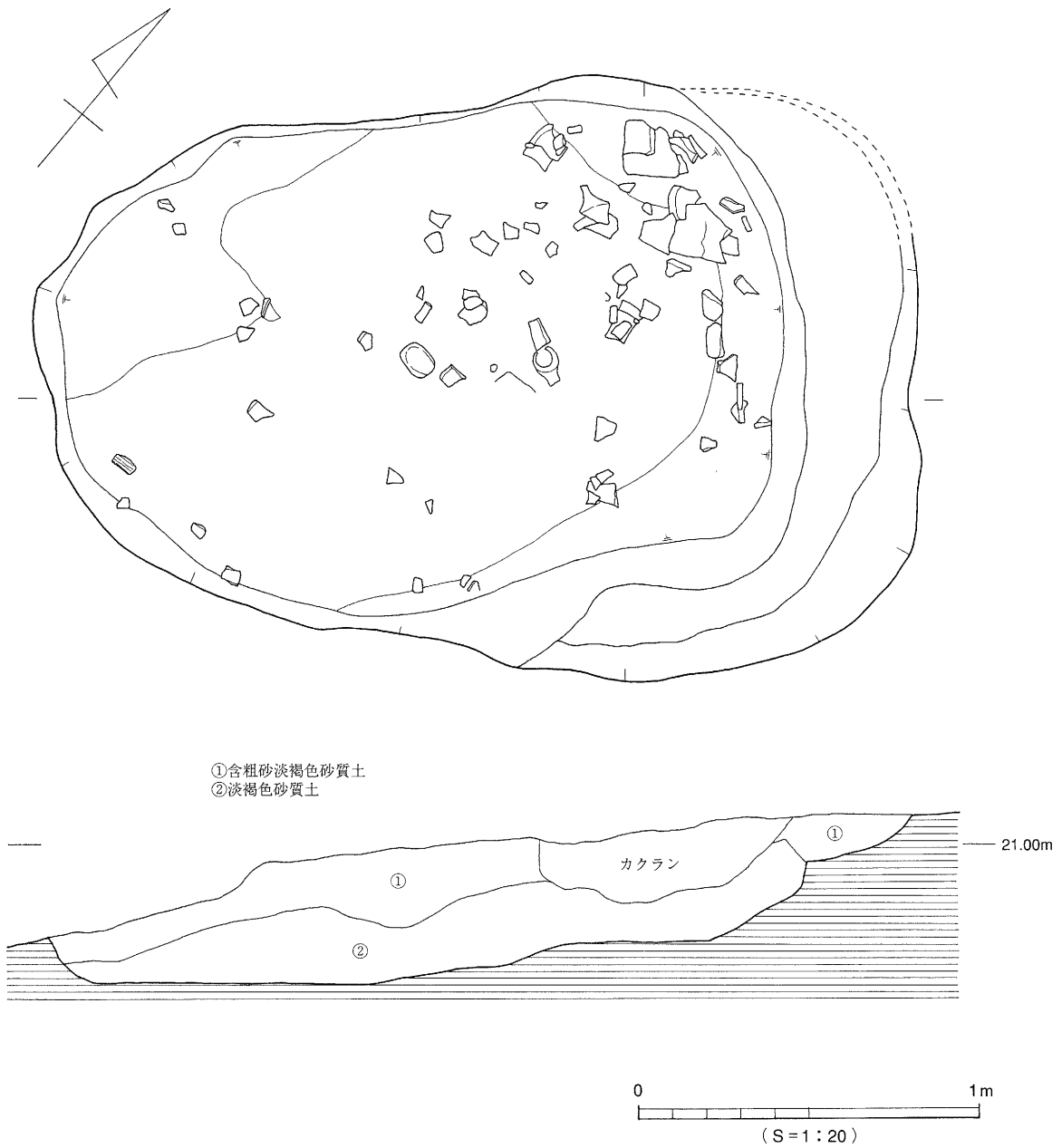


図52 G区SK12

3号墳丘の南西方向の斜面で検出されたもので、1.7×2.5mの楕円形から隅丸方形に近い形状をなしている。斜面上方の北東から東部にかけてテラス状に高くなった部分がある。深さ15～30cmで、テラスより内側の部分で弥生土器の出土があった。

S K 12出土遺物

弥生土器 (図53)

壺 (125・126) 125は復元径25.0cmを測る口縁部片で、口端部の平坦な面にヘラ描沈線を1条巡らせた後、縦方向に刻みを入れるものである。126は短頸、広口の口頸部小片である。復元口径には若干の不安があるが、約17cmを測る。頸部と口縁部の境に低い段を持ち、この段の直上に刺突列点文を施すもので、若干他のものより古い特徴を持っているので、混入遺物と考えられる。

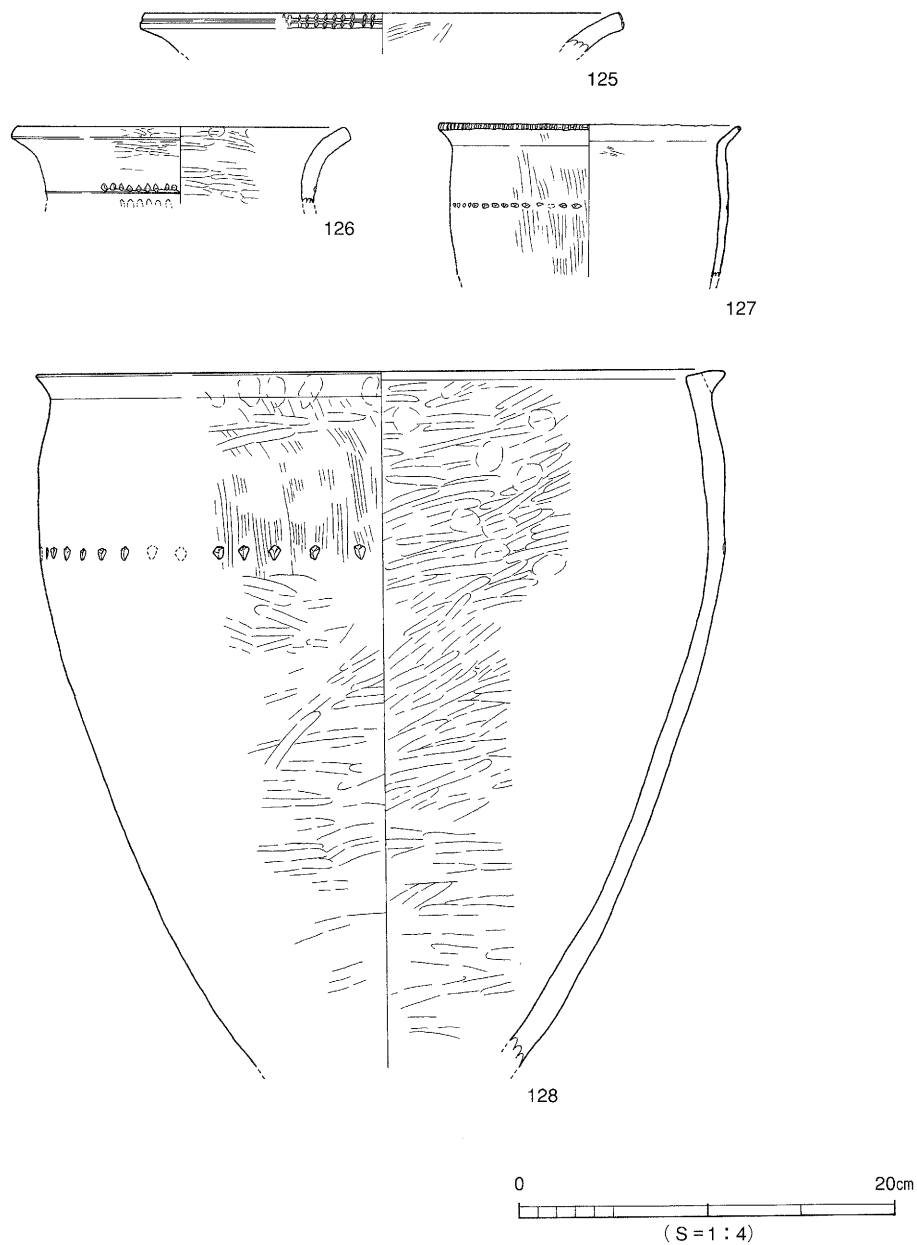


図53 G区SK12出土遺物

甕 (127・128) 小型の127は、口径15.8cmを測るもので、外上方に開く口縁部は折り曲げによる。端部は丸みを持って仕上げられ、刻み目を施される。胴部上位の外面に刺突列点文を巡らせている。胴部外面を縦刷毛目、内面は磨かれているようである。大型品128は、明らかに同一個体と考えられるいくつかの部位を図上復元したものである。口径36.3cmを測る口縁部は、断面三角形の粘土帯貼り付けによる。胴部外面上位には向かって右上斜め方向からの三角形の刺突が1段巡っているが、原体は不詳である。外面の刺突から頸部の間は縦刷毛目、その他の内外面はヘラ磨きされている。

S K 13 (図54)

S K 4 の南1.3mで、3号墳の周溝に切られたかたちで検出された。南西側の肩は残りがよく、この部分で深さ65cmを測る。一方反対側の部分は周溝に切られ、ほとんど残っていない。弥生土器小片が僅かに出土したが、図化可能なものはない。

S K 14 (図55)

4号墳周溝に切られて検出されたもので、0.8×0.9mの不整円形をなす土坑である。深さ15cm程

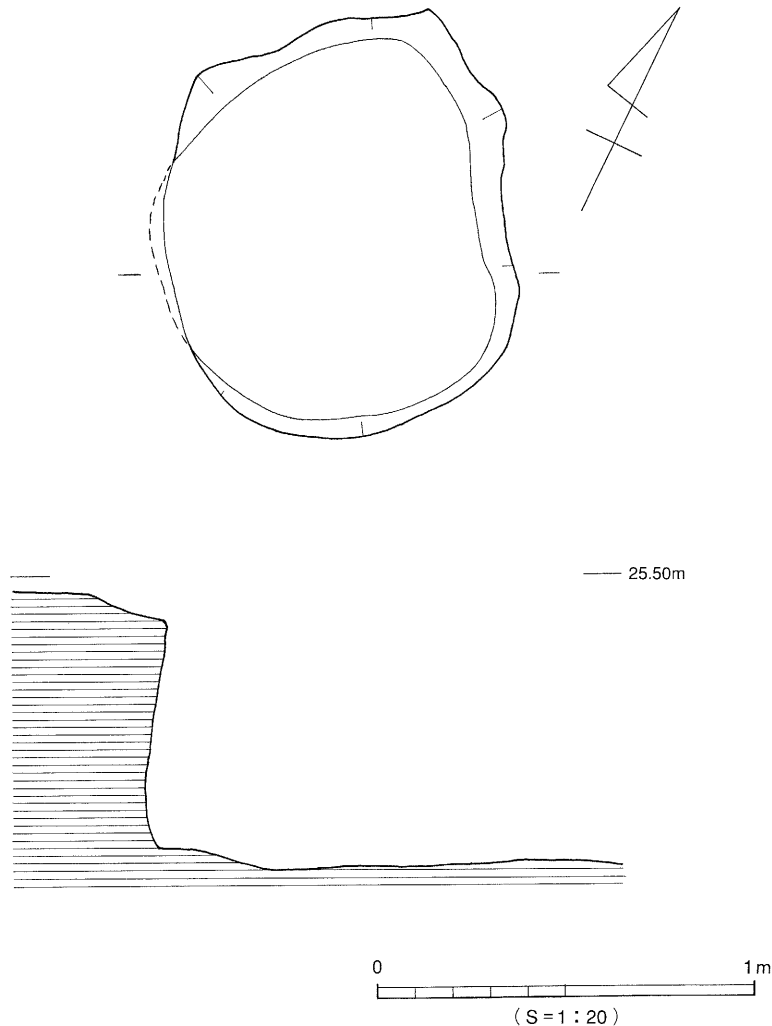


図54 G区SK13

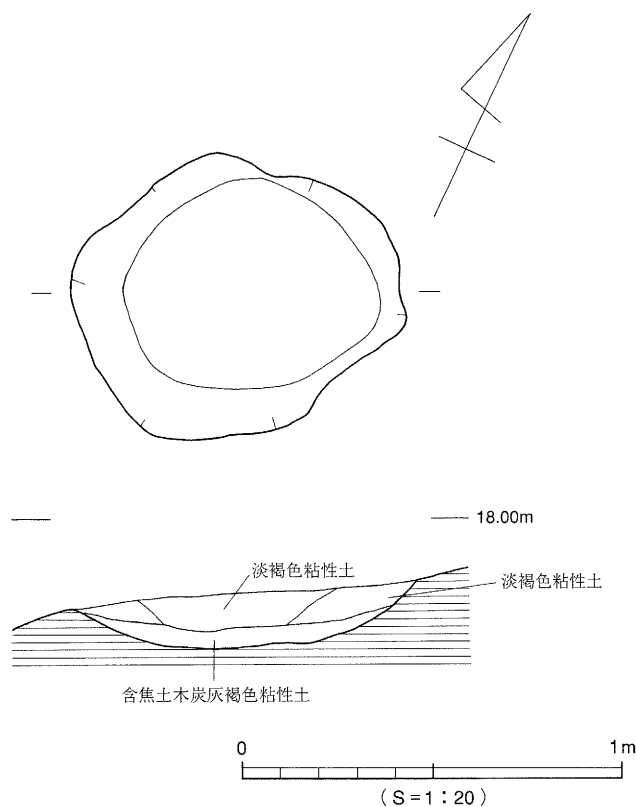


図55 G区SK14

度の遺存であった。若干の焼土混じりの土で埋まっていた。この土坑からも弥生土器の小片が数点出土したが、図化可能なものはなかった。

S K 15 (図56)

3号墳の南西斜面でS K12と並列して検出されたもので、一辺2 m程度の隅丸形状のプランをなすものと思われるが、斜面下方にあたる南西部が削平されているので詳細は不明である。

S K 15出土遺物

弥生土器 (図57)

壺 (129・130) 129は口縁部片である。端部を丸みを持った面に仕上げられ、その下端部に刻み目を施している。130の有文壺は肩部の片、ヘラ描沈線による文様が施されるものである。3本の直線文の上位に直交して2本沈線が立ち上がり、これらの直線文によって区切られた空間に、4本の弧線を用いた木葉文が描かれている。

甕 (131・132) 131は平底の底部、復元径7.6cmを測る。132は器高32.3cm、口径25.8cm、底径7.8cmを測るもので、胴部上位に最大径を持ち、その値は26.2cmとほぼ口径と同じとなっている。胴張り部から頸部にかけて櫛描文が施されており、その構成は上から順に、直線文、波状文、刺突文となっている。条線には強弱があり、おおよそ0.5cm間隔で強い線が現れる。おそらく、原体はこの幅のものであると考えられ、最下段の上下2段の列点文もこの原体を用いたものであろう。これらの施文は、縦刷毛目の上に施されているが、胴部外面のその他の部位はヘラ磨きされている。内面は胴部上位をヘラ磨き、下位を撫で調整している。

遺構と遺物



図56 G区SK15

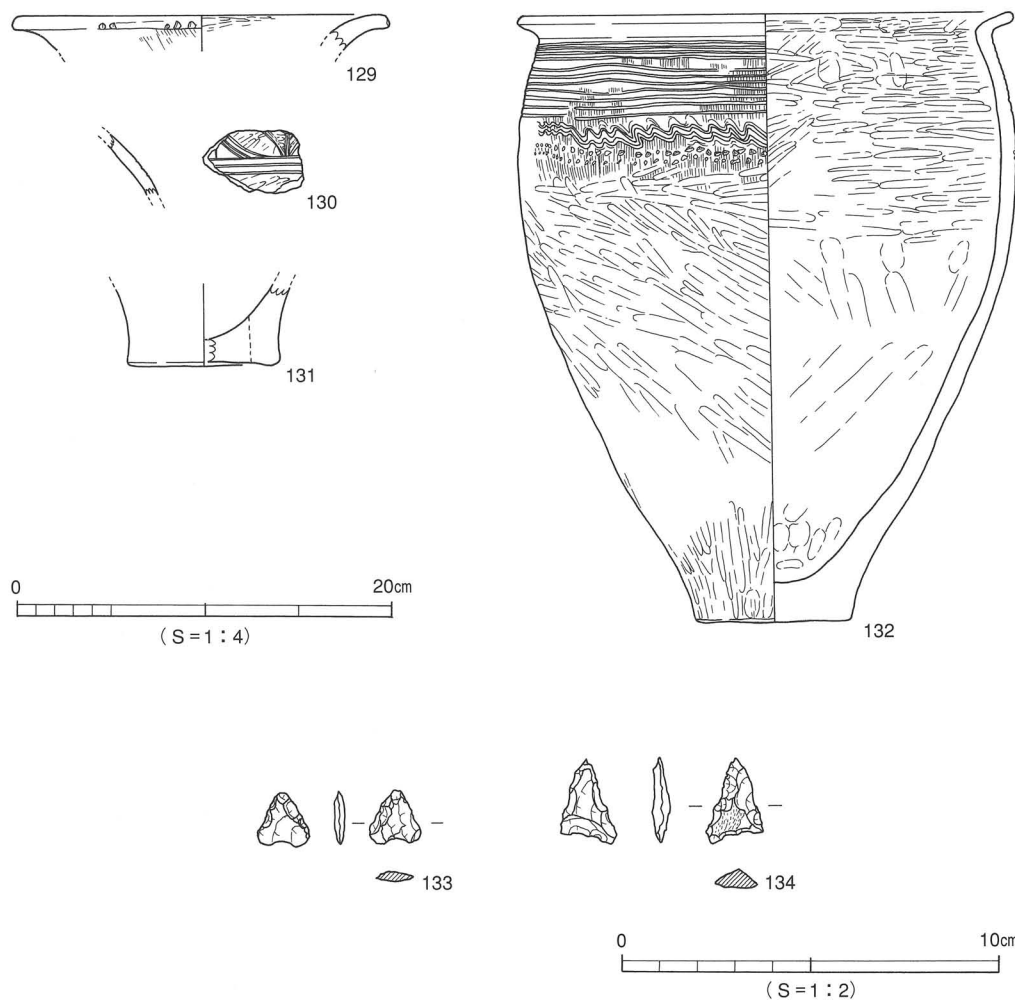


図57 G区SK15出土遺物

石器 (図57)

石鏃 (133・134) 両者ともにサヌカイトを素材とする打製の凹基無茎鏃で、133は全長1.4cm、最大幅1.3cmと正三角形に近い形態で、重量0.40gを量る。134は全長2.2cm、最大幅1.5cm、重量0.84gのものである。左右非対称で、一方の逆刺が短くなっている。

S K 16 (図58)

S K 12・15の北西で検出された。2.4×2.1mの隅丸方形で、深さ30~15cmの遺存であった。

S K 16出土遺物

弥生土器 (図59)

壺 (135~138) 134は内面突帯を持つ口頸部片、頸部の外面に沈線が1条確認できる。136~138は壺の肩部片で、2本単位の半截竹管による沈線と山形文を組み合わせた施文が行われている。

甕 (139) 折り曲げによる水平口縁の甕、復元口径22.8cmを測る。胴部外面には斜め方向の刷毛目、内面の口縁部付近には横ヘラ磨きを確認できる。

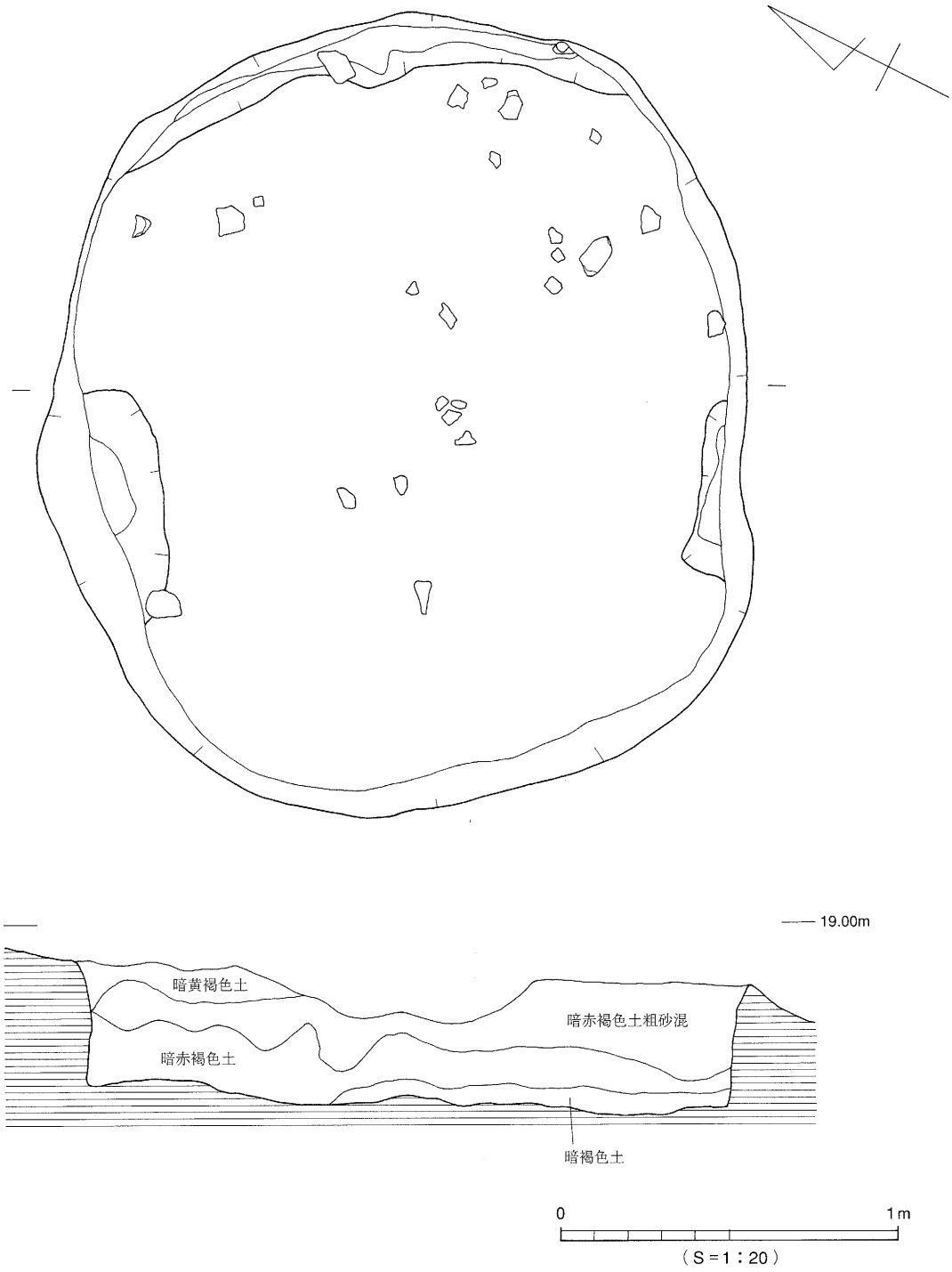


図58 G区SK16

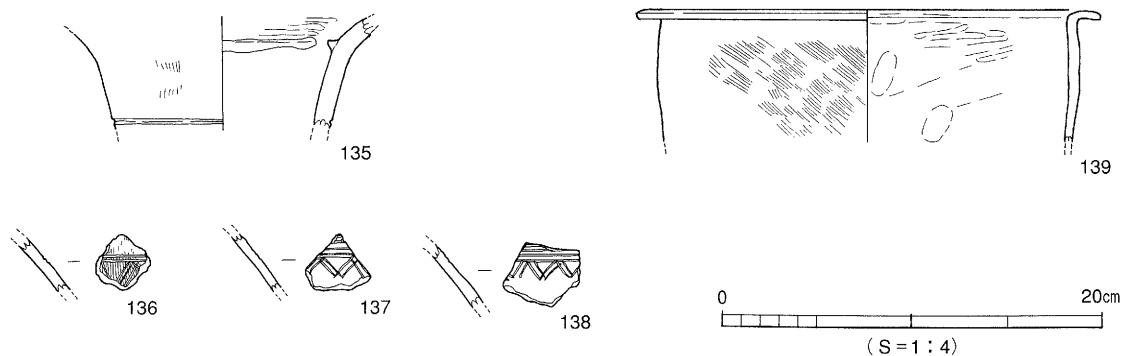


図59 G区SK16出土遺物

S K17 (図60)

後述するS K18とともに3号墳丘上で検出された。直径0.8mの円形プランで、深さ50cmを測る。壁は一部オーバーハングする部分もあるが、ほとんど垂直に立ち上がっている。

S K17出土遺物

弥生土器 (図61)

壺 (140) 口頸部から肩部、口径17.4cmを測る。筒形の短い頸部から外に短く開く器型で、頸部に3条のヘラ描沈線を持つ。頸部の外面は縦刷毛目の後横撫で、胴部外面は横ヘラ磨きされている。

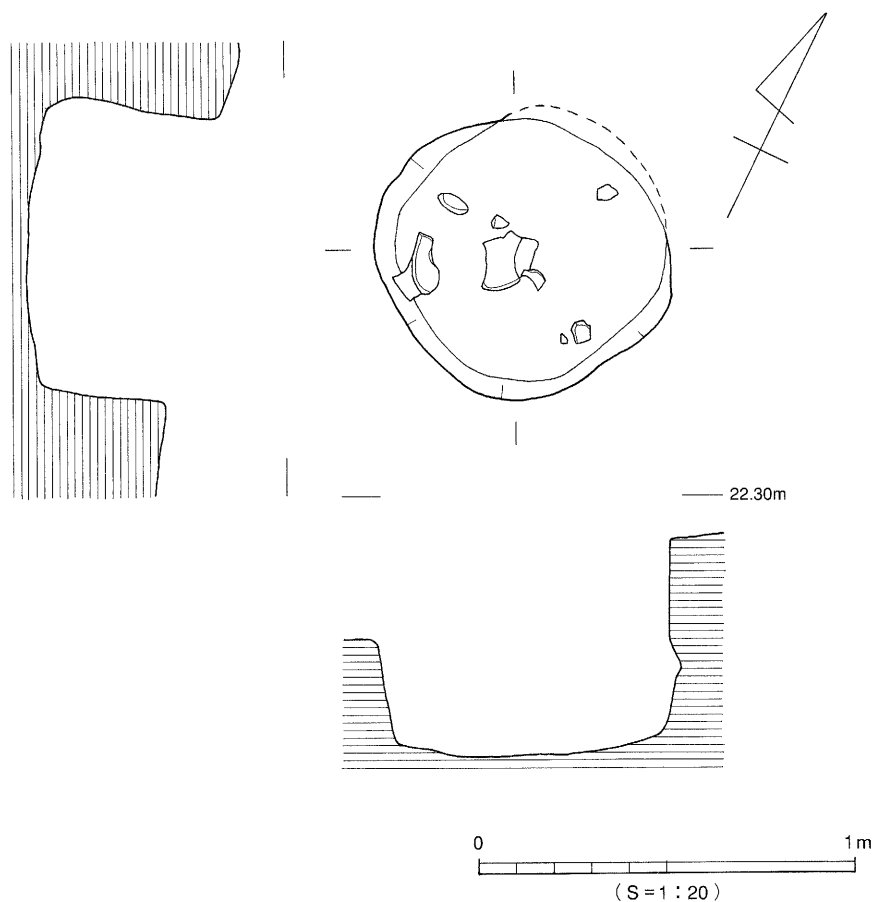


図60 G区SK17

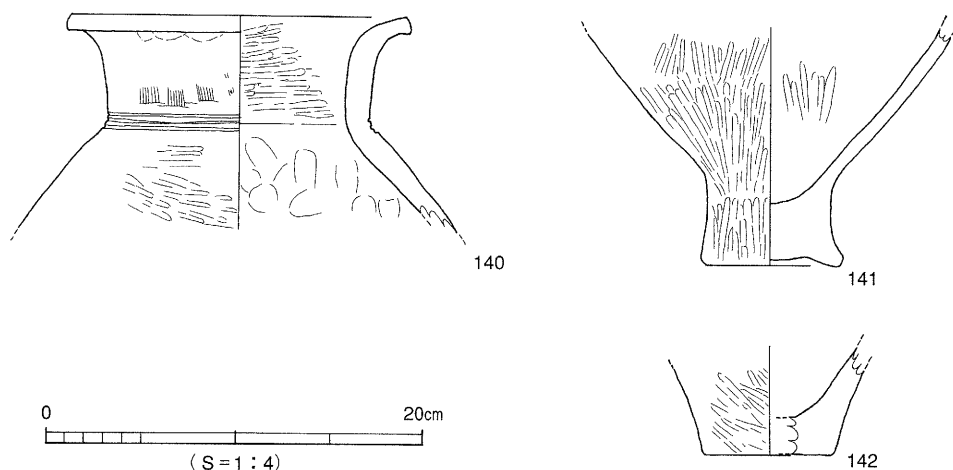


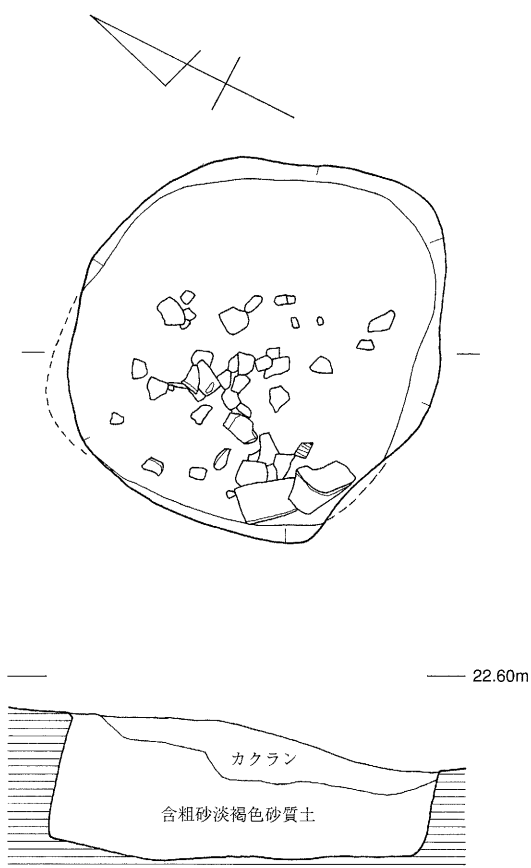
図61 G区SK17出土遺物

口頸部内面も同様に横ヘラ磨き、胴部は撫でられている。

甕 (141・142) 141は底部から胴部下位であるが、中窪み、中実の高い底部が特徴的なものである。底径6.8cmを測る。142は平底の底部片である。

S K 18 (図62)

3号墳丘上S K 17の北東4mで検出された不整形円形の土坑で、浅い攪乱に切られているが、深さ40～25cmの遺存であった。坑底はほぼフラットで、一部壁がオーバーハングする部分がある。埋土には若干の木炭が混ざっていたが、種実の類は検出されていない。



S K 18出土遺物

弥生土器 (図63)

甕 (143・144) 143は底部を欠くもので、深い胴部が特徴的なものである。貼り付けによる口縁部を刻んでいる。外面の口縁部下

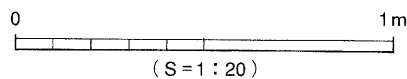


図62 G区SK18

にはヘラ描沈線が10条、その直下に刺突列点文が施されている。胴部外面の施文部位を縦刷毛目で調整されるほかは、胴部内外面ともに縦方向にヘラ磨きされている。144は平底の胴部下位、底径8.0cm

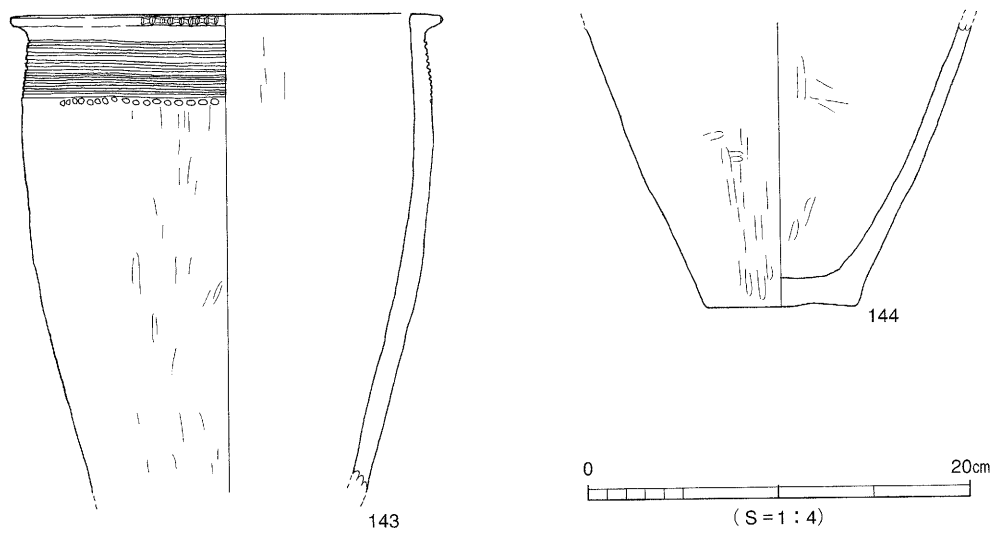


図63 G区SK18出土遺物

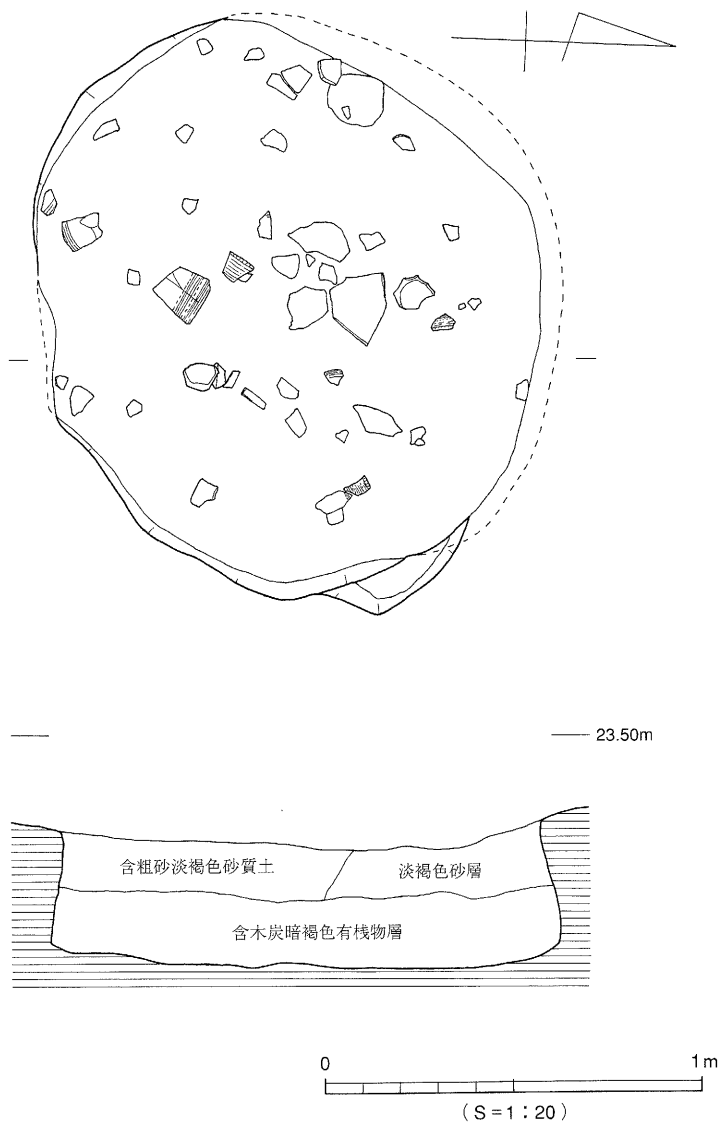


図64 G区SK19

を測る。内外の底面以外の部分は磨かれている。

S K 19 (図64)

2号墳東裾の段カット部分で検出された土坑で、1.55×1.35mの楕円形に近いプランをなす。坑底はフラットで、深さ25cm程度しか遺存していないが、壁がオーバーハングする部分が多いので、袋状をなす土坑であったものと考えられる。

S K 19出土遺物

弥生土器 (図65)

壺 (145~147) 145は口径21.3cmを測る口縁部で、内面突帯を持つ。口端部は平坦な面をなし、その下端部を刻まれている。外面を縦、内面を横刷毛目で調整されている。146は二枚貝施文の壺胴部片、3本の直線文と2本単位の弧文が確認できる。147は胴部上位の片で、胴張り部と肩部にそれぞれ5条ずつのヘラ描沈線を持つものである。外面を横ヘラ磨き、内面は撫で調整されている。

甕 (148~151) 148は貼り付けによる口縁部。口端面に刻み目、口縁下にヘラ描沈線が3条まで

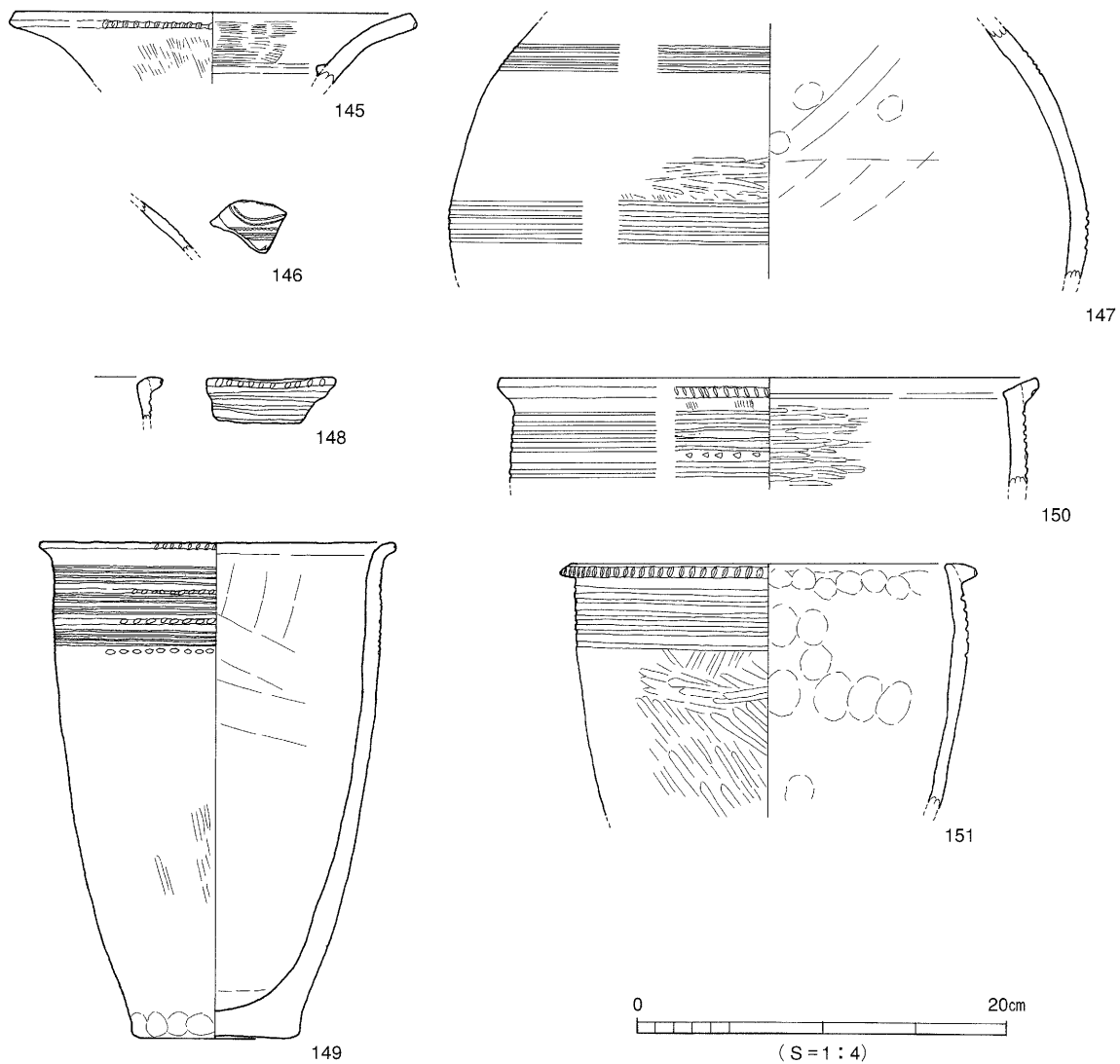


図65 G区SK19出土遺物

確認できる。149は器高27.0cm口径19.3cm、折り曲げによる口縁部は非常に短く外上方に開き、端面に刻み目を持つ。口縁下には、上に4条のヘラ描沈線、その下に刺突という組み合わせが3段にわたって施されている。底部は直径9.0cmの安定のよい平底である。胴部外面の調整は明確ではないが、施文部以下に部分的にヘラ磨きが看取できる。内面は撫でられている。150は復元口径28.8cm、貼り付けによる口縁部は上面が内傾した平坦面をなし、その内端を内側につまみ出すように僅かに突出させている。口端部は平坦な面をなし、その下端から口縁部下面にかけて刻み目を入れている。口縁下の胴部外面に5条のヘラ描沈線、その直下に刺突列点文、さらにその下位に沈線が2条まで確認できる。151は胴部下位を欠くもので、口径19.8cmを測る。口縁部は胴部上端に接して、断面三角形の粘土帯を貼り付けており、上面は水平よりもやや下がった面となっている。外端面には大きめの刻み目が入られ、口縁下にはヘラ描沈線が6条巡っている。胴部外面の施文部位は粗い縦刷毛目で調整され、それ以下は単位の細かい磨きが横、斜め方向に施されている。内面の調整は撫でによっている。

b. その他の弥生遺物

以上の土坑群からの出土のほか、表採遺物や、所属遺構が不明確になった弥生遺物があるのでここで扱っておく。

弥生土器（図66）

甕（152～159） 152は口縁部から胴部上位の片。折り曲げによる口縁部外端面に刻み目、口縁部下に4条のヘラ描沈線を持つものである。胴部外面には縦刷毛目が観察できる。153も口縁部折り曲げによる甕で、口径19.8cmになるものである。外上方に軽く折り曲げられた口縁部は、端部に面を持っておさめられる。口縁部をやや下った胴部外面に刺突列点文が巡っている。外面は粗い縦刷毛目で調整される。口縁部は内外面横撫で調整されているが、横撫でが弱く、口縁部の外面端部にまで及んだ刷毛目が残っている。内面の口縁部下はヘラ磨きされ、以下の胴部は刷毛目の後撫でられている。154は器高16.4cm、口径13.6cm、底径6.5cmを測る小型の甕である。口縁部は断面三角形の粘土帯を貼り付け、端部に刻み目を施している。口縁下にはヘラ描沈線が8条、その直下に刺突列点文が1段巡っている。外面の器壁の傷みが激しいため、調整は不詳、胴部内面は撫でられている。155は甕と思われる胴部片で、櫛描による施文が行われている。上下の沈線間に山形文、下位の沈線下に竹管文が2段巡るものである。156～159は底部で、156や157のような平底、158のような若干の窪み底、また、159のようなくびれの上げ底になるものがある。

壺（160～164） 160は口縁部小片、短頸・広口の形態になるものと思われる。口縁部外端面に浅い沈線を1条引き、その上から板状工具木口の刺突による斜線のような刻み目を施している。161は、土坑SK7・8の直近でまとまって出土したもので、本来はなんらかの遺構に伴っていた可能性が高い。器高35.8cm、口径12.6cm、底径8.0cm、最大径26.1cmを測る胴部は張りを胴部の中ほどに持つ。頸部は短く外反し、短い口縁部が外上方に開く。口端面にはヘラ描による格子文が施され、頸部には圧痕文突帯が1条貼り付けられている。胴部の外面は刷毛目の後ヘラ磨きされ、内面も磨かれている。162は胴部片で、ちょうど胴張りの部分にあたる。4条のヘラ描沈線と、その上位に細く低い連鎖状刻み目突帯を貼り付けるものである。163・164は平底の底部である。

石器・石製品（図67）

石斧（165～167） 伐採斧165・166と加工斧167があるが、いずれも緑泥片岩を素材とするもので、

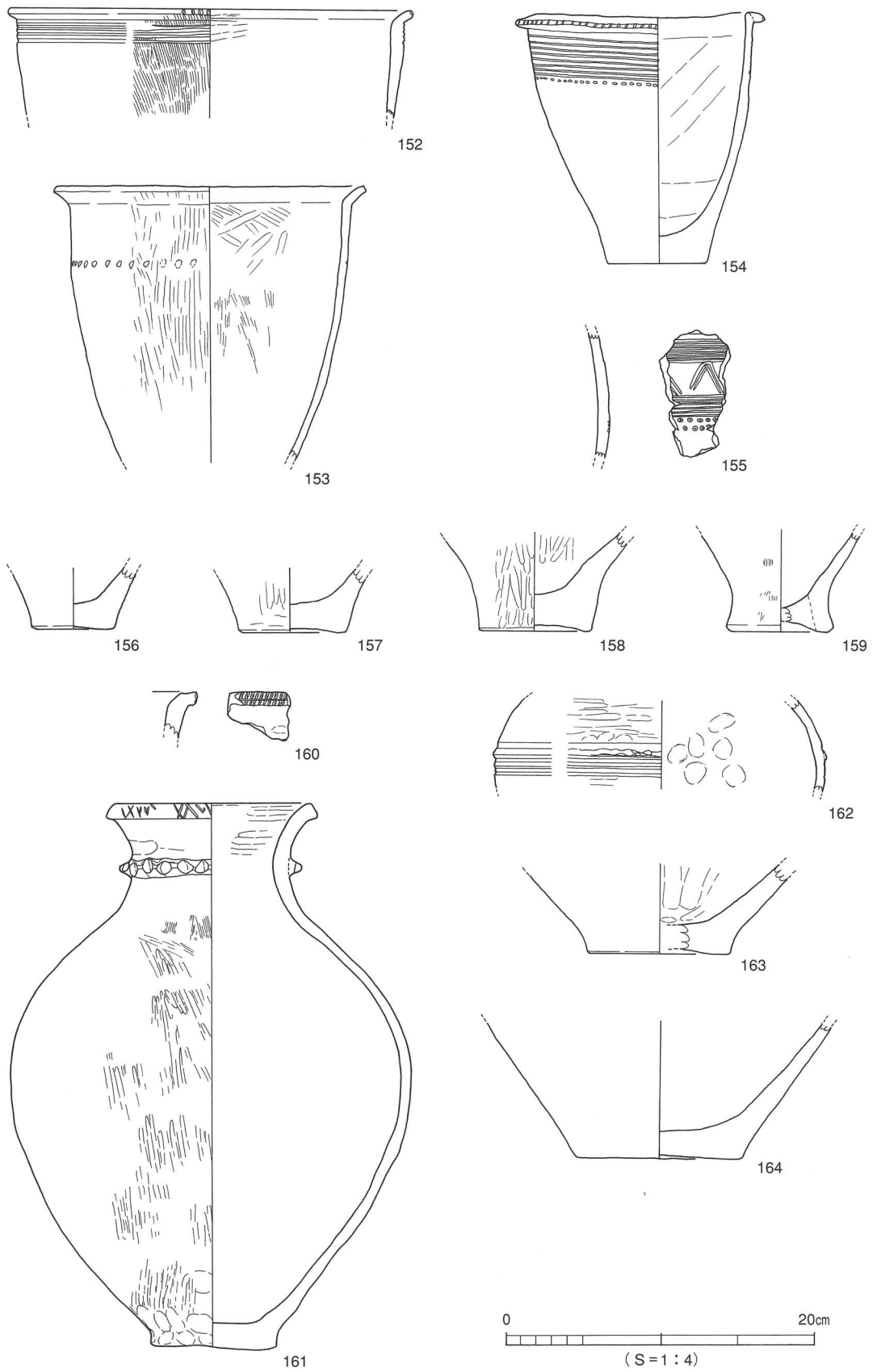


图66 G区出土弥生土器

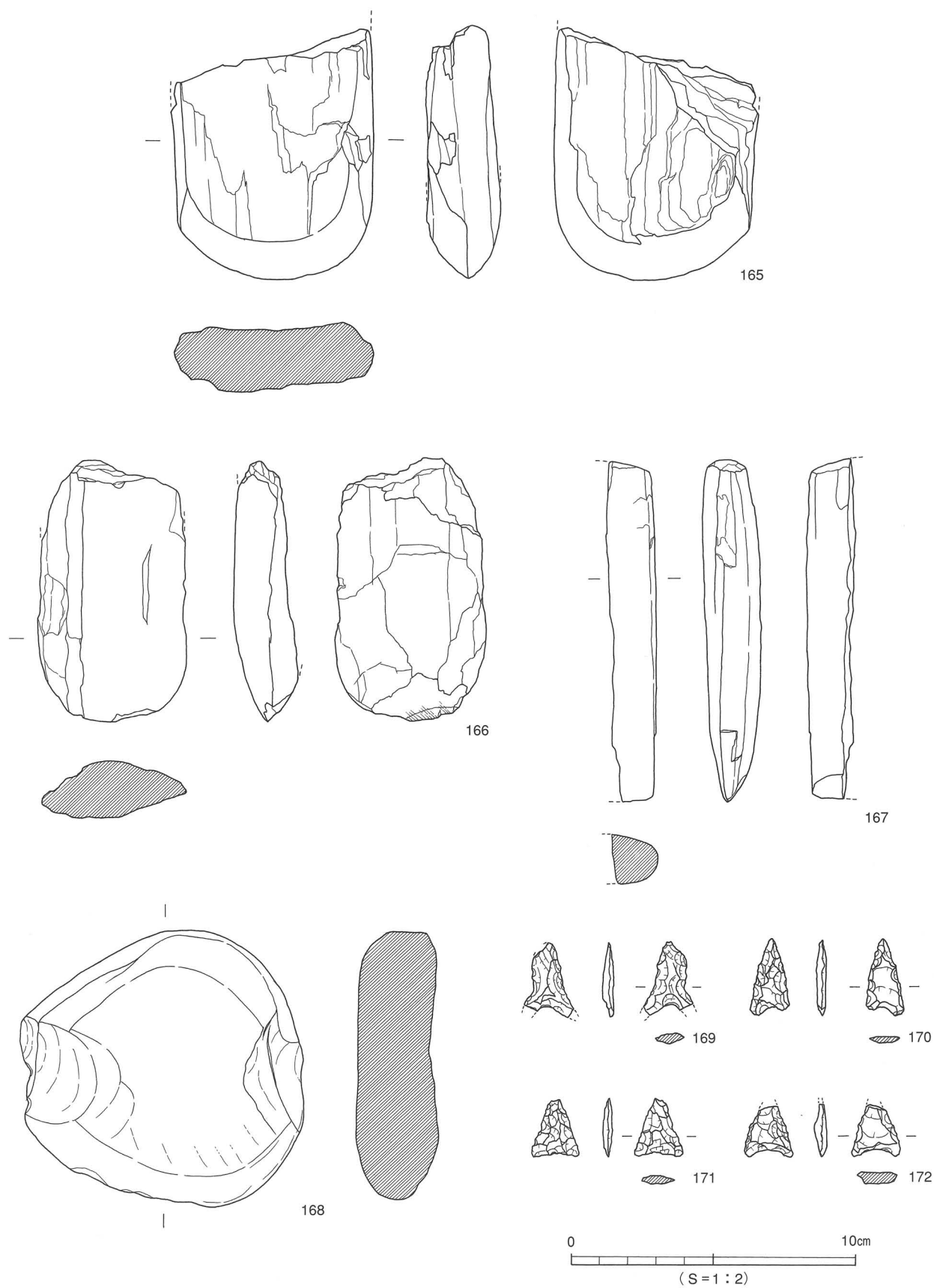


図67 G区出土石器・石製品

破損品である。165は、幅7.0cm、現況重量254.9gで刃部に近い部分で折損している。また、片面の身部に剥離もある。刃部は両面から偏ることなく均等に研ぎ出されている。166は剥離や折損のため、刃部の一部と身部の一部が生きているのみである。167は柱状もしくは扁平片刃で、縦方向に破断している。現状での長さは12.2cm、重量62.6gとなっている。

石錘（168） 扁平な砂岩転石の側縁を打ち欠いて錘としたもの、重量428gを量る。

石鏃（169～172） すべてサヌカイト素材の凹基無茎鏃である。169は尖端部、逆刺部を欠損しているが、側縁が大きく窪み、逆刺が長く伸びるものである。現況での重量0.79gを量る。170は全長2.7cm、最大幅1.4cmの二等辺三角形に近い形状のものであるが、一方の逆刺部が短く左右非対称となっている。重量0.84gを量る。171も二等辺三角形で、全長2.0cm、最大幅1.6cm、重量0.74gの基部が僅かに窪むものである。172は尖端部を欠くが、やや基部の窪みの大きい二等辺三角形、他のものに比べると肉厚である。現況重量1.20gを量る。

（2）古墳時代の遺構と遺物

G区では、古墳時代の遺構として4基の古墳が検出されている。いずれも畑の段カットや、灌水用の配管などによる破壊が進んでいるため、墳丘盛り土、主体部の遺存はなく、周溝の一部が検出されたのみである。

a. 1号墳（図68）

検出された4基のうち最も北側に位置するもので、次に述べる2号墳の直近で検出されたが、切り合いの有無は不明である。東から西への傾斜面の斜面上方で、三日月形の形状を呈する溝として検出された。溝は最大幅4m、深さ0.3m程度で、長さ14m程度検出された。比較的状态のよい溝外側の肩で測定してみると、直径14～15m程度の円形に復元できそうである。主に墳丘寄りの立ち上がり斜面に貼り付くような状態で埴輪片が出土している。

1号周溝出土遺物

埴輪（図69）

円筒・朝顔形埴輪（173～178） 173・174は普通円筒の口縁部、175は朝顔の肩部、その他は胴部片で円筒、朝顔の別は不詳である。173は復元口径24.0cmになるもので、比較的薄手のつくり、口端部は内傾した面をなす。端部付近の内外面に横刷毛が施されている。174も173と同様の特長を持つ口縁部片であるが、端面の内傾が173ほどには強くないものである。175は朝顔の肩部から頸部で、頸部に断面三角形、肩部には断面台形のタガが貼り付けられている。肩部突帯直下には透孔がある。外面の肩部には横から斜め方向の刷毛目、頸部には縦方向のハケ目がある。胴部片176～178のうち、176は須恵質に近い硬質の焼成で、中窪みのタガは上面が水平に近く、下面が緩やかな斜めになる断面を持つ。外面は縦刷毛調整され、二次調整は行われていない。177も176と同様の形状をなすタガを持つが、端面の窪みはやや弱い。外面に部分的に横から斜め方向の刷毛目が観察できる。178のタガ形状も前二者と同様である。

形象埴輪（179・180） 179は、動物もしくは人物の足と考えられるもの。直径3.0cmの中実の粘土棒の一端を扁平な弧状に曲げ、放射状に短沈線を5本施して指を表現した結果、6本指の足となっている。指の方向が正面からみて左にシフトしているため、右足を表現しているものと考えられる。180

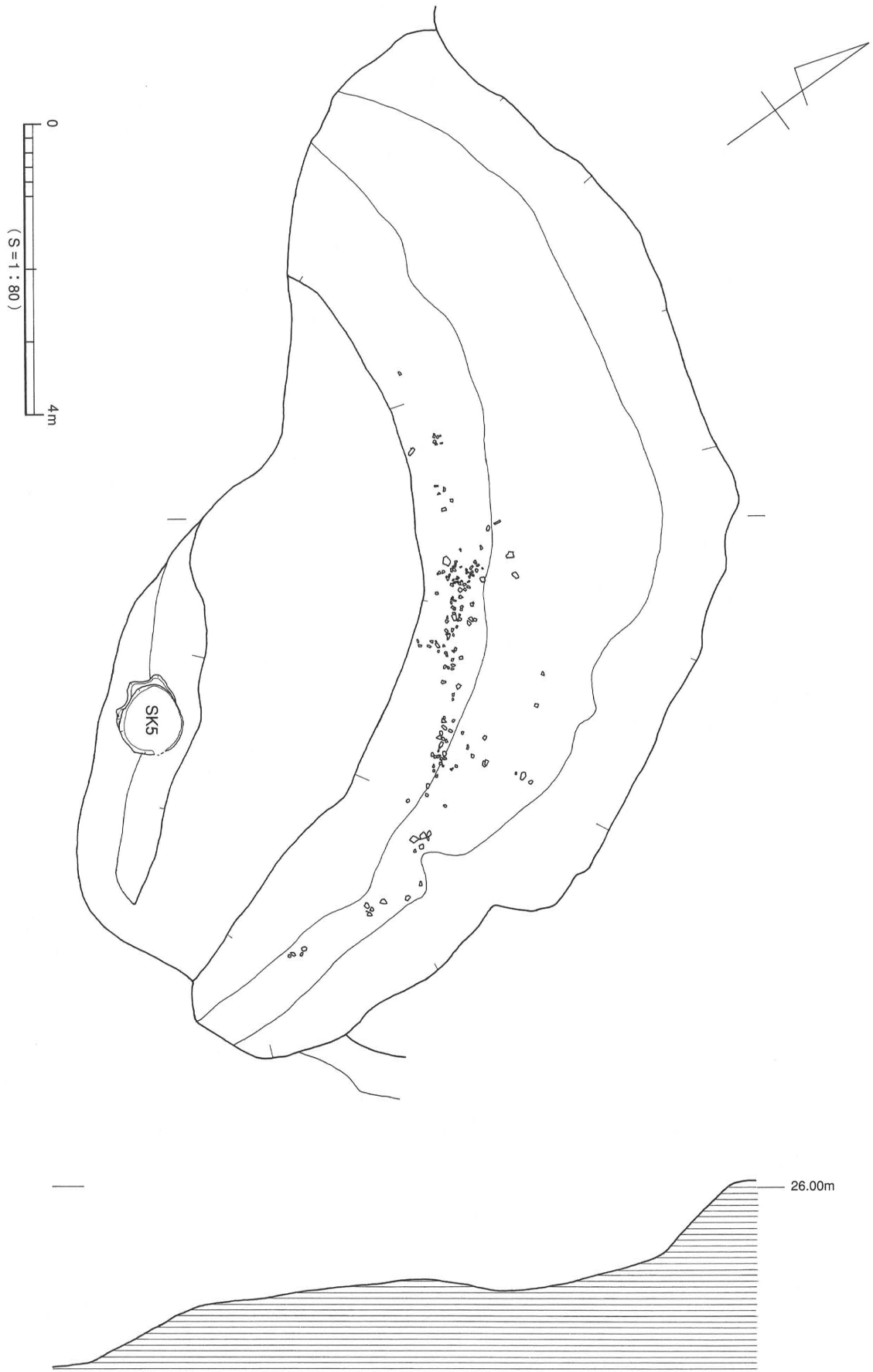


図68 G区1号周溝遺物出土状況

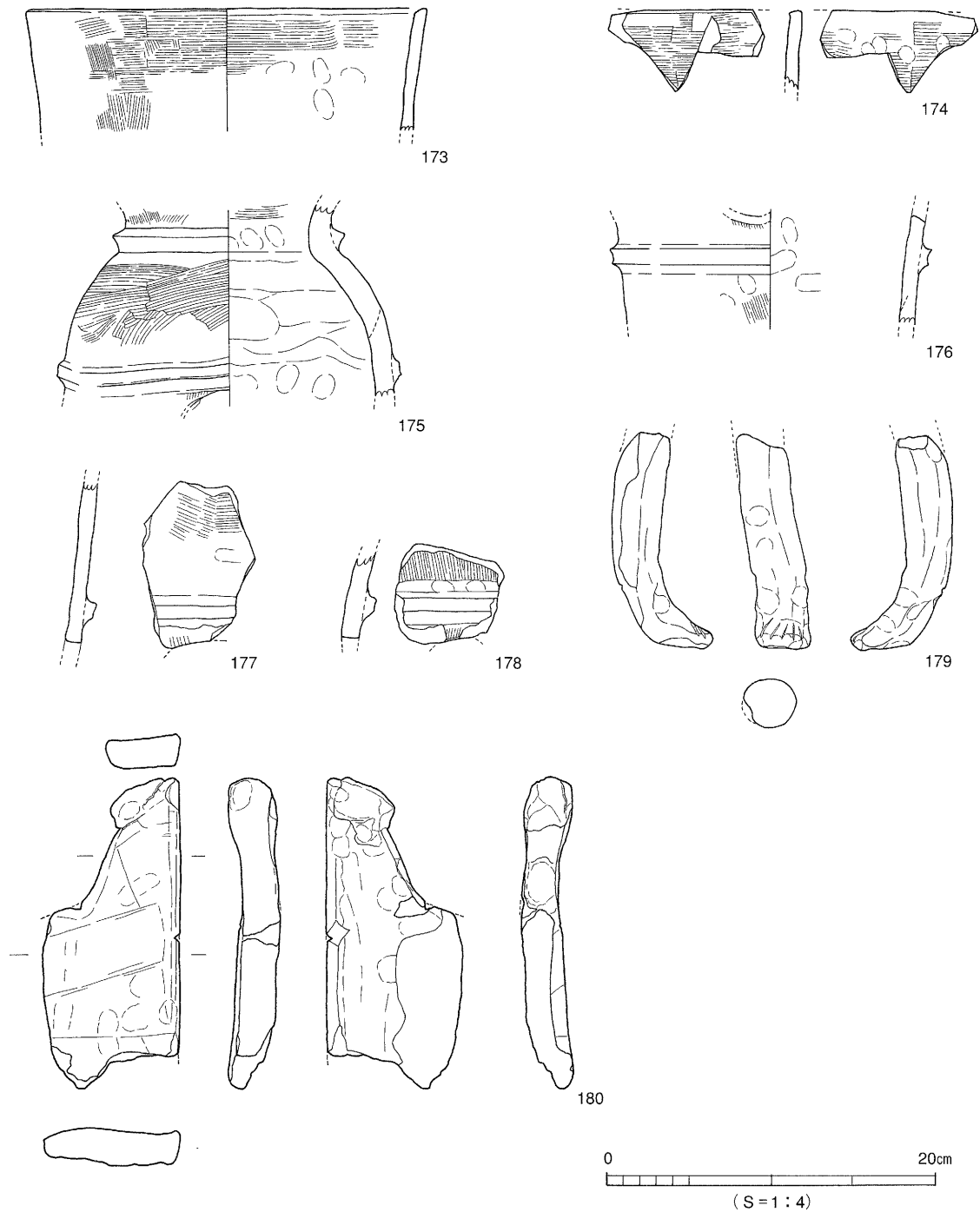


図69 G区1号周溝出土遺物

はやや反りを持った粘土板で、現況の直線的な長側縁と、この端部から一旦瘤のように膨らんだ後鋭角的に折り返し、カーブを描いて延びていく辺が生きている。裏面には隅丸形状の剥離痕があるので、この部分で別のパーツに貼りついていたものだが、何の一部であるのか不明である。

b. 2号墳 (図70)

1号墳の東直近尾根上で検出された。長さ9m程の三日月形の溝で、最大幅2m、深さ0.4mを測

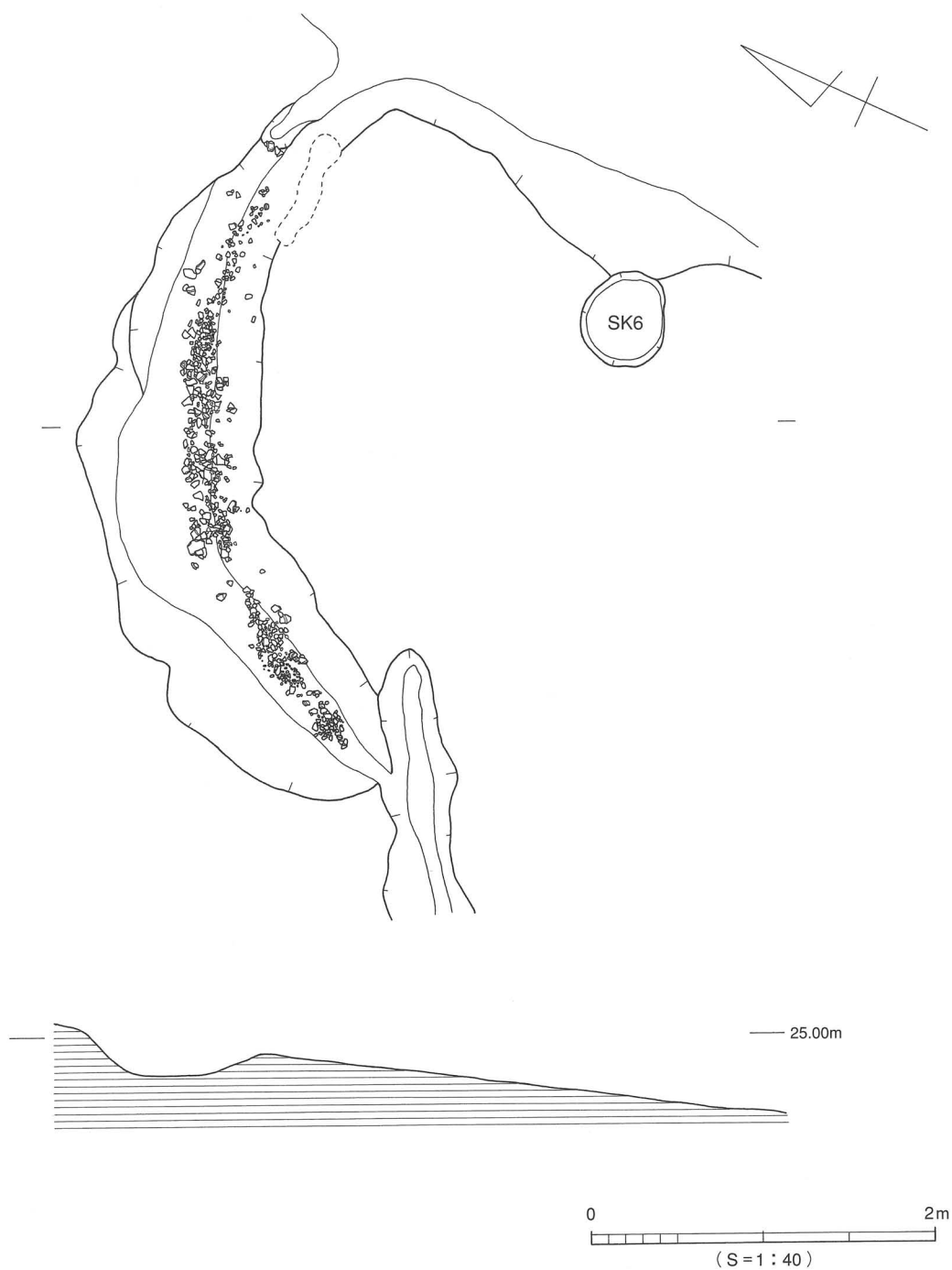


図70 G区2号周溝遺物出土状況

る。これも溝外側の肩で測定してみると、直径10m程度に復元でき、この規模であるとする、先の1号墳や後述する3号墳と切り合うことはない。この周溝からも、主に墳丘寄りで埴輪片の出土がみられている。

2号周溝出土遺物

埴輪 (図71~73)

円筒・朝顔形埴輪 (181~200) 181~191が普通円筒、197~199が朝顔と確定できるもの、その他

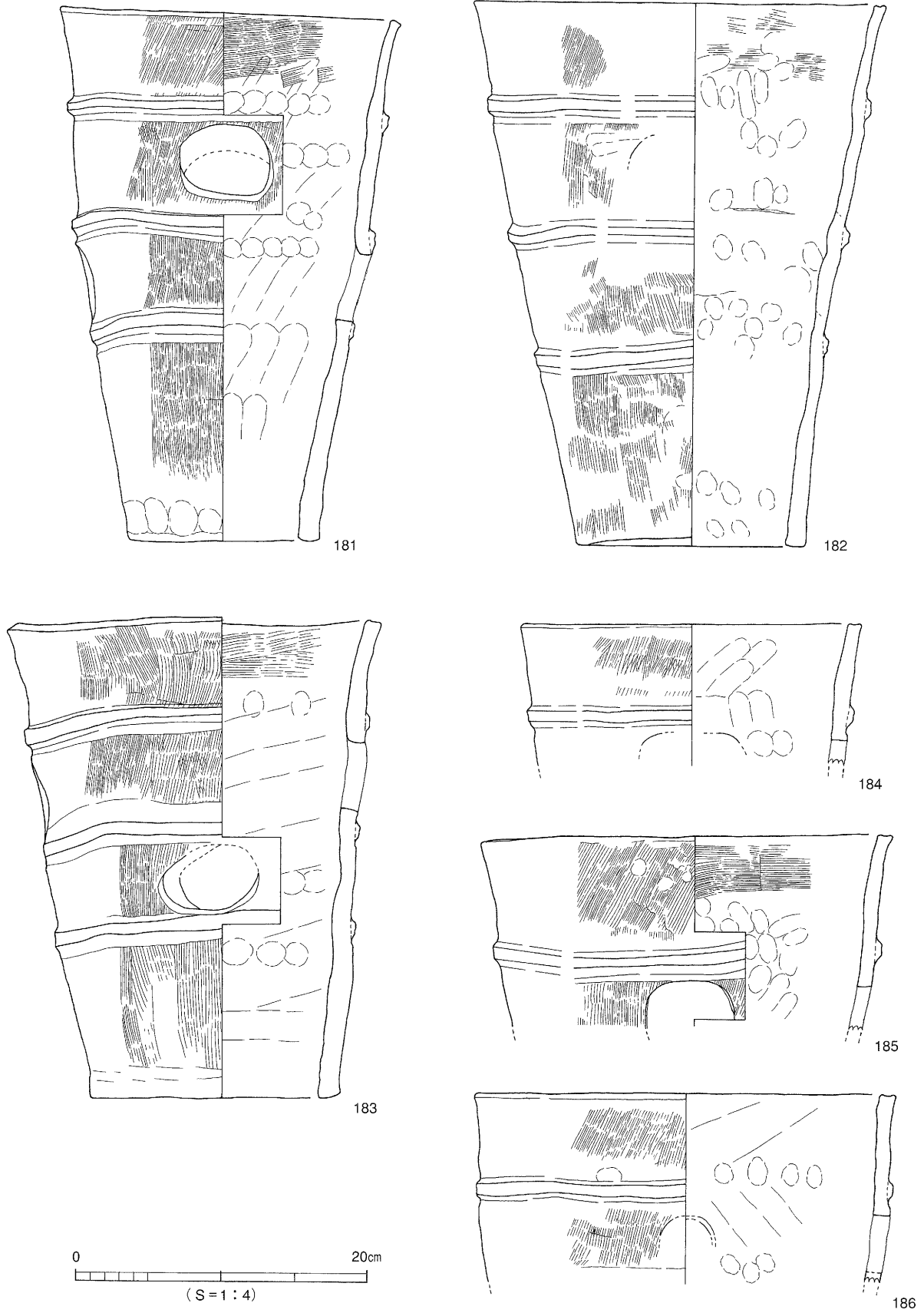


图71 G区2号周溝出土遺物(1)

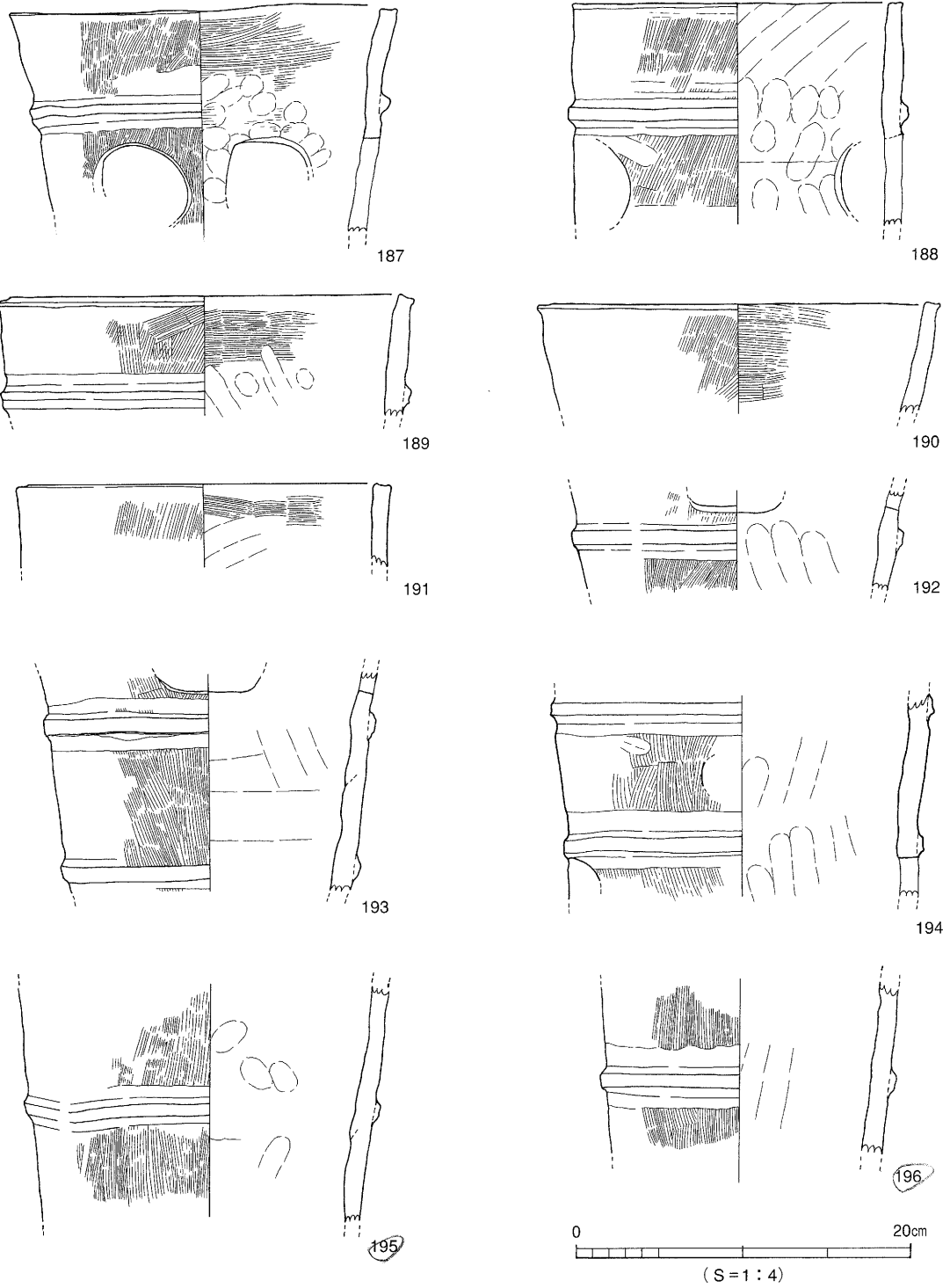


图72 G区2号周溝出土遺物(2)

は胴部および底部である。181は器高36.1~37.0cm、口径23.0cm、底径13.0cmになるもので、胴部に3本のタガが貼り付けられている。口縁部はやや外反気味、端部に僅かな撫で窪みを有する外傾した面をなす。上から2段目、3段目に直交配置で、隅丸方形に近いかたちの透孔を2箇所ずつ持っている。上位2段のタガが端面を強く撫で窪ませた、断面M字になっているのに対して、最下段のタガの断面は角の取れた台形状を呈する。外面の調整は、口端部を横撫で、底部を指おさえするほかは縦から左下がりの斜め刷毛目で、2次調整は施されていない。口縁部の内面は横刷毛（C種）、その他の部位は指撫でされている。土師質であるが、堅緻に焼成されている。182は器高37.6cm、復元口径27.4cm、底径15.4cmを測る。タガはやはり3段、透孔は上から2段目に部分的にしか確認できない。タガの断面形は台形状、外面の調整は181と同様であるが、最下段の縦刷毛は底端部まで施されている。口縁部内面にも横刷毛が施されているが、181とは違いA種である。183は器高33.1cm、口径24.2cm、底径17.0cm、とやや寸詰まりの器型で、タガや透孔の配置は先の181と同様、透孔は楕円形、タガは低い台形状を呈する。内外面の調整も基本的には181と同じであるが、底部の外面には工具の圧痕があり、内面は横方向にヘラ削りされている。184は口縁部から最上段のタガの片で、復元口径23.3cmを測る。タガの直下に透孔が僅かに確認できる。外面は斜め刷毛目の1次調整のみ、内面口縁部に刷毛目はなく、撫で調整されている。185は口径27.3cmを測るもので、口縁部から2段目の円孔が1/2ほど確認できる。タガ断面は、やや中窪みの台形である。外面は左下がりの斜めから縦方向の刷毛目、口端部の横撫での範囲は非常に狭く、端面はほぼ水平な面をなしている。口部内面にはB種の横刷毛が施されている。186は口径28.8cm、これも口縁部から一段目のタガを経て、その下位の円孔が僅かに確認できるもので、口縁部内面には横刷毛目を持たない。187・188は口縁部から1段目の透孔までのものである。187は口径23.1cm、断面台形のタガと、その下の区画に円孔を持つ。外面を縦から左下がりの斜めの刷毛目、口縁部内面をA種横刷毛で調整している。188は直立気味の器型で、2段目タガ上位の横撫で部分までの片。やはり、断面台形のタガとその下の区画の円孔の一部が確認できる。口縁部内面に横刷毛はなく、斜め方向に撫でられているのみである。189は口縁部から1段目のタガまでの片。口端部は外傾した平坦面をなすが、外端部をつまむように撫でるため、粘土が外側にはみ出している。タガ断面は中窪みのM字形、口縁部の内面にはB種横刷毛が施されている。190・191は口縁部片、外面を斜め方向の刷毛目、内面を横刷毛で調整されるものである。190の口端部は、189と同じく横撫でによる粘土のはみ出しがある。192~194は胴部片のうち、タガと透孔が確認できるもので、外面刷毛目の方向からすると、192が上から2段目のタガとその上位の透孔、193が上から2・3段目のタガと2段目区画の透孔、194が1・2段目のタガと2・3段目区画の透孔であると考えられる。部分的な破片のためわかりにくいだが、192・193の透孔の形状は隅丸方形になるものと思われる。195・196はタガ部の片で、透孔が確認できないものである。197~199は朝顔形の片、197が口縁部タガの部分で外面に縦刷毛、内面に横刷毛を施されている。198・199は肩部の片で、いずれも断面三角形のタガを頸部に持つ。200は直径13.2cmを測る底部片。外面の縦刷毛目は端部まで施されている。

石製品（図73）

石錘（201） 混入遺物と思われる打ち欠き石錘片。結晶片岩を素材としている。

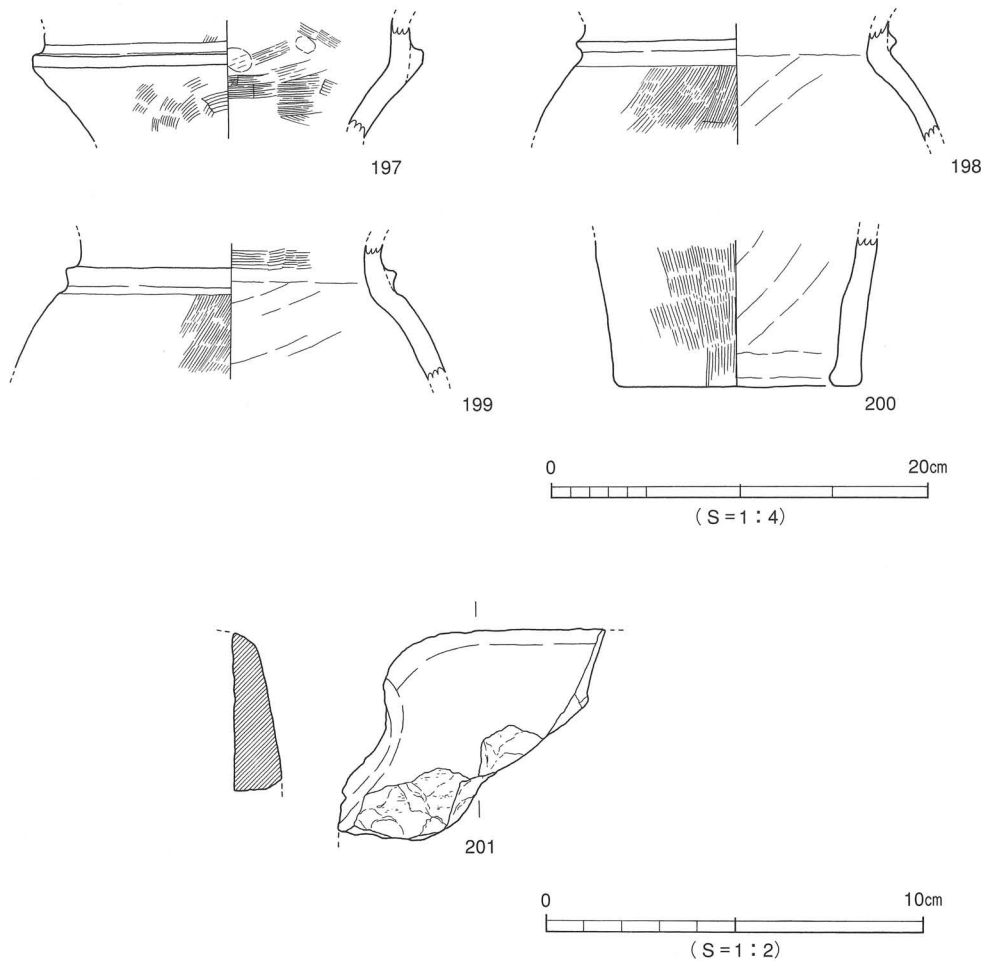


図73 G区2号周溝出土遺物(3)

c. 3号墳(図74)

この区で検出された古墳のうちでは最も良好な遺存状態の1基である。2号墳南の尾根上に位置し、現況で墳丘直径11.3m、周溝外側の差し渡しで15.5mを測る。周溝は北東から南西側にかけての残りがよく、最大幅3.5m、深さ0.35mを測る。埴輪片や須恵器片といった遺物もこの部分での出土がすべてである。

3号周溝出土遺物

須恵器(図75・76)

坏蓋(202~204) 202は有蓋高坏の蓋、天井部に直径3.5cmの中窪みのつまみを持つ。203は復元口径11.4cmになるもので、口縁部と天井部の境に稜を持つ。口端部は段をなし、天井部全面をヘラ削りされている。204も同形態の口縁部小片である。

坏身(205) 口縁部の小片。垂直に近く立ち上がる口縁部は、端部に段を持つ。

壺・甕(206~214) 206は口径15.3cmを測る口頸部で、やや外反しながら外上方に立ち上がった口縁部は、端部をつまみ上げるように上方に延ばしている。口端部直下に突帯を1条、その下位にも細い突帯を1条施し、頸部中位には1条の凹線を巡らせ、これらの施文間のスペースに櫛描波状文を描いている。207も同様の器型になるもので、口縁部直下と頸部中位のそれぞれ1条の突帯間のスペースに櫛描波状文を施文している。復元口径15.9cmを測る。208~211は無文のもの、208では口端部を

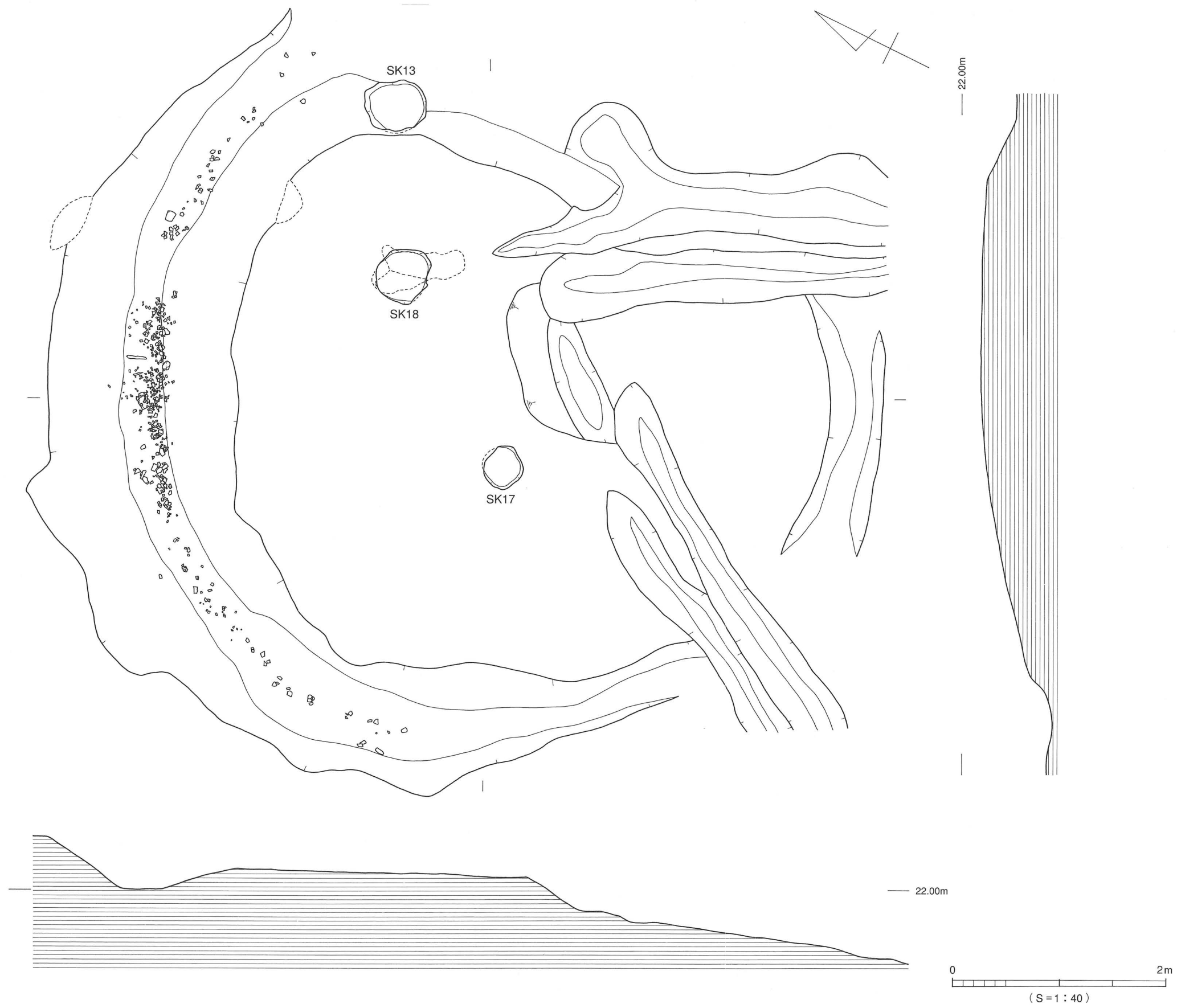


图74 G区3号周溝遺物出土狀況

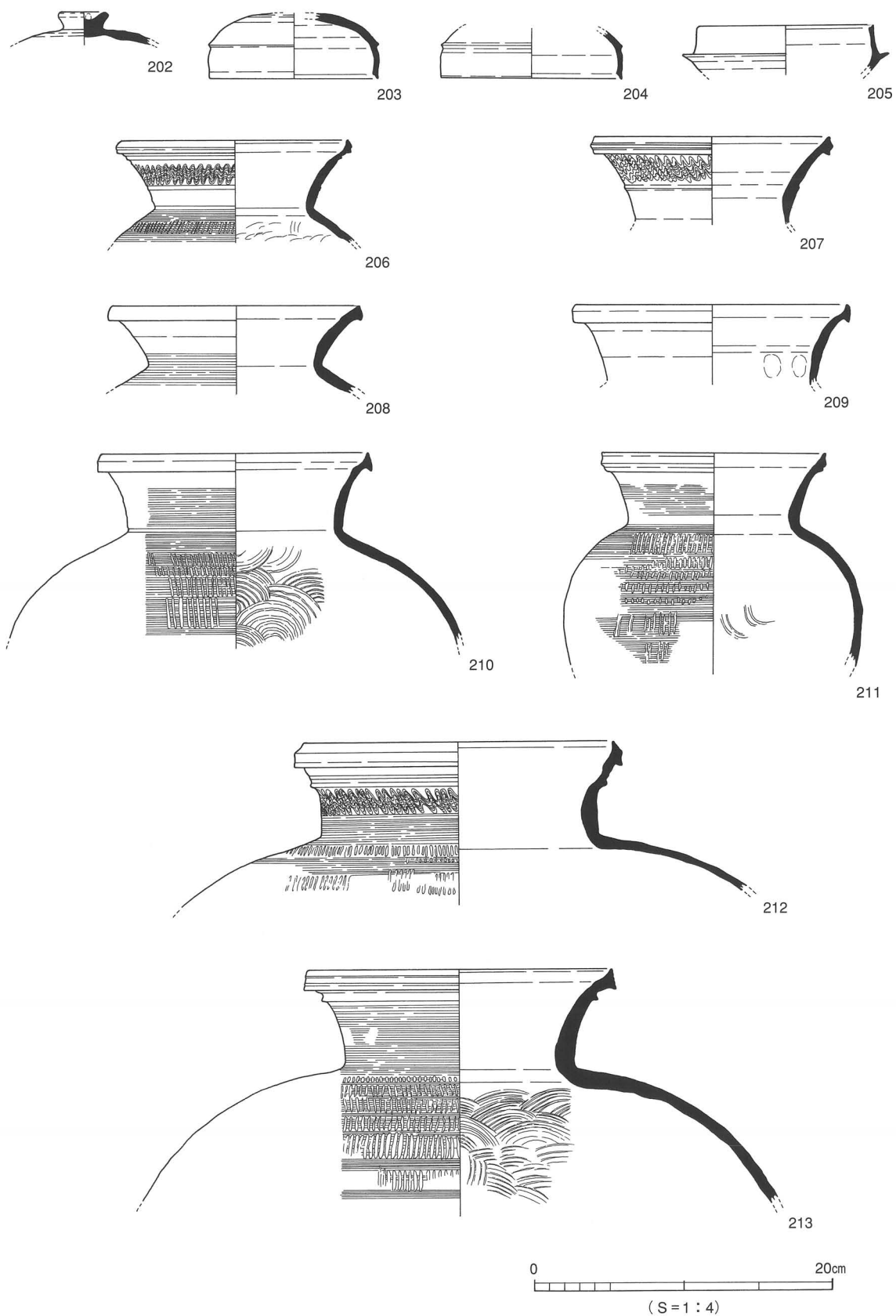


图75 G区3号周溝出土遺物(1)

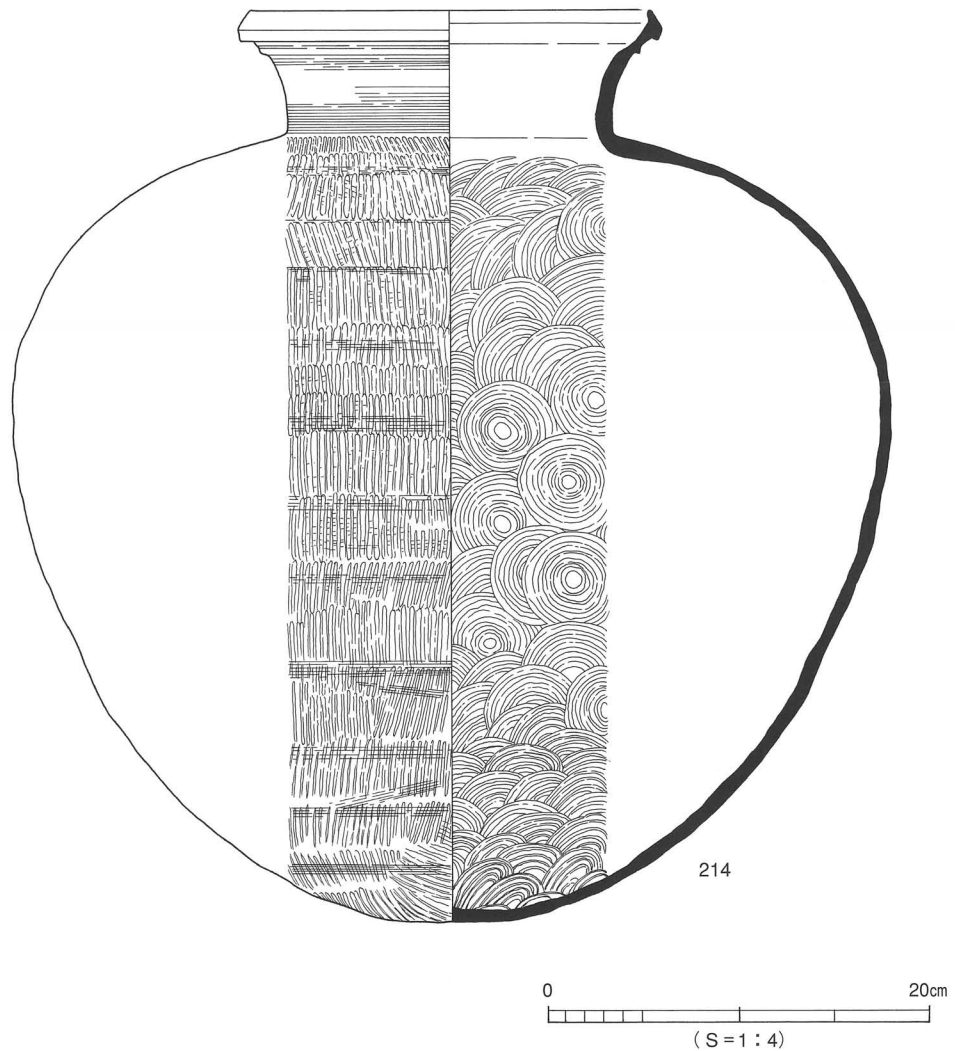


図76 G区3号周溝出土遺物(2)

下方に肥厚、209・210は口端部を上下に肥厚するものである。211は口径15.2cm、胴部最大径20.1cmを測る壺で、口端部直下に1条の突帯を持つ。胴部外面は叩きの後カキ目、頸部にもカキ目調整が施されている。胴部内面の当て具痕は撫で消されている。212～214は大型の甕である。212は口径20.9cmを測るもので、直立気味の短い頸部から短い口縁部が外上方に開く。口端部は外面に稜を持って上下に肥厚する。口縁部をやや下がった位置に断面三角形の突帯を1条回し、その直下に櫛描波状文を施す。胴部外面には叩きの後カキ目が施され、内面の当て具痕は撫で消されている。213は口径20.5cmを測るもの、外反気味に開く口縁部は端部を上下に拡張し、端面に浅い沈線を2条施している。口端部をやや下った位置に断面三角形の突帯が1条巡っている。胴部外面には叩きの後間隔をおいたカキ目が施され、また頸部もカキ目調整されている。214は器高48.3cm、口径21.1cm、胴部最大径46.2cmを測る。口縁部は外反して外上方に開き、端部を稜を持って上下に拡張する。口端部をやや下った位置に1条の突帯が巡っている。内外面の調整は213と同様である。

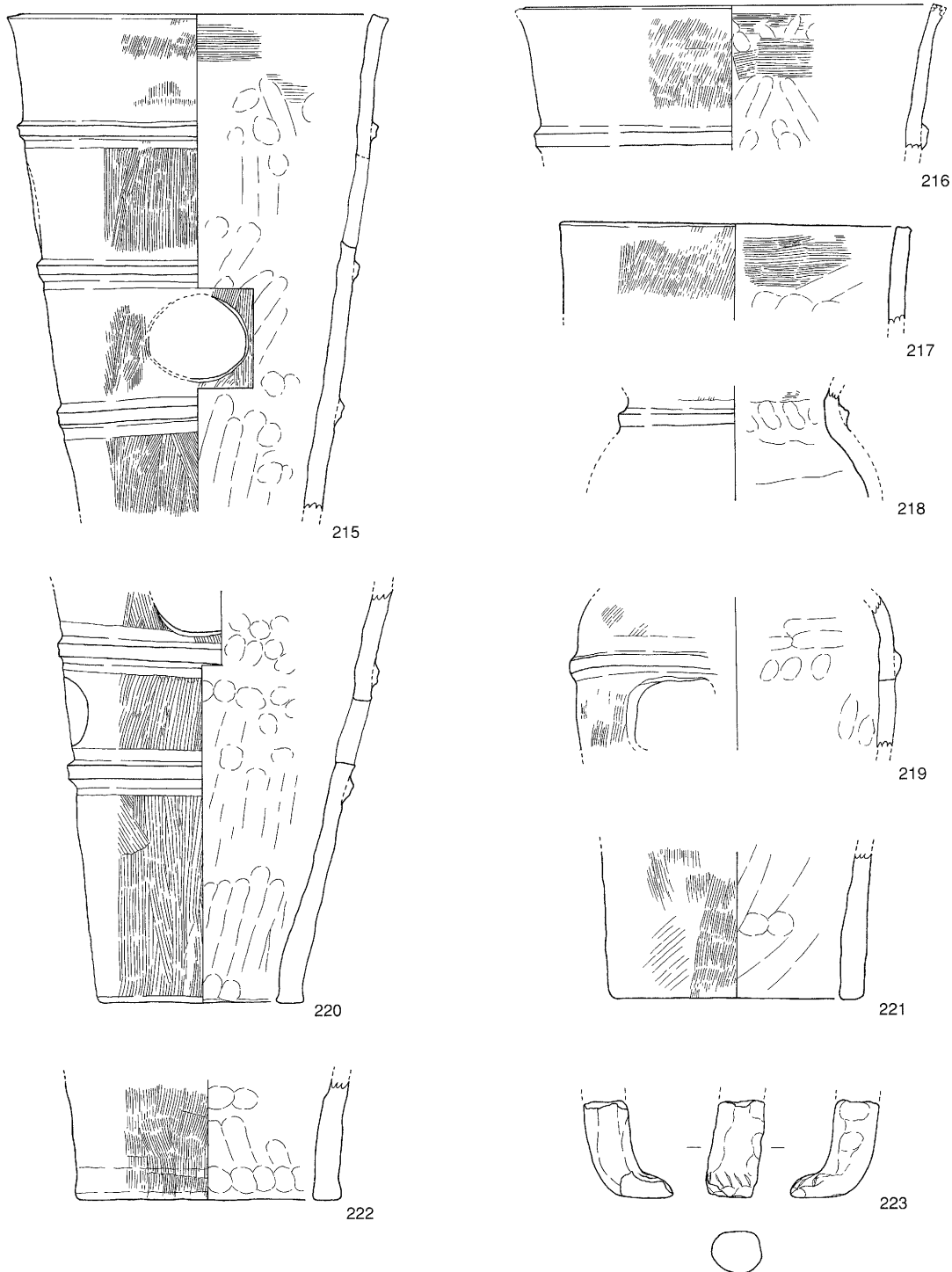


図77 G区3号周溝出土遺物(3)

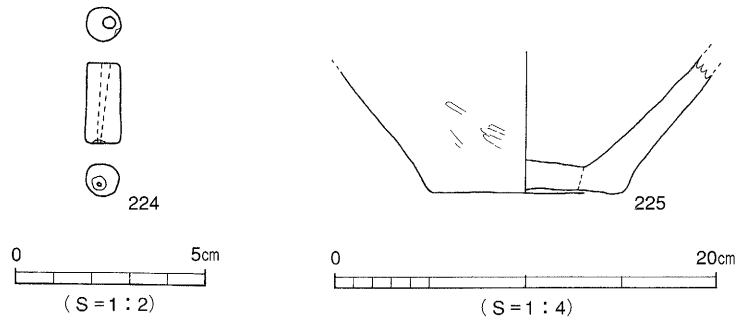


図78 G区3号周溝出土遺物(4)

埴輪(図77)

円筒・朝顔形埴輪(215~222) 215~217が普通円筒、218・219が朝顔、その他が底・胴部である。215は復元口径23.0cmになるもので、底部を欠く。口縁部は僅かに外反し、端面はやや外傾した平坦面をなす。タガ断面は中窪みの台形で、上から2段目、3段目の区画に直交配置の円孔を持つ。外面は縦刷毛目調整され、口縁部内面にはA種の横刷毛目がある。216・217は口縁部片、216は比較的薄手のつくりで口端部が僅かに外反している。タガの断面形は台形、外面に斜め方向の刷毛目、内面の上位に横刷毛が施されている。217の口端部は水平な平坦面をなす。内外面の調整は前二者と同様である。218は朝顔形の頸部で、断面三角形の突帯が巡っている。219は肩部タガの部分で、低い台形のタガ直下に隅丸方形と思われる透孔が一部確認できる。220は胴部~底部で、底径12.8cmを測る。基底部から2段目のタガと、2段目、3段目の透孔が確認できる。透孔の形状は楕円形となっている。外面の縦方向の刷毛目は底端部まで施されている。221・222は底部、それぞれ底径15.4cm、15.8cmを測る。

形象埴輪(223) 1号周溝出土の179と同形態のもので、人または獣の足と考えられるものである。沈線5本で6本指という点も同じである。ただし沈線の方向が、179とは対称的に正面からみて右にシフトしているので左足を表現したものであろう。

装身具(図78)

管玉(224) 碧玉製管玉、長さ2.1cm、直径0.85cm、重さ2.98gで、濃緑色の色調を呈する。片側からの穿孔によっている。

弥生土器(図78)

壺(225) 底径9.8cmを測る平底の壺底部、混入遺物と思われる。

d. 4号墳(図79)

3号墳の南12mの尾根上で検出された、長さ8m、幅3m、深さ0.1m程の浅い弧状の溝である。この溝以外の部分はほとんど破壊されているが、溝内から若干の埴輪片や図化した須恵器坏片の出土があったので古墳と判断した。

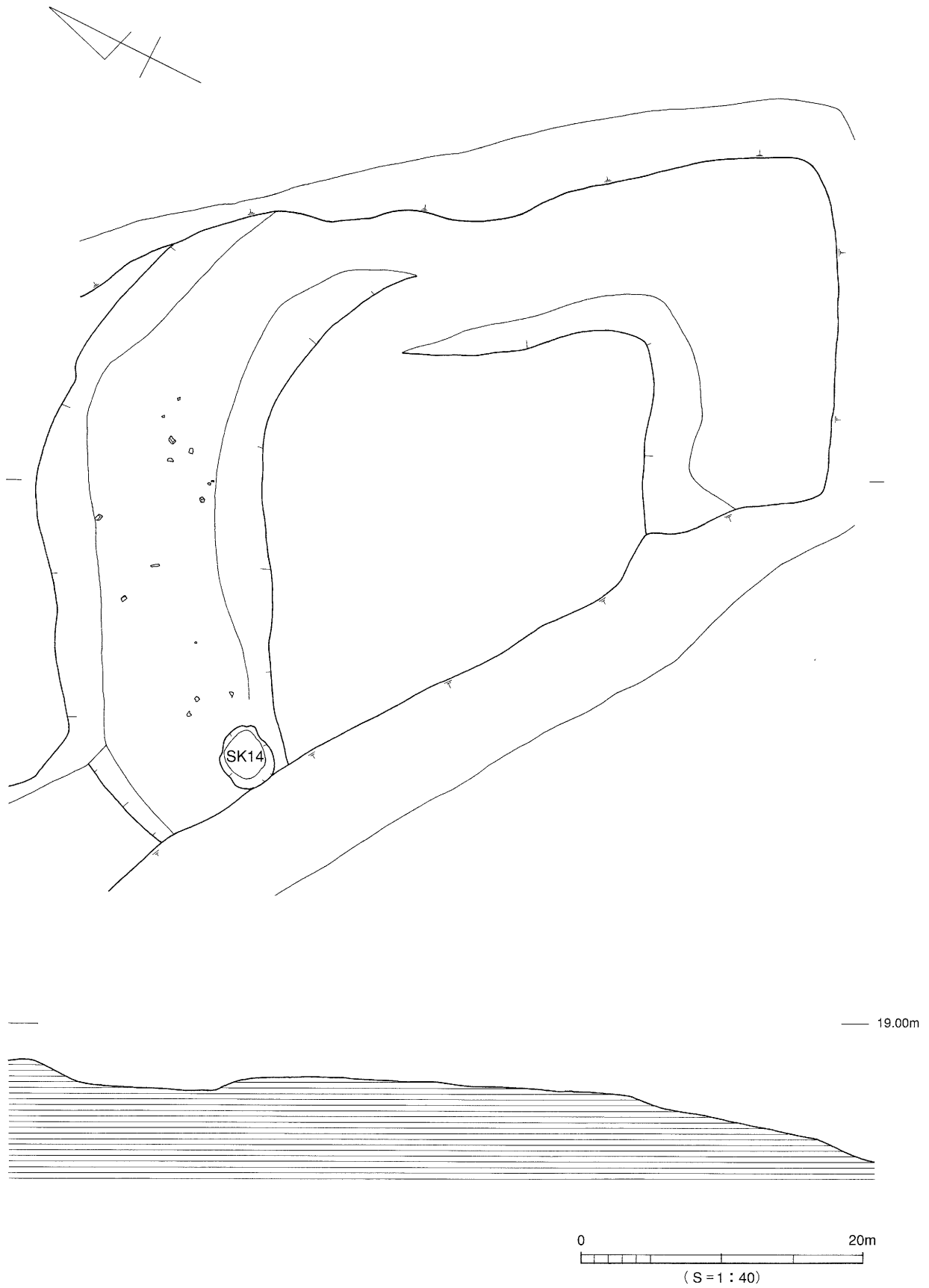


図79 G区4号周溝遺物出土状況

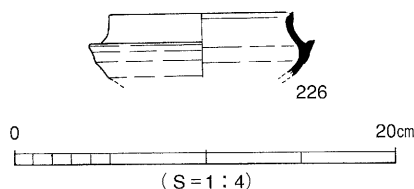


図80 G区4号周溝出土遺物

4号周溝出土遺物

須恵器 (図80)

坏身 (226) 復元口径9.7cmを測る片。強く外反しながら上方に立ち上がる口縁部は、端部に段を持っている。

f. G区採集遺物

須恵器 (図81)

坏蓋 (227・228) 両者ともに口縁部と天井部の境に稜を持つものである。227は器高4.3cm、口径12.9cm、口端部は斜めの面をなしている。天井部はその4/5程度の部分をヘラ削りされ、稜に近い部分は横撫でされている。稜は低く、鈍い。天井には細い1本線のヘラ記号がある。228は口径12.0cm、227に比べると天井が高く、稜は鋭い。口端部は段をなしている。

蓋 (229) 復元口径8.3cmを測る壺蓋。天井部に稜を有する段を持つ。段より上位の部分は回転ヘラ削りされている。

高坏 (230) 短脚の有蓋高坏の脚部片で、復元脚裾径9.1cmを測る。脚裾部に1条のシャープな突帯を持つ。脚柱部の長方形透かしは3方向に復元できる。

埴輪 (図81・82)

円筒・朝顔形埴輪 (231~243) 231~233は普通円筒の口縁部、いずれも内面の口端部付近にA種横刷毛を有するものである。234~238は朝顔。234は口縁部片、復元口径30.3cmになるものである。外面は縦刷毛、内面には横刷毛目で調整されている。235~237は口縁部タガの部分、235のタガはしっかりした稜を持ってやや下方に突出している。238は断面三角形のタガを持つ頸部片、タガの下位の部分は強く横撫でされている。239は胴部片、上位のタガの上下に直交配置の透孔が確認できるので、タガは上から2・3段目のものであることがわかる。240~243は底部片であるが、241の底面から内面に掛けて粘土板の接合痕が残っている。

形象埴輪 (244~247) 244は家の土台、方形のコーナー部分である。裾廻突帯はなく、厚さ0.8cmの粘土板で成形された床からダイレクトに壁が立ち上がる。基部は、コーナー部分に、壁面にあわせた高さ2.0cmの突起を設けて脚台としている。床の内面には指撫で痕が顕著である。245は囲いのコーナー部分か。平らな基底部分から壁状に立ち上がったところで欠損している。内面の弧状に湾曲したラインは生きており、丁寧に指撫でされている。246は人物の手足、もしくは獣足と思われるもので、1号や3号の179・223に似通った法量・形態をなすが、端部の形状が扁平になっていないところが異なる。器面の剥落のため、短沈線による指表現も確認できない。247は1号周溝出土の180と同形態の器種不明のもので、180にみられた粘土塊を貼り付けた瘤状の部分が欠損している。

鉄製品 (図83)

刀子 (248・249) 248は刀身基部と茎の一部の片、関はなく、また身幅が厚いのが特徴である。249は非常に小型のもの、茎を一部欠くが、現状で長さ6.9cm、刀身の最大幅0.8cmを測る。

鋌 (250) 全長3.2cmの金具で、かしめられた両端の間2cmの部分に木質が一部みられる。木目の方向は金具に直交している。

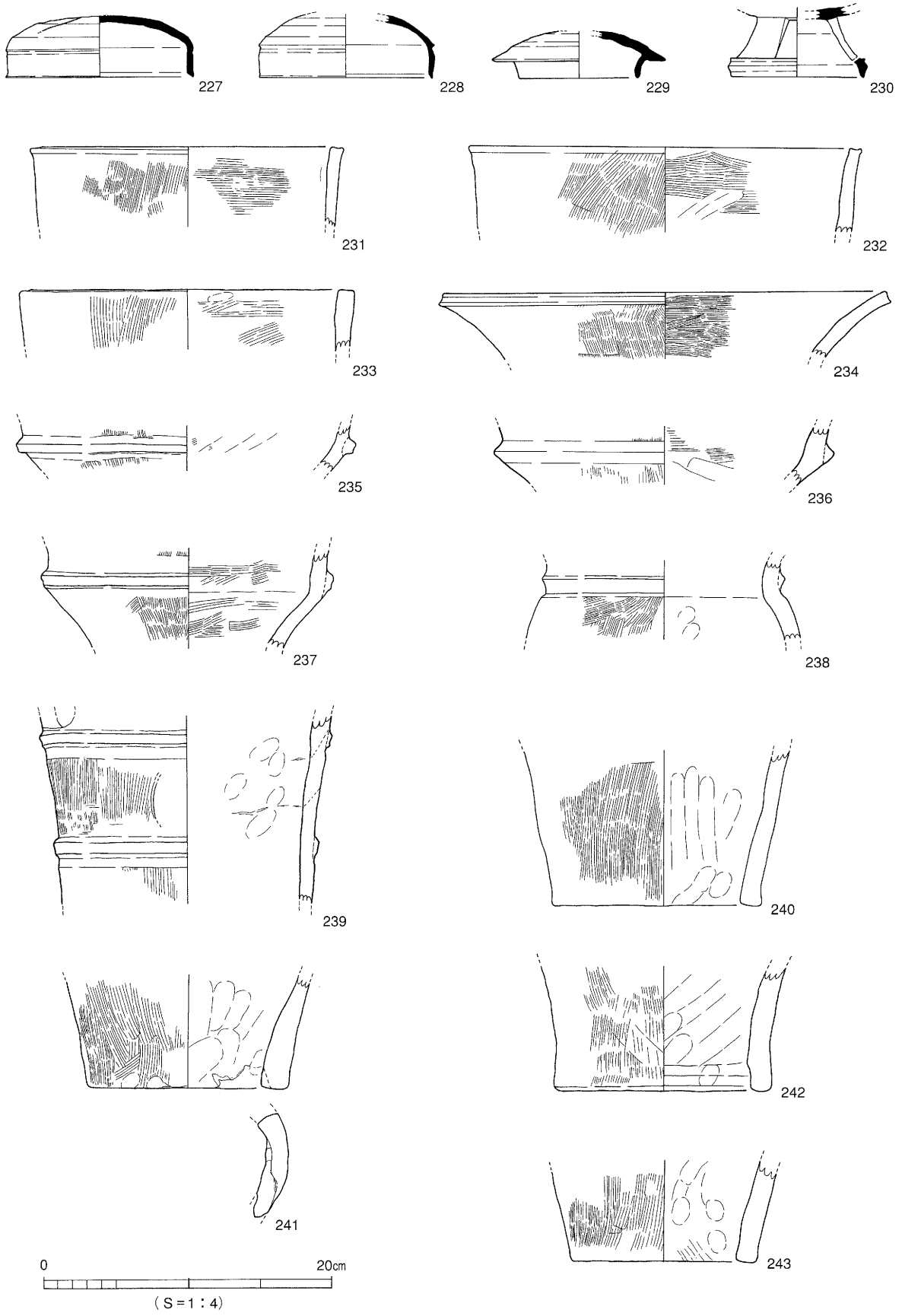


図81 G区出土古墳時代遺物(1)

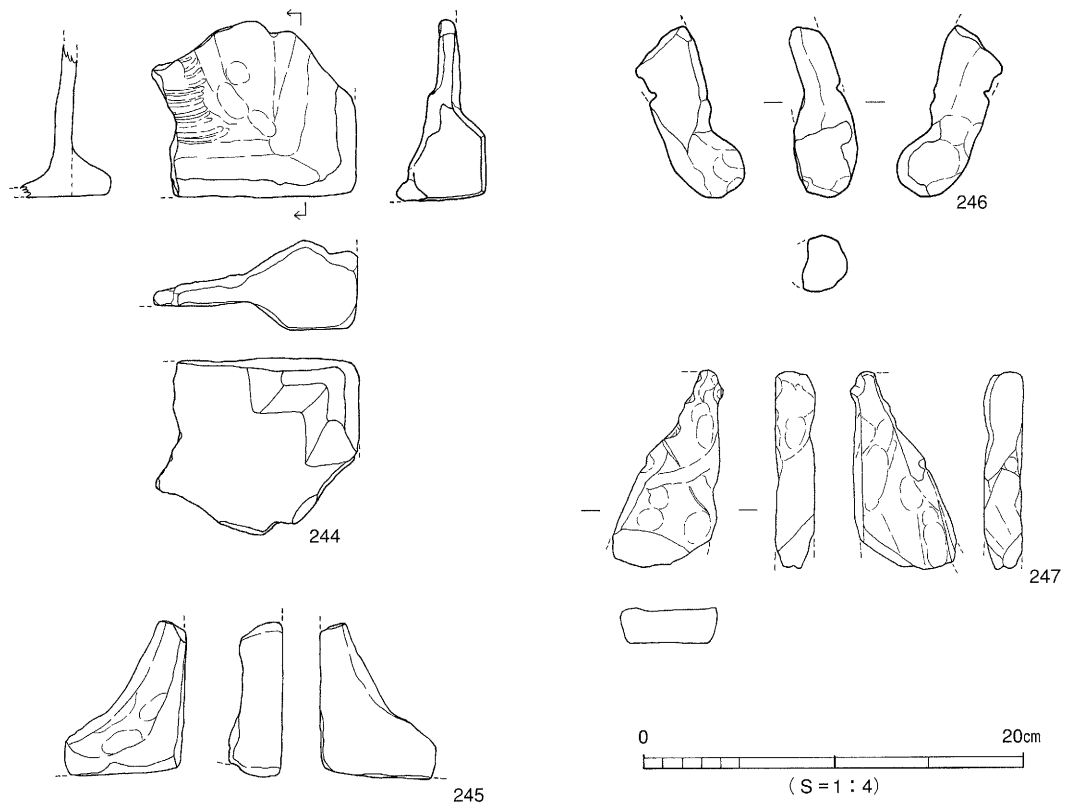


図82 G区出土古墳時代遺物（2）

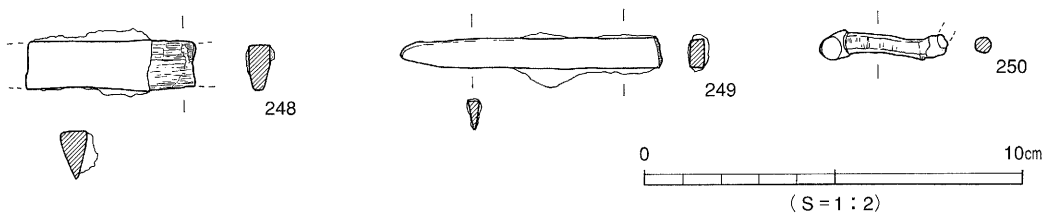


図83 G区出土古墳時代遺物（3）

遺物観察表

出土遺物について、観察および計測値一覧表を作成した。番号は本文中の通し番号に対応している。なお、観察表の各項目においては、以下のような略記を使用している。

法量欄 () : 推定復元値

調整欄 口-口縁部、頸-頸部、胴-胴部、胴上-胴部上半、胴下-胴部下半、底-底部、天-天井部

胎土・焼成欄 長-長石、石-石英、(数値)-鉱物粒の大きさ(mm)、◎-焼成良好、○-焼成やや良、△-焼成不良

表1 B区 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
1	坏蓋	つまみ径2.8 残高3.4	有蓋高坏の蓋。 中窪みのつまみを持つ。	㊦回転ヘラケズリ ㊧回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰色	含細砂粒 ◎		25
2	坏蓋	口径(12.8) 残高3.1	口縁部片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	含細砂粒 ◎		25
3	坏蓋	口径(14.6) 残高4.9	端部を丸く収める外開きの口縁部と天井部の境に稜を持つ。	㊦回転ヘラケズリ ㊧回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1~2) ◎		25
4	坏身	受部径(15.7) 残高3.2	短くのびる受部。	㊧回転ナデ ㊦回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		25
5	甕	口径(24.7) 残高5.8	外反する口縁部の端部は肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	長(1) ◎		25
6	埴輪	底径(11.6) 残高10.9	底部片。	ナデ	ナデ(指頭痕)	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1~2) ◎		25
7	埴輪	残高7.1	小片。タガ1条と円孔を施す。	ハケ(4本/cm)	ナデ(指頭痕)	橙 橙色	石・長(1) ◎		25

表2 C2号墳 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
8	広口壺	口径(15.4) 器高19.9	外反する口縁の端部を上下に拡張する。球型の体部。	㊧回転ナデ ㊨カキ目→ヨコナデ ㊩タタキ→カキ目	㊧回転ナデ ㊨タタキ	灰色 灰色	長(1) ◎		25

表3 C区 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面/内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
9	高坏	裾部径(9.6) 残高5.4	脚部片。凹線が1条巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~2) ◎		
10	壺	口径(14.8) 残高5.1	外反する口縁端部は、上方につまみ上げている。	㊧回転ナデ ㊨カキ目	回転ナデ	灰色 灰色	長(1~2) ◎		

表4 D区 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
11	坏蓋	口径(12.3) 残高4.1	口縁部と天井境に稜を持つ。 口縁部に段を持つ。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ◎		26
12	坏蓋	口径(14.6) 残高3.8	口縁部と天井境に稜を持つ。 口縁部に段を持つ。	㊸回転ヘラケズリ ㊹回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	含細砂粒 ◎		26
13	坏蓋	口径(14.0) 残高2.9	口縁部と天井境に稜を持つ。 口縁部に段を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	長(1~2) ◎		26
14	坏蓋	口径(15.0) 残高3.8	口縁部と天井境に沈線を施す。 口縁部は平坦な面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	長(2) ◎		26
15	坏身	口径(11.4) 残高3.9	内上方に長めの口縁部。 口端部に段を持つ。	㊹回転ナデ ㊸回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 灰白色	長(1) ◎		26
16	坏身	口径(11.6) 残高3.2	外反する短い口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ◎		
17	壺・甕	口径(16.2) 残高2.7	口端部外面を下方に肥厚する。 口端部に沈線1条施す。	㊹回転ナデ ㊸タケキ回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ◎		26
18	壺・甕	口径(18.1) 残高4.1	口端部外面を下方に肥厚する。 口端部に沈線1条施す。	㊹回転ナデ ㊸カキ目	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ◎		26
19	壺・甕	口径(16.7) 残高5.0	口端部を断面三角形に肥厚し、 1条の沈線を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ◎		26
20	壺・甕	口径(21.0) 残高5.7	口端部の内外面に断面方形の 肥厚帯を持ち、口端面を平坦 におさめる。	㊹回転ナデ ㊸カキ目	回転ナデ	灰オリブ色 灰オリブ色	長(1) ◎	外内面に 釉付着	26
21	壺・甕	口径(20.0) 残高5.5	あまり開かない頸部。 口端部は薄い。	㊹回転ナデ ㊸カキ目	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ◎	外内共に 釉付着	26
22	壺・甕	底径(9.9) 残高4.3	底部。外上方に直線的に立ち 上がる体部。	回転ナデ (指頭痕)	回転ナデ (指頭痕)	灰白色 灰白色	長(1) ◎		
23	高坏	底径(13.0) 残高1.4	短脚有蓋高杯の脚裾端部片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰 色	長(1) ◎		
24	埴輪	残高5.5	朝顔形。口縁部片。	ナデ→ハケ	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	砂粒 赤色酸化土粒 ◎		26
25	埴輪	残高5.4	朝顔形。受部タガ付近の片。	ナ デ	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	赤色酸化土粒 ◎		26
26	埴輪	残高6.7	須恵質。円孔を施す。	ナ デ ハケ(11本/cm)	ナデ(指頭痕)	褐灰色 褐灰色	砂粒 ◎		26
27	埴輪	残高7.5	小片。タガ1条と円孔を施す。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	砂粒 ◎		26
28	埴輪	残高6.8	小片。タガ1条と円孔を施す。	ハ ケ ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	砂粒 赤色酸化土粒 金ウソモ ◎		26
29	埴輪	残高11.3	須恵質。タガ1条。	ハケ(5本/cm)	ナデ(指頭痕)	褐灰色 にぶい褐色	石・長(1) ◎		26
30	埴輪	残高11.6	底部片。タガ1条と円孔を施 す。	ハケ(5本/cm)	ナデ(指頭痕)	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1) ◎		26

表5 D区 出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質・色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
31	勾玉	未製品	滑石・淡緑灰色	2.7	1.0		4.99		25

表6 D区 出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質・色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
32	煙管	完形	銅・オリーブ灰色	17.1	1.15	0.7	15.47		

表7 D区 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
33	石錘	未製品	緑泥片岩	10.5	8.6	1.8	282.2		25
34	石斧	未製品	緑泥片岩	8.0	5.2	3.2	209.2		25

表8 E区1号墳 出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質・色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
35	鉄鍬		鉄・褐色	12.4	0.9	0.8	17.9		27
36	不明		鉄・褐色	9.0	7.6	0.5	11.59	馬具?	27

表9 E区1号墳 出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質・色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
37	勾玉	尾部欠損	水晶・半透明色	1.90	0.90	上下 0.11 0.30	2.88		27
38	算盤玉	完形	水晶・半透明色	0.62	1.43	上下 0.25 0.10	1.70		27
39	算盤玉	一部欠損	水晶・半透明色	0.79	1.00	上下 0.30 0.15	0.82		27
40	管玉	完形	碧玉・濃緑色	3.11	1.04	上下 0.35 0.10	6.48		27
41	管玉	完形	碧玉・濃緑色	3.10	1.02	上下 0.3 0.11	6.29		27
42	管玉	完形	碧玉・濃緑色	2.61	0.85	上下 0.31 0.10	3.45		27
43	管玉	一部欠損	碧玉・濃緑色	2.48	0.90	上下 0.30 0.10	3.38		27
44	管玉	完形	碧玉・濃緑色	2.43	0.88	上下 0.30 0.15	3.39		27
45	管玉	完形	碧玉・濃緑色	2.30	0.82	上下 0.40 0.11	2.57		27
46	管玉	完形	碧玉・濃緑色	1.93	0.72	上下 0.25 0.10	1.86		27
47	管玉	完形	碧玉・濃緑色	2.00	0.69	上下 0.30 0.15	1.67		27
48	管玉	完形	碧玉・濃緑色	1.45	0.76	上下 0.30 0.10	1.49		27
49	管玉	完形	碧玉・淡緑灰色	2.38	0.69	上下 0.25 0.30	1.41		27
50	管玉	完形	碧玉・淡緑灰色	2.03	0.63	上下 0.30 0.10	0.98		27
51	管玉	完形	碧玉・淡緑灰色	1.88	0.68	上下 0.20 0.30	1.29		27
52	管玉	完形	碧玉・淡緑灰色	1.86	0.63	上下 0.20 0.10	0.98		27
53	管玉	完形	碧玉・淡緑灰色	1.69	0.67	上下 0.30 0.10	1.14		27
54	管玉	一部欠損	碧玉・淡緑灰色	1.10	0.59	上下 0.20 0.10	0.51		27

番号	器種	残存	材質・色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
55	丸玉	完形	ガラス・濃紺色	0.39	0.60	0.10	0.157		27
56	丸玉	一部欠損	ガラス・濃紺色	0.35	0.59	0.20	0.146		27
57	丸玉	完形	ガラス・緑青色	0.47	0.52	上 0.25 下 0.20	0.153		27
58	丸玉	完形	ガラス・緑青色	0.44	0.50	0.25	0.12		27
59	丸玉	一部欠損	ガラス・濃紺色	0.33	0.50	0.20	0.101		27
60	粟玉	完形	ガラス・濃紺色	0.18	0.30	上 0.08 下 0.80	0.019		27
61	粟玉	完形	ガラス・濃紺色	0.12	0.25	0.10	0.012		27
62	粟玉	完形	ガラス・濃紺色	0.12	0.24	0.10	0.008		27
63	粟玉	完形	ガラス・濃紺色	0.14	0.26	0.10	0.013		27
64	粟玉	一部欠損	ガラス・濃紺色	0.15	0.27	0.10	0.015		27

表10 E 2号墳 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
65	高坏	口径12.4 残高4.3	無蓋高坏で、口縁部は歪んでいる。	㊶ 回転ナデ (坏底)回転ナデ	㊶ 回転ナデ (坏底)ナ デ	灰 色 灰 色	長(1~2) ◎	烧歪	27
66	高坏	口径12.9 残高4.9	無蓋高坏で、口縁部はかなり歪んでいる。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ◎	烧歪	27
67	高坏	口径10.6 残高7.8	坏部に短いめの脚が付される。	回転ナデ	回転ナデ	浅黄色 浅黄色	密石(1) ◎	自然釉	27
68	長頸壺	口径9.7 底径9.2 器高23.5	台付長頸壺。偏球状の胴部から、ラッパ状に開く口頸部が立ち上がる。肩部に2条平行の短い直線にヘラ記号を施す。	㊶ 回転ナデ (胴下)タタキ→横ナデ ㊷ 回転ナデ	回転ナデ	灰白色・灰色 灰白色	石・長(1~3) ◎	自然釉	27

表11 E 2号墳 出土遺物観察表 金属製品

番号	器種	残存	材質・色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
69	釘		鉄・褐色	3.6	1.48	1.0	5.42		27
70	釘		鉄・褐色	3.9	0.8	0.83	3.25		27
71	釘		鉄・褐色	7.15	0.9	0.74	8.61		27
72	釘		鉄・褐色	2.85	0.65	0.61	2.14		27
73	釘		鉄・褐色	1.35	0.8	0.52	0.63		27
74	釘		鉄・褐色	5.6	0.65	0.61	3.42		27
75	釘		鉄・褐色	8.43	0.83	0.65	7.49		27

表12 G区SK2 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
76	壺	口径16.4 底径9.1 器高32.0	短い頸部に、安定のよい平底。胴部中位に6条の沈線があり上下に刺突文を施す。口端部に刻み目。	㊶ 胴上 ミガキ ㊷ 胴下 ハケメ→ミガキ	㊶ マメツ ㊷ ミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石(1~3) ◎	黒斑	28
77	壺	底径(9.4) 残高5.8	平底の底部。	㊸ ミガキ (底面)ナ デ	指頭痕→ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1~2) ○		

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
78	甕	口径(17.8) 残高10.9	胴部に張りを持たず、水平に開く貼り付け口縁。	㊦ヨコナデ ㊧マメツ	ミガキ	明黄褐色 浅黄橙色	石・長(1~3) ウンモ ◎		28
79	甕	口径(18.4) 底径5.8 器高23.1	平底。張りを持たない胴部に短く水平に開く貼り付け口縁。	㊦マメツ ㊧ミガキ ㊨ナデ	指頭痕→ナデ	橙 色 色	石(1~3) ◎	黒斑	28

表13 G区 SK 4 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
80	壺	底径(9.2) 残高25.0	平底。	ミガキ	ミガキ	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1~4) ◎	黒斑	28
81	壺	口径(5.6) 底径(4.6) 器高10.6	無頸壺。口縁やや下位に円孔2個(φ0.5cm)。上げ底。	ミガキ	ナデ	橙黄褐色 橙黄褐色	石・長(1~2) ◎		28
82	壺	底径11.8 残高6.9	厚みのある平底。	ハケ→ナデ	指頭痕→ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1~3) ◎		
83	壺	底径7.0 残高6.5	やや上げ底。	㊧ミガキ ㊨指頭痕→ナデ	ミガキ	橙 色 色	石・長(1~4) ◎		

表14 G区 SK 5 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
84	甕	口径20.3 底径7.1 器高23.5~22.2	口縁端面に刻み目。口縁下にヘラ描沈線4条+連続山形文+ヘラ描沈線5条+連続山形文+ヘラ描沈線4条。	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ ㊨ナデ	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ ㊨ナデ	褐色・橙 色 色	石(1~3) ◎	黒斑	29
85	甕	口径(21.4) 残高6.5	口縁端面に刻み目。口縁下にヘラ描沈線7条+刺突文2段。	ナデ・ミガキ	ナデ	橙 色 色	石(1) ◎		
86	壺	残高21.1	偏球形に張る胴部片。	ミガキ	指頭痕→ミガキ	にぶい黄 橙 色 浅黄 橙 色	石(1) ○	黒斑	
87	壺	口径(18.6) 底径(7.0) 器高26.5	大きく外反する口縁。頸部は筒状。口縁部と頸部の境内面に注口状の突帯。	㊦マメツ ㊧ミガキ ㊨指頭痕→ナデ	㊦指頭痕→ミガキ ㊧ナデ	にぶい黄 橙 色 明黄 褐 色	石(1~3) ◎	黒斑	29
88	壺	底径7.4 残高28.5	口縁部と頸部の境内面に刻み目の突帯。外面頸部に8状、肩部に4条胴部に6状の沈線。	ミガキ	ナデ	黄褐色 黄 色	石・長(1~3) ウンモ ◎		29

表15 G区 SK 5 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
89	擦り石	完存	凝灰岩	10.1	6.4	4.6	402.5		29

表16 G区 SK 6 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
90	甕	口径(22.6) 残高17.2	折り曲げ口縁。無文。	㊦ヨコナデ ㊧ミガキ	㊦指頭痕 →ミガキ ㊧指頭痕→ナデ	橙 色 色	石(1~2) ◎	黒斑	28

表17 G区SK7 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
91	鉢	残高11.0	大型品。口縁は大きく開く。	ミガキ	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1~3) ◎		31
92	甕	口径(20.6) 残高15.7	断面三角形の貼付口縁。	㊦ ヨコナデ ㊧上 ミガキ・ナデ ㊧下 ミガキ	指頭痕→ナデ	明黄褐色 褐灰色 にぶい黄褐色	石・長(1~3) ◎		
93	甕	口径(23.6) 残高5.4	折り曲げ口縁。口縁端面下端に刻み目。口縁下にヘラ描沈線8条+刺突文1段まで確認できる。	㊦ 指頭痕 ㊧ ナデ	ミガキ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~2) ◎		31
94	甕	残高8.9	胴部片。ヘラ描沈線1条以上+刺突文2段+ヘラ描沈線3条+刺突文1段+ヘラ描沈線4条+刺突文1段。	ハケ→ミガキ	ナデ	にぶい黄褐色 明黄褐色	石・長(1) ◎	黒斑	31
95	壺	口径(11.6) 残高11.3	貝殻施文の無頸壺片。	ミガキ	ミガキ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	密・石・長(1) ◎		31
96	壺	底径(8.4) 残高5.2	平底。	マメツ	ナデ?	黄褐色 明黄褐色	石・長(1~2) ○		
97	壺	底径(7.0) 残高3.4	平底。	ミガキ	ナデ	にぶい褐色 にぶい黄褐色	石・長(1~2) ◎		
98	壺	底径(6.6) 残高3.1	厚みのある平底。	㊧ ミガキ ㊧底 ナデ	指頭痕→ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1~2) ◎		

表18 G区SK8 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
99	鉢	底径7.4 残高11.8	短く外反する口縁。平底。	マメツ	ミガキ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長(1) ○		30
100	鉢	口径(21.6) 残高8.4	口縁端面は面をなす。端部下端に刻み目。	ミガキ	マメツ	淡赤橙色 淡橙色	石・長(1~3) ○		30
101	甕	残高11.8	折り曲げ口縁。	マメツ	ミガキ	赤褐色 黄色	石・長(1) ○		
102	甕	口径(21.2) 残高7.9	折り曲げ口縁。口縁端面に刻み目。口縁下にヘラ描沈線11条+刺突文。	㊦ 横ナデ ㊧ ナデ	㊦ 横ナデ ㊧ ミガキ	黄色 明赤褐色	石・長(1) ◎	煤付着	
103	甕	口径(18.8) 底径7.2 器高(20.0)	口縁端部は丸味を持つ。端面に刻み目。口縁下にヘラ描沈線6条+刺突文2段。平底。	ミガキ	ナデ	黄褐色 暗褐色	石・長(1~5) ○		30
104	甕	口径(21.6) 底径7.0 器高(24.6)	短く水平に開く口縁。口縁下にヘラ描沈線8条+刺突文1段。平底。	㊦ ヨコナデ ㊧ 指頭痕→ミガキ ㊧底 ミガキ	㊦ ヨコナデ ㊧ ミガキ ㊧底 ナデ	黄褐色 浅黄褐色	石・長(1~7) ○		30
105	甕	口径21.0 底径6.0 器高21.1~22.9	口縁端部は面をなし、端部上下に刻み目。口縁下にヘラ描沈線8条+刺突文2段+ヘラ描沈線6条+刺突文1段。	㊦ マメツ ㊧底 ミガキ	㊦ ミガキ ㊧底 ナデ	明褐色 オリーブ黄色	石・長(1) ◎	煤付着	30
106	壺	底径6.8 残高9.0	平底。	ナデ	㊧ ミガキ ㊧ 指頭痕→ナデ	淡黄色 黄褐色	石・長(1~2) ◎		
107	壺	底径10.0 残高10.9	丸みのある胴部。平底。	ミガキ	㊧ ミガキ ㊧底 ナデ	橙色 明赤褐色	石・長(1) ◎		
108	投弾	直径6.0	不整球形。	指頭痕		褐色 褐色	石・長(1) ◎	重さ 19.09g	30

表19 G区SK9 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
109	壺	口径(14.0) 残高12.2	口縁部は外上方に開く。口縁部は平坦面をなし、その下端部に押圧による刻みを持つ。	㊦ハケ(5本/cm) (頸・胴上)ミガキ	㊦ミガキ (頸・胴上)ナデ	明黄褐色 にぶい黄褐色	石・長(2) ウンモ ○		30
110	壺	底径7.9 残高14.6	平底。	㊦ミガキ ㊦マメツ	㊦底ミガキ	褐色にぶい黄褐色 にぶい褐色 褐色	石(2) ◎		30
111	壺	底径(7.8) 残高9.6	平底。	㊦マメツ (胴下)ハケ(6本/cm) ㊦指頭痕→ナデ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長(3) ○	黒斑	
112	壺	底径(8.2) 残高7.2	平底。	㊦ミガキ ㊦ナデ	ミガキ	橙 色 にぶい褐色	石・長(2) ◎		
113	壺	底径11.2 残高5.1	平底。	マメツ	指頭痕→ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石・長(3) ○		
114	壺	底径8.8 残高22.1	張りのある胴部。平底。	㊦ミガキのちナデ ㊦ナデ	ナデ(指頭圧痕)	にぶい褐色 明黄褐色	石(4) ○	黒斑	
115	甕	口径(30.4) 残高9.4	口縁部貼り付けによる無文の甕。水平に開口口縁部。	㊦頸ヨコナデ ㊦ハケ(7本/cm)	指頭痕→ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石(3) ウンモ ◎		
116	甕	底径6.3 残高4.3	平底。	㊦ミガキ ㊦底面ナデ	指頭痕→ナデ	明黄褐色 明黄褐色	石(5) ◎		

表20 G区SK9 出土遺物観察表 石製品

番号	器 種	残 存	材 質	法 量				備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)		
117	敲石		砂岩	9.8	9.2	7.3	1005	擦り石として利用	30

表21 G区SK10 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
118	壺	口径(18.6) 残高7.6	短く開口口縁。端部は面をなす。頸部にヘラ描沈線6条。	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	石・長(1~2) ○		31
119	壺	底径11.2 残高28.7	やや上げ底。大型品。	㊦底ミガキ ㊦底面ナデ	ミガキ	にぶい黄褐色	長(1) ◎		31
120	甕	残高6.6	胴部片。刺突文+沈線3条が3段以上確認できる。	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 橙 色	石・長(1~2) ◎		31
121	甕	底径(5.4) 残高3.5	平底。	㊦ミガキ ㊦底面ナデ	指頭痕→ナデ	橙 色 にぶい褐色	石(1~2) ◎		
122	甕	底径4.8 残高3.4	平底。	㊦ミガキ ㊦底面ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	石(1~3) ◎		
123	甕	底径(7.0) 残高4.5	平底。	㊦ミガキ ㊦底面ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	石(1) ◎		

表22 G区SK11 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
124	石斧	欠損	緑泥片岩	(2.9)	(2.5)	(1.1)	(9.16)		

表23 G区SK12 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
125	壺	口径(25.0) 残存高2.1	口縁端部へラ描沈線1条巡らせた後、縦方向に刻み目。	ヨコナデ	ミガキ	にぶい黄橙色 にぶい黄褐色	石・長(1) ◎		32
126	壺	口径(17.2) 残存高4.0	短頸壺。外反する口縁部。頸部と口縁部の境に刺突列点文を施す。	ミガキ	ミガキ	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1) ◎		32
127	甕	口径(15.8) 残存高8.1	折り曲げ口縁。端部は丸みを持ち刻み目を施されている。	ハケ(5本/cm)	ミガキ	橙 色 橙 色	石・長(1~3) ◎		32
128	甕	口径(36.3) 残存高36.8	貼り付け口縁。胴部上位に三角形の刺突文が1状巡っている。	①指頭痕→ナデ ②ハケ(5本/cm)→ミガキ ③ミガキ	①指頭痕→ミガキ ②(無)ミガキ	橙 色 橙 色	石・長(1~3) ◎		32

表24 G区SK15 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
129	壺	口径(19.2) 残高1.9	口縁端部は、丸みを持ち、刻み目を施している。	①(口端)ナデ ハケメ	ミガキ	橙 色 橙 色	石・長(1) ◎		
130	壺	残高3.2	有文壺の肩部片。3本の直線文の上に、木葉文が描かれている。	ミガキ	ミガキ	黄橙色 灰白色	石・長(1~2) ウンモ ◎		32
131	甕	底径(7.6) 残高4.3	平底の底部。	②ナデ	ナデ	浅黄橙色 黄橙色	石・長(1~2) ◎		
132	甕	口径(25.8) 底径7.8 器高32.3	胴部上位に、上から直線文、波状文刺突文が巡らせている。	①(口端)ヨコナデ ②(肩上)ハケメ ③(胴下)ミガキ ④(底面)ナデ	①(胴上)ミガキ ②(胴下)ナデ	橙色、灰黄褐色 黄橙色	石・長(1) ウンモ ◎		32

表25 G区SK15 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
133	石鏃	完形	サヌカイト	1.4	1.3	0.25	0.40		32
134	石鏃	完形	サヌカイト	2.2	1.5	0.25	0.84		32

表26 G区SK16 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
135	壺	残高5.8	口頸部片。内面突帯を施し、頸部外面に沈線1条。	ハケ→ミガキ	① ミガキ ② ナデ	淡黄色 橙 色	石・長(1~2) ◎		
136	壺	残高2.9	肩部片。半裁竹管文による沈線と山形文。	ハ ケ	ミガキ	黒色 浅黄色	石(1) ◎		29

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
137	壺	残高3.0	肩部片。半裁竹管による沈線と山形文。	ナ デ	ナ デ	橙 橙 色 色	長(1) ◎		29
138	壺	残高2.8	肩部片。半裁竹管による沈線と山形文。	ナ デ	ナ デ	橙 橙 色 色	長(1) ◎		29
139	甕	口径(22.8) 残高7.0	水平な折り曲げ口縁。	㊦ナ デ ㊧ハケ(8本/cm)	㊦ミガキ ㊧指頭痕→ナデ	橙 橙 色 色	石・長(1~2) ◎		29

表27 G区SK17 出土遺物観察表 土製品

ミガキ

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
140	壺	口径(17.4) 残高11.3	筒形の短い頸部から外反する口縁。頸部に3条の沈線。	㊦ナ デ ㊧ハケ→ナデ ㊨ミガキ	ミガキ ㊨指頭痕→ナデ	明黄褐色 橙 色 色	石・長(1) ◎		29
141	甕	底径(6.8) 残高12.6	くびれを持ち、やや上げ底。	ミガキ 底面ナ デ	ミガキ 底ナ デ	にぶい 暗赤 色 色	含細砂粒 ◎		29
142	甕	底径(6.6) 残高5.8	平底。	ミガキ 底面ナ デ	ナ デ	にぶい 橙 色 色	石(1) ◎		

表28 G区SK18 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
143	甕	口径(21.4) 残高25.3	貼り付け口縁。端面に刻み目。口縁下にヘラ描沈線10条+刺突文。	㊦ナ デ ㊧ミガキ	㊦指頭痕→ナデ ㊧ミガキ	明黄褐色 明黄褐色	長(2) ウンモ ◎	煤付着	32
144	甕	底径(8.0) 残高14.9	平底。	㊨ミガキ 底面ナ デ	ミガキ	明黄褐色	石・長(1~4) ○		

表29 G区SK19 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
145	壺	口径(21.3) 残高3.8	口縁部は平坦な面をなし、下端部は刻み。	㊦ナ デ ㊧ハケ(6本/cm)	ハケ(8本/cm)	明黄褐色 明黄褐色	石・長(0.5~1) 金雲母 ◎		33
146	壺	残高2.8	胴部片。二枚貝施文の壺。3本の直線文と2本単位の弧文。	ナ デ	ナ デ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金雲母 ◎		33
147	壺	残高13.8	胴部片。胴張り部と肩部に5条ずつのヘラ描沈線。	ハケ→ミガキ ミガキ→ナデ ナ デ	ナデ・指頭痕	橙色、淡黄色 灰白色	石(1) ◎		33
148	甕	残高2.3	貼り付けによる口縁部。口端面に刻み目、口縁下にヘラ描沈線3条以上。	ナ デ	ナ デ	浅黄橙色 浅黄橙色	長(1~2) ◎		33
149	甕	口径(19.3) 底径(9.0) 器高27.0	折り曲げ口縁。短く外上方に開き端面に刻み目。口縁下に4条のヘラ描沈線、その下に刺突の3段。	㊦ナ デ ㊧ミガキ・ナデ 指圧痕	ナ デ	明褐灰色 明赤褐色、灰褐色	石・長(1~5) ◎	外面に 黒斑	33
150	甕	口径(28.8) 残高6.0	貼り付けによる口縁部で上面が内傾した平坦面をなす。口端部下から口縁部下面に刻み目。	ナ デ	㊦ナ デ ㊧	にぶい 橙 色 明褐色	石・長(1~2) ◎		33
151	甕	口径(19.8) 残高13.7	断面三角形の粘土帯を貼り付けた口縁部。外端面に刻み目。ヘラ描沈線6条。	㊦ナ デ ㊧ミガキ	ナデ・指頭痕	にぶい 褐 色	石・長(1~3) ○	外面に 煤付着	33

表30 G区出土弥生時代 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
152	甕	口径(26.0) 残高7.0	折り曲げによる口縁部外端面に刻み目、口縁部下に4条のヘラ描沈線。	㊶ ハケ→ナデ ㊷ ハケ(7本/cm)	㊸ ミガキ ㊹ ナデ	橙 色 橙 色	石・長(1) ○		34
153	甕	口径19.8 残高18.1	折り曲げ口縁。胴部外面に刺突列点文が巡る。	㊶ ヨコナデ ㊷ ハケ(5本/cm)	㊸ ヨコナデ ㊹ ハケ→ミガキ ㊺ 胴下 ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長(2) ○	外面に 煤付着	33
154	甕	口径13.6 底径6.5 器高16.4	口縁部は断面三角形の粘土帯を貼り付け、端部に刻み目。口縁下にヘラ描沈線8条、刺突列点文1段。	ナ デ	ナ デ	橙 色 灰白色	石・長(5) ○		34
155	甕	残高8.2	胴部片。沈線間に山形文、下に竹官文が2段巡る。	ナ デ	ミガキ	褐灰色 橙 色	石・長(1) ○		34
156	甕	底径4.8 残高4.1	平底。	㊻ マメツ (底面)ナデ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長(4) ○		
157	甕	底径6.7 残高4.3	平底。	㊻ ミガキ (底面)ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石(3) ウンモ ○		
158	甕	底径7.0 残高6.5	窪み底。	㊻ ミガキ (底面)ナデ	㊼ ミガキ (底面)ナデ	橙 色 橙 色	石・長(2) ウンモ ◎		
159	甕	底径(6.0) 残高6.7	くびれの上げ底。	マメツ	ミガキ?	橙 色 にぶい橙色	石・長(1) △		
160	壺	残高3.1	口縁部小片。口縁部外端面に浅い沈線1条その上から板状工具木口の刺突による刻み目。	㊽ 上 ヨコナデ ㊽ 下 ミガキ	㊽ 上 ヨコナデ ㊽ 下 ミガキ?	橙 色 橙 色	石(1) ウンモ ◎		34
161	壺	口径(12.6) 底径8.0 器高35.6~36.3	短い口縁部が外上方に開き、口端面にヘラ描による格子文が施される。頸部に圧痕文突帯が1条貼り付けている。	㊾ ナデ ㊿ ハケ(10本/cm) ㊿ ミガキ ㊿ 指頭痕	ミガキ	赤 色 赤 色	石(2)・長(1) ◎		34
162	壺	残高5.9	胴部片。4条のヘラ描沈線と、その上に細く低い連鎖状刻み目突帯を貼り付ける。	ミガキ・指頭痕	ナデ・指頭痕	にぶい橙色 にぶい橙色	石(2) ◎		34
163	壺	底径(8.8) 残高5.9	平底。	ナ デ	指ナデ・指頭痕	明黄褐色 明黄褐色	石(2) ○		
164	壺	底径(10.2) 残高9.0	平底。	マメツ	マメツ	橙 色 明黄褐色	石・長(3) ○		

表31 B区出土弥生時代 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
165	石斧		緑色片岩	9.0	7.0	2.2	254.86		34
166	石斧		緑色片岩	9.4	5.2	2.0	137.08		34
167	扁平片刃石斧		緑色片岩	12.2	(1.7)	(1.8)	62.25		34
168	石錘		砂岩	10.0	9.8	2.8	428		34
169	石鏃		サヌカイト	2.58	1.7	0.33	0.79		34
170	石鏃		サヌカイト	2.7	1.4	0.2	0.84		34
171	石鏃		サヌカイト	2.0	1.6	0.3	0.74		34
172	石鏃		サヌカイト	1.8	1.65	0.4	1.20		34

表32 G区1号周溝 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
173	埴輪	口径(24.0) 残高7.6	円筒。口縁部片。 口端部は内傾した面をなす。	Ⓚ上ハケ(7本/cm) Ⓚ下ナデ ハケ(8本/cm)	ハケ(6本/cm) ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1) ◎		35
174	埴輪	残高4.9	円筒。口縁部片。	ハケ(6本/cm) ナデ	ハケ(6本/cm) ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(2) ◎		35
175	埴輪	残高12.2	朝顔形。頸部から肩部。	Ⓚハケ(7本/cm)	Ⓚハケ(指頭痕) Ⓚナデ(指頭痕)	明黄褐色 明黄褐色	石・長(1~2) ◎		35
176	埴輪	残高7.6	胴部片。須恵質。	ヨコナデ ハケ(6本/cm)	ナデ	灰黄褐色 浅黄橙色	砂粒 赤色酸化土粒 ◎		35
177	埴輪	残高10.2	胴部片。	ハケ後ナデ (7本/cm)	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	含細砂粒 ◎		35
178	埴輪	残高6.0	胴部片。	ハケ(7本/cm) ヨコナデ	ハケ	浅黄橙色 浅黄橙色	砂粒 ○		35
179	埴輪	残高13.0	形象の人物か動物の足?	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	石(2) ◎		35
180	埴輪	残高19.0	形象。やや反りを持った粘土板。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	含細砂粒 赤色酸化土粒 ◎		35

表33 G区2号周溝 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
181	埴輪	口径23.0 底径13.0 器高36.1~37.0	円筒。口縁部はやや外反気味。 2段目、3段目に隅丸方形に 近い形の透孔2個ずつ。	Ⓚ上ナデ Ⓚハケ(8本/cm) Ⓚ下ナデ Ⓚ指頭痕	Ⓚハケ(9本/cm) Ⓚナデ	橙 色 橙 色	石(1~3) ◎		36
182	埴輪	口径(27.4) 底径(15.4) 器高37.6	円筒。 タガ3段。透孔は2段目。	Ⓚナデ ハケ(7本/cm) 指頭痕	Ⓚハケ(8本/cm) Ⓚナデ・指頭痕	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1) ◎		36
183	埴輪	口径24.2 底径17.0 器高33.1	円筒。 タガ3段は低い台形状。 透孔は楕円形。	Ⓚ上ナデ Ⓚハケ(6本/cm) Ⓚ下ナデ	Ⓚハケ(6本/cm) Ⓚナデ・指頭痕	橙 色 橙 色	石・長(1) ◎		36
184	埴輪	口径(23.3) 残高9.8	円筒。 口縁部から最上段のタガ片。	Ⓚ上ナデ Ⓚハケ(6本/cm) Ⓚ下ナデ	ナデ・指頭痕	黄褐色 黄褐色	砂粒 ◎		37
185	埴輪	口径(27.3) 残高13.5	円筒。 口縁部から最上段のタガ片。 円孔あり。	Ⓚ上ナデ Ⓚハケ(6本/cm) 指頭痕 Ⓚ下ナデ	Ⓚハケ(8本/cm) Ⓚナデ	赤褐色 赤褐色	石(2)・長(1) ◎		36
186	埴輪	口径(28.8) 残高13.0	円筒。 口縁部から最上段のタガ片。 円孔あり。	Ⓚ上ナデ Ⓚハケ(7本/cm) Ⓚ下ナデ	ナデ・指頭痕	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1) ◎		37
187	埴輪	口径23.1 残高13.6	円筒。 口縁部から1段目の透孔。	Ⓚ上ヨコナデ Ⓚハケ(7本/cm) Ⓚ下ヨコナデ	ハケ(8本/cm) 指頭痕	橙 色 橙 色	石・長(1~2) ◎		37
188	埴輪	口径(19.7) 残高13.6	円筒。 口縁部から1段目の透孔。	Ⓚハケ(6本/cm) ナデ Ⓚ下ナデ	ナデ	黄橙色 黄橙色	石(1~2) ◎		37
189	埴輪	口径(24.8) 残高7.2	口縁部から1段目のタガ片。 口縁部は外傾した平坦面。	Ⓚ上ナデ Ⓚハケ後ナデ (8本/cm) Ⓚ下ナデ	Ⓚ上ハケ(8本/cm) Ⓚ下ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	砂粒 ◎		37
190	埴輪	口径(24.1) 残高6.5	円筒。口縁部片。	Ⓚ上ナデ Ⓚハケ(7本/cm)	ハケ	赤褐色 赤褐色	含細砂粒 ◎		

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
191	埴輪	口径(22.3) 残高5.0	円筒。口縁部片。	㊦ナ デ ㊧ハケ(6本/cm) ナ デ	ハケ(9本/cm)	橙 色 橙 色	含細砂粒 ◎		
192	埴輪	残高6.0	2段目のタガとその上位の透孔。	㊦ナ デ ㊧ハケ(8本/cm)	ナ デ	赤褐色 赤褐色	含細砂粒 ◎		
193	埴輪	残高13.0	2・3段目のタガと2段目区画の透孔。	㊧ハケ(6本/cm) ㊦ナ デ	ナ デ	黄橙色 浅黄橙色	石(2) ◎		37
194	埴輪	残高12.1	1・2段目のタガと2・3段目区画透孔。	㊧ハケ(6本/cm) ㊦ナ デ	ナ デ	黄橙色 黄橙色	含細砂粒 ◎		37
195	埴輪	残高14.2	タガ部の片。	㊧ハケ(6本/cm) ㊦ナ デ	ナ デ・指頭痕	赤褐色 赤褐色	石(2)・長(1) ○		36
196	埴輪	残高10.5	タガ部の片。	㊧ハケ(8本/cm) ㊦ヨコナデ	指 ナ デ	橙 色 橙 色	石・長(1~2) ◎		37
197	埴輪	残高6.3	朝顔。口縁部タガ片。	㊧ハケ(6本/cm) ㊦ナ デ	ハケ(10本/cm) ナ デ・指頭痕	橙 色 橙 色	砂粒 ◎		37
198	埴輪	残高6.4	朝顔。肩部片。	㊧ハケ(8本/cm) タガ ナ デ	ナ デ	黄橙色 橙 色	砂粒 ○		
199	埴輪	残高7.3	朝顔。肩部片。	ヨコナデ ハケ(7本/cm)	ナ デ	淡橙色 浅黄橙色	長(1) ◎		37
200	埴輪	底径(13.2) 残高7.8	底部片。	㊧ハケ(7本/cm) ㊦ナ デ	ナ デ	明褐色 明褐色	石(1~2) ◎		37

表34 B区2号周溝 出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
201	石錘	欠損	結晶片岩	7.1	5.6	1.5	58.47		

表35 B区3号周溝 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
202	坏蓋	つまみ径3.5 残高2.2	有蓋高坏の蓋。	㊦回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		38
203	坏蓋	口径(11.4) 残高4.5	口縁部と天井部の境に稜を持つ。 口縁部は段をなす。	㊦回転ヘラケズリ ㊧回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	長(1) ◎		38
204	坏蓋	口径(12.1) 残高3.3	稜は鋭く、口端部段をなす。	㊦回転ヘラケズリ ㊧回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	長(1) ◎		38
205	坏身	口径(12.0) 残高3.1	垂直に立ち上がる口縁部は端部に段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ◎		38
206	壺	口径(15.3) 残高7.0	外反しながら外上方に立ち上がり、突帯1条、頸部に1条の凹線および波状文。	㊦回転ナデ ㊧タタキ→カキメ	㊦回転ナデ ㊧タタキ	灰 色 灰 色	長(1) ◎		38

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面 内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
207	壺	口径(15.9) 残高6.0	外反する口縁部。頸部に1条の凹線と波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1) ◎		38
208	壺	口径(16.4) 残高5.9	口端部は、下方に肥厚している。	㊦ 回転ナデ ㊧ カキ目	回転ナデ	灰白色 灰白色	長(1) ◎		
209	壺	口径(18.2) 残高5.4	口端部は上下に肥厚している。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色、暗灰色 灰色	長(1) ◎		
210	壺	口径(17.9) 残高13.1	口端部は上下に肥厚している。	㊦ 回転ナデ ㊧ カキメ ㊨ タタキ→カキメ	㊦ 回転ナデ ㊧ タタキ	暗灰色、灰色 青灰色	長(1) ◎		
211	壺	口径(15.2) 残高14.4	口端部直下に1条の突帯。	㊦ 回転ナデ ㊧ カキメ ㊨ タタキ→カキメ	㊦ 回転ナデ ㊧ タタキ→ナデケシ	灰色 灰色	長(1~3) ◎		38
212	甕	口径20.9 残高10.2	直立の短い頸部に口端は外面に稜を持って上下に肥厚し、突帯1条と波状文を施す。	㊦ 回転ナデ ㊧ カキメ ㊨ タタキ→カキメ	㊦ 回転ナデ ㊧ タタキ→ナデケシ	灰色 灰色	長(1~2) ◎		38
213	甕	口径(20.5) 残高15.9	口端に沈線2条、やや下った位置に突帯1条。	㊦ 回転ナデ ㊧ カキメ ㊨ タタキ→カキメ	㊦ 回転ナデ ㊧ タタキ	灰オリーブ色 暗灰色	長(1) ◎		
214	甕	口径21.1 器高48.3	口縁部は、外反して外上方に開き端部は稜を持って上下に肥厚しやや下った位置に突帯1条。	㊦ 回転ナデ ㊧ カキメ ㊨ タタキ→カキメ	㊦ 回転ナデ ㊧ カキメ	灰色 灰色	長(1~2) ◎		38
215	埴輪	口径(21.0) 残高30.1	円筒。口縁部は外反し、端面は外傾した平坦面。2段、3段に円孔。	㊦ 横ナデ ㊧ タガナデ ㊨ ハケ(7本/cm)	㊦ ナデ ㊧ ハケ(6本/cm) ㊨ ナデ(指頭痕)		長(1~5) ◎		39
216	埴輪	口径(24.6) 残高8.3	円筒。口端部が僅かに外反。	㊦ ナデ ㊧ ハケ(7本/cm) ㊨ タガナデ	㊦ ナデ ㊧ ハケ(7本/cm) ㊨ ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石(4) ○		39
217	埴輪	口径(20.2) 残高5.6	円筒。口端部は、水平な平坦面。	㊦ ナデ ㊧ ハケ(7本/cm)	㊦ ハケ(6本/cm) ナデ(指頭痕)	橙色 橙色	石・長(2) ◎		39
218	埴輪	残高6.1	朝顔形。頸部に断面三角形の突帯。	㊦ タガナデ マメツ	ナデ(指頭痕)	にぶい橙色 にぶい橙色	石(1) ◎		39
219	埴輪	残高9.2	朝顔形。肩部に低い台形のタガ直下に透孔。	㊦ タガナデ ハケ	ナデ(指頭痕)	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石(2)		
220	埴輪	底径(12.8) 残高25.1	基底部から2段のタガと2段目と3段目に透孔。	㊦ タガナデ ハケ(6本/cm)	ナデ(指頭痕)		石(4) ◎		39
221	埴輪	底径(15.4) 残高8.8	底部。	㊦ 底面ナデ ハケ(6本/cm)	ナデ(指頭痕)	明黄褐色 明黄褐色	長(1) ○		39
222	埴輪	底径(15.8) 残高7.3	底部。	㊦ 底面ナデ ハケ(6本/cm)	ナデ(指頭痕)	明黄褐色 明黄褐色	石(3) ◎		39
223	埴輪	残高5.9	形象。人または獣の足。	指頭痕	指頭痕	橙色 橙色	石・長(1) ◎		38
225	壺	底径(9.8) 残高7.4	弥生。平底の底部。	マメツ	ナデ	明黄褐色 浅黄橙色	石・長(1~4) ◎		

表36 G区4号周溝 出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質・色	法 量				備考	図版
				長さ(cm)	直径(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
224	管玉	完形	碧玉・濃緑色	2.1	0.85	上 0.35 下 0.10	2.979		38

表37 G区4号周溝 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
226	杯身	口径(9.7) 残高3.4	外反する口縁部。端部に段をもつ。	㊟回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ◎		

表38 G区出土古墳時代 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
227	坏蓋	口径12.9 器高4.3	口縁部と天井部の境に稜を施す。天井に細く1本線のヘラ記号。	㊟回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 灰 色	石(1~4) ◎		40
228	坏蓋	口径(12.0) 残高4.4	口縁部と天井部の境に鋭い稜をもつ。	㊟回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰 色 灰 色	石・長(1) ◎		40
229	蓋	口径(8.3) 残高3.3	壺蓋。天井部に稜をもつ。	㊟回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ◎		
230	高坏	底径(9.1) 残高4.9	有蓋高坏。脚裾部に1条の突帯。脚柱部の長方形透かし3方向。	回転ナデ	回転ナデ	灰 色 灰 色	長(1) ◎		
231	埴輪	口径(20.0) 残高5.6	円筒。口縁部。	㊟端ナ デ ハケ(8本/cm)	ハケ(7本/cm)	橙 色 橙 色	石(2) ◎		40
232	埴輪	口径(26.2) 残高5.9	円筒。口縁部。	㊟端ナ デ ハケ(6本/cm)	ハケ(6本/cm)	にぶい橙 色 にぶい橙 色	石(3) ◎		40
233	埴輪	口径(21.4) 残高4.1	円筒。口縁部。	㊟端ナ デ ハケ(5本/cm)	ハ ケ	橙 色 橙 色	長(1) ウンモ ◎		
234	埴輪	口径(30.3) 残高4.6	朝顔形。口縁部片。	㊟端ナ デ ハケ(7本/cm)	ハケ(10本/cm)	橙 色 橙 色	含細砂粒 ◎		40
235	埴輪	残高3.2	朝顔形。口縁のタガ部片。しっかりした稜でやや下の方に突出。	㊟タガナ デ ハ ケ	ナ デ	橙 色 橙 色	石・長(1) ◎		
236	埴輪	残高4.1	朝顔形。断面三角形のタガをもつ口縁部片。	㊟タガナ デ ハ ケ	ハケ→ナデ	橙 色 橙 色	長(1) ウンモ ◎		
237	埴輪	残高7.1	朝顔形。口縁のタガ部片。	㊟タガナ デ ハケ(7本/cm)	ハケ→ナデ	橙 色 橙 色	含細砂粒 ◎		40
238	埴輪	残高5.5	朝顔形。断面三角形のタガをもつ頸部片。	㊟タガナ デ ハケ(7本/cm)	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	石・長(1) ◎		40
239	埴輪	残高13.0	胴部片で2、3段目のタガで上下に透孔を施す。	㊟タガナ デ ハケ(5本/cm)	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	石・長(1) ◎		40
240	埴輪	底径(13.4) 残高10.7	底部片。	ハケ(6本/cm) ㊟底面ナ デ	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	石・長(1) ◎		40

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面 内面)	胎 土 焼 成	備考	図版
				外面	内面				
241	埴輪	底径(13.4) 残高7.9	底部片。底面から内面にかけて粘土板の接合痕が見られる。	ハケ(6本/cm) ⑥(底面)ナ デ	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	石(2) ◎		40
242	埴輪	底径(14.2) 残高8.6	底部片。底面から内湾し外反している。	ハケ(6本/cm) ⑥(底面)ナ デ	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	石(1~2) ◎		
243	埴輪	底径(12.6) 残高7.1	底部片。大きく外反している。	ハケ(5本/cm) ⑥(底面)ナ デ	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	石(2) ◎		40
244	埴輪	残高4.7	形象。家の土台。方形のコーナ部分。	ナ デ	ハケメ→ナデ (指頭痕)	橙 色 橙 色	石・長(2) ◎		41
245	埴輪	残高2.8	形象。家の土台。	マ メ ツ	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	石・長(1) ◎		41
246	埴輪	残高9.0	形象。人または獣の手足。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	石(1) ◎		41
247	埴輪	残高10.4	形象。	ナデ(指頭痕)	ナデ(指頭痕)	橙 色 橙 色	砂粒 赤色酸化土粒 ◎		41

表39 G区出土古墳時代 出土遺物観察表 金属製品

番号	器 種	残 存	材質・色	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
248	刀子	刀基部	鉄・褐色	4.5	1.3	1.3	11.16	木片付着	41
249	刀子	刀基部	鉄・褐色	6.9	0.8	0.4	6.03		41
250	鋌	一部欠損	鉄・褐色	3.2	0.4	0.4	1.74	木片付着	41

第3章 自然科学分析

鶴が峠遺跡から出土したアズキ状近似の炭化種子について

京都造形芸術大学
岡田 文男

松山市鶴が峠遺跡、G区SK2遺構から出土した炭化種子類のなかにコムギが含まれていると発掘当初発表されたが、精査の結果、コムギではなく、マメ科の近似種であった。近年の発掘調査では、各地で炭化したマメ類が検出されているので、現生種との比較を中心に同定を試みた。

結果

調査した資料は、G区、SK2・SK4・SK5・SK7・SK8・SK9から出土した炭化種子類で、水洗され、ケースに収められていた。観察の結果、大部分は炭化したコメで、そのほか炭化したマメ類やドングリ類、木片があった。未炭化種子も2粒含まれていた(表1)。

炭化した種子でマメ科の特徴を示す種子は約70点であった。種子の最大長の平均が約6.1mmで、種子にへそが認められ、へその端部には幼根が取れた痕跡が遺存する種子30点、子葉に2分割した種子20点であった。後者では2点に幼芽が残っていた。そのほか子葉が細分化した17点があった。

表40 鶴が峠遺跡G区出土の炭化種子類同定結果

出土地	遺構	出土年月日	内容
鶴が峠遺跡G区	SK-2	800529	炭化したアズキ近似種(30、子葉20、破片17)、木炭片2、不明2
	SK-2ベルト	800723	炭化したアズキ近似種(1、子葉3、破片5)、木炭片1
	SK-4	4	炭化したドングリ類(子葉4)
	SK-5・No.1	800611	炭化したコメ55、破片5
	SK-5・No.2	800609	炭化したコメ55
	SK-5・No.3	800609	炭化したコメ11
	SK-5・SE2	800611	炭化したコメ152、破片17、炭化したアズキ近似種(子葉3、破片1)
	SK-7		炭化したコメ3
	SK-8・No.6	800619	炭化したコメ14、破片2
	SK-8	800617	炭化したコメ17、炭化したドングリ類子葉2
	Sk-9・No.1		炭化したイチイガシ?(子葉1)
	Sk-9・No.4		炭化したコメ1、炭化したドングリ類(子葉2)、木炭片5

表41 G区SK-2出土アズキ近似炭化種子と現生のアズキ・リョクトウの種子長の比較

種子	最大長	へそ長	へその長さ/最大長	計測数
SK-2出土種子	6.1	2.5	0.41	30
アズキ(未炭化)	6.3	3.4	0.53	80
炭化アズキ	7.3	3.1	0.44	40
煮焦げアズキ	7.4	3.2	0.45	39
リョクトウ(未炭化)	5.2	1.7	0.33	80
炭化リョクトウ	6.2	1.5	0.25	40
煮焦げリョクトウ	6.4	1.5	0.24	40

表42 G区SK-2出土炭化種子とアズキ、リョクトウの最大長・へそ長の比較 (単位: mm)

長さ	12	15	18	21	24	27	30	33	36	39	42	45	48	51	54	57	60	63	66	69	72	75	78	81	84	87	90	粒数
出土種子				1	3	3	1			1	1	2	4	6	8	5	1	2										30
最大長																												8
へそ長																												80
未炭化アズキ										1	1	7	19	22	18	9	3											80
へそ長																												40
炭化アズキ										4	8	8	1															21
最大長																												39
へそ長																												18
煮炭化アズキ										2	7	3	3	3														80
最大長																												80
へそ長																												40
未炭化リョクトウ																												35
最大長																												40
へそ長																												34
炭化リョクトウ																												80
最大長																												80
へそ長																												40
煮炭化リョクトウ																												35
最大長																												40
へそ長																												34

表43 出土種子とアズキ・リョクトウのへそ長/最大長の比較

種類	0.17	0.2	0.23	0.26	0.29	0.32	0.35	0.38	0.41	0.44	0.47	0.5	0.53	0.56	0.59
出土炭化種子															
未炭化アズキ															
炭化アズキ															
煮炭化アズキ															
未炭化リョクトウ															
炭化リョクトウ															
煮炭化リョクトウ															

従来、遺跡から炭化して出土したマメ科の種子として、アズキ、ヤブツルアズキ、リョクトウ近似種が報告されている。これらはアズキ属に分類され、種子の形状は互いに類似する。

そこで、出土した炭化種子の中から計測可能な30粒を抽出し、種子の最大長とへそ長を計測した結果を表2に示す(表2・写真1)。

ついで、現生のアズキ、リョクトウについて未炭化の種子、坩堝に入れて加熱して炭化させた種子、煮てから炭化させた種子について、それぞれ炭化前後の種子の最大長とへそ長を計測して、出土炭化種子のそれらと比較した(表3・写真2)。さらに、それぞれについてへそ長/最大長の比を比較した(表4)。

以上から、出土したマメ科の炭化種子は、現生のアズキ近似種と考えられる。



写真1
出土炭化種子 上段：左・中の種子には中央にへそが見える。右の種子には下端に幼根の取れたあとがみえる。
下段：左・中の種子は種皮が取れて縦溝がある。右は子葉状に割れたもの。



写真2
上段 左：生のリョクトウ、中：炒ってこがしたリョクトウ、右：同じく種皮が取れた状態
下段 左：直接煮てこがしたリョクトウ、中：一晩水漬けしてから煮てこがしたリョクトウ

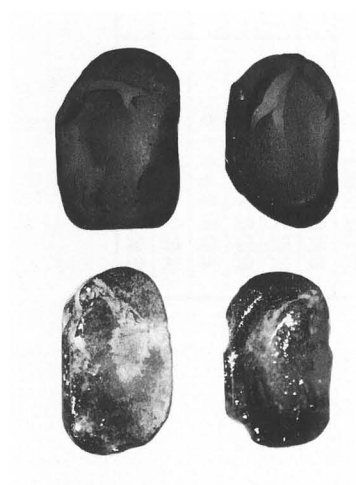


写真3
上段 左：アズキの幼芽、右：リョクトウの幼芽
下段 出土炭化種子の幼芽(上部中央にみえる)

第4章 まとめ

今回は、鶴が峠遺跡における全調査のうち、A区からG区の遺構・遺物についての報告である。検出されたのは、弥生時代については主にG区の土坑群、古墳時代のものとしては各区で検出された古墳であった。ちなみに、次年度刊行予定のH区からL区での主要な遺構は、中後期の古墳群である。

さて、弥生時代の土坑はG区において19基が検出されている。そのうち遺物を出土したものが15基で、出土遺物をみても、おおそ前期末から中期初頭・前半の間に営まれたものがすべてである。前期末、梅木編年のI-4に属するものがSK2・5・7・8・10・18・19であり、中期初頭から前半、IIの段階のものがSK4・6・9・12・15・16・17、柱状片刃石斧片1点のみの出土のSK11の細かい所属年代は難しいが、この間のどこかの段階のものであることは間違いない。前期末のものは、甕においては、口縁部下のヘラ描による多重沈線や刺突、口端部の刻み目といったものを主な施文とし、また壺においては、頸胴部の同じくヘラ描多重沈線や、口縁部内面突帯などを主な特徴としており、前期後半でも新しい段階のものである。中期初頭、前半期のものは、このヘラ描多重沈線がほとんどなく、甕においては無文であったり、胴部の刺突のみであったり、また文様を持つものでも施文が櫛であったりする。したがって、これら土坑群は前期後半の新しい段階から、中期初頭あるいは前半代の比較的短期間に営まれたものである。これらの土坑のうち、不整形プランを呈するものを除いた、ほぼ円形に近くなるものの多くからは炭化米や豆、種実が検出され、貯蔵穴としての機能を果たしていたものと考えられる。また、遺存状況の良好なSK7が袋状断面を呈するほか、SK4や19など、残りの悪いものの中にも部分的に壁がオーバーハングするようなものもあることから、袋状貯蔵穴もある程度存在していたものと思われる。さて、このような生活に直結する遺構が多数検出されているにもかかわらず、A区からG区にかけては住居址の検出がない。住居址としては、次年度報告予定のL区において1号墳丘上の地山面で中期前半のものが1棟検出されており、この1棟が鶴が峠遺跡丘陵上で検出されたすべてである。貯蔵穴のみを丘陵上に設けて、鞍部や低地に住居をかまえることは考えにくいとなると、L区の1棟のごとく本来は丘陵上に住居が存在していたものと考えられる。古墳群の造営の際、あるいは古代以降、現代までの耕作によって削平されたものであろう。

古墳は合計9基の検出をみた。墳丘や周溝のみのものが、B区で1基、C区で2基、G区で4基、横穴式石室を主体部とするものがE区で2基である。E区以外の、主体部の残存がない古墳で、ある程度まとまった遺物を出土したのは、G区の4基のうちの1～3号墳である。G1号墳では円筒・朝顔形埴輪と、動物あるいは人物の足や器種不明の形象埴輪の出土があり、2号墳では円筒・朝顔形埴輪、3号墳からは壺・甕を主体とした須恵器群と、やはり円筒・朝顔、動物もしくは人物の足を表現した形象埴輪の出土がある。4号墳では須恵器坏片1点のみの出土であった。ここで須恵器を多く出土している3号墳についてみると、坏や高坏の蓋においては天井部と口縁部の境に稜を持ち、高坏蓋には中窪みのつまみが付せられる。坏身の口縁部立ち上がりは比較的長く垂直に近く立ち上がる。身、蓋ともに端部は丸く収められることはなく、斜めの面を持ったり、段を持ったりしている。壺・甕は口縁部下の頸部に細い突帯を持っていたり、また頸部に櫛描波状文を描かれるものもある。胴部内面の同心円文は撫で消されるものも一部あるが、多くのものは撫で消されることはない。これらの

須恵器の特徴は、田辺編年のTK23型式に相当する特徴である。4号墳は須恵器坏身片1点のみの出土であるが、やはり3号墳出土の須恵器と大差ない時期のものである。さて、これらの須恵器に伴い出土した埴輪には、円筒、朝顔、動物または人物の足といった形象埴輪がある。円筒や朝顔で、底部から口縁部まで接合できた例はないが、底部径13~16cm、口縁部径23~26cmと比較的小型で、残りのよい215や220といった円筒埴輪をあわせて考えると、さほど高くない3段のタガによって4区画された胴部の、底部から2区画目3区画目に直交配置の透かしを持つ。高さは40cm程度になるものと考えられる。外面には縦もしくはやや斜めの刷毛目が施され、2次調整は施されない。また、口縁部内面の端部から5cm程度の間に横刷毛目を持つのも特徴である。焼成は、色調には須恵質というものはないが、土師質の色調を呈していても須恵質に近いほど堅緻に焼かれたものがある。黒斑を持つものはない。これらの埴輪の特徴は、須恵器を出土していない1号・2号墳出土埴輪に共通するものである。また、形象埴輪として1号、3号墳において同形態の足の出土がある。それぞれの墳丘には盛土は既になく、地山面で周溝の一部が検出された状況であったが、墳丘規模は、周溝外側までの差し渡しで10~14・5mの規模となり、それぞれが切り合わない配置にあったものと想定される。以上の遺物の時期と墳丘の配置を総合すると、これらの古墳は5世紀末頃の段階で同時期に併存していたものと考えられる。

さて、同様の検出状況をみたのがB区、C区の3基である。いずれも地山面での墳丘痕跡、あるいは周溝遺存の状態で検出された。B区では地山整形の痕跡と調査区で採集された遺物によって、この痕跡が古墳の名残と判断した。採集された遺物には、若干の須恵器片と埴輪片があり、その多くがやはりTK23段階のものと考えられる。また、C区の2基も稜線上で並列して検出されたが、これもまたお互いに切り合わない配置となっている。古墳に伴うと考えられる遺物は、2号墳出土の壺1個体で、これもまたTK23段階のものと思われる。D区では、遺構としての古墳の検出はなかったが、須恵器や埴輪の出土がみられた。須恵器はTK23からTK217段階くらいのものであり、埴輪は破片資料のみであるが、円筒と朝顔があるようである。したがって、この調査区においても他の調査区同様のTK23段階の古墳が本来存在していたものと思われる。また、これよりも下る須恵器は、後述するが、D区の背後に位置するE区で検出された後期古墳に由来するもの、もしくはこの調査区にも後期古墳が存在していた可能性を示すものといえよう。

ところで、当地方において横穴式石室が古墳の主体部として採用されるのは、今のところMT15の段階であると考えられているので、これより遡るこれら地山整形痕や周溝のみの古墳の主体部として考えられるものとしては、竪穴式石室、箱式石棺、木棺直葬、あるいは土坑への直葬などがある。墳丘に形象埴輪を混じえた埴輪群を伴うことを考えると土坑直葬というのは考えがたく、なんらかの構造物を伴った埋葬であったものと思われる。次年度の報告になるが、J調査区では、内法の全長2.4m、幅0.8m、高さ0.65mの竪穴式石室が検出されている。刀子やガラス小玉といったものが出土遺物で土器類を欠いており、詳細な年代は不明だが、このような石室も主体部候補のひとつとして挙げられよう。段畑や農道の造成に用いられていた割石が、本来この種の石室の部材であったとするなら、主要な候補のひとつとなろう。ただ、後述するようなE区の横穴式石室をはじめとして、これも次年度に多く報告されるが、丘陵上に散在する破壊された横穴式石室にも同様の石材が用いられていることがあるので、そうとばかりは断定できないところがある。また調査中、丘陵各所に緑泥片岩の20~30cm大の破片が散見されている。調査地は花崗岩地帯で、結晶片岩の採取地は平野南部にあるが、当

地ではこの結晶片岩が箱式石棺材として利用されることが多い。したがって、これらが破壊された箱式石棺の部材であった可能性も考えられる。また、当平野でのこの時期の古墳群として、平野東部の東野お茶屋台古墳群や、畑寺竹ヶ谷古墳群がよく知られている。前者は、低丘陵上に営まれた円墳群で、現在、合計23基が調査され、うち当該期のものが少なくとも8基ある。また、後者は丘陵尾根線上に連続して9基が配置された該期の円墳群であるが、両古墳群ともに主体部が確認された例はない。このように、確認例が1例もないことから、遺存の難しい木棺直葬のような主体部を想定することもできよう。このように、これらの古墳の主体部については確定的な資料がないのが現状で、現段階では以上挙げた3つの候補を想定しておき、好例を待ちたい。

E区では2基の横穴式石室を主体部とする古墳が検出された。E1号墳も2号墳も、墳丘ともども破壊され石室の一部が残存しているのみで、墳形や規模はともに不明であった。1号墳は小ぶりの割石を用いた小型の石室で、副葬土器の出土はなく、若干の玉類と僅かな鉄製品を出土したのみである。2号墳では数点の須恵器と鉄釘が主な出土品であった。鉄釘に完存品はないが、おおよそ10cm以下の長さで、棺材の厚みが2.5cm程度のものであったと考えられること、出土した須恵器が7世紀中頃のものであるということは年代的にはよく符合し、これらの須恵器の示す時期に釘付け木棺を用いた埋葬がこの石室で行われたことはほぼ間違いないが、この埋葬が石室利用のいつの段階のものかが明らかではないので、必ずしも築造年代がこの時期であるということにはならない。したがって、7世紀中頃もしくはそれ以前の築造になるものとしかれない。ただし、側壁腰石に扁平な石材を立てて用いているところをみると、それほど大きく遡るものではなく、築造年代は古くとも7世紀前半代におさまるものと考えられる。さて、斜面立地の2号墳に対して、1号墳は尾根の最高所に占地していることから考えると、1号墳は2号墳よりも築造が遡る可能性が高い。1号墳の石室は、地山の岩盤と同質の割石材を用いて築造された小型の横穴式石室で、僅かに残った壁体や抜き痕から、これも腰石として扁平な石材を立てて用いている部分があるのは、2号墳と似た特徴といえる。したがって、遡るとはいえ、やはり7世紀の前半頃に築造された可能性が強いものとする。

文献

- 阪本安光『東野遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会 1979
- 田辺昭三『須恵器大成』講談社 1981
- 森 光晴「東野お茶屋台古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会 1986
- 西尾幸則「畑寺竹ヶ谷古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県教育委員会 1986
- 栗田茂敏「愛媛の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開—古代学協会四国支部第9回徳島大会資料—』古代学協会四国支部 1995
- 梅木謙一「伊予中部地域」『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社 2000
- 吉岡和哉『東野お茶屋台遺跡6次調査地』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2006

写真図版



調査前遠景（南より）



調査前のA区～E区（南より）



調査前のG区～J区（北東より）



A区トレンチ調査状況（1）（南より）



A区トレンチ調査状況（南より）



B区1号墳丘（南西より）



C区1・2号墳丘（東より）



C区1号墳丘（北より）



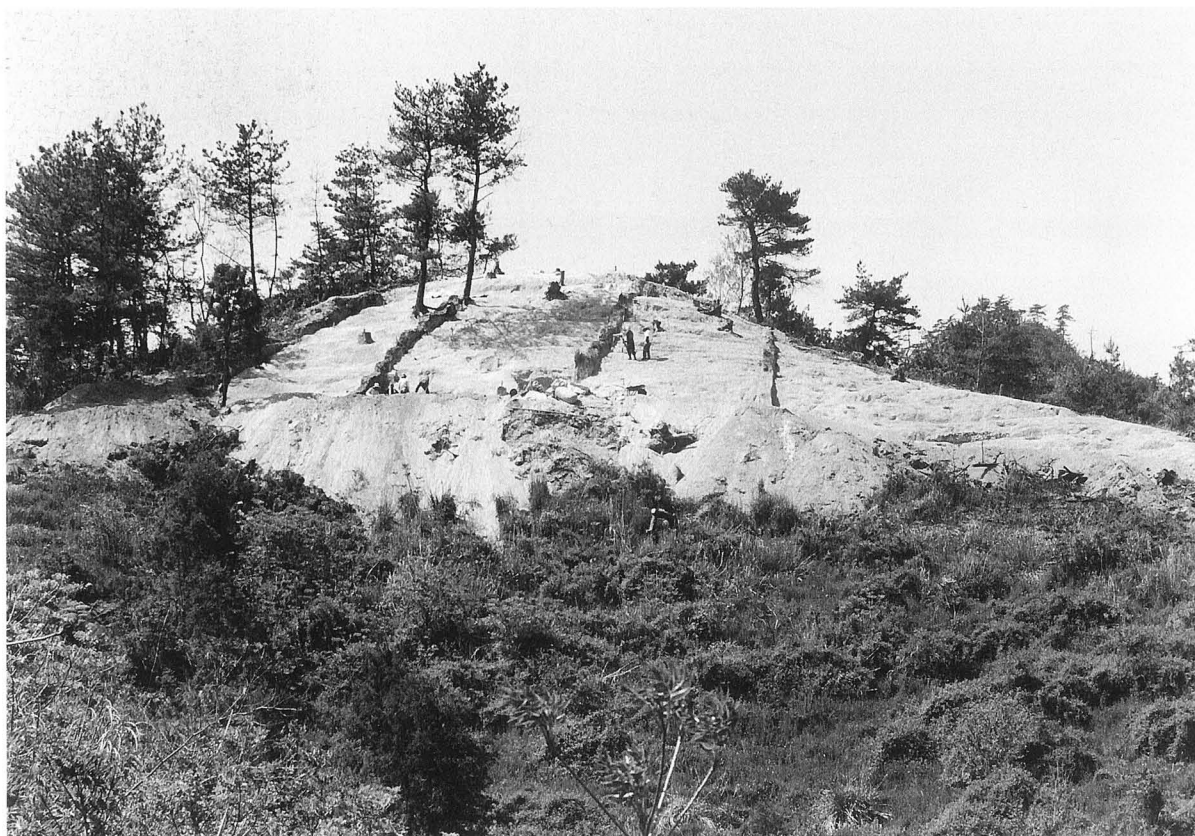
D区第2地点調査状況（南東より）



D区第1地点近景（西より）



E区1号墳丘調査前（北西より）



E区調査状況（南東より）



E区1号墳横穴式石室検出状況（北西より）



E区1号墳横穴式石室攪乱状況（南より）



E区1号墳横穴式石室玉類検出状況



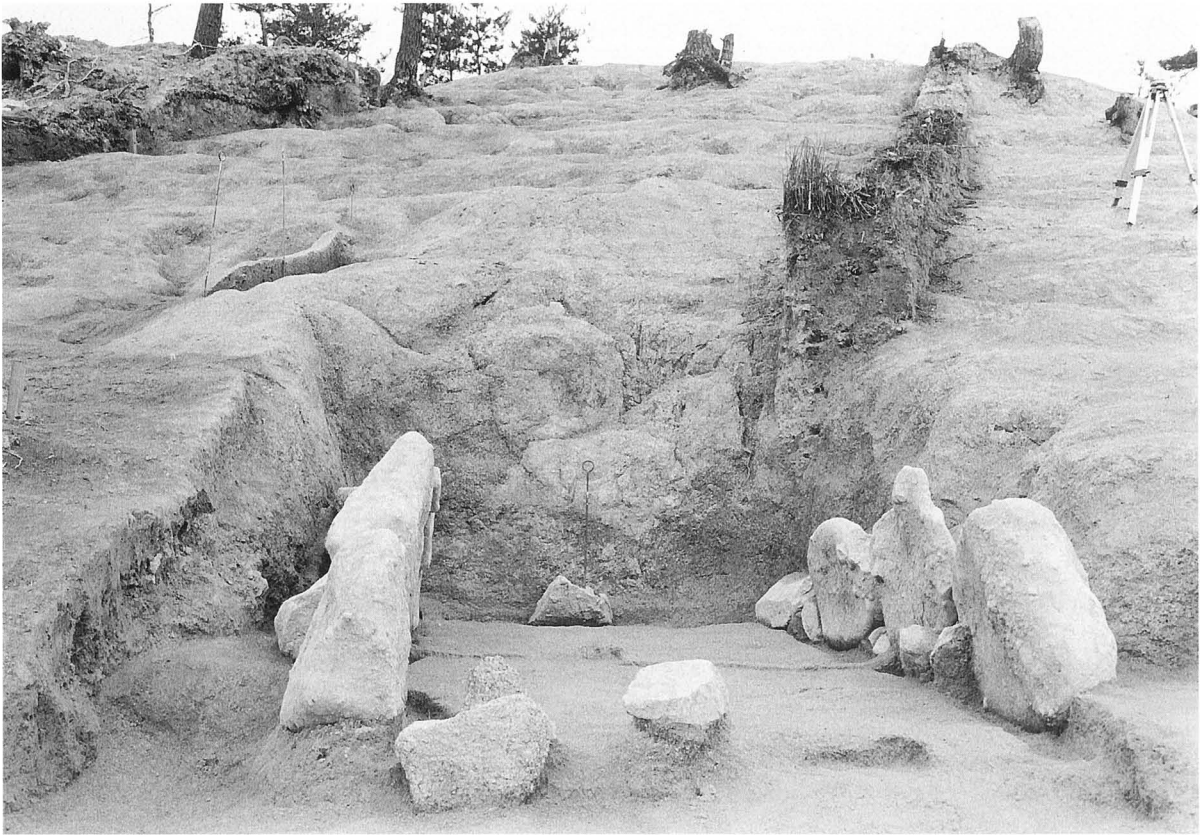
E区1号墳横穴式石室完掘状況（南より）



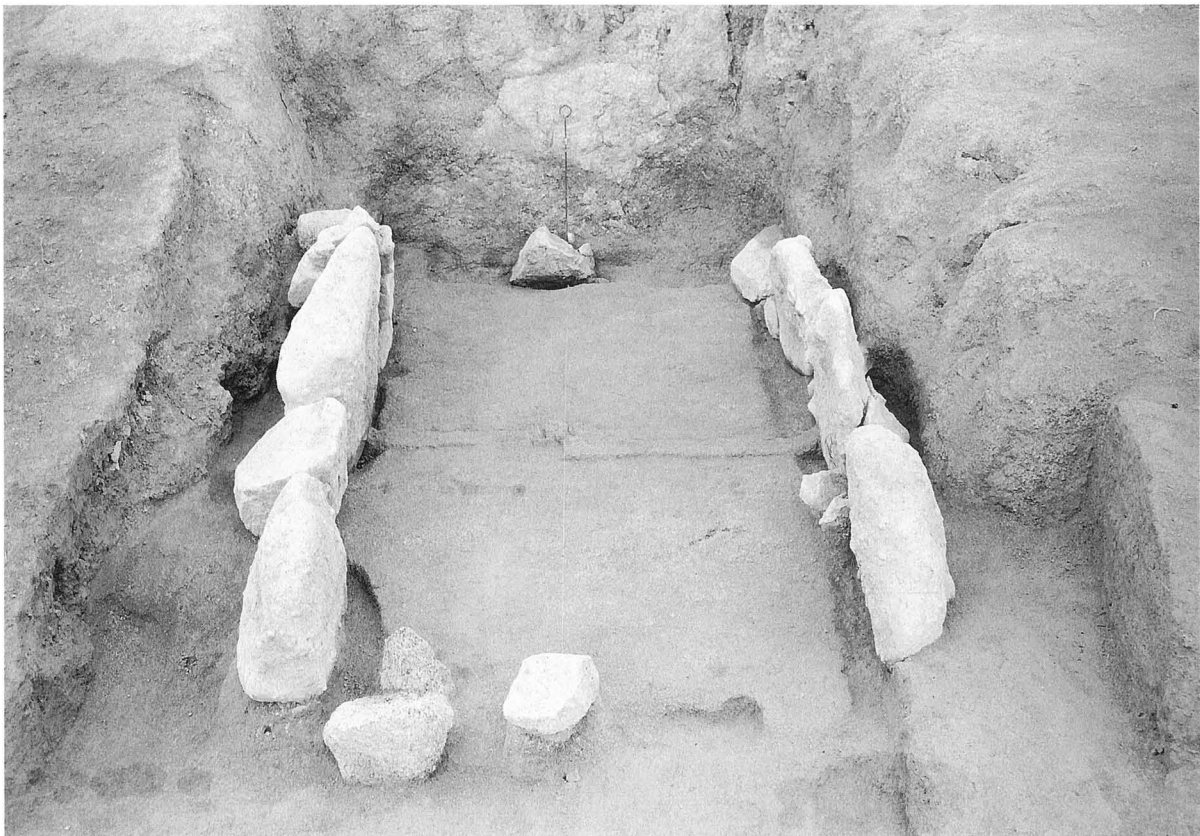
E区2号墳横穴式石室攪乱状況（北より）



E区2号墳横穴式石室遺物検出状況



E区2号墳横穴式石室完掘状況(1)(南より)



E区2号墳横穴式石室完掘状況(2)(南より)



E区2号墳東側壁近景（南西より）



E区2号墳西側壁近景（東より）



G区SK2遺物出土状況（南より）



G区SK4遺物出土状況（北西より）



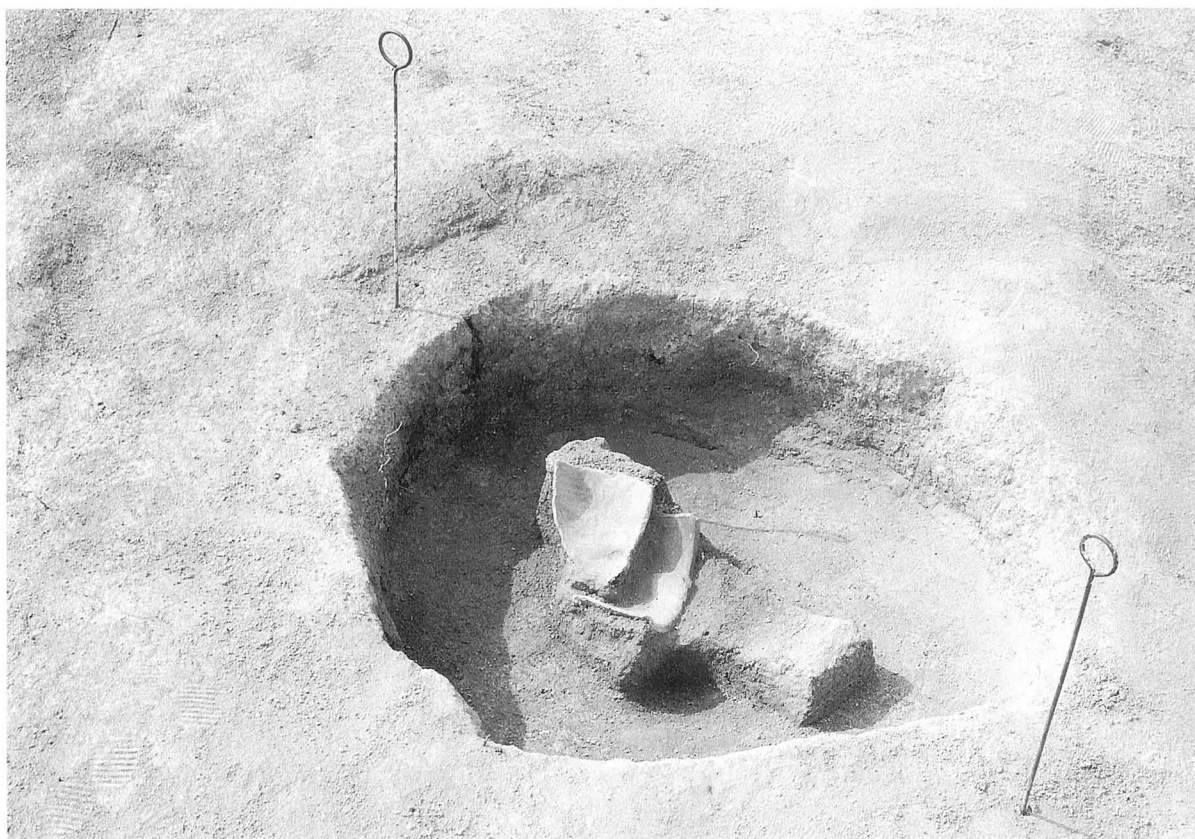
G区SK1～SK4（南より）



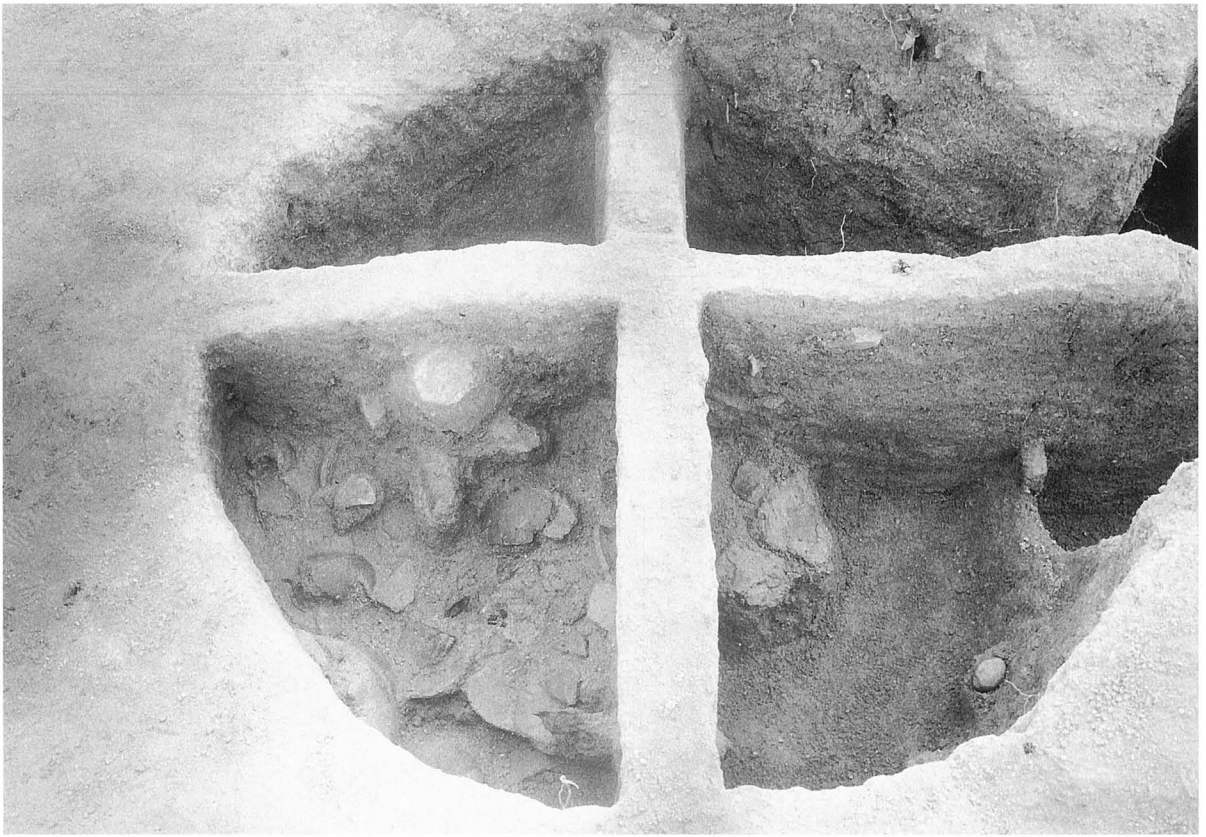
G区SK5遺物出土状況（1）（南西より）



G区SK 5 遺物出土状況 (2)



G区SK 6 遺物出土状況 (南より)



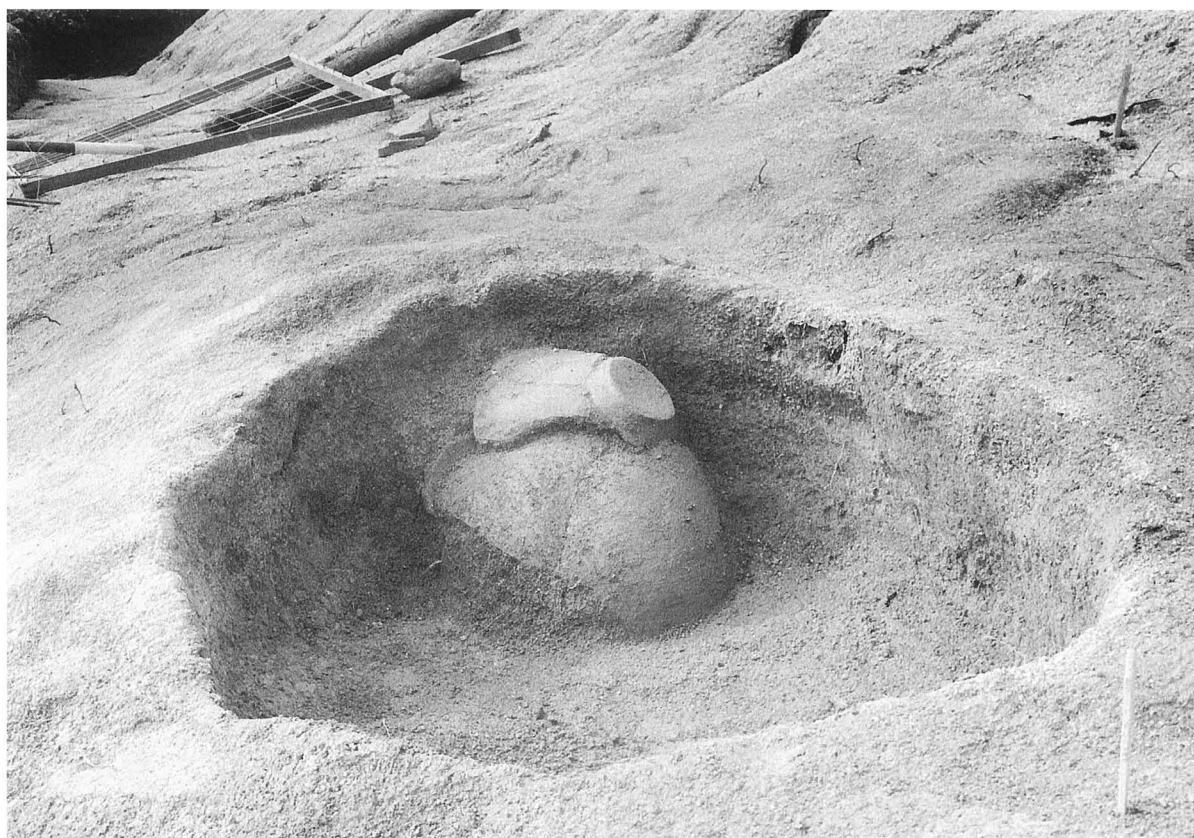
G区SK 8 遺物出土状況（東より）



G区SK 7・8 完掘状況（南東より）



G区SK9遺物出土状況（南より）



G区SK10遺物出土状況（南東より）



G区S K12遺物出土状況（北東より）



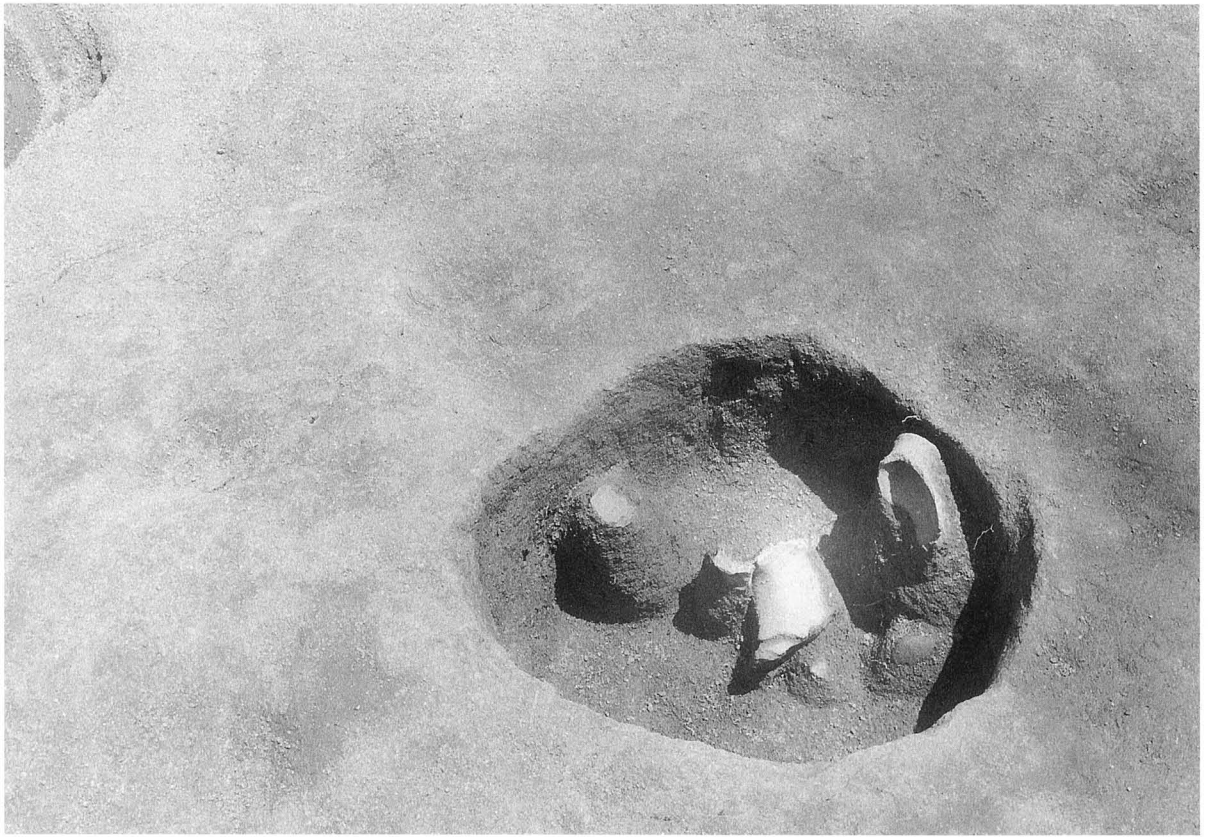
G区S K13完掘状況（北東より）



G区S K15遺物出土状況（1）（北より）



G区S K15遺物出土状況（2）



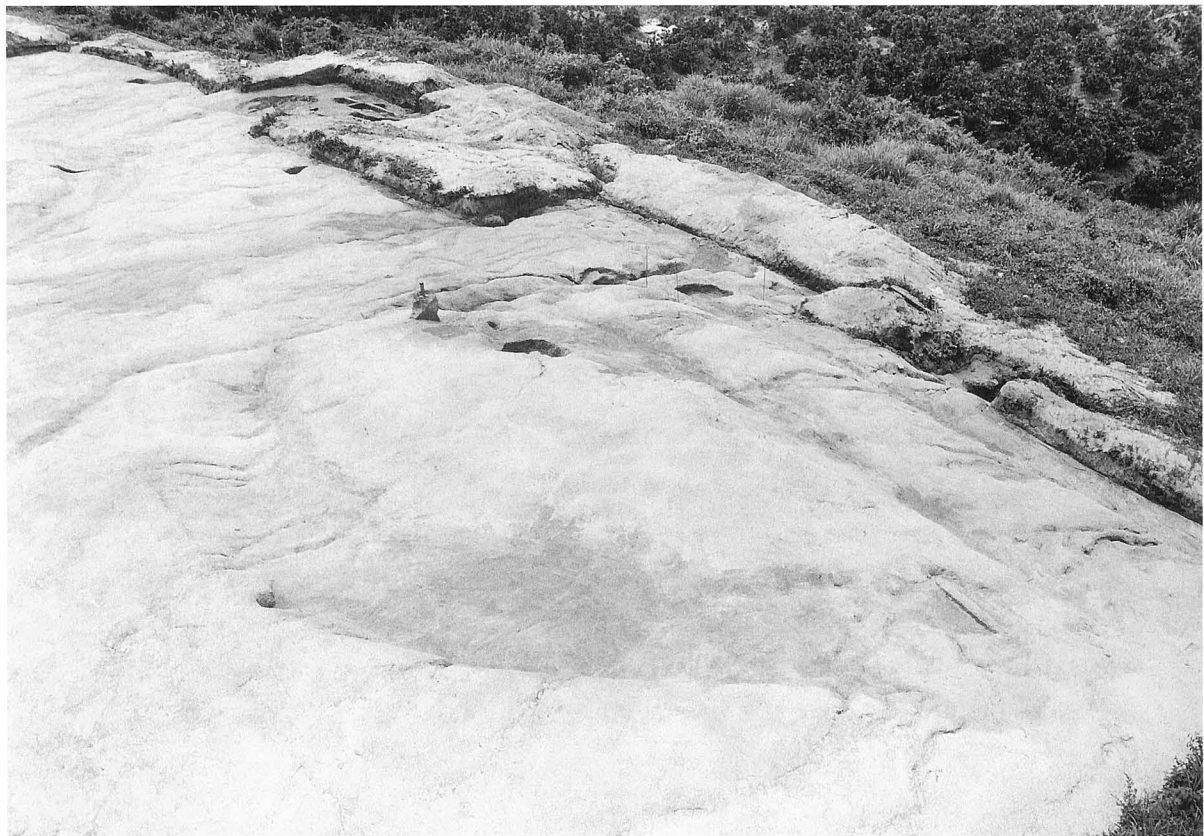
G区 S K 17遺物出土状況（北より）



G区 S K 18遺物出土状況（東より）



G区S K19遺物出土状況（北東より）



G区1号墳全景（北より）



G区2号墳周溝遺物出土状況(1)(北より)



G区2号墳周溝遺物出土状況(2)(西より)



G区3号墳周溝遺物出土状況(1)(北より)



G区3号墳周溝遺物出土状況(2)(西より)



G区3号墳周溝遺物出土状況近景（西より）



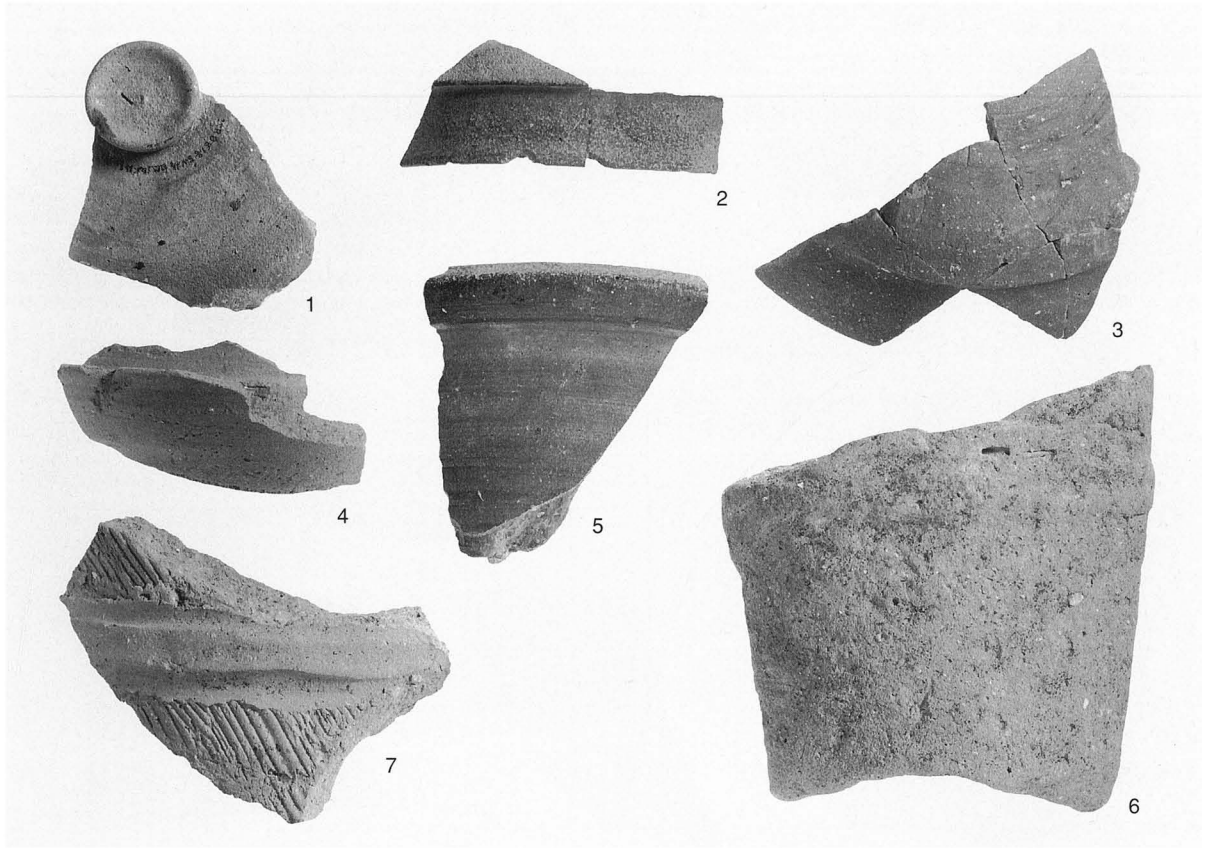
G区3号墳全景（西より）



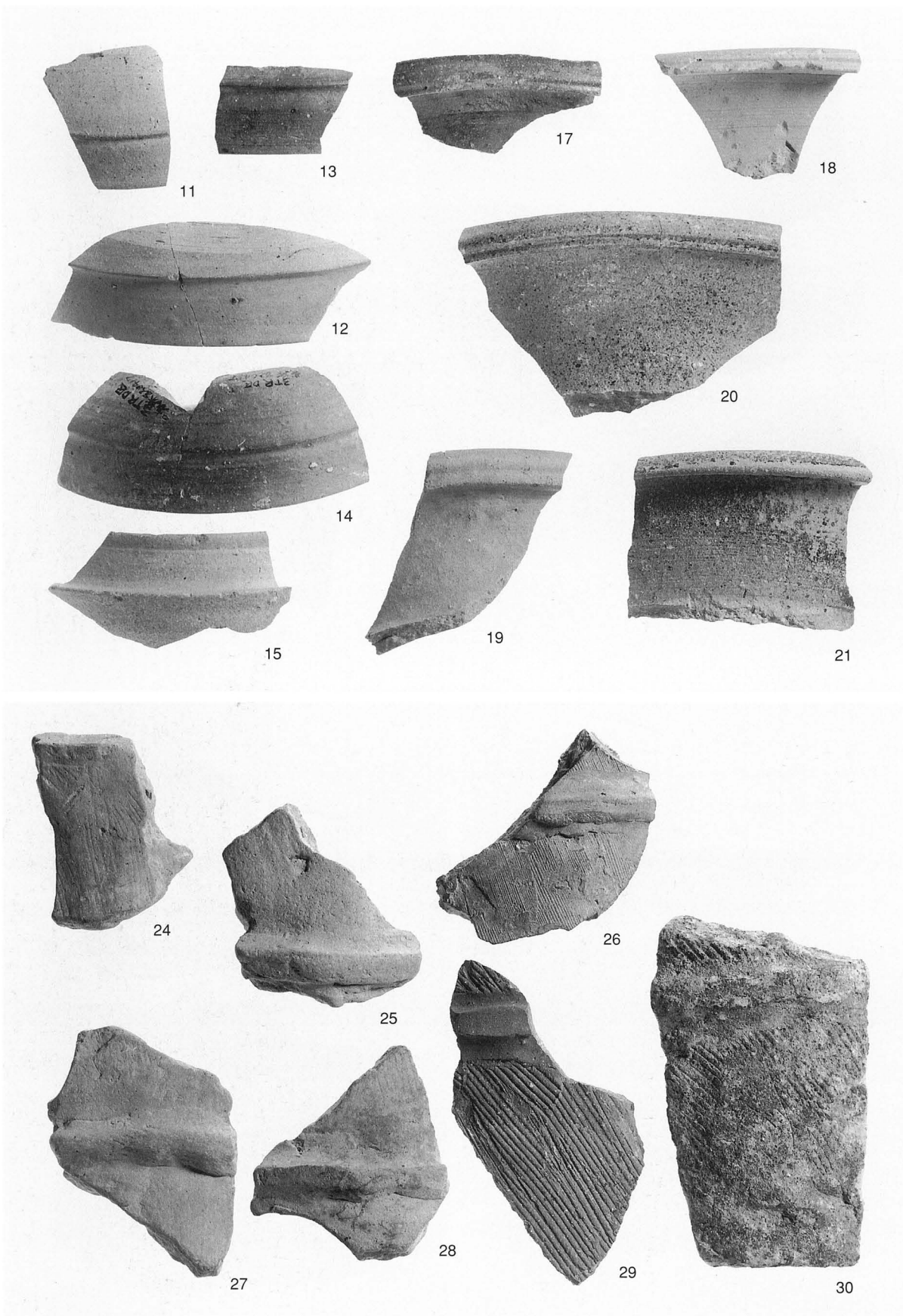
G区1～4号墳完掘状況（北西より）



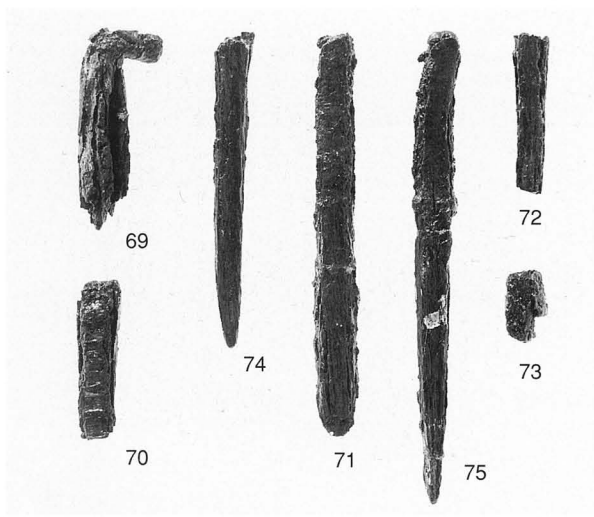
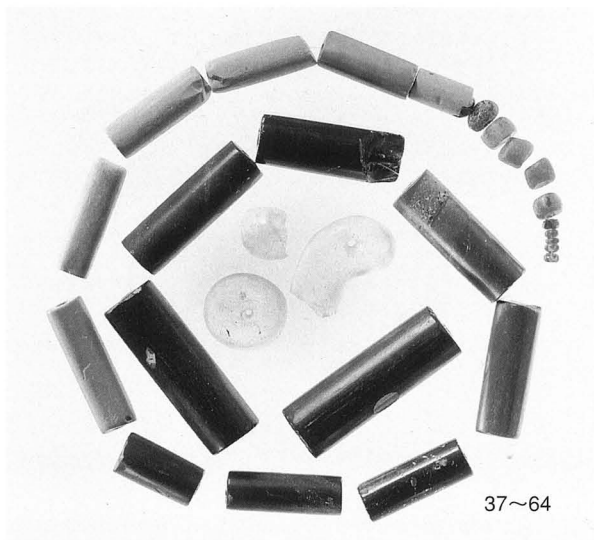
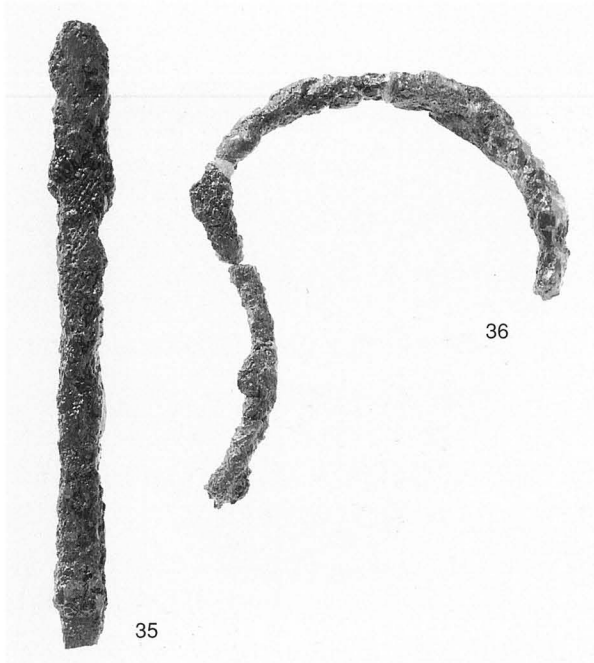
G区4号墳全景（西より）



B区、C区2号墳・C区、D区出土遺物



D区出土遺物



E区1·2号墳出土遺物



78



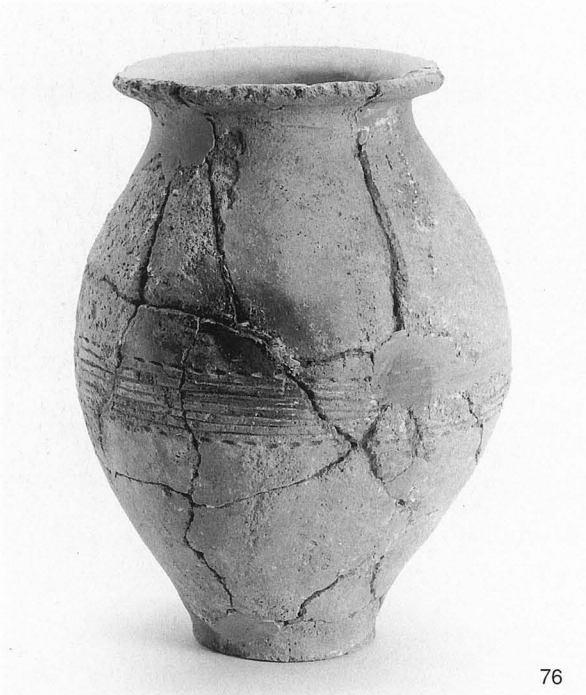
80



79



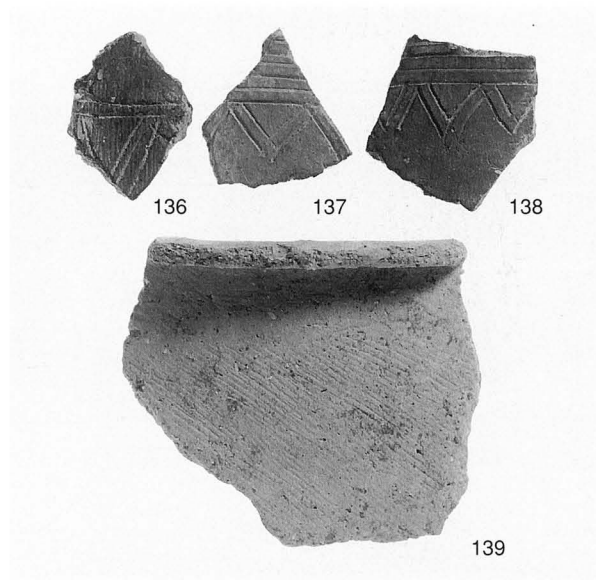
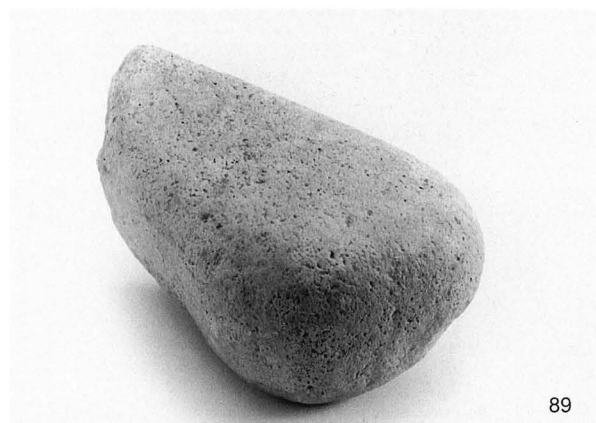
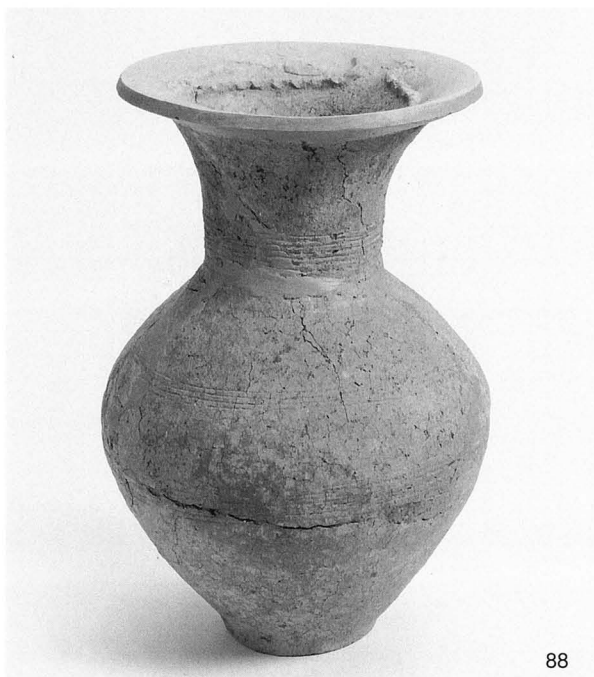
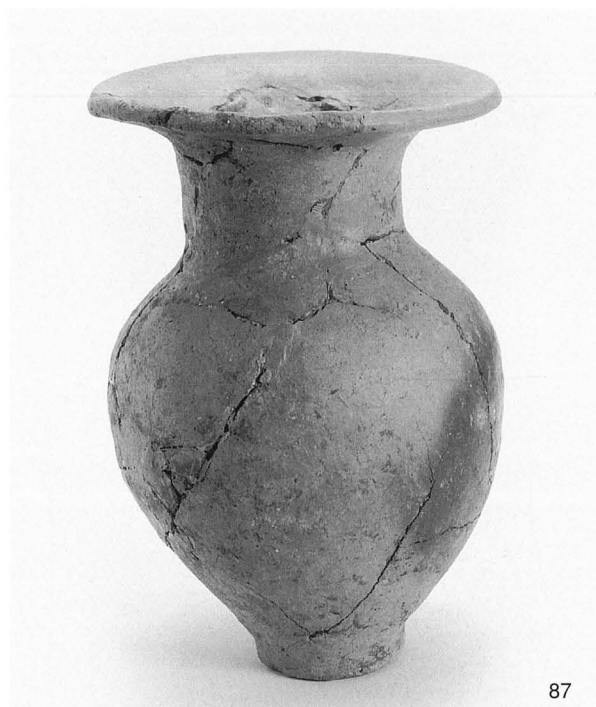
81



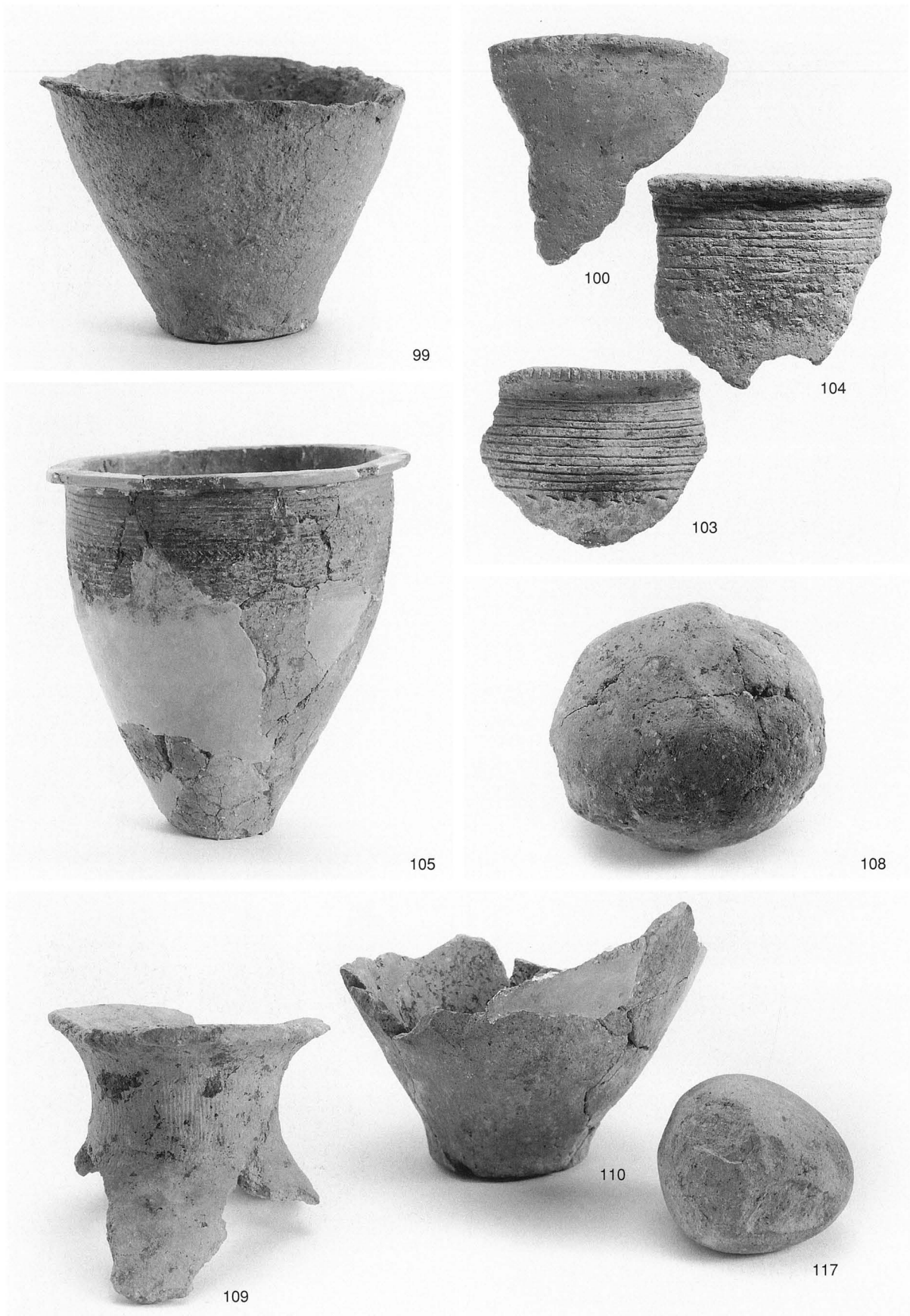
76



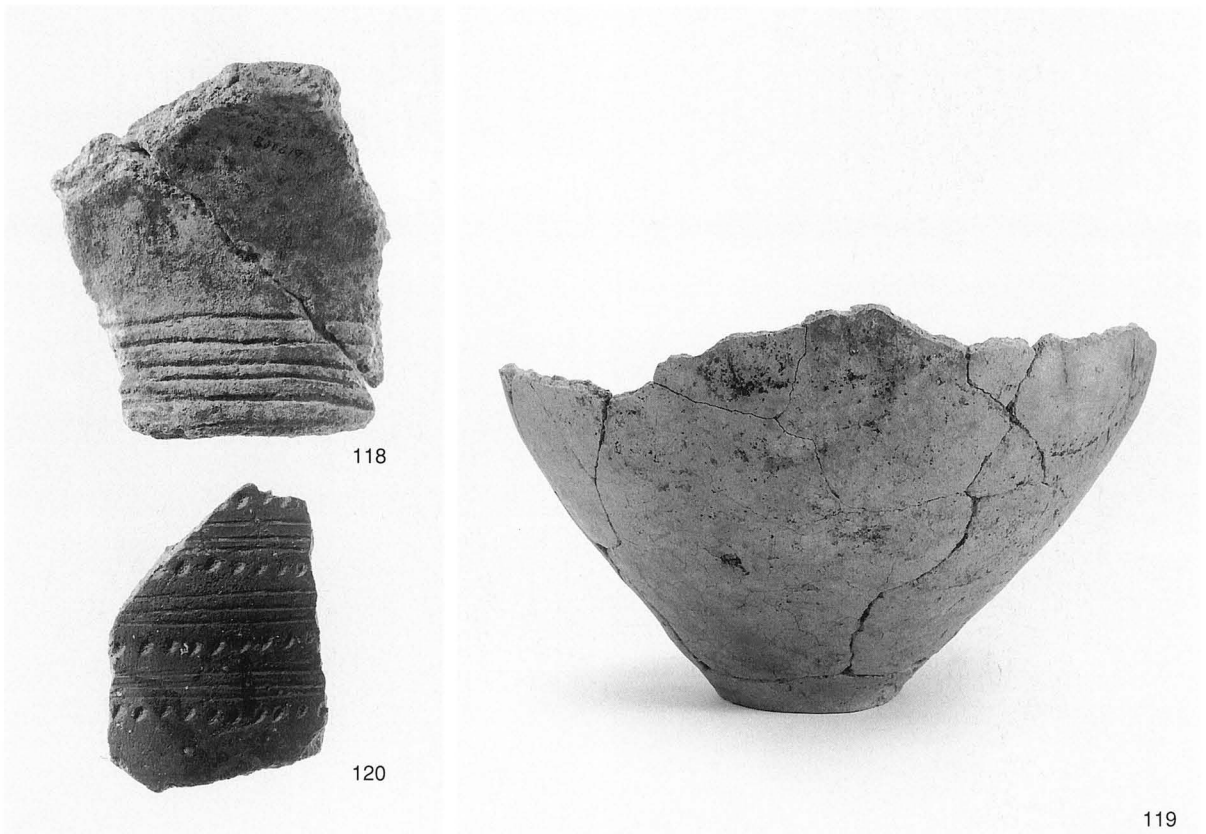
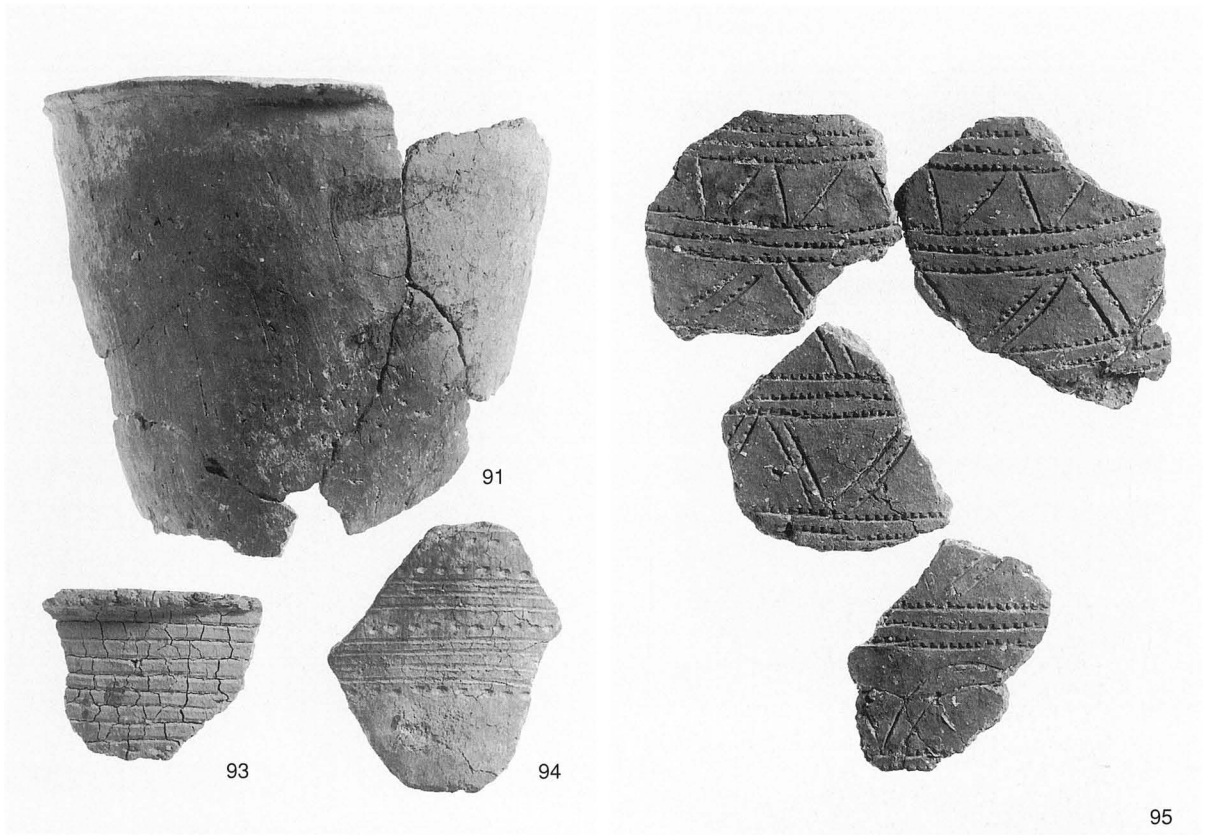
90



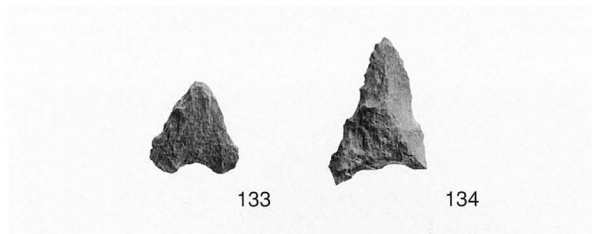
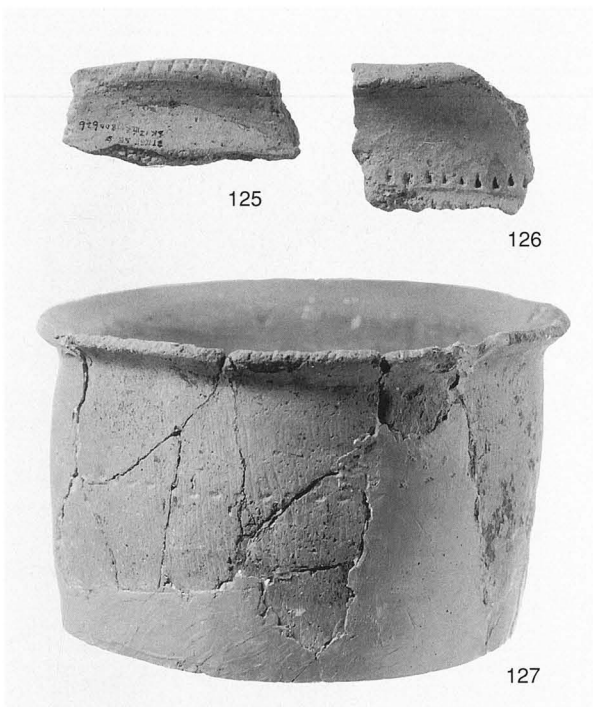
G区SK5·16·17出土遺物



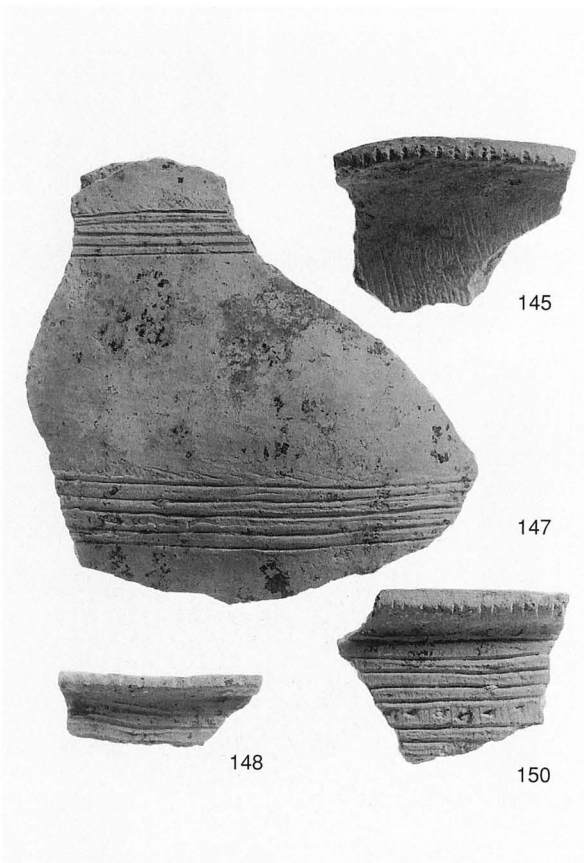
G区SK 8·9 出土遗物



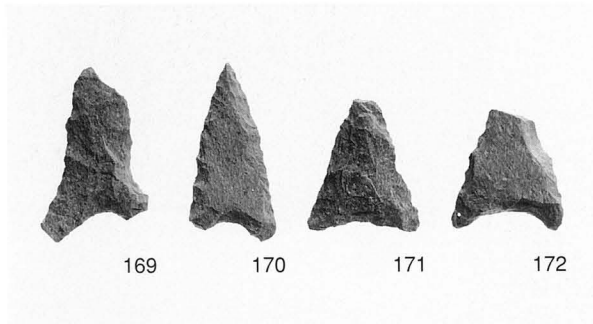
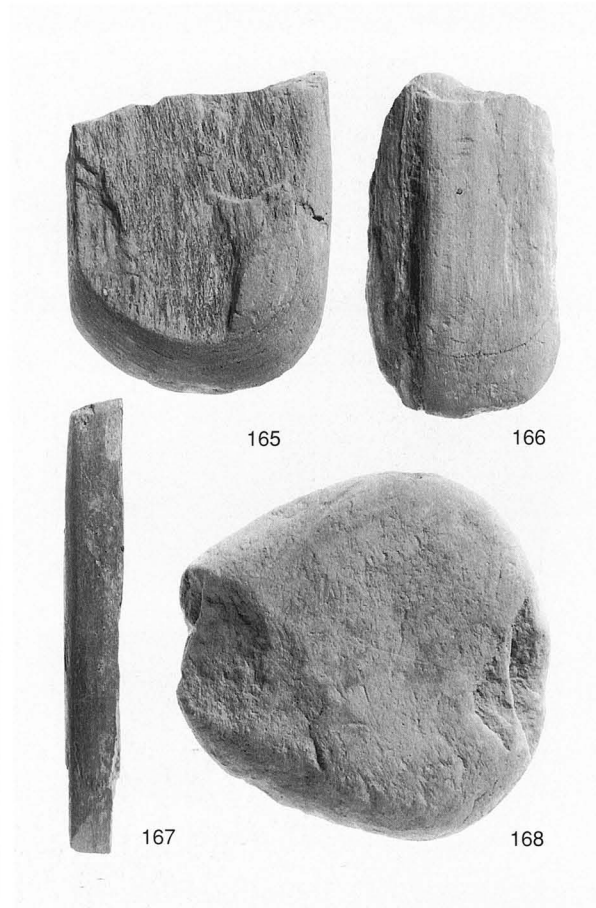
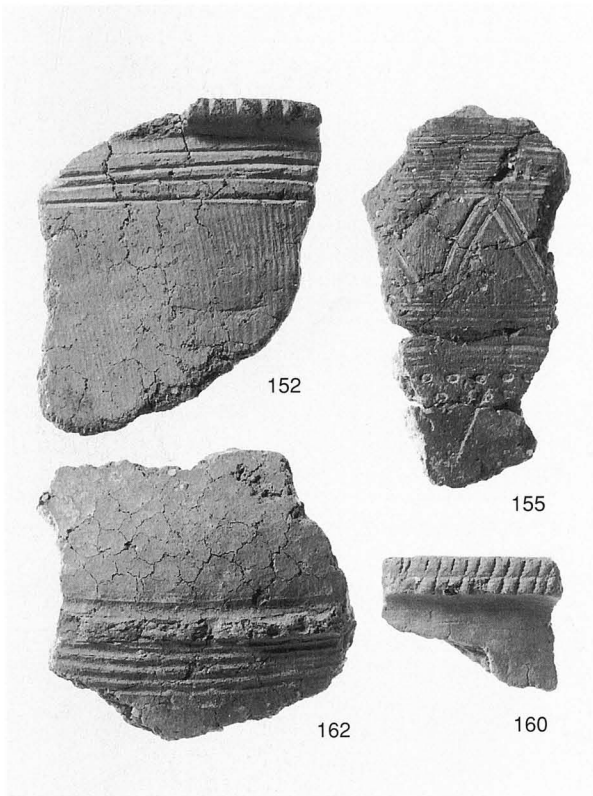
G区S K 7 · 10出土遺物



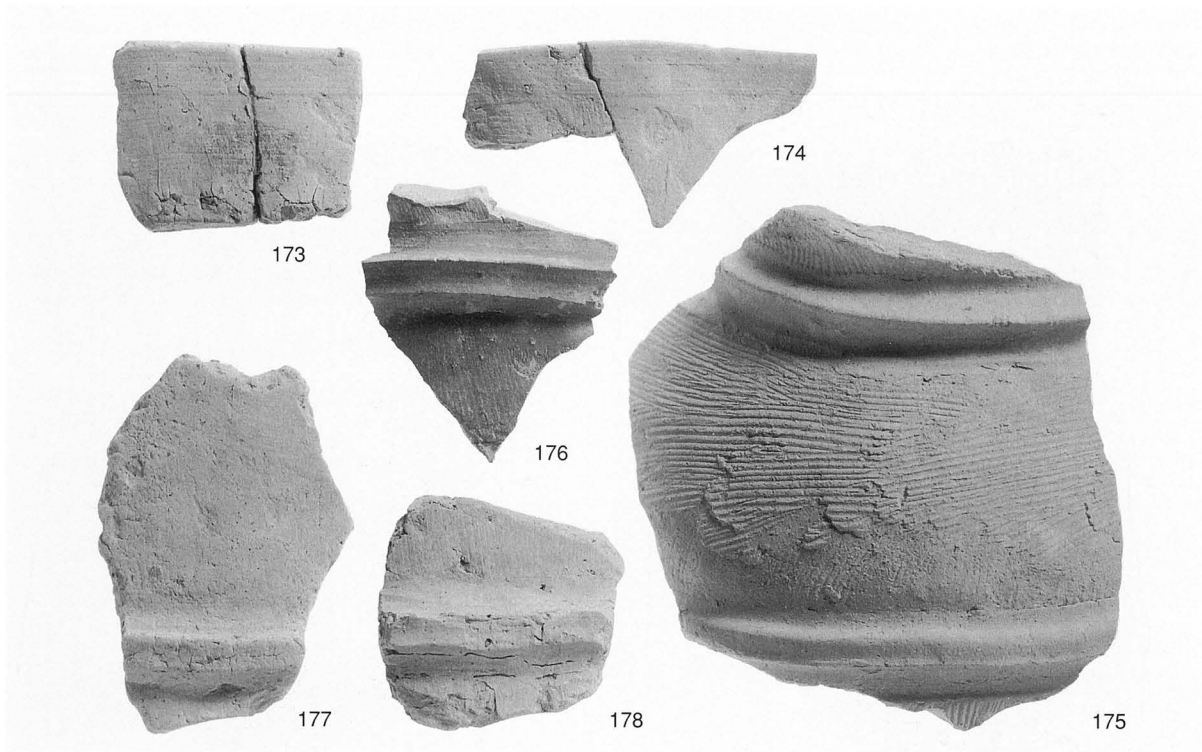
G区S K 12·15·18出土遺物



G区S K 19出土遺物、G区出土弥生土器



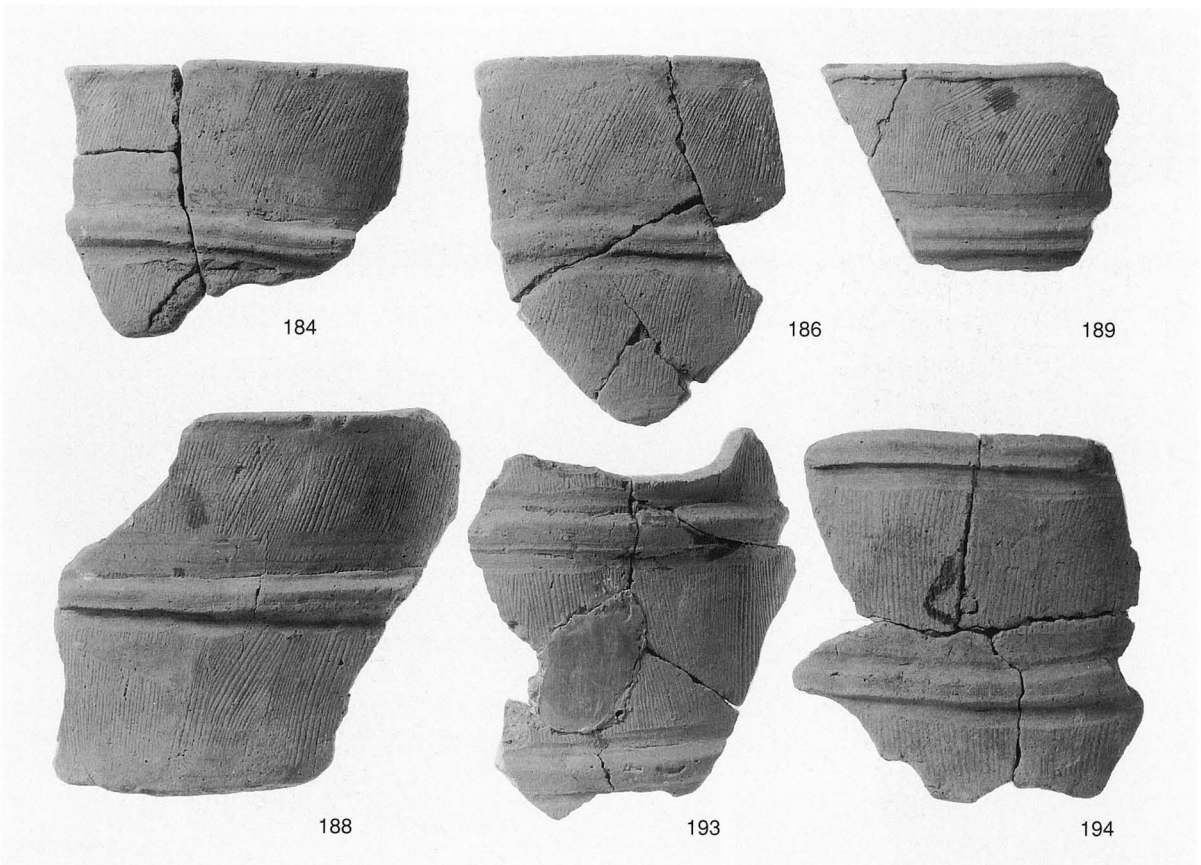
G区出土弥生遺物



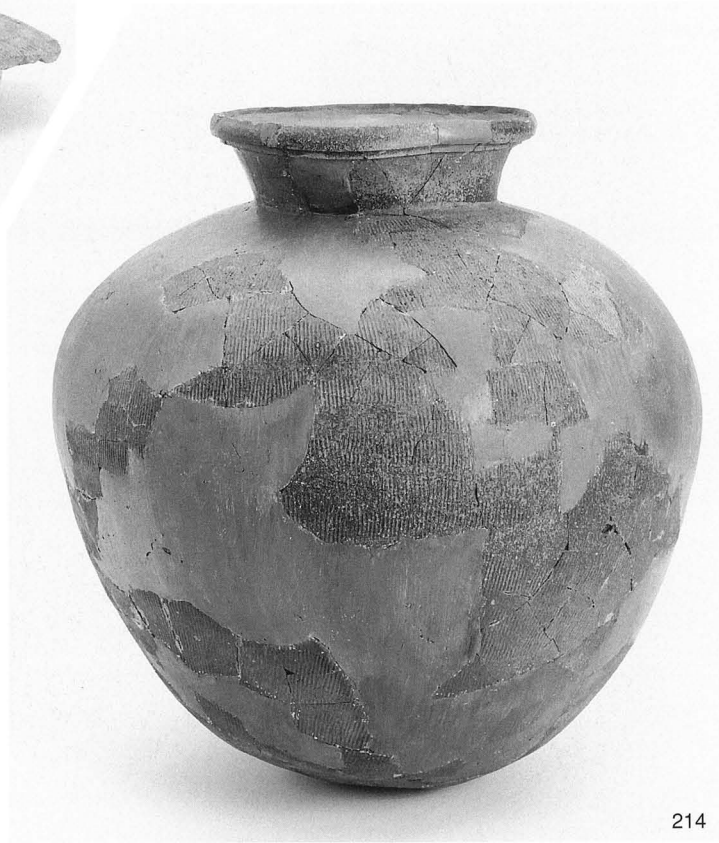
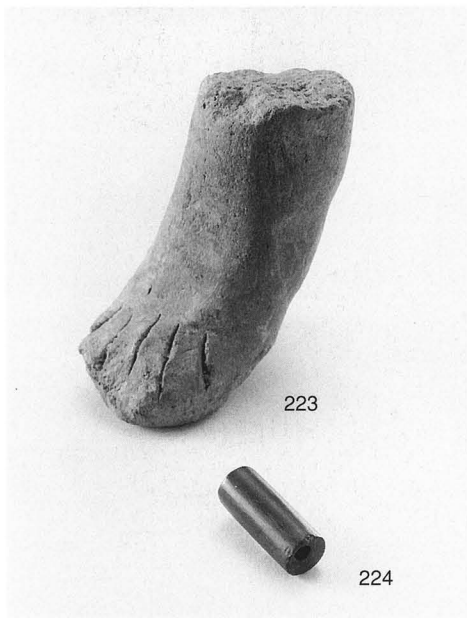
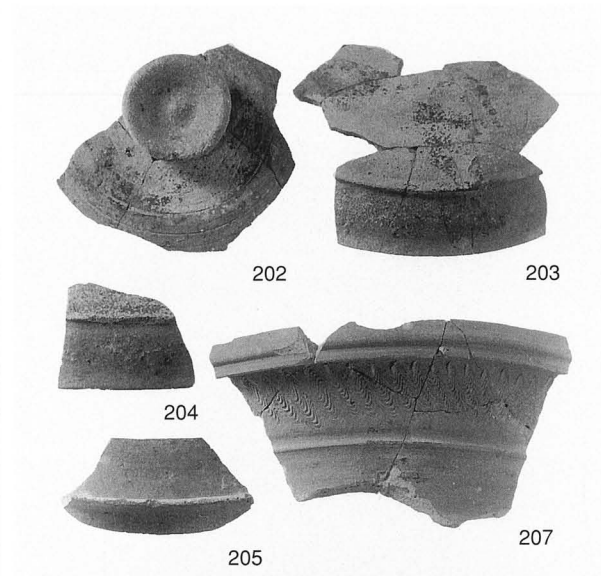
G区1号墳周溝出土遺物



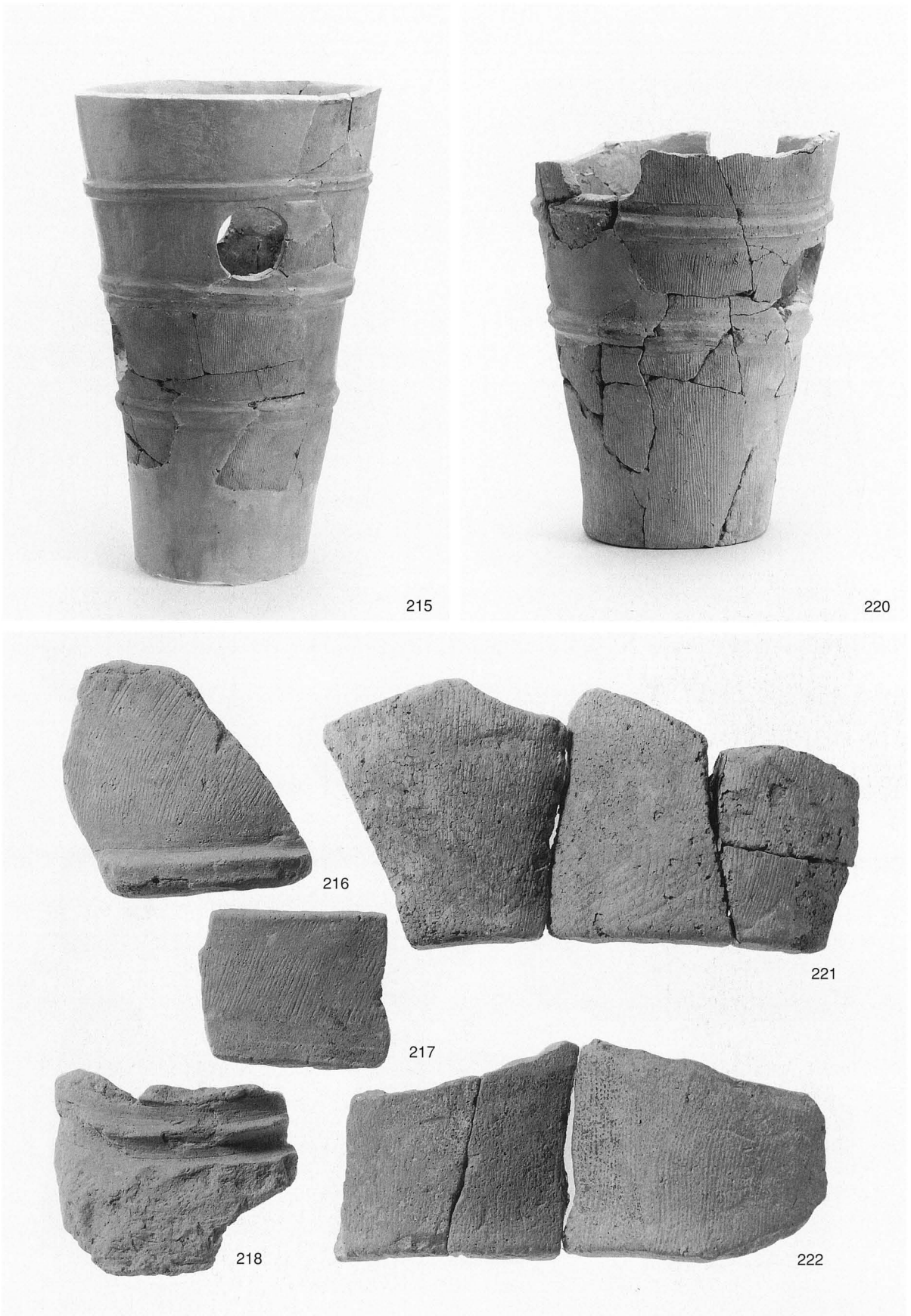
G区2号墳周溝出土遺物(1)(展示用に想定復元されたものを含む)



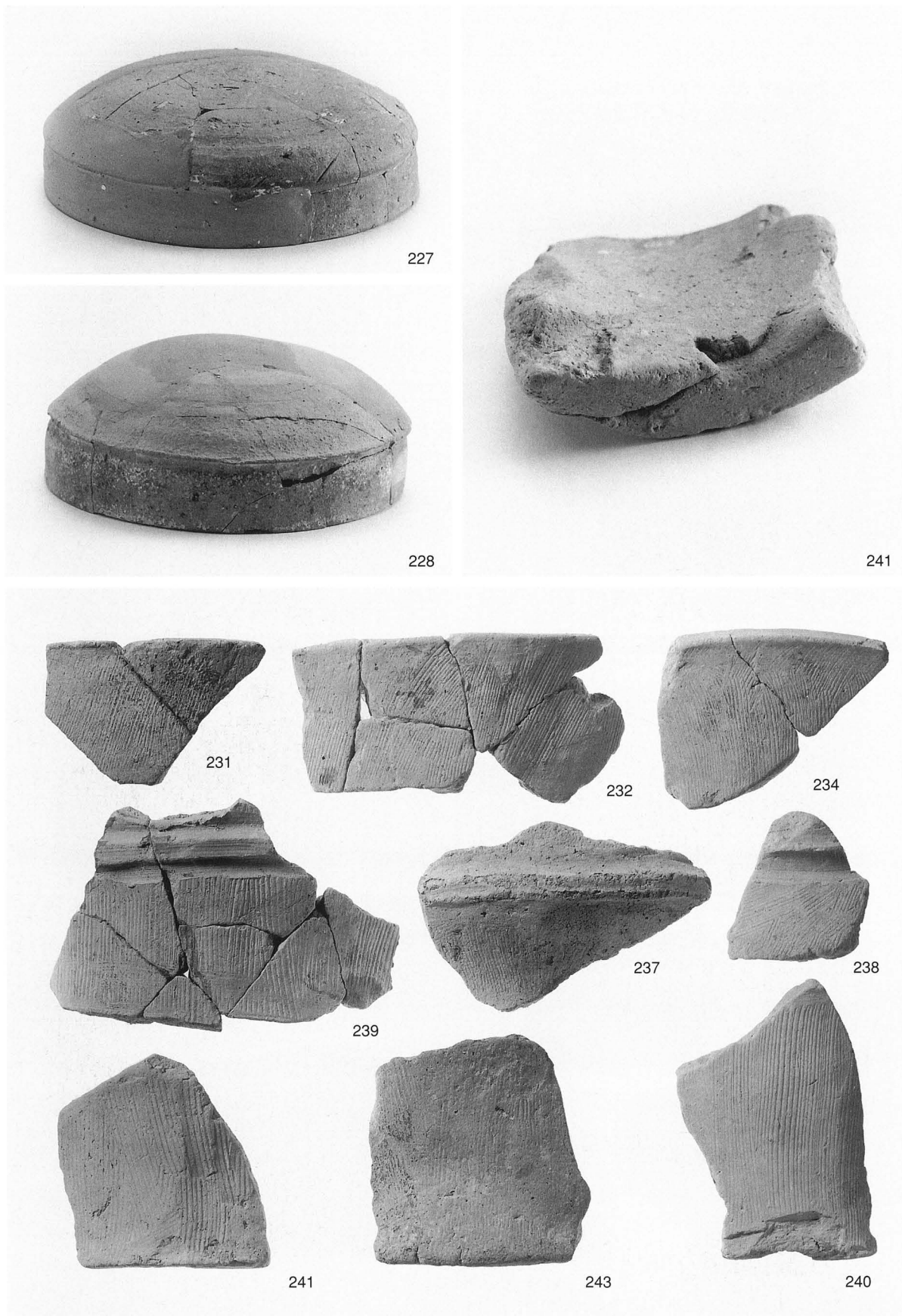
G区2号墳周溝出土遺物(2) (展示用に想定復元されたものを含む)



G区3号墳周溝出土遺物(1)



G区3号墳周溝出土遺物(2) (展示用に想定復元されたものを含む)



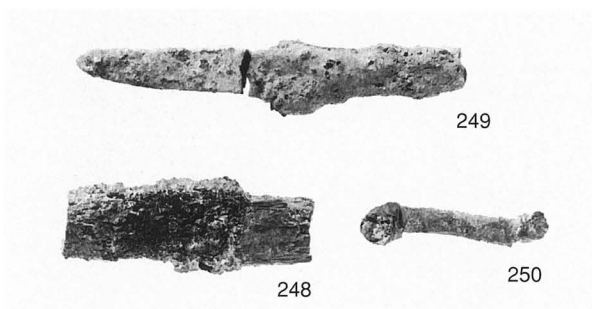
G区出土古墳時代遺物（1）



244



247



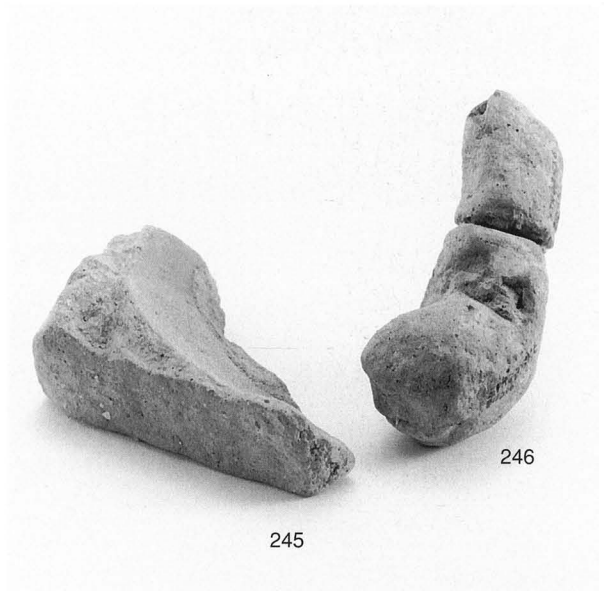
249



248



250



246

245

G区出土古墳時代遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	つるがとうげいせき							
書名	鶴が峠遺跡 I							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松山市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第116集							
編著者名	栗田茂敏							
編集機関	松山市教育委員会 財団法人 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒790-0003 松山市三番町6丁目6-1 TEL(089) 948-6605 〒791-8032 松山市南斎院町乙67-6 TEL(089) 923-6363							
発行年月日	西暦 2007年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つるがとうげいせき 鶴が峠遺跡	まつやましいしふ ろちよう 松山市石風呂町 まつのき 松ノ木	38201		33°52'32"	132°43'9"	19800121 19810928	4,500	工地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
つるがとうげいせき 鶴が峠遺跡	集落 古墳	弥生時代 古墳	土坑 横穴式石室 墳丘、周溝		弥生土器・石器 炭化米・種実 須恵器、装身具 鉄器・鉄製品 埴輪		獣、家などの形象 埴輪を含む	

松山市文化財調査報告書 第116集

鶴が峠遺跡 I

平成19年3月31日 発行

編集 松山市教育委員会
発行 〒790-0003 松山市三番町6丁目7-11
TEL(089)948-6605

財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地6
TEL(089)923-6363

印刷 原印刷株式会社
〒790-0056 松山市土居田町396-6
TEL(089)974-8711
